

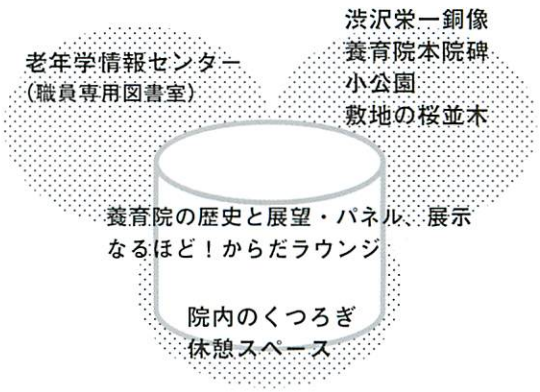
櫻園通信　1．平成 25 年 6 月

東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター



2013 年 6 月、東京都健康長寿医療センターは、新築落成し、新施設で高齢者医療に新たな一歩を印しました。

センターの前身は、**東京都老人医療センター＋東京都老人総合研究所**、その前は、昭和４７年に建設された**東京都養育院附属病院＋東京都老人総合研究所**です。更に遡ると、今から 140 年前の明治５年に本郷に創設された**養育院**ということになります。時代の要請に応じて医療・福祉の多方面に展開していったその歴史は、日本の近代医療・福祉の歩みそのものです。



新施設の出発に当たって、入り口の円筒ガラス空間の２階に、**養育院・渋沢記念コーナー**が設けられています。くつろぎの空間、来院者の健康に関わる情報提供のための図書室とともに、養育院の歴史と健康長寿医療センターの展望を示す展示を用意しました。『養育院・渋沢記念コーナー』と名付けられるこの空間の成り立ちについてご理解頂くために、**櫻園通信**を出発させました。養育院は、昔から、桜の名所であり、院内の彼岸桜が咲き始めた３月にこの冊子を出発させたことから、**櫻園通信**と名付けました。応援の意味も込めています。

渋沢栄一銅像、養育院本院跡碑、小公園、外構の櫻などの樹木と一体となった空間を考えており、**ヒポクラテスの木**の苗も植樹予定です。また、一般向けの図書コーナーと、専門家向けの老年学情報センター（３階）と連携した運営となります。なお、センター１階ホールには、山口晃画伯による『養育院幾星霜之図』と題する壁画が飾られています。円筒部分の一階は、**カフェ ド クリエ**が喫茶部門を営業しています。また２階には、売店**グリーンリーブス**、食堂**ビアンモール**を営業しています。合わせてご利用ねがいます。



養育院・渋沢記念コーナー

病院のシンボル的癒し空間を提供する設計者の意図、老年学情報センターが提供する、患者・患者家族の健康問題及び高齢者の生活に役立つ老年学の知見を紹介するコーナー、養育院の歴史に関する展示コーナーとの３つの役割を合体させたものです。パネル・図書の閲覧のほか、インターネットの利用、視聴覚メディアや立体模型、手で触れる・動かすハンズオン展示など複数のメディアで情報提供を行っています。また、食堂や売店にも隣接した明るいホールであり、呼び出し番号パネルを設置した休憩・待合コーナーとしての機能をもたせます。　なお、図書コーナーの内扉、ホール柱の基部には、敷地内にあった桜を素材として再利用しています。

展示内容：・常設壁面パネル展示「引き継がれる志」逐次、説明のためのパンフレットを用意します。

① 養育院の系譜イラスト
② 養育院掟書初款：明治６年２月、上野の養育院恒久施設開院の時、用意されていた利用者の約束事の冒頭に、大久保一翁府知事が追記。
③ 養育院・渋沢記念コーナの入口サイン：
④ "養育院"とは？：時代の求めに応じて、医療・福祉事業を展開していった様子を示す。
⑤ 江戸の福祉と医療：小石川養生所、松平定信の七分積金、安政の改革と蕃書調所、病幼院創立意見、長崎養生所、パリ万博使節団に言及。
⑥ 養育院と東京府病院：大久保一翁府知事時代に設立。
⑦ 大久保忠寛（一翁）と渋沢栄一：両者の関係に言及
⑧ 養育院、冬の時代：養育院の維持、発展に尽力した渋沢栄一。
⑨ 養育院の発展に貢献した人々。安達憲忠、入沢達吉、光田健輔について。
⑩ 養育院の看護：拝志よしね、瓜生岩このこと。看護教育の歴史
⑪ 第二次世界大戦と戦後復興：塩原疎開、空襲、戦後の用地縮小について。
⑫ 高齢者医療・福祉の展開：1972-2009 の三位一体の高齢者医療・福祉の展開。
⑬ 新施設オープン：新センターの運営理念
⑭ 時代の求め、社会の求めに応える志:鹿鳴館のバザー、様々の寄付、船形の磨崖碑
⑮ 展示：松平定信の吉祥天心願書と渋沢栄一の讃、渋沢栄一 86 歳の書、入澤達吉：老人病学（世界初の高齢医学教科書）など



なるほど！からだラウンジ

複数のメディアにより疾患や治療の理解を深めるための場として、また、生活情報として役立つ老年学の知識、病院部門および研究部門各所が作成した一般向けの業務案内・イベント広報・健康管理情報を提供します。
また、読書の楽しみとしての図書（小説等）も今後、置いていきます。

・図書の閲覧・貸出
病気と治療に関する一般向けの解説書など
・映像資料の視聴：健康番組 DVD などを設置 PC で視聴（準備中）
・インターネットの利用：コイン式パソコンでインターネットが使えます。
・からだのしくみや疾患の状態の理解に役立つ立体モデル等の展示　（準備中）。
・院内報「糸でんわ」や病院部門各科作成のパンフレット等の配布、研究部門作成の健康管理情報ポスター掲示、老年学公開講座テキストの閲覧、イベント広報のためのチラシ配布・ポスター掲示など



図書の利用

- 平日 10：00 ～ 13：30
- コーナー内では、自由に読書できます。
- 本のコピーをしたい場合は、売店のコピー機をご利用ください。
- 患者様とご家族の方には図書の貸出もしています。
- 貸出冊数は、何冊までも OK です。
- 貸出期間の目安は２週間以内としていますが、多少おそくなってもけっこうです。
- 本の返却の際に、係員が不在のときは、返却用ボックスに本を入れてください。



コーナー内は飲食ＯＫです。
待合・休憩・談話コーナーとしてもご利用ください。



コーナー内では、携帯電話のご利用は可といたしますが、声がひびきやすい場所なので、他の方にご迷惑がかからないよう、ご配慮ねがいます。

東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

【養育院本院】碑について

東京都健康長寿医療センターは、『養育院』の流れを汲む組織であり、昭和 61 年までは『養育院附属病院』、以後平成 21 年までは『老人医療センター』と称しました。平成 21 年４月からは、地方独立行政法人・東京都健康長寿医療センターとなりました。平成 25 年３月、新施設開設に先立って、敷地内の渋沢榮一銅像の前に、『養育院本院』碑が建てられました。元職員を中心とする、『養育院を語り継ぐ会』によるもので、重量 1.98 トンの御影石の石碑です。碑の題字には、養育院の維持・発展に 50 年以上も尽くした、社会事業にも熱心な日本経済の父・渋沢栄一の墨跡を用いました。養育院の原資となった七分積金制度を作った松平定信の心願書と、彼をたたえる渋沢栄一の書が、旧養育院長室に掲げてありましたが、そこからとったものです。はめ込んである金属板の碑文に『養育院』のいわれが書いてあります。



養育院本院の碑　碑文

養育院は、明治五（千八百七十二）年十月十五日に創設された。維新後急増した窮民を収容保護するため、東京府知事大久保一翁（忠寛）の諮問に対する営繕会議所の答申「救貧三策」の一策として設置されたものである。この背景には、ロシア皇子の訪日もあった。事業開始の地は、本郷加賀藩邸跡（現東京大学）の空長屋であった。その後、養育院本院は上野（現東京芸大）、神田、本所、大塚など、東京市内を転々としたが、関東大震災後、現在地の板橋に移転した。養育院設置運営の原資は、営繕会議所の共有金（江戸幕府の松平定信により創設された七分積金が明治新政府に引き継がれたもの）である。

養育院の歴史は、渋沢栄一を抜きには語れない。営繕会議所は、共有金を管理し、養育院事業を含む各種の事業を行ったが、渋沢は明治七年から会議所の事業及び共有金の管理に携わり、養育院事業と関わるようになった。明治十二年には初代養育院長となり、その後亡くなるまで、五十有余年にわたり養育院長として事業の発展に力を尽くした。

養育院は、鰥寡孤独（かんかこどく）の者の収容保護から始め、日本の社会福祉・医療事業に大きな足跡を残した。特に第二次大戦後は、児童の保護や身寄りのない高齢者の養護、さらに高齢者の福祉・医療・研究、看護師の養成など時代の要請に応じて様々な事業を展開した。

平成十一年十二月、東京都議会において養育院廃止条例が可決され、百二十七年にわたる歴史の幕を閉じたが、養育院が行ってきた事業はかたちをかえて現在も引き継が

れている。

養育院に関連する碑は、ほかに養育院の物故者中、引取人のない遺骨を埋葬、回向をお願いした東京都台東区谷中の大雄寺、了侃寺、栃木県那須塩原市の妙雲寺及び東京都府中市の東京都多磨霊園にある。

なお、碑の「養育院本院」は渋沢栄一の墨蹟を刻んだものである。

平成二十五（二千十三）年　三月

養育院を語り継ぐ会

この碑は元養育院職員等の篤志によって建てられました。

地方独立行政法人　健康長寿医療センター



なお、『明治５年（1872）、ロシア皇太子の訪日に際し、市中を浮浪者が徘徊するのは文明国の恥と考え、時の治安維持責任者が、浮浪者を集めて収容した・・・』という説が流布しています。しかし、近年、大久保忠寛（のち隠居名・一翁）が、江戸幕府の“蛮書調所総裁”であった安政４年に、七分積金の様な財政基盤による大規模な西洋版小石川養生所の創設を提案（病幼院創立意見）していること、江戸開城の時、七分積金を明治政府に引き継いだ責任者が大久保一翁であること、かれが東京府知事になったとき、救貧策を諮問し、その答申の一つとして養育院が作られたことが明らかにされています。また、ロシア皇太子とあるのも、ロシア皇帝の３男に当たる人で、皇太子ではなく、後に日露戦争時のロシア海軍の最高責任者アレクセイであったことが明らかにされています。

東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

渋沢栄一銅像のお引越し

明治５年 (1872) に、本郷の旧加賀藩邸の空き長屋を利用して養育院の仮施設が、翌６年２月に上野に恒久施設が作られました。渋沢は明治７年から、静岡の徳川藩で知遇を得た大久保一翁府知事から、共有金（七分積金）の取り締まりを依頼され、それ以来、養育院に関与するようになりました。しかし、財政基盤が定まらず、渋沢は必死に寄金を集めるなど、養育院の維持に努力し、明治 22 年にはその意義が理解され、東京市の経営となりました。その後は、名誉職吏員の養育院長として 41 年間、安達憲忠、光田健輔、入澤達吉らの活躍もあり、大塚本院を中心に社会事業は大きく発展しました。また。板橋への移転計画中の大正 12 年、関東大震災で大塚本院は壊滅し、急遽板橋に引っ越しました。板橋施設の建設が一段落したとき、養育院常設委員会（委員長は東京市長）は、市民の寄金で銅像の建設を計画しましたが、渋沢ご当人は、いやがってなかなか承諾しませんでした。

そこで、『この銅像は単に過去における養育院長としての、ご功績を記念しようと云うだけでなく、終始、渋沢の念頭を離れない養育院の構内に、百年の後も永久にこれを守護せんとする渋沢子爵の魂魄のため、定住所をお作り申し上げる意味もある・・・・』と説得、『養育院のため・・』と言う一言に初めて承諾されたといいます。

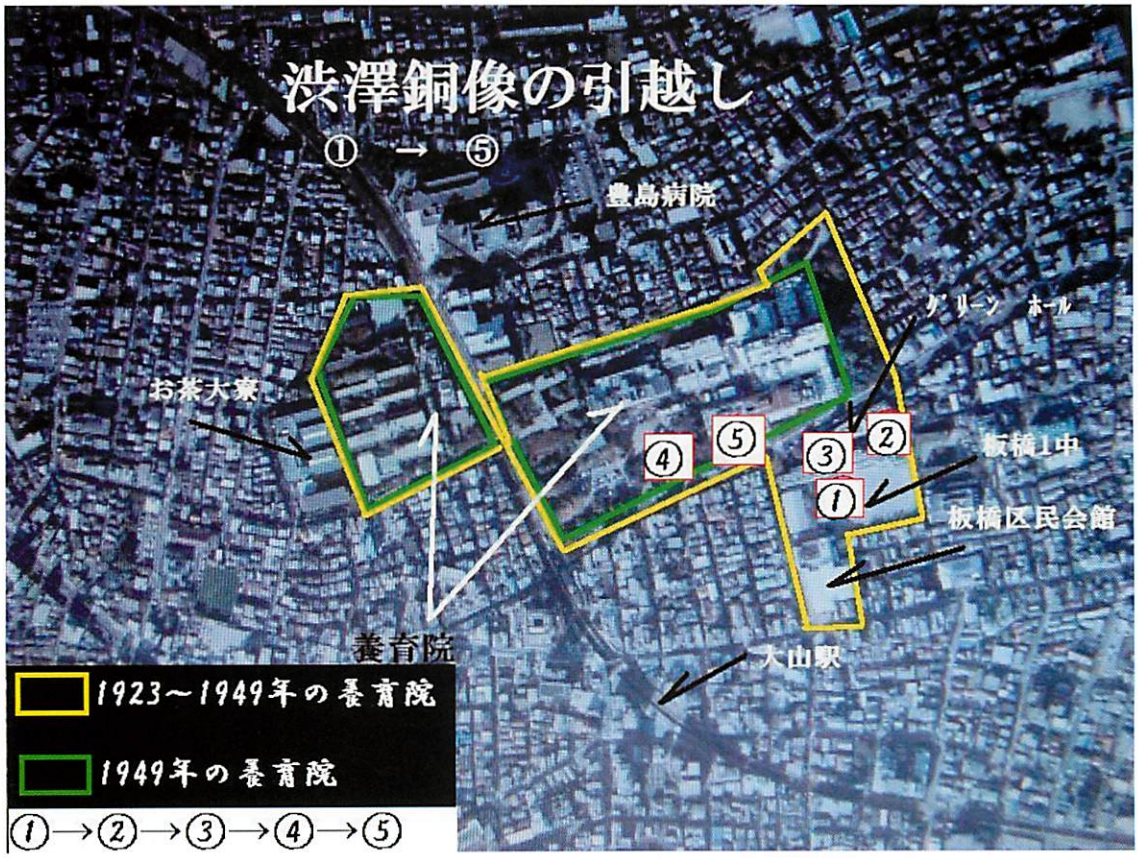


帝展・文展審査員の彫刻家、小倉右一郎の制作になる、高さ 16 尺 (4.3m)、方 20 尺 (5.4m) の花崗岩の台座に、高さ 10 尺 (3.75m)、重量 1.8 トン (480 貫) の青銅製で、フロックコート姿でソファーに座っています。大正 14 年、その落成式で、銅像を背にしてご本人が謝辞を述べている写真が、深谷市の記念館に残っています。銅像建設当時の板橋本院事務所は、現在の板橋第一中学校の校舎の辺りにあり、銅像は現在の体育館の辺りに、旧川越街道に向かって南に面して建っていました①。看護学校の卒業式などの記念写真の背景にしばしば利用されています。

昭和 16 年 (1941)、戦時の金属資源供出時にコンクリート像に変えられ、本体は供出予定で地上に降ろされていました。昭和 20 年 (1945) 3 月、米軍の B 29 の東京大空襲で施設の９割が焼失、利用者 107 名の犠牲を出した中でこの像は残りました。

【養育院本院の戦後復興】　空襲で、建物の９割を失いながらも、養育院は機能を持続し、

復興の道筋が模索されました。練馬の軍用地や東村山への転地も含めて検討する一方、板橋区では独自に養育院移転を前提とした都市計画が進められ、養育院移転の区民運動が展開されました。この間様々な折衝が行なわれましたが、当時の占領下で、ＧＨＱ民政局のキャロー女子の鶴の一声で、板橋現地での存続に決着しました。すなわち、中学校、区施設、公園のための用地を区に売却し、残りの現在地に復興すると言うもので、昭和27年に新入寮が建築されました。この間銅像は校庭（現体育館）にありましたが、昭和30年（1955）に養育院官舎の西側②に移動、更に昭和32年（1957）3月30日、当時ご存命の作者、小倉右一郎監修で、現在の三角地に銅像は復元されました③。金属供出のため一旦降ろされて破損していたのを改修したものです。



施設の神様があまりにもみすぼらしい姿であると、昭和57年に、道路を隔てた④の場所に巨大な台座ごと、コロに乗せられて、交通遮断の中、しずしずと移動しました。周辺に、池や噴水のある広場が整備され、説明の看板がつくられ、銅像の作者、建立の経緯などが書いてありました。また、噴水池が作られ、中央に“よろこびの像”が造られました。（稲松）



東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

灰色の渋沢栄一銅像について





渋沢栄一の銅像の色はもともとは左写真のように黒っぽいブロンズ色でした。

ハトの糞などで汚れ、痛みもあるため、平成 14 年 10 月に保護のための塗装工事が発注されました。当時、酸性雨の影響を受けにくく、汚れがつきにくい塗料を選んだ筈ですが、覆いを外したときその白さに関係者は驚いたそうです。仕様書を見せていただきましたが、3 層に保護膜が塗り重ねられ、最上層は汚れの付きにくいフッ素系の保護膜が塗られています。色については、細かい指定はなく、灰色としか書いてありません。像の周りにはドバトが舞い、時に、はげたおつむに止まっていたりするので、塗装職人の判断で鳩の糞が目立たないようにしたようです。



【平成 25 年の引越しと本院碑建設】



平成 25 年 6 月開院に向けて、新施設が建設されました。敷地内の銅像は、東側に約 45m移動されました。南向きだったのが、新施設を見守るように西向きに設計図が描かれました。設計図を描く人は図面の上でチョイト動かせばよいのですが、施行する人は大変です。



銅像を外して再塗装して元のブロンズ色にすることも検討されましたが、銅像本体の破損が予測されるため断念し、洗浄のみが行われました。

台座は削岩機で丁寧に解体、パーツ毎に移送、再構築されました。台座の高さは、昭和 57 年の移送時、底の部分を地下に埋め、約 30ｃｍ低くされた。このため、銅像制作者の意図よりも足が短く見え、創建時の高さに戻すことも検討されました。しかし、親しみを感じる低い高さのままに落ちつきました。

銅像の方向のことですが、大正14年、創建時、現在の中学校敷地では大山の通り方向の南に向いていました。戦時中は、台座から降ろされて、ボイラー室の横で金属供出を待っていたようです。昭和32年に、三角地で修復された後は、西向きに変えられました。そして、昭和57年に道路を渡って引っ越しをした後は、また、南向きになりました。

今回再び西向きになりました。新病院をにらむように西向きに、道路からも見えるようにやや斜めに構えています。西方浄土をにらんでいるわけではありません。



そして、養育院本院碑と、徳川家斉墓前の石灯籠が、一枚の写真の中に収まるようになったのです。
(稲松)



東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

葵の石灯籠

小公園内に、2 基の大きな石灯籠が据えられています。三つ葉葵の紋が彫り込んであり、徳川家ゆかりの石灯籠です。渋沢銅像の近く、スダジイの大木の下にある方をよく見ると、下のように彫られています。



奉献　　石灯籠　一基
東叡山
文恭院殿　尊前
天保十一年庚子年閏正月晦日
豊後国佐伯
従五位下　伊勢守藤原毛利高泰

東叡山は上野の寛永寺のこと。文恭院殿は第 11 代将軍徳川家斉の戒名。天保十一年庚子年閏正月晦日。豊後国佐伯は、大分県。従五位下　伊勢守藤原毛利高泰



徳川家斉は天保 12 年（1841 年）正月 30 日に死去しています。大分県の小大名が、第 11 第徳川将軍家斉が亡くなったときに、寛永寺の墓前に奉納したものとわかります。

もう 1 基、銅像から遠い方にあるのには右のように彫られています。
大猷院殿は、将軍家光のことです。

奉献　　石灯籠
武州　　東叡山
大猷院殿　尊前
慶安五年四月二十日
松平出雲守源勝隆

慶安五年四月二十日：一回忌の命日
松平出雲守源勝隆：天正 17 年(1589 年)、徳川家康の重臣・松平重勝の 5 男として生まれ、寛永 15 年（1638 年)、上総国佐貫藩主となって、1 万 5000 石を領しています。一回忌の時、寛永寺の墓前に奉納したと言うことです。

家光は、徳川三代将軍（慶長 9 年～慶安 4 年 4 月 20 日：1604 ～ 1601）享年 48 歳。

遺骸は遺言により東叡山寛永寺に仮埋葬され、翌承応元年（1653年）には、日光の輪王寺に改装され大猷院廟が造営されています。

二つの徳川家の、寛永寺の灯籠は、様式は似ていますが年代が200年近くも離れているのです。

寛永寺にあった石灯籠が、どうしてここ板橋にあるのでしょうか・・・・



徳川将軍は、初代家康と三代家光は日光に霊廟がある他は、上野の寛永寺と芝の増上寺を菩提寺とし、ほぼどちらかに葬られています。寛永寺には、四代家綱、五代綱吉、八代吉宗、十代家治、十一代家斉、十三代家定のお墓があります。芝の増上寺には、二代秀忠、六代家宣、七代家嗣、九代家重、十二代家慶、十四代家茂のお墓があります。十五代慶喜だけは、明治になって隣接する谷中墓地に神式で葬られています。

江戸時代、将軍が亡くなるとどちらかのお寺に霊廟が作られ、全国の諸侯が、墓前に燈籠を献上したようです。諸侯の江戸屋敷が、江戸の石屋に石灯籠を発注するので、江戸の石屋は大忙し。それはともかく、戦前の両寺には、数千基の石灯籠が林立していたそうです。

戦後増上寺は、敷地のかなりの部分をプリンスホテルに売却し、そこにあった燈籠は・・・寛永寺も、墓地の再開発で、行き場を失った燈籠の多くは、信州の鬼押し出しの寛永寺別院にあります。西武の堤康次郎の寄進で建てられたお寺です。その他の多くの灯籠が関東のあちこちに配られています。養育院長・渋沢栄一は旧幕臣、寛永寺関係者との交流は深く、一族の墓地も谷中にあり、明治の終わりには、寛永寺の檀徒総代を務めています。このことと板橋の寛永寺の燈籠の関係は歴史の闇の中・・・・

今回の工事の前、椎の木の下にあったのは家光の燈籠で、恵風寮の前、新病院の建っているところに家斉の灯籠があったのです。今回それが入れ替わってしまいました。椎の木の下、養育院本院碑の後ろにあるのが、家斉墓前の燈籠です。

ところで、老中・松平定信は、11代将軍家斉が将軍になったときの初めの筆頭老中で、七分積金が制度化されたのは、家斉の治世と云うことになります。また、旗本・大久保忠寛が、初めて小納戸として江戸城に出仕したのが、家斉晩年のことであり、何かの時に、弓が上手と褒められたと書いてあります。彼はのちに、アメリカの黒船が来た時に、幕府の海防掛に抜擢され、蛮書調所総裁の時、西洋版小石川養生所の建設を提案し、明治になってそれを実現したのが養育院です。養育院にゆかりの２人が仕えた家斉将軍の、墓前に捧げる石灯籠が、ここにある不思議を感じます。工事関係者が意図したともおもえないのですが・・・・(稲松)

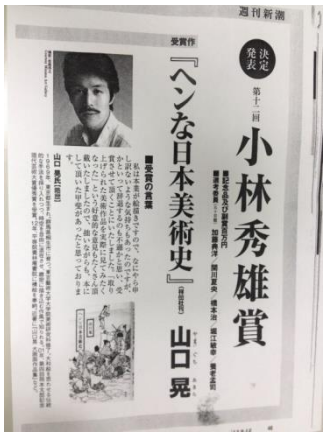


櫻園通信　6. 平成 25 年 10 月

東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター



★　養育院幾星霜之圖　・　山口晃



東京都健康長寿医療センターは、本年 6 月、リニューアルオープンした。その玄関ホールに、山口晃の近作、【養育院幾星霜之圖】が飾られている。本郷→神田→本所→大塚→板橋と移転を繰り返した養育院の歴史をたどるとともに、現代の病院をユーモラスに描いている。鳥羽僧正の鳥獣戯画と洛中洛外図屏風を現代風にアレンジしたような絵図で、今売れっ子の若手、山口晃 http://ja.m.wikipedia.org/wiki/の手になる。彼は上野の東京芸大美術学部卒業であるが、この場所は、明治六年二月、上野の護国院の一部を買い取って、養育院の恒久施設が建てられた所である。しかし、幕末・明治のオランダ医、ボードウインが、この一帯は公園や博物館に適していると言ったため、既に出来ていた養育院は明治十二年に神田に追いやられ、立地予定の東大は本郷に行き、公園、博物館、学校などになった。明治二十二年に、養育院の跡地は東京美術学校となっている。彼は、絵をかきながらこのことに気付いた様で、***(いまの芸大あたり。建て増したりしたが、博物館用地にするため追い出された)***と絵の中に書きこんでいる。



その山口が平成 25 年度の小林秀雄賞を受賞した。優秀評論を対象とする賞であるが、著者の日本美術史に関する初評論が授賞対象となった。題して【ヘンな日本美術史】。早速購入して読んでみた。鳥獣戯画の 4 層構造。雪舟の画家としての冒険。洛中洛外図屏風の空間処理などについて、斬新な見解を述べている。最終章に、「やがて悲しき明治画壇」と小題を付けて、いわゆる近代日本美術史に登場する画家は割愛して、明治初期の画家、川鍋暁斎、月岡芳年、川村清雄を取り上げている。川村清雄は「最初期の洋行帰りの画家としてのみ取り扱われているのを惜しんで、その画業について述べている。



まったく偶然のことであるが、この川村清雄が書いた「大久保一翁」の油絵肖像画の写真を、センター2 階の、「養育院・渋沢記念コーナー」に掲げており、その奇縁に驚いた。



このコーナーの準備に、養育院の黎明期のことを勉強していて、いくつかのことに気付いた。そのひとつは、養育院の成立に、大久保一翁が深く関与しているらしいことである。その調査のために、数年前にご子孫の大久保家を訪れたことがある。その際、玄関先で私を出迎えてくれたのが、この、日本における最初期の油彩肖像画であった。その時の思いもあってこの原稿を書いている。 この画家は、日本で最も早い時期に欧米に留学し、西洋画を修得した人である。元は幕臣の旗本で、明治元年に徳川家と共に静岡に移住、明治四年に徳川家の給付生として渡米、大久保一翁の助言もあり、その後パリ、ベネチアで十年間西洋画を学んだ。この間、大久保一翁や勝海舟の子息、徳川家達らと交流している。帰国後は、大久保一翁、勝海舟の援助で画家として活躍した。



大久保一翁は、江戸幕末期に目付海防掛~蕃書調所総裁の時、七分積金による西洋版小石川養生所の創設を提案している。しかし、幕末期のごたごたで実現化せず、明治五年に東京府知事になって実現したのが養育院と東京府病院である。その歴史が【養育院記念コーナー】の展示パネルになっている。　その川村清雄の作品群の中に、大久保一翁にたいしての感謝を込めた肖像画があるが、その写真が二階の【養育院・渋沢記念コーナー】に掲げているものである。大久保一翁の肖像画は、川村清雄による日本で最も早い時期の油絵の肖像画である。一翁の子孫の家にある実物の写真を、お許しを得て展示している。なお、慶応大学北里講堂に掲げられている福沢諭吉像も川村清雄による。一翁は福沢諭吉の慶応義塾用地の確保に協力しており、そのお礼の手紙の存在が知られている。養育院に絡む妙なご縁に驚いている。（文責：稲松）

【参考】 山口晃の作品群：

今様遊楽圖（2000 年）、何かを造ル圖（2001 年）、胎内巡り圖（2004 年）、歌謡ショウ圖（2004 年）、東京圖　奨堕不楽乃段（2001 年）、東京圖六本木昼圖（2002 年）、階段遊楽圖（2002 年）、百貨店圖　日本橋三越（2004 年）、東京圖　芝の大塔（2005 年）、成田国際空港　飛行機百珍圖（2005 年）、ラグランジュポイント（2006 年、四季休息圖（2007 年）、渡海文殊（2007 年）、Tokio 山水（2012 年）

櫻園通信　7．平成 25 年 10 月

東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター



養育院のルーツ

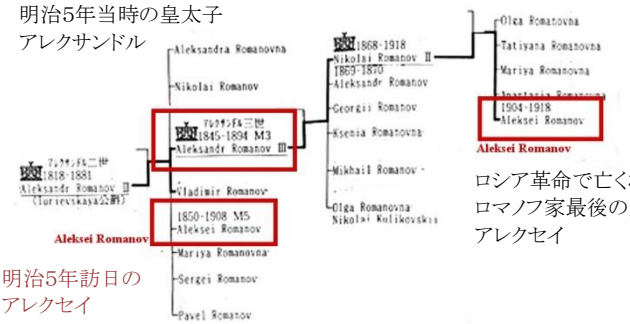
よく知られた
養育院開設の一般的な説明。
しかし・・・

養育院は、1872（明治 5）年にロシア皇太子アレクセイが来日する直前、街中に乞食等が徘徊するのを帝都の美観を損ねるものとし、外交上・治安上の理由で約 240 人の乞食・浮浪者を本郷の旧加賀藩邸に隔離収容したことから始まる。

実は、明治5年訪日のアレクセイは**皇太子**ではありません。

当時、ロシアの皇太子は、第 2 皇子アレクサンドル・アレクサンドロヴィチ・ロマノフです。（長男ニコライは病死）。
来日したアレクセイは四男で、皇太子ではありません。
皇太子ではなく、皇子または大公（＝君子一門の男子）と呼ぶのが正しい表現です。

明治5年当時の皇太子
アレクサンドル



明治5年訪日の
アレクセイ

ロシア革命で亡くなった、
ロマノフ家最後の皇太子
アレクセイ

では、養育院は明治 5 年開設の浮浪者収容施設から始まるという説明はどうでしょう？
渋沢栄一の養育院長就任から出発し、養育院前史をさかのぼってみます。



院長渋沢栄一は、東京府議会やマスコミの養育院廃止論（財政圧迫、惰民養成）という逆風の中、院の存続に奮闘。分院・専門施設を次々開設。91 歳で亡くなるまで、約 50年間院長を務め、養育院事業を拡大していった。

渋沢栄一による養育院事業の展開

養育院開設から 7 年後、渋沢栄一が養育院院長に就任。



渋沢栄一に引き継がれた新・幼病院「養育院」。

1879（明治 12）年
養育院の事務長は院長に改称。この職制改定で、渋沢栄一は養育院院長に。

1876（明治 9）年
渋沢栄一、養育院事務長に就任

1872（明治 5）年
アレクセイ大公訪日直前に浮浪者を集めて収容。営繕会議所附属養育院と命名。

大久保一翁東京府知事が、東京の貧民の救貧対策を営繕会議所に諮問。営繕会議所は、病人・老人・浮浪児を保護する施設の設置を含む「救貧三策」を答申。

明治政府は共有金（＝七分積金）を管理する組織「営繕会議所」設立。

大久保一翁（忠寛）の「病幼院」プランは、養育院として実現。



大久保一翁（忠寛）

1869（明治 2）年
明治政府は、七分積金により貧民を収容する救育所を三田・麹町・高輪に設置。しかし、逃亡者が相次ぎ、費用の維持も困難で、明治 5 年に廃止。

1868（明治元）年

明治維新　幕府の実質的最高位（会計総裁　若年寄）であった大久保一翁が、江戸の困窮者救援資金七分積金を含む幕府の財産を明治政府に引き継ぐ。



徳川慶喜、静岡藩に蟄居。静岡藩中老となった大久保一翁、欧州帰りの渋沢栄一を呼び静岡藩勘定組頭に任命。

1867（慶応 3）

坂本龍馬は、大久保一翁の大開国論より「船中八策」を作成。西郷隆盛らに大政奉還論を説く。船中八策を基にした山内容堂「大政奉還建白書」により、将軍徳川慶喜大政奉還を朝廷に奏上。



1864（元治元）年

大久保忠寛、家督相続し、名を一翁と改める。

大久保忠寛、一翁に改名。

1863（文久 3）年

大久保忠寛、屋敷を訪れた土佐浪人５人。そこで忠寛の大政奉還論を聞かされ、深く感銘をうけた浪人が、坂本龍馬。

幕府の中で大政奉還論（諸侯会議・公議政体論）を唱えた大久保忠寛、幕末の混乱の中で、左遷と登用を繰り返す。



大久保忠寛

1857（安政 4）年

大久保忠寛（目付・海防掛・蕃書調所総裁）、平山敬忠の素案を加筆修正した、「病幼院創立意見」を幕府に提出。しかし直後に忠寛は長崎奉行に任命されるも拒否。左遷させられる。西洋の社会救済制度を参考にした病幼院プランは実現せず。

1853（嘉永 6）年
黒船来航



幕末開港後、欧米諸国の重圧を感じる幕府は、オランダ以外の各国語（とくに英語）による洋学の必要にせまられた。洋学の中心機関として蕃書調所が設置され、外交担当官の養成・洋書翻訳・海外事情の研究が盛んに。

幕末、大久保忠寛により「西洋式の貧院・病院・幼院」の知識が、具体的な新施設プランとして浮上。

オランダ語による蘭学から、英語をメインにした洋学へ

1790（寛政 2）年

松平定信（老中）、江戸の貧窮者の保護資金積立制度「七分積金」発足。

職方外紀により日本に伝わった西洋式の貧窮者保護制度「貧院・病院・幼院」の知識

1700 年ごろ？

職方外紀が日本に渡来。鎖国体制の中で禁書とされたが、西洋の知識に飢えていた人々は争って本書を伝写し、蘭学者の間に、政治・学問・教育・福祉の理想形としての西洋観が広まる。ヨーロッパの社会救済制度を解説した記述にある「貧院」「幼院」「病院」という言葉は本書によって蘭学者の間で使われるようになった。現代の日本で使われる「病院」という言葉はここから。



1623 年

イエズス会士のイタリア人艾儒略(Giulio Aleni, 1582–1649)が編纂した世界地理書「職方外紀」、明（中国）で刊行。

櫻園通信　8. 平成 26 年 2 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター



健康長寿医療センターの敷地に 板橋競馬場があった頃

大沢鷹邇　養育院・渋沢記念コーナー維持ボランティア

健康長寿医療センターの裏（北側）の崖沿いに、一方通行路があります。この通路にほぼ並行して、敷地内にかつて板橋競馬場のトラック（走路）がありました。今は跡形もなく消えた幻の競馬場です。



図 1　板橋競馬場を描いた明治 45 年の地図

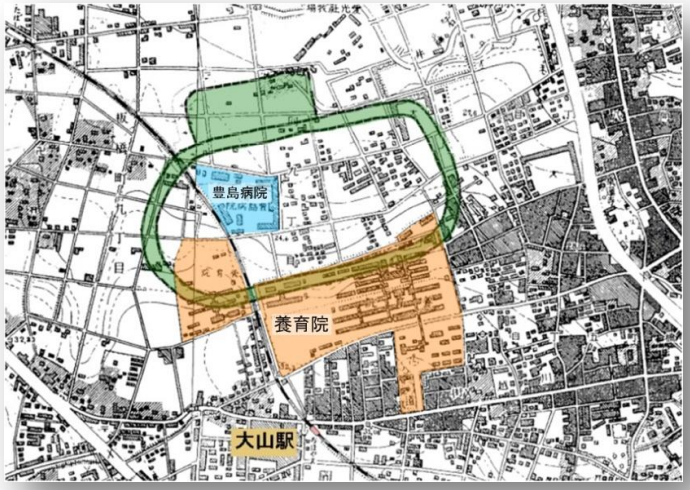


図 2　昭和 12 年測図の地形図に、明治 42 年測図の板橋競馬場トラックのみを加筆

走路は崖上に直線部があり、区立大山公園の北端部から半周して傾斜を下り、当時蛇行していた石神井川を除けて低地に直線部を設けていました。

1 周 1600m の楕円形の走路は、東上線のガード付近から再び半周して傾斜面を先ほどの崖上に戻りました。

明治 45（1912）年発行、東京逓信管理局作成の「東京市及び近傍町村番地入地図」に板橋競馬場が鮮明に描かれています（図 1）。明治時代の終わりのころの板橋町の姿を伝えています。

大正 3(1914)年開通の東上鉄道（現　東武東上線）や同年開院の養育院板橋分院（現　都立板橋看護専門学校）は、まだありません。

同図には、元禄 9（1696）年開設の千川上水と江戸時代以来の小松屋横町道が描かれています。千川上水は昭和 6（1931）年ごろに暗渠になるまで養育院の敷地内を通過する清流でした。

正門側の事務棟と北側の病棟の間に上水の清流が流れ、医師・看護師は事務棟から屋根付きの橋を渡って直接病棟に行くことができました。建物の外には別の橋がありました。

小松屋横町道は板橋区仲宿の酒屋小松屋の脇道が名の由来と言われています。大正 12（1923）年、養育院本院が大塚から移転してきたとき、院内病棟を東西に横切っていた小松屋横町道を裏の崖際に付け替えました。現在、小松屋横町道は、板橋第一小学校前を通って大山公園に突き当たり、右（北）に迂回し、崖沿いを行き、東上線に出たところで再び昔の小松屋横町道の踏切（第 17 号踏切）に出ます。

第 1 図を改めてみると、競馬場の走路は小松屋横町道に近接し、ほぼ並行に走っています。つまり、走路は現在の一方通行路と、旧小松屋横町道の間を走り抜けていたわけです。当時トラックの柵は目隠しは無いと思われるので、小松屋横町道を歩く人のすぐ脇を競走馬が駆け抜けていたことになります。石神井川寄りの低地にあった馬見所でみるよりも余程迫力があったことでしょう。

板橋競馬場については「久保田遺跡」発掘報告書に荒木正彦氏が詳報しています。氏の記事を引用し・参考させて頂き、以下にあらましを記します。

日露戦争（1904-05 年）を通して日本の軍馬の不足、質の貧弱さが指摘され、その対処法として競馬の有効性が説かれました。

そこで明治 39（1906）年東京競馬場が池上を馬場として設立されました。同年 11～12 月に第 1 回のレースが開催され好評を博しました。こうして 1～2 年後には 200 を超える倶楽部設立の申請書が出願されました。板橋競馬場もこんな状況の中での誕生です。明治 41（1908）年春の時点で、東京付近で馬券を発売して開催された競馬は、東京競馬会（池上）、日本競馬会（目黒）、京浜競馬倶楽部（川崎）、日本レース倶楽部（横浜）、そして東京ジョッケー倶楽部（板橋）の 5 か所でした。

東京ジョッケー倶楽部には、明治 40 年 8 月に設立の認可が下りていましたが、馬場工事の遅れで開催できず、翌年に順延となりました（図 3）。板橋競馬場第 1 回は明治 41 年 3 月 28 日から 4 日間開催されました。内 3 日間が雨天となり、馬場が重く交通不便等の悪条件にもかかわらず、入場者は相当多く、出場馬と興味ある番組により観衆を熱狂させ、予期以上の成績であったといいます（「日本競馬史」第 3 巻）。

その後、7 月に 4 日間、12 月に 3 日間開催したのを最後に板橋競馬場はわずか 1 年足らずで役目を終えました。

明治 43（1910）年、政府の方針で東京近辺の 4 競馬会（池上、目黒、板橋、川崎）は整理統合され、同年 5 月に東京競馬倶楽部を設立し、唯一の馬場を目黒（後に府中に移転）に定めました。…以上荒木氏の記事から。

図 1 の地図が発行された明治 45 年、板橋競馬場は統合された後で、その跡地が残されていました。明治 45 年 7 月 30 日、時代は大正に変わりました。

大正元年、養育院板橋分院（現　都立板橋看護専門学校）の敷地の取得が決まりました。分院敷地の北東寄りは、板橋競馬場のトラックがカーブしながら崖上から傾斜面を下りていた部分でした。分院も競馬場の跡地を利用していました。

板橋競馬場の跡地は、分院のほか、東上鉄道（現　東武東上線　大正 3 年開通）、愛光舎牧場（大正 2 年　巣鴨より移転）、豊島病院（大正 7 年　現板橋第一小学校の近くから移転）、養育院本院（大正 12 年　大塚から移転）など、公私の大規模施設の開設・移転先に活用されました。現在は介護・医療・教育施設の一大集積地に発展しています。



図 3　都新聞　明治 40 年 8 月 31 日版
「久保田遺跡」から



図 4　板橋競馬場勝馬投票券　「馬の博物館」所蔵



なお、板橋競馬場については、板橋区立郷土資料館の特別展「板橋と馬」にて勝馬投票券（図 4）の実物が展示されています（平成 26 年 1 月 25 日～3 月 23 日）。

同展図録には同館学芸員齊藤千秋氏が板橋競馬場の誕生と終わりを詳しく語られています。

櫻園通信　9. 平成 26 年 2 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

養育院史



東京府知事
大久保一翁



140 年にわたる**養育院**の歴史の中で、60 年史・70 年史・80 年史・100 年史・120 年史が編まれている。

60 年史は昭和 8 年発行。渋沢栄一生前に発行が目指されたが、間に合わなかった。大部で、よく基礎資料が上げられている。関東大震災で、渋沢栄一が集めた元の資料が失われており、以後の養育院史のはじめの頃の記載は、おおむね本書による。難は、渋沢死亡直後の出版であり、渋沢色が強い。

昭和 18 年発行の 70 年史は、60 年史以降の記載が主であるが、冒頭の 60 年史の概略の中で、江戸期の社会福祉史を引き継ぐものとしての位置づけが明快で、七分積金の使い方を、大久保一翁知事が心配して、救貧策を営繕会議所に諮問し、三策の答申を得、その実現、養育院建設に動いている様が記載されている。その部分の原文を以下に示す。（稲松孝思）

第一編　六十年史梗概

江戸時代の社會事業　養育院は明治五年十月の創立と稱するも一面江戸社會事業の明治時代に於ける復活とも見ることが出來る。抑〻近代の社會事業は都市發展に附帶して必然的に發生せるものにして、東京市の社會事業特に養育院事業はその始源を遠く江戸なる都市發展の中に之を求めることが出來る。卽ち養育院事業の始祖と仰ぐ松平樂翁公時代の江戸社會事業の中にその萠芽を見、例へば備荒貯蓄の籾藏並に江戸町會所（もちにしょ）七分積金を初じめ釋放者保護事業とも見るべき石川島の人足寄場等の創立は、夙に八代將軍吉宗時代に創設せられたる今日の貧病院たりし小石川御藥園内の養生所等と相俟つて江戸都の社會事業に一應の整備を見せ、更に淺草と品川の兩所には非人溜が設けられ、非人無宿の徒を收容する等、夫〻府内の要救護者を救助し、一應濟貧の實を擧げ江戸市内の秩序を保つて來た。殊に町會所は今日の町會事務と救濟事務を擔當し、江戸の町法を改正して剩し得たる有名なる七分積金を繼續管理し、備荒のため糓を貯藏し、窮民の居宅救助、低利資金の貸附等の自治救濟事業を行ひ、明治政府に引繼がれたる資産のみにても百四五十萬兩の多額に上れるより見れば、江戸時代にとりては實に歷史的に誇り得べき大なる社會施設の一であつた。

然るに幕末より明治維新への社會變革は、これ等の施設を或は破壞し或は無機能たらしめ、一時的なりしも市内の社會事業は潰滅に瀕した。かくて新東京には窮民浮浪者輯に增加し「窮民指揮に泣き、餓莩（がひょう）道途に横はる」の慘狀を呈したといふは、敢へて誇張の修辭にあらざりしことが容易に想像される。

養育院の創立　明治二年時の有司之を捨て置く可からずとなし、當時莫大の資金を有しつつ、その活動機能を停止しゐたる町會所に命じ之を救濟せしめた。三田薩摩邸跡、鍛冶町紀尾井町の救育所は卽ち之である。然るにこの救育所は一時的のお救小屋式施設にて間もなく廢止せられ、町會所も亦營繕會議所と改められて土木架橋等の公共事業を營むこととなり、市内の救貧問題は依然として未解決のまま放置せられてゐた。ここに於て時の東京府知事大久保一翁氏は大に之を憂慮し、明治五年九月その救濟策を營繕會議所に諮問した。當時會議所は市内の有力者より選ばれたる委員によりて運用せられゐたるが、所謂町會所以來の社會事業的經驗により、左の如き適切なる三策を獻議した。依に有名なる救貧三策にして　卽ち

一、工作場の設置（授産場）　二、窮民救濟施設の設立

三、日雇會社の設立

の三社會施設の設立方策にして、これは當時の東京市有司の社會事業に對する最高認識を示すものとして今日尚頗る興味深きものあるも、幸ひにこの三策は悉く府當局の納むる處となり、夫〻實現の計畫中なりし處、偶同年十月露國皇子の來遊あり、東京は帝都の體面上、市内に多數徘徊する浮浪乞食の徒を一定の場所へ取集むるの必要に迫られた。

ここに於て東京府は營繕會議所に命じて取敢へず本郷元加州邸跡空長屋を臨時收容所とし、同年十月十五日より十九日迄市内に徘徊する浮浪乞食の徒を集めて同所へ收容せしめ、その取扱方を淺草溜（舊幕時代の病囚輕罪囚及び釋放者等の保護所）の非人頭たりし車善七なる者に囑した。これ卽ち本院の濫觴にして、その間收容者老

幼男女を合して二百四十二名の多數に上つた。而してこの十五日を以て養育院の創立記念日とする所以茲にここに存する。然しながら未だ當備の施設なき爲、一先づこの收容者を淺草溜に預けることとなり、十九日移轉を行ひ、東善七によつてその保護をなさしめたが、後に當設の收容所を上野護國院内に設立し、淺草溜の收容者を移轉すると共に、明治六年二月四日より新しく收容を開始し東京養育院と稱した。かくて名實兼備の養育院は生れた。而してその所要經費は前述せる通り松平定信公の創始にかかる七分金を以て支辨せられたるを以て、遠く本院事業を業績公に由來するといふ所以がここに存する。

事業の發展擴充　かくして會議所々管の下に開始せられた東京養育院は、同九年九月會議所が其の事務を東京府に引繼ぎたる爲、爾來府知事の直轄に歸したるが、終世本院事業に盡瘁せられたる渋澤子爵が本院長の職に就きたるは實に明治七年のことにして、偶ゝ幕臣當時の等知たりし大久保一翁氏より會議所共有金の取締を委任せられたるに端を發する。

然るに明治十六年東京府會に於て養育院は十七年度限り地方稅支辨を廢し、その經營は府の直轄を離れ委任經營とするの議可決せられ、爾來渋澤院長等により維持經營せらるるに至りしが、明治二十二年四月東京に市制の施行せらるるや、府會の決議により翌二十三年一月一日より市へ引繼がれ、東京市養育院と改稱、今日に至つてゐる。

本院設立の當初は現に市内に徘徊する乞食の徒を收容するに止まりしが、漸次市内居住の窮民救助をも行ふこととなり、尋で明治十六年一月よりは事業を擴張して東京府下の行旅病人をも併せ救療し、同十九年三月に至りては更に東京府下の棄兒、遺兒、迷兒をも救育し、同二十三年には郡部の窮民をも受託收容するに至り、又同三十三年七月には新に感化部をも附設して市内不良性兒童の感化事業を開始する等事業の範圍は漸次擴張せられた。

又明治末期より大正初期に於ける社會問題發生の時期に入るや所謂近代的社會事業たる職業紹介所或は無料宿泊所、市内浮浪兒童の保護所等を創設して、後の東京市社會局所管事業の端緒をも開き、越えて昭和年度に入り劃期的社會立法たる救護法の昭和七年一月一日より實施せらるるや、府市の該當者を收容し愈々斯界に重きをなすに至つた。

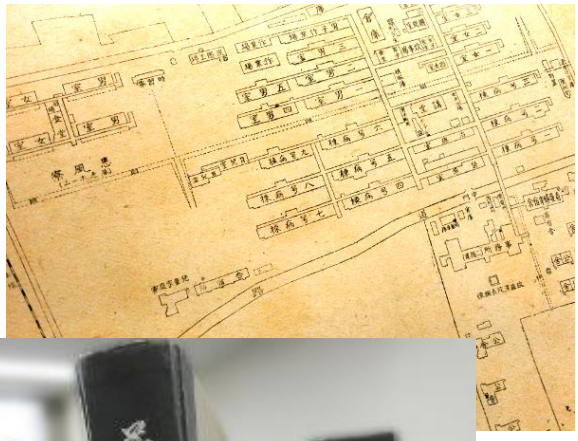
次に施設擴充の跡を見るに本院は明治六年二月上野護國院に移り創始期を送れるが、同敷地が博物館敷地として入用となりし爲、同十二年十月には神田和泉橋の元藤堂藩の上屋敷跡に移りしも、明治十八年度以降地方費の支辨が廢せられて事業縮少の止むなきに至り、同地の敷地建物を賣却、本所長岡町に移轉、然るに明治二十三年一月より東京市營となり次第に事業の擴張に伴ふ收容者の增加は遂に收容場舍の狹隘を告ぐるに至り、明治二十九年三月小石川區大塚辻町に新築移轉、非常なる整備發展を見たるが、同地がいつしか殷賑の巷と化し建物亦腐朽破損しきに至り、大正十二年府下板橋町の現在地に新築移轉して、今日に至つてゐる。

次に明治二十七、八年戰役前後に渉り東京市内に夥しき不良兒童簇出し、是等兒童にして本院に收容せらるるもの靜からざる結果、在來收容中の孤兒等にして漸次惡化の傾向を生じ、之が防止策として特別教育機關設置の必要を認め、明治三十三年七月院内に感化部を設置、我國感化事業の先驅をなす。後ちに別置の必要を認め實時府下武藏野村井之頭御料地の一部を拜借の上、感化部の新築に移り、三十八年九月竣成、東京市養育院感化部井之頭學校と稱したが、同校の敷地借用は後に井之頭公園の東京市への恩賜の端緒を作つてゐる。

次に本院收容の兒童は多く入院前の環境の影響に依り發育不良者又は虚弱兒童少からず殊に明治三十年前後在院兒童にして肺結核に仆れるもの甚だ多きに上りしを以て、明治三十三年七月千葉縣勝山町に臨海保養所を設け病弱兒童の轉地を試みたるが、其の成績良好なるに鑑み、明治四十二年四月同縣船形町に安房分院を創立、病弱兒童の療養を兼ね小學教育を授け今日に至つてゐるが、世界最古の養護施設として廣く知られてゐる。

又本院創立以來入院者の增加に伴ひ、兒童の入院者少からず、既設の收容場舍のみにては漸次狹隘を感ずるに至れるのみならず、是等兒童を成人收容者と同一場所に收容するはその教育上に及ぼす惡影響甚大なるものあるを以て、之が別置の必要を感じ、明治四十二年三月府下北豊島郡西巢鴨町に兒童收容所を新設し、巢鴨分院と名付け、本院收容中の健康兒童を之に移して幼稚園並に小學課程の教育を施すに至り、一應養育院の兒童保護の態勢は整備するに至つた。

前記安房分院は結核兒童の療養所として設置せられたるも大人の結核患者の入院極めて多く大正三年十月東京府北豊島郡板橋町にこれが專門の療養所を設置、板橋分院と稱した。同施設はその後、東京市の野方療養所創設せられ、加ふるに大正十二年九月大塚の本院が同分院隣りに移轉し來り、以來分院として獨立の取扱ひをなすの理由薄弱となりしが、設立當時は市立野方療養所に先驅せる帝都唯一の療養施設として大きなる歷史的役割を果して來たものである。以上の如く一本院の外に三分院一學校を有する程の發展擴充を遂げつつ六十年史時代を終り、最近十年の改善整備時代に入るに至る。





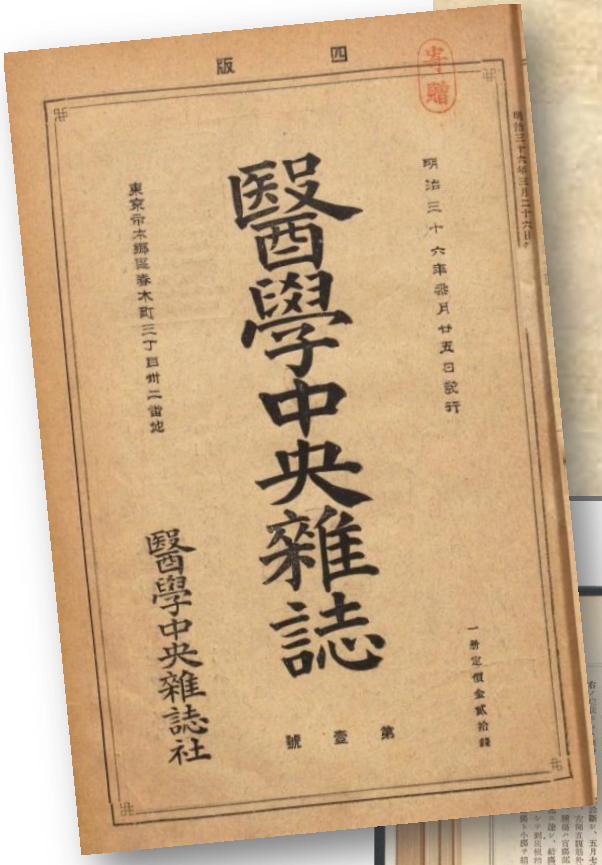
日本最古の医学情報データベースに携わった　養育院附属病院院長

東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

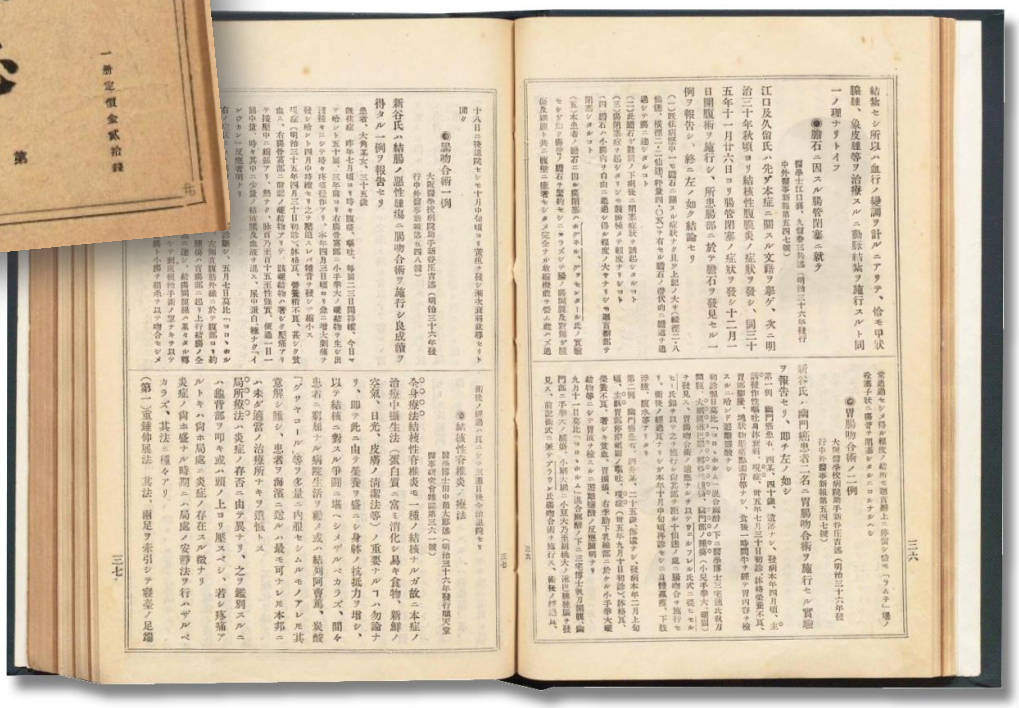
宮本孝一（老年学情報センター）

コピー機・パソコン・インターネットのない時代に、文献（医学雑誌掲載の医学論文）の収集や引用の作業をどのようにやっていたのか、若い方には想像もできないのではないでしょうか。洋雑誌には INDEX MEDICUS、和雑誌には**医学中央雑誌**という抄録誌があり、病院内図書館の一角を占拠していました。 医師は、診療の合間や夜間、これをひもとき、筆写するのが、学会に発表するときのはじめの作業でした。

この「医学中央雑誌」を発行していたのが、尼子四郎・富士郎親子でした。尼子富士郎先生は、世田谷区の浴風会という老人施設を経営しており、老人病の泰斗でした。昭和47年、当医療センターの前身「養育院附属病院・老人総合研究所」が新築され大々的に出発した時の村上元孝院長、亀山正邦副院長、蔵本築部長、松下哲医長らや、現理事長の松下正明は、何れも尼子先生の所で、老人学を研鑽した方達でした。また当時の養育院附属病院の医師たちも医学中央雑誌の抄録づくりを手伝っています。（文責　稲松孝思）



医学中央雑誌　創刊号





尼子四郎



尼子富士郎

日本一古い雑誌データベース　日本の医学関連専門誌（約三〇〇〇誌）の掲載記事・掲載論文（三六万件）を探す索引データベースに、**医学中央雑誌（医中誌WEB）**というデータベースがあります。

日本の医師・看護師など医療専門職が、専門分野や医療業務に関する最新の情報を入手するために、なくてはならないデータベースで、東京都健康長寿医療センターでも職員が日常的に使用しています。

かつては冊子でしたが、現在はインターネットを通じて、施設内のパソコンで使用します。医学中央雑誌は、約一一〇年前、明治三六（一九〇三）年に一人の医師が発行し始めました。医学情報の索引誌としては世界で二番目に古く、日本で一番古い雑誌データベースです。

夏目漱石の家庭医が始めた「医学中央雑誌」　夏目漱石「吾輩は猫である」に登場する甘木先生という人物のモデルになった医師**尼子四郎**が、当時の医学先進国ドイツの医学雑誌索引誌に刺激を受け、千駄木にあった自宅を作業場にして「医学中央雑誌」の編集・刊行を開始しました。尼子四郎は近所に住んでいた夏目漱石の家庭医もしていました。

日本の高齢者医療の草分けと「医学中央雑誌」　医学中央雑誌刊行から二五年後、その刊行事業は尼子四郎の息子**尼子富士郎**に継承されました。尼子富士郎は、関東大震災で行き場を失った高齢者を収容した東京・高井戸の施設**浴風会**の医長を務める医師で、浴風会の医療は日本の高齢者医療の先駆けとなり「老年医学の発祥の地」と言われています。

尼子富士郎の作業　医学中央雑誌の編集とはつぎのような作業でした。

国内で発行された医学関連領域（医学、薬学、歯科学、獣医学など）の雑誌や図書を購入し、論文、学会発表のすべてを読んで採択、非採択を決める。採択が決まると、科目別分類をする。抄録が必要なものは、抄録を作る。これらを編集し、校正し、索引語を指定する。富士郎は浴風園の院長としての仕事や、東京大学での老年医学の講義も行いながら、この「医中誌」発行の全ての工程を一人で確認し、とくに論文と学会発表の採否、科目別分類，最終校正においては全く一人で行っていたという。ゲラ刷りは印刷所から毎日数十ページ届くため、これらの校正に毎日数時間を要し、この日課は七八歳で亡くなる直前まで続けられた。（斎藤晴恵　尼子四郎と夏目漱石　医学図書館　五三巻一号より）

尼子富士郎の死後、富士郎の自宅でのこの作業を継承したのが、当時、養育院附属病院の院長に就いていた村上元孝でした。



養育院附属病院
村上元孝院長

尼子富士郎の事業を継承した、新・養育院附属病院長　終戦後しばらく養育院収容者専用だった養育院附属病院は、昭和四七（一九七二）年、一般都民も対象にした高齢者医療専門病院として再スタートしました。新・附属病院の初代院長に就任したのが**村上元孝**です。

村上元孝は昭和三九（一九六四）年に医学中央雑誌刊行会の理事に就任し、医学中央雑誌の発行に関わっていました。またそれ以前に昭和三四（一九五九）年の日本老年医学会設立にも関わっています。

村上元孝も尼子富士郎と同様に、日本の高齢者医療の開拓者でした。

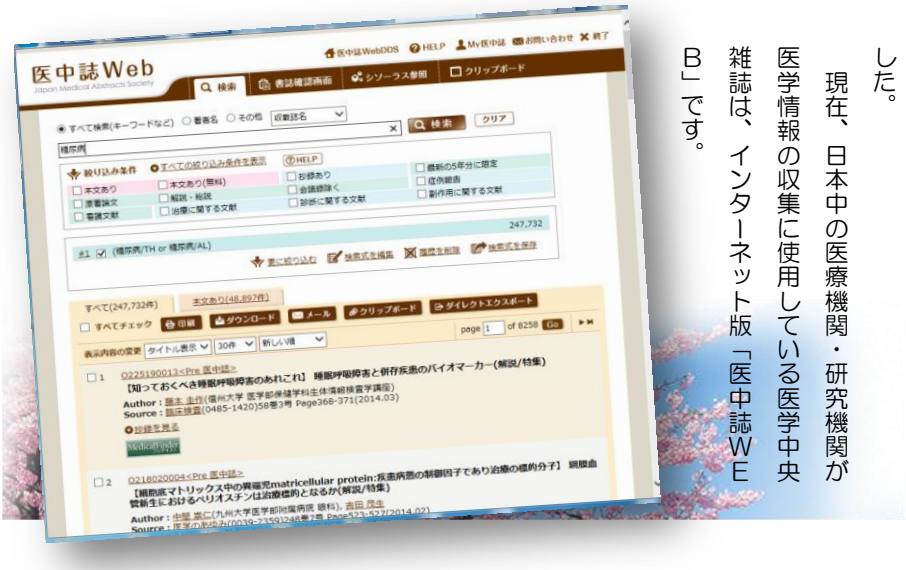
村上元孝は昭和五九（一九八四）年まで院長を務めて「世界にも類を見ない、研究機能を持った老人専門病院」づくりをめざし、また、医学の世界では、日本老年学会や国際老年学会を会長として開催しました。

村上元孝は、養育院附属病院長在任中の昭和五〇（一九七五）年に医学中央雑誌理事長に就任、尼子富士郎の家内工業的といえる医学中央雑誌の発行作業を引き継ぎ、八年後には、コンピュータを使った編集をスタートさせました。

医学中央雑誌の電子化　コンピュータ編集を導入した村上元孝は平成元（一九八九）年に亡くなりましたが、その後も医学中央雑誌の電子化はさらに進展し、CD-ROM 版発行を経て、平成一二（二〇〇〇）年にはインターネットで使用する「医中誌WEB」が始まりました。

明治三六年から始まった冊子は、平成一四（二〇〇二）年まで刊行されていました。

現在、日本中の医療機関・研究機関が医学情報の収集に使用している医学中央雑誌は、インターネット版「医中誌WEB」です。



櫻園通信　号外．平成 26 年 4 月

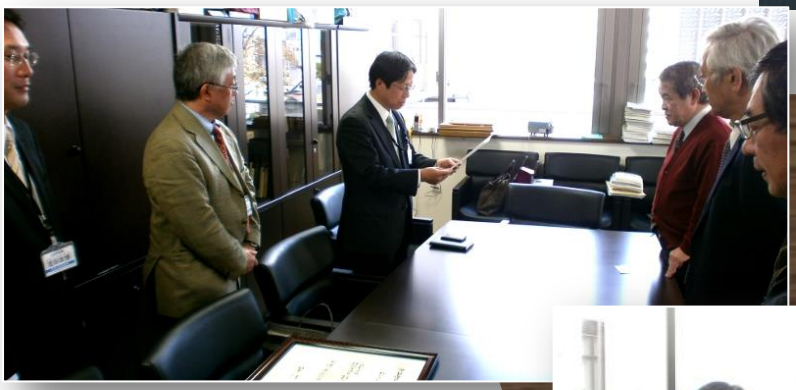
東京都健康長寿医療センター　養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

渋沢栄一銅像
板橋区の有形文化財に登録



健康長寿医療センター敷地内に立つ渋沢栄一銅像が、平成 25 年度**板橋区登録有形文化財（歴史資料）**に登録されました。

4 月 14 日（月）、センター理事長室で、板橋区教育委員会から松下理事長に登録書が手渡されました。





登録書は、二階「養育院・渋沢記念コーナー」に掲示しています。





宮本孝一（老年学情報センター）

旧養育院渋沢栄一銅像とは



銅像は、関東大震災による養育院大塚本院崩壊に伴い、大正十二年、既に分院があった板橋へ本院移転が決まったことを契機として、同十三年に東京市長永田秀一郎らが発起人となり「渋沢養育院長銅像建設会」を設立、六五〇名余りの寄付を募り製作し大正十四年（一九一五）十一月十五日、本院完成にあわせて建立しました。

当初は養育院本院の事務室があった、現在の板橋第一中学校内に建てられましたが、その後転々と位置を変えています。

昭和十六年に金属供出のため台座から下ろされ、代わりにコンクリート製像が台座に置かれていました。

戦後昭和三二年の像移転の際に元の銅像に戻され、平成二五年六月東京都健康長寿医療センターの開院を機に現在地へ移設しました。

渋沢栄一像は、帝展・文展の審査員も務めた彫刻家小倉右一郎製作、完成当時は高さ十六尺（四．三メートル）、方二〇尺（五．四メートル）の花崗岩の台座に、高さ一〇尺（三．七五メートル）、重量四八〇貫（一．八トン）の青銅製で作られ、その姿はフロックコートにソファーに座った坐像です。

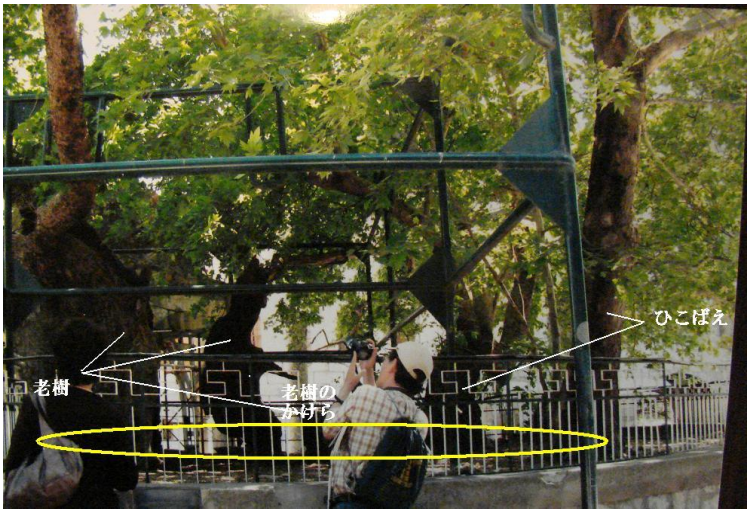
（板橋区ホームページ　「旧養育院渋沢栄一銅像」より）



櫻園通信 11. 平成 26 年 4 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

健康長寿医療センターのヒポクラテスの木について

ヒポクラテス（紀元前 460 年頃～紀元前 370 年頃）は、古代ギリシャの医者である。医学を原始的な迷信や呪術から切り離し、臨床と観察を重んじる経験科学へと発展させたことが最も重要な功績として挙げられる。また、医師の倫理性と客観性について『誓い』と題した文章が全集に収められ、現在でも『ヒポクラテスの誓い』として受け継がれている。これらヒポクラテスの功績は古代ローマの医学者ガレノスを経て後の西洋医学に大きな影響を与えたことから、ヒポクラテスは「医学の父」、「医聖」などと呼ばれる。



2005 年、ギリシャ・コス島にて、著者撮影
最盛期、黄色輪の樹幹であったが、巨大な空洞ができ、樹皮でかろうじて立ち、鉄枠で支えられている。2 本の蘖（ひこばえ）が大きく育つ。

そのヒポクラテスは、晩年、生まれ故郷のコス島のプラタナスの木陰で、若い医師達に医の道を教えたといわれる。そのゆかりのプラタナスの子孫が巨樹となって、19 世紀のヨーロッパで最も有名な木となり、「ヒポクラテスの木」とよばれていた。今日、空洞の多い老樹となっているが、その蘖（ひこばえ）2 本が大きく育っており、親の老樹をしのぐ勢いで繁茂している。

この「ヒポクラテスの木」を始めて日本に持ち込んだのは、慶応大学卒業の産婦人科医篠田秀男先生である。1955 年にコス島を訪れた際、その種を持ち帰り、日本で発芽させ、その実生苗や挿木苗をご自分の病院や母校の慶応大学、山形県の施設などに植えたのである。

1966 年、元日本医史学会理事長の新潟大学の整形外科医、蒲原宏先生が、同様にプラタナスの種を持ち帰り、発芽させ、あちこちに挿し木苗を配布している。

1970 年、東大の沖中重雄先生は、医学会総会の会頭であったとき、東大紛争後の医学界の混乱を深く案じ、ヒポクラテス展を催した。これを担当した東大の緒方富雄先生は、そのとき以来、ヒポクラテスに深く思いを致し、篠田株、蒲原株を入手して育てていたが、1976 年、ギリシャの Doxidas 教授経由で、「ヒポクラテスの木」ゆかりの苗を入手、本郷の東大医学図書館の前に植え、説明碑を建てている。今日、38年を経て、医学図書館の前に巨樹となって育っている。篠田株も本郷の敷地内のベルツ・スクリバ銅像の近くに植えたが、2000 年頃には枯死して、説明碑のみが残されている。蒲原株は沖中先生が長く療養されていた虎ノ門病院の川崎分院で育てられ、今日、医師教育のシンボルとなっていたが、2013 年に虫害で枯死した。



東大医学図書館前の、樹齢 30 年余のヒポクラテスの木。
遠くに新校舎の塔が望見できるが、医学のシンボルの医神・アスクレピオンの杖が描かれている。

1977 年、日本赤十字百周年にあたり、小林隆院長は、ギリシャ赤十字から苗と種を入手、日赤中央病院で増殖し、赤十字病院を中心に広く配布している。その後も何人かの先生がコス島を訪れるたびに苗木を入手し、医学教育のシンボルとして育てている。

		日本の“ヒポクラテスの木“					2010. 4. 10.		
	篠田	蒲原	緒方	小林	ｷﾞﾘｼｬ協会	原田	武田	大田・富樫	不明
記載	42	35	1	119	22	5	5	8	2
生存	17	20	1	43	13	2	3	7	2
踏	2	5	1	11	2				
ｱﾝ	5	12		23	9		1	7	
ﾈｯ	10	2		6	2	2	2		2
枯死	15	10		20	5	3	1	1	
不明	10	5		56	4		1		

2010 年 4 月以後、ネット上に、蒲原株 22 本程度、武田株 3 本程度の記載あるが、詳細不明

2005 年ころ、ある思いがあって、アンケート調査、ネット情報の収集により、日本国内のヒポクラテスゆかりの木について調査をした。日本国内で 100 本以上のヒポクラテスの木が育てられていることが判明し、それらの木の由来と系統を日本医史学会に報告した。その後の調査情報も含めて、入手者の系統ごとの本数を一覧表に示した。その後、長岡の星先生、虎ノ門病院の先生が積極的に配布している。この調査のとき、それを導入するときの関係者の医学の現状、教育についての深い思いが伝わってきた。
私も 2009 年に、縁あって日本ギリシャ協会から苗を入手し、育成に努めたが、心無い人？に傷つけられ、数年で枯死してしまった。

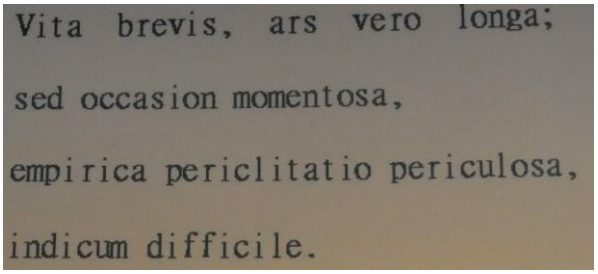
今回、新施設の建設に際して、再チャレンジを試みた。たまたま本郷の東大・緒方株の実生苗を見つけ、関係者のご理解を得て、2012 年秋に高さ 30cm 位の苗を入手、リハビリテーションのスタッフに鉢植えにして育ててもらっていた。新施設移転後は、屋上庭園に移植していていたが、樹勢もしっかりし、屋上の屋根を貫く勢いになってきたので、地上に降ろすことにした。移植に最適の 4 月、病院玄関に移植した。背丈 158cm、根回り 3cmの幼い樹である。ヒポクラテスの有名な箴言の緒方訳を掘り込んだステンレス板を配置した。

また、板橋看護専門学校の新築にあわせ、表の武田株のヒポクラテスの木の苗を入手することができ、新しい敷地に植えた。武田株（京都の武田病院の理事長が入手、配布したものの挿し木苗を旧知の三重大学の名誉教授からいただいたものである。

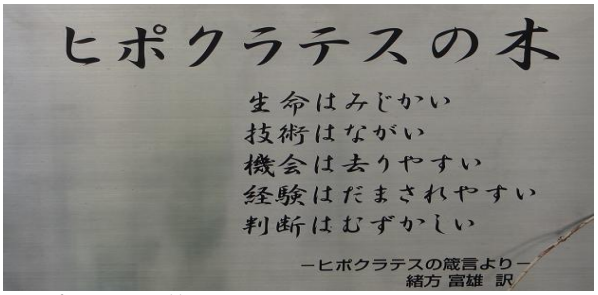


2012 年秋入手　　2014 年 4 月定植

「ヒポクラテスの木」は中東原産のプラタナスであり、アメリカ原産のアメリカプラタナス、交雑種のモミジバプラタナスとは葉の形、幹の様子、実のつき方などの表現形に違いがあるが、詳細は稿を改めたい。



この 10 年近く、あちこちの施設の「ヒポクラテスの木」を見る機会を得た。それぞれ、若干の違いがあり、実生の場合の遺伝子変異、枝変わり、植えられた土地の条件、樹齢などに起因すると思われた。医学倫理も、時と場所を乗り越えて、本質的には普遍的なものであろうが、時代ごとに、土地ごとにいささかの差があり、それを反映するものと考えたい。



ヒポクラテスの箴言

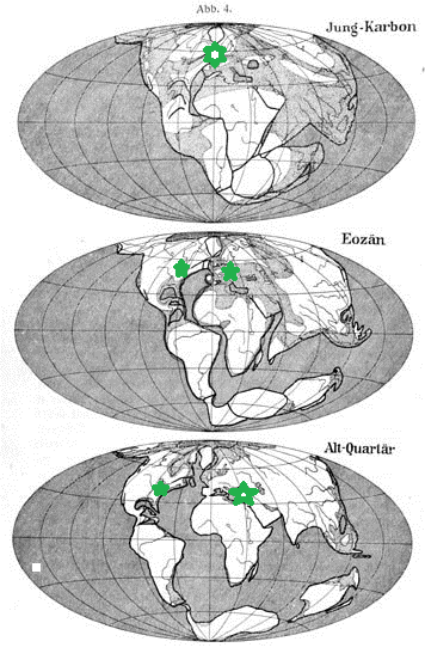
プラタナスの寿命はおよそ 500 年と考えられており、現在のコス島の老樹も、すでに 5 代目くらいなのであろうか。すでに老年期に達しているが、勢いよく蘖（ひこばえ）が二本、次の時代に向かって育っている。医の道に思い惑うこと、悩み苦しむことは、医学に携わるものの必然である。そのときに、自然とともにある医学の本質を、考え続けるきっかけにしていただければと思っている。あちこちの医療関連機関で「ヒポクラテスの木」を育てる人たちの共通の思いであろう。（稲松孝思）



櫻園通信　12.　平成 26 年 4 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

ヒポクラテスの木の植物学

「ヒポクラテスの木」は、中近東原産で、ギリシャやトルコにふつうに生えている**プラタナス**（*Platanus*）の木であり、語源は大きな葉：ギリシャ語の platys（広い）に由来する。ソクラテスもプラトンもその木陰で講義したといい、ヒポクラテスだけではないようだ。花言葉は「天才」であるのはこのためだろう。日本名はスズカケノキである。スズカケの語源は鈴をぶら下げたような実がなるからと言う俗説があるが、誤りである。スズカケを漢字で書くと「篠懸」で、山伏などの旅装束の、上に羽織る衣装の胸元のぼんぼんのような糸玉のことである。能や歌舞伎の「安宅」などで、義経や弁慶の装束のあの玉である。近縁種のアメリカスズカケノキは、英語で　button　tree とよばれ、よく似た語源である。



ウェーゲナー『大陸と海洋の起源』第4版(1929年)より,著者改変

上段：　白亜紀：原始プラタナス
中下段：　大陸移動。隔離進化
18　世紀イギリスで交雑種：モミジバプラタナスができる。世界で品種改良公園樹、街路樹に

白亜紀のヨーロッパの植物化石にプラタナス属と思われるものがあるらしい。大陸移動で、ユーラシア大陸とアメリカ大陸が分かれる過程で一族は双方に引き裂かれたらしい。それぞれの土地で独自に隔離進化したものが、中近東原産のスズカケノキ（Platanus orientalis Linn.）と、北米原産のアメリカスズカケノキ(Platanus　occidentalis　Linn.)であるようだ。前者は葉の切れ込みが深く、多数の実が房状に付き、樹皮は大きく剥がれ白い幹が裸出するが、後者はその逆である。

17世紀のプラント　ハンターの時代に、英国の植物収集家の庭で両方を並べて植えておいたら、その合いの子のモミジバ　スズカケノキ(Platanus acerifolia　Wild.)ができたという話が本に書いてある。モミジバ　スズカケノキは幹の肌が美しく、公害によく耐え、剪定にも強いため、品種改良が加えられ、英国で庭園樹、街路樹として広く用いられ、その後世界中に広がり、いまや、世界4大街路樹の一つと言われている。

日本にスズカケノキが導入されたのは、明治９年の小石川植物園がはじめで、高さ30mを越える３種の巨樹が一望できる。明治　30　年代には、西洋式庭園に欠かせない樹種として、目黒の林業試験場、新宿御苑、日比谷公園に導入され、モミジバ　スズカケノキの子孫が品種改良されあちこちの街路樹に多用されている。

都内の街路樹の多くは、このモミジバ　スズカケノキである。同じモミジバ　スズカケノキであっても、地方により利用される品種は異なり、葉の形や樹皮の様子はさまざまである。


小石川植物園の３種のプラタナス。

剪定に強いため、秋には極端な剪定を受け、断端がコブの様になり、冬場には骸骨のような樹形で、街路に林立することになる。

剪定しなければ、のびやかに枝を伸ばして、高さ 30m を超える巨樹となる。街路樹とは全く異なる樹形である。

なおロンドンの大時計台（ビッグベン）の周りの緑はほとんどこの樹木である。





この 3 種の葉の形を写真に示した。葉の切れ込みが深く形の整っている左上 2 枚がプラタナス、切れ込みが浅く形の不正な右上がアメリカ　プラタナスの葉である。モミジバ　プラタナスは下段のものであるが、個体ごとの多様性が大きく、前 2 者の中間のいろいろな形のものがある。葉の大きさや厚さと固さ、黄葉時の葉の色つやにもバリエーションが大きい。

プラタナスは雌雄同株異花である。6 月頃に地味な花をつけ、秋には堅い集合果となる。冬中ぶらぶら枝に下がっているが、次第に落果して、踏まれて粉々になるか、風に飛び散って、タンポポのような小さい種が風に散る。



写真の①は雌花、②は雄花、③は一冬越した集合果、④は種が飛び散った後の柄である。



一つの柄に、花・実が 4−6 個つくのが写真に示すプラタナスで、1 個がブラーンとぶら下がるのがアメリカ　プラタナス、2 個ついてサクランボのような形になるのがモミジバ　プラタナスである。集合果は、崩れるとタンポポのような種となり、風に乗って飛び散る。





樹皮がはがれ、白く裸出するのがプラタナス、樹皮の剥がれにくいのがアメリカ　プラタナス、幹の中間から上のほうで剥がれてくるのがモミジバ　プラタナスであるが、個体差はかなり大きい。

左の写真は、東大のヒポクラテスの木の姿、集合果のなり方は、植物学的には、ギリシャのコス島の「ヒポクラテスの木」と同じ、中近東原産のプラタナスである。



スズカケノキ
アジア西部、ヨーロッパ南東部、ヒマラヤ原産。
葉の切れ込みが深い。
樹皮は大きく剥げ落ちる。
実は串団子のように 2〜6 個つく。



アメリカスズカケノキ
北アメリカ原産。
葉の切れ込みは浅い。
樹皮はあまり剥げない。
実は 1 個づつ。



モミジバスズカケノキ
スズカケノキとアメリカスズカケノキの雑種と推定されている。
樹皮が剥げ落ちて、まだら模様になる。
実は 2 個づつが多い。



あちこちに植樹されている日本のヒポクラテスの木には、挿し木苗で増やされたもの、実生苗で増やされたものが入り混じっており、同一クローンではない。アメリカプラタナスの遺伝子が入り込んだヒポクラテスの木も混在しているようだ。遺伝子の川の不思議を感じる。

（稲松孝思）

櫻園通信 13　平成 16 年 6 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター



養育院80年史より－渋沢院長の功績

社会福祉事業としての『養育院』事業は、多くの人の公益に対する思いがより合わさってできているものであろう。ことに、渋沢栄一の半世紀を超える、養育院事業の維持・発展に尽くした功績には計り知れないものがある。養育院80 年史に、その功績を総括した文章があるので紹介する。その中で、青淵回顧録を引用して、渋沢の社会事業感が述べられている。いわく、「人間は本来平等のものである、然るに一方は飽食してなお余りあるのに、一方は飢餓に瀕して苦悩を訴えている。この場合には他人は他人で、自分は自分であるといって、少しもおもいやりの心を起こさなくてもよいものであろうか・・・」。100 年以上前の言葉である。

アダムスミス風の考え、ハイエク風の考え、リーマンショックの時代を経て、21 世紀の今日、改めて渋沢の思想が、ドラッガーなどにより再評価される理由である。

七分積み金制度を作った松平定信（白川楽翁）の為政者としての覚悟を記した、吉祥天に対する起請文の写しを、自身の讃を付して養育院長室に掲げた渋沢の思い（展示中・・・）

大久保一翁の、「養育院掟書」の冒頭に付した、人間の基本理念としての互助精神（パネルに記載）・・・そのような人格のより合わさったものとして、養育院事業は存在しえたのであろう。

本院創立以来昭和六年一一月逝去されるまで実に五〇有九年間、本院事業のため、ひいては本邦社会事業発展のため尽瘁された故渋沢栄一院長の功績は偉大なるものがあり、本史冒頭からその献身的努力と高邁なる人徳については縷々述べてきたが、こゝに故渋沢院長の人となり及び本院関係の主なる事績について略述する。

天保一一年二月一三日武蔵国榛沢郡血洗島村（埼玉県大里郡八基村）に出生、後に一橋藩に出仕し、慶応三年フランス万国博覧会に水戸の民部大輔の差遣に際してこの随員として同三月一行と共に渡仏した。明治元年一一月帰朝、既に大政を奉還して静岡藩主であつた徳川家に仕えて勘定組頭に就任されたが、明治二年一一月新政府に出仕を命ぜられ大蔵省租税正に就任、以来累進して大蔵少輔となり、明治草創期の我が国財政の確立に貢献されたが同六年五月官を退き第一国立銀行の設立に意をそゝがれたのである。

越えて明治七年五月一一日静岡藩時代の旧知であつた東京府知事大久保一翁氏から共有金（楽翁公創設の七分積金）の取締を托され、営繕会議所頭取になり同時に養育院事務を管理されることとなつたのである。即ち本院事業に関与された端緒であつた。

其の後における事績については既に前各章において記述された通りであるが大綱的に述べるならば、先ず明治一五年東京府会に養育院廃止論が提議されるや、この阻止に百方奔走しこれを阻止し得たが、明治一八年六月限り養育院事業を地方税支弁から廃止することに決定され、院の存続が危うくなつた際、この存立に尽瘁して同一八年二月有志と共に、院の経営を委任されたのである。また後援団体である婦人慈善会の設立、演劇慈善市の開催等院資の増殖に努められた。明治二二年東京に市制が施行され、院長の申出により事業並びに財産の全部を引継いだ、そして本院委員長に推進され従前通り院務を統轄されたのである。

明治二七、八年の日清戦争前後市内に多数の浮浪少年が放浪し、感化救済の必要が痛感されたので同三三年七月院内に感化部を設置し、更に別置する必要を認め北多摩郡井之頭（現、三鷹市井之頭公園）御料地を拝借し、同三八年三月感化部施設として井之頭学校（現荻山実務学校）を創設された。

明治四一年一〇月、中央慈善協会会長に就任、翌四二年三月西巣鴨町に普通児童収容施設として巣鴨分院（現、石神井学園）を別置し、同年虚弱児養護のため千葉県船形町に安房分院（現、安房臨海学園）を創立、更に大正三年北豊島郡板橋町（現、板橋区板橋町）に肺結核療養所として板橋分院（現、本院分室）を設置し市の療養事業に先駆する等、養育院分化施設を発展拡充された。

その他大塚本院の板橋町移転、大震災の為ほとんど全潰した安房分院の復旧工事の完成等、その功績は枚挙にいとまがない。

又養育院入院の癩患者の治療に関連して、日露戦争前後から癩療養所の設立運動を起し、癩予防法の制定、道府県連合癩療養所設置の促進となり、昭和六年一月癩予防協会を創立し会頭に就任、更に方面委員事業についても同年五月全日本方面委員連盟会長に就任され救護法の実施促進に努力された。

こゝに渋沢院長の社会事業観を青淵回顧録から摘記する。

「人間は本来平等の者である、然るに一方は飽食して猶余りあるのに、一方は饑餓に瀕して苦悩を訴へている。此の場合には他人は他人で、吾人は吾人であると云うて少しも惻隠の心を起さなくても可いものであらうか。私は矢張り社会政策の上から云うても、貧窮の為に漸く不良の心を助長して社会に害悪を及ぼす様な人々を慈善事業に依つて之を未然に防止する時は、他日斧を用いなければならぬ者も嫩葉のうちに摘み取つてしまう事が出来ると思う……中略……慈善という事は敢て養育院に限つた訳ではないが、養育院は慈善の為めに作つたのであつて、然かも非常に重大な社会政策を意味して居るものである。近頃社会問題の研究が頗る盛んになつて来たのは喜ばしい傾向であるが、それにつけてもこの慈善ということに就いて、真先に社会上且つは経済上の問題として研究して貰いたいと思う」（青淵回顧録）

又院長は明治三三年男爵を、大正九年子爵を授けられたが、昭和六年一一月一一日九二才の高齢で逝去された。

澁沢院長の銅像建設

大正一三年一二月末「東京市養育院長渋沢子爵の功績を記念する為め、其銅像を院内に建設し、同院に寄附するを目的」とする「渋沢養育院長銅像建設会」が設立され、渋沢院長の徳を偲ぶ為院内に建設し本院へ寄附されることになった。

この建設会の発起人は当時の東京市長、同助役、東京市会議員及び養育院常設委員一同、並に養育院幹事等であり、同会役員は次の通りであつた。

会　長　中村是公　　専任理事　小坂梅吉
理事男爵　大倉喜八郎　　理　事　田沢義鋪
理　事　安東正臣　同　大岩豊吉
同　田沼義三郎　同　三井元之助
同　岡田忠彦　同　天利庄次郎
同　荘清次郎

各界有志に設立趣意書を通じて寄附を募り、同一四年三月中、彫刻家小倉右一郎に依頼して銅像の製作及び附帯工事の造営に着手し、同年一一月初旬に一切の工事を竣工し本院に寄附され同月一五日除幕式を行つた。

この像は青銅坐像で総高さ一〇尺、重量四八〇貫、台石は花崗岩で高さ一六尺平面方二〇尺の巨大なものである。

なお、この建設の収支決算概要は次の通りであつた。

収入　一、金三三、〇四二円九六銭　寄附金並に利子収入
支出　一、金二八、四〇〇円　工事費
一、金　四、六四二円九六銭　雑　費

この銅像建設に対して、寄附された人員は六五〇人で、寄附の口数は六、五四八口（一口、五円）、寄附金額は三二、七四〇円に達した。

設立趣意書

終始一貫其首脳者として指揮経営の重責を負ひ、前後半世紀間、無慮六万の老廃窮孤の薄倖なる同胞を救護し、帝都の社会事業として規模実質共に能く東京市の面目を立つるに至りしもの、一に子爵の熱烈なる努力の賚にして、我等市民の深く之れを多として已まざる所なりとす、而して今や同院は時代の必要に迫られて、多年計画し来りたる改良拡張の工事成りて、市内小石川旧所在より郊外板橋町の新築場舎に移転し、面目亦た往日の比にあらざるものあり、而して此機会に於て、吾人同志胥謀り子爵が終生の事業として努力せらるゝ養育院の構内に其銅像を建設し、一は以て其功績を記念するの微意を表し、他は以て後人をして永しなへに其徳を偲ばしめんとす、吾人の企望豈に徒爾なりと云ふべけんや。

以来この銅像は、院の至宝だけではなく、本邦社会事業史上の記念物として、本院事務所前（現、本院南側用地）にその姿を見せていたのであるが、たまたま、昭和一六年一二月、起つた第二次世界大戦中、戦争資材の一部としてこの銅像も回収を余儀なくされ、銅像に代る同型の石像を設置し今日に至つている。

「旧養育院の渋沢銅像」は、様々な経緯を経て、今日、新しいセンターに向かって微笑みかけている。フロックコートを着てソファーに腰掛け、毎々爺然と施設の行く末を見ているが、平成26年、板橋区の有形文化財に指定された。この銅像の変遷については「櫻園通信 3.4.号」に記載している。養育院80年史（昭和28年刊）では、戦時の金属供出のため下におろされ、代替コンクリート像が作られたことまでが記載されている。おろされた銅像は施設の片隅の倉庫の横に置かれ、兵器製造のため供出を待っていた。昭和20年5月の空襲で施設が焼夷弾で焼かれ、本来銅像のあった場所（現在の中学校の体育館の校庭より）は炎上しているが、片隅に置かれていた銅像は焼け残った。昭和32年(1957)に存命の作者の監修を受けて修復再建されている。

様々な団体が、様々なスタイルの銅像、石造を作った近代以降の人物を、渋沢栄一以外に知らない。日本銀行の前の常盤橋公園に立つ朝倉文夫作の大きな立像。帝国ホテルの敷地にある、大理石の胸像。一橋大学の如水会館（同窓会館）ロビーの胸像、飛鳥山の旧邸にある銀行協会の若々しい立像、史料館の銅像、頭部石像。生まれ育った埼玉県深谷市にいくつもある銅像。生家にあるパリ出立時の侍姿の銅像（これは、平成になって建てられた）、青森県の小牧温泉にある立像・・・・


a


b


c

a：現在の板橋像　b：戦災後のコンクリート像
c：登録書　d：深谷の生家、パリでの侍姿
e：銀行協会・飛鳥山邸
f：日銀前（常磐橋公園）
g：一ツ橋大学、如水会館　h：深谷駅前
i：渋沢史料館（飛鳥山）
j：渋沢史料館：頭部石像


d


e f


g


h i


j



櫻園通信13　平成16年6月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

青淵先生訓話集・社会事業思想の変遷と養育院

渋沢栄一（青淵）は、60歳過ぎると、経済活動から次第に身を引き、より積極的に国際関係、社会事業、思想活動に取り組むようになっていく。論語と算盤の思想としての深化、帰一教会、青少年教育、社会福祉事業について、盛んに講演活動行うようになるが、そうした活動を昭和3年発行の訓話集に見ることができる。その目次の一部を掲げた。その中で、養育院事業に関する一講演があり、その熱心なり、白川楽翁に対する思い入れが際立っている。白川にある楽翁公顕彰の南湖神社の建設にも積極的に応援するようになる。この稿を本号に転載する



主な目次

・古聖賢の訓言より、経済道徳主義の徹底
・復興国民の努力すべき第一義（関東大震災）
・わが国民に希望する、富豪と成敗
・世界の平和と人類の文化、・国際連盟協会の使命
・米国対日問題の経過、米国の排日移民法
・日露関係解生の意義、日中の経済的連携
・国際共助精神の現れ、国際道徳と世界平和
・政治道徳の本義、政党の堕落と国軍の忘却
・経済的困難と道徳、学問の実際と能率
・正業家と虚業家、経済の合理化と忠恕
・新しい社会の要求と理想、商業立国と文化的農業
・社会生活と個人生活、労働問題と多数
・労働問題の根本的解決策
・社会事業の変遷と養育院。
・人間の本性とその使命、思想の悪化と教育の改善
・今後の教育は精神的に、商業教育の進展
・現代青年の通弊、有為の青年は磁石の如し
・青年に与える、権利義務の正当なる理解
・社会人としての人格修養
・克己は仁の原動力、趣味と実益
・地位は自ら築くべし、精神の安住地
・私の目的と経歴

七、社會事業思想の變遷と養育院

私は院長となつてゐる東京市養育院に毎月十三日出勤することにして居るが、同院最近の月報を見て、過去五十年の歳月を我身に觸れて思ひ出し、如何にして斯くも變化したかの感想を惹起し、遂には昔と今と何れが果してよからうかとの疑問をさへ持ち、且つ世に必要な事業であると解つて居ても、時の變化はかうまで社會事業に對する感觸を變へるものかと、眞に無量の感慨が湧くのを覺える。

一體失意の人を憐み、社會の落伍者に同情し、此等の救護に努めることは、國民の爲すべきことゝされて居るが、此の考へも年と共に變化するので、一概には論ぜられない。例を東京市養育院の過去五十年の變遷に見ても歷々たるものがある。養育院の最初は乞食を集めたものである。西洋の乞食に就てのことは調べないからよく知らないが、日本に於ては物貰ひは古くから居た。私が知つてからでも、乞食は家毎に米を貰つて歩くのが一般の風習であつて、其數も中々澤山居り、大店（おほだな）などへは常時二十人も三十人もつめかけて居る有樣で、見た處頗る體裁が惡く、薄陶しいものであつた。其處で明治五年であつたと思ふが、外國から身分のある人が來遊されるに就て、乞食狩をして之を一ヶ所に集めることになり、此等を收容したのが養育院の起りである。その時三百數十人を集めたが、早速生活の方法を考へねばならなくなつた。そして斯く集める前には官許の非人頭として車善七と云ふ者があり、何かと乞食の世話をし、生活出來るやうにして居たが、斯く一ヶ所に集めて見ると、其の生活の料を與へる爲めに相當の費用が必要であるのに、此費用の出所に先づ困難したのである。何分當時は新政府の成立後日尚ほ淺く、財政の如き頗る逼迫して居た時のことであるから、乞食の收容に要する資金の出所がない。そこで種々苦心協議した結果、松平樂翁公の手で蓄積した共有金が、政府のものでもなければ個人のものでもないので、差當りそれの內から支出することにした。そして場所は初めには上野の護國院を充て、東京營繕會議所（後の東京會議所）と云ふものが世話をしたのである。私が其仕事に携はるようになつたのは、當時の東京府知事大久保一翁氏に依頼せられたからである。此人は靜岡藩時代に私の先輩だつた關係から、私が銀行業者になつたに就て、其保管に係る共有金を基本として成立した東京營繕會議所の會長を委囑されたのであつた。東京營繕會議所は後に東京會議所となり、多くは社會事業的の事柄を行ひ、乞食の世話の外、道路、橋梁のこと、墓地のこと、或は東京商科大學の濫觴たる商法講習所等の世話を主として行つて居た。

然しながら乞食の世話から始められた養育院は、單に共有金のみでは充分に其機能を發揮することが出來なくなり、明治十二年府會が開かれると同時に、府の方から經費の支出をすることに決したのである。當時の府知事は楠本正隆氏で、私は議員にはならなかつたが、福澤諭吉氏、福地源一郎氏などは議員になつて居た。斯くて十二三年になると、護國院は狹くなつて來たので、泉橋の藤堂屋敷に引移り、其後本所の長岡町へ、それから又大塚へ、更に近頃板橋へ轉じた。本院だけに就ても斯くの如く屢〻移轉した程であるから、其間に自ら性質も變化し

て來た。明治十五年であつたと思ふが、養育院の維持に關して强い反對論が起つた。それは當時府會議員であつた沼間守一氏などが『元來人たるものは他人から援助を受くべきでない。誰かどうかして呉れるであらうと云ふやうな考であつては、日本人は自彊息まずでなく、やんでしもふ結果になるであらう。故に救濟されると云ふやうな考へを持つことのないやうにせねばならぬ、救濟するから其樣なつまらぬ考を出すのであるから、救助などしてはならぬので、他人には冷酷でなければならぬ』と主張し、此考へ方が一般を風靡した。然し私はさうは思はず、救助しなければならぬ、又他人に冷酷であつてはいけないとして、大いに論じたけれども力及ばず、遂に府の經費支出は中止せられることになつた。但し私は沼間氏等とは反對の意見を持つて居たとは云へ、私交上には相變らず親しく、其の兄の須藤時一郎氏の如き第一銀行の重役であつて常に懇親であつた。

斯くて府會から見離された養育院としては詮方なく、新たに收容することを中止し、自然に減少閉鎖する方針を執るに至つたのであるが、私としては之を維持するのは頭の上にふりかゝつた責任であり、職分であると考へて、大いに努力したのである。卽ち十八年に到り府の手から全然離れて獨立し、其の經費は私が同志の者又は家內などに相談して組織した婦人慈善會などの寄附金によつて、二十二年まで五ヶ年間維持した。當時本院は本所の長岡町に在つたのである。處が二十二年に地方制度が布かれ、東京市に自治制が採用せられたが、其の間時世の變化が相當に激しいものがあり、養育院に對する一般の考へも變り、沼間氏等の唱へた冷酷論は世の容れない所となり、反對に社會に於ける必要なものとして維持しなければならぬが、將來をどうするかと云ふことが問題になつたのである。處が市の方で必要があり適當な施設であると思ふならば引受けてもよいと云ふ內務省令があつたから、玆に養育院を東京市で引受けることに決定した。此時の東京市制は特別市制で、其の市長は府知事が兼任して居た。然し此等の制度は此處に詳しく論ずる要がないから省略するが、要するに養育院は個人經營から地方制度の實施と共に東京市に移され、爾來市設の事業として維持せられつゝある。

然るに其後に於ける社會事業の必要は愈〻加はり、官廳や自治體に於ても其事務を取扱ふ爲め、社會局を置くやうになり、東京市にも設置せられたが、養育院は古い歷史もあり、慣例もあり、且つ各方面の有力者から多額の寄附金があつて、總ての設備なども行はれて居るので、市に於ける他の社會事業と同一視して、其監督下に置くのもどうかと云ふことで、特別なものとして、有名無實ではあるが、私が院長となつて經營して居るのである。そして本院は板橋にあり、建物設備等も相當のもので、不具者や不具に近い所謂貧民の居る所ではあるが、それ程汚くもなく、粗末でもない。特に衞生なども充分に氣をつけて居り、目下千名からの收容者がある。又病院には不治の病者が二百人位居り、更に棄子、迷子等の爲め巢鴨に分院がある。巢鴨分院に收容したものゝうち嬰兒は里に出して居るが、在院兒童の數は三四百人程度である。又病弱な兒童は房州の船形の分院で療養せしめて居るが、此れは空氣療法をさせるのがよいと云ふ醫師の說に據つたものである。尙ほ明治三十三年頃東京市內に不良少年が三千人からあり、それ等の者を指導感化する必要があると云ふので、井の頭公園の傍に、不良少年感化所を經營し、全體から見ると僅に一小部分ではあつたが百五十人ばかりを收容し、現に繼續して居る。此の地所は初め宮內省から拜借して居たが、宮內省から東京市に讓渡されたものゝ一部である。

斯樣に私は東京市養育院と頗る古い關係にあるが、同院が年と共に發展して參つたのは、一般の人々が此種の社會事業を缺くべからざるものとして、寄附金其他後援に盡されたからである。其の結果現今では基本金の內から日常の費用の支出さへ出來る有樣である。故に名は東京市養育院であつても、市の金で設置されたとか、府の稅金の內から設備せられたと云ふのではない。

斯樣に開院した當時の有樣と今日の社會の狀態とを比較して考へ、所謂社會事業なるものに對する人々の觀念の相違を顧ると、感慨無量である。前にも述べた通り、沼間氏等の主張によつて、一時私の說が敗れた形であつたが、後に至つて、私の主張通りになり、大に喜んだのである。然し果して長きに亙つて滿足であるかと云ふと、決して滿足であると申すのではなく、或は冷酷であつたならば、今頃は養育院の必要が無くなつて居たのではあるまいか、とさへ思ふことがあり、今猶何れがよいかと斷定出來ぬ程である。

從つて此點は將來社會事業に携る人々に依つて深く考慮して戴きたいと、此處に老人の同顧談を敢てした次第である。

櫻園通信15号

櫻園通信 15　平成 26 年 8 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

なぜ加賀藩屋敷に開設？“養育院”という名の由来は？

じつはまだ解けていない　養育院開設２つの謎

老年学情報センター：宮本孝一
監修　顧問医：稲松孝思

明治五年、ロシア皇子アレクセイ来日に際し、東京市中の貧民を一ヶ所に集めて収容することから養育院の歴史が始まりました。

そのとき貧民の収容先になったのが、本郷の加賀藩邸内の長屋でした。

当時加賀藩邸には、最後の加賀藩主前田慶寧（よしやす）が居住していました。

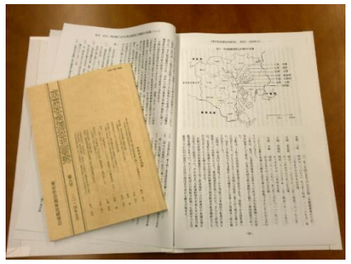

前田慶寧

なぜこの元藩主の住んでいる藩邸内が貧民収容にあてられたのかその理由を記述した歴史史料は見つかっていません。また、現在の春日通りに面した消防署のあたりに長屋があったとされてきましたが、異論もあります

長沼友兄氏（養育院・渋沢記念コーナー維持ボランティア参加）が今年発表した論文「明治期における東京養育院立地場所の変遷について」によると、廃藩置県後の明治五年春の時点では、屋敷は政府に上げ地となり、司法省と東京府の協議により、加賀藩邸内に小伝馬町の牢屋敷を移して囚獄を建設することが決まっていました。また、当時の東京府囚獄掛は、病気の囚人や十五歳未満の囚人を収容する**浅草溜**も管理していました。

明治五年十月、貧民たちはアレクセイ来日前に囚獄予定地であった加賀藩邸内に一旦集められ、五日後には浅草溜に移されます。

養育院創設の地が加賀藩邸になった経緯には、貧民と犯罪者を同一視する為政者の貧民観が作用していた可能性があります。


長沼友兄「明治期における東京養育院立地場所の変遷について」東京社会福祉史研究　第８号
拡大コピーした冊子を養育院・渋沢記念コーナーに置いていますので、ぜひご覧ください。

前田慶寧は、13 代藩主前田斉泰（なりやす）と正室溶姫（11 代将軍徳川家斉の21女）の間に生まれました。

江戸時代、大名家に嫁いだ将軍家の子女が住む御殿には、朱塗りの門が作られました。前田斉泰と溶姫の婚姻の際にも加賀藩屋敷に朱塗りの門が建てられました。それが現在の東京大学の赤門です。

前田慶寧は江戸本郷の加賀藩屋敷で生まれ、約40年の生涯の 7 割の期間は本郷の屋敷で暮らしました。本国金沢に住んでいたのは約 12 年間だけです。明治 4 年の廃藩置県後は東京（本郷の前田邸）に戻りますが、本郷屋敷の約 1/10 の占有を許可されています。

近衛文麿（34・38・39 代総理大臣）は慶寧の孫、近衛文麿の娘と細川護貞の子が細川護熙（79 代総理大臣）です。

旧幕府の重臣だった**大久保一翁**は明治五年に東京府知事に就任すると、東京営繕会議所（幕府による困窮民救済積立資金の管理運用を委託された、有力実業家たちの民間組織）に対し、幕府瓦解後に東京にあふれた大量の困窮者の保護施策の実施を働きかけました。


大久保一翁

これが同年の養育院設立につながります。

大久保一翁は、幕臣時代から、江戸に西洋式の救貧医療施設をつくるプランをもっていました。運営資金の確保方法、施設の内容などを**病幼院創立意見**として具体的にまとめ安政四年に幕府に提案しましたが、幕末の政治的混乱のさなかであり、病幼院は実現しませんでした。

当時江戸幕府の開明派は、種痘所の設立、天領・長崎でのポンペによる医学伝習所、長崎養生所の設立など、海外情勢の情報を積極的に収集し、それに合わせた国づくりをめざしていましたが、一翁もその一人です。

病幼院創立意見は、大久保一翁が東京府知事になることで営繕会議所附養育院と東京府病院（府下病院・愛宕下病院とも呼ばれた）という双子の施設として実現しました。

加賀藩では、黒船来航後は海防意識が高まり、前藩主**前田斉泰**（まえだ なりやす）により洋学者の登用と西洋兵学・西洋医学の研究・教育にとり組んでいました。シーボルトに学んだ藩医黒川良安や、西洋砲術の指導役として採用された洋学者**佐野鼎**（かなえ）らを登用していました。佐野は、加賀藩の援助で、幕府の遣米使節団・遣欧使節団にも随行し西洋の知識を深めました。


佐野　鼎


福沢諭吉

養育院創設の地、東京の加賀藩邸に住んでいた“最後の加賀藩主”**前田慶寧**（まえだ よしやす）もまた、幕末の金沢で、大久保一翁同様に西洋の知識を得て、西洋式の貧民用病院を創ろうと考え、藩医黒川良安に永作養生所を見学させ、貧民病院「卯辰山養生所」の設置にこぎつけています。

東京養育院の名の由来は、もしかすると、この福沢諭吉の日記写本で開明派大久保一翁らの目に触れた**養育（じつは盲）院**かもしれません。ちなみに、明治以来の東京養育院の事業内容は幕末洋学の知識では西洋の「貧院」にあたります。

前田慶寧の卯辰山養生所設立は、福沢諭吉の「西洋事情」の影響とする説がありますが、養育（盲）院が記載された「西航記」写本も手にしていた可能性があります。

養育院創立の地が加賀藩邸であること、「養育院」という名称がつけられたことには、前田慶寧の意向がなにか影響したとも考えられます。

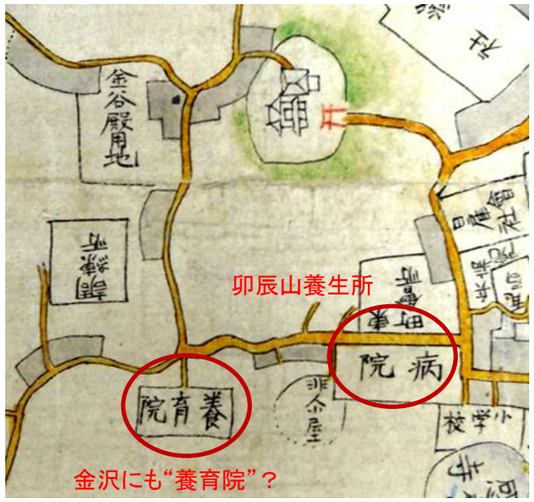
遣米使節団・遣欧使節団には**福沢諭吉**も随行しており、そのときの見聞は「西航記」という日記やそれを発展させた「西洋事情」としてまとめられ、帰国後、外国奉行・開明派や洋学者たちの間で読まれ、西洋社会の知識が共有されました。

福沢諭吉のパリ滞在時の日記に、病院・養老院・養幼院・養唖院・養癲院（精神病院）・といった医療施設・福祉施設のひとつとして**養育院と読める言葉**が一箇所だけでてきます。

その部分ではどんな施設なのか説明がないのですが、日記の他の箇所と合わせてみると、これは盲学校のことらしく**養盲院**と記したと考えるのが自然です。

実は現代に活字化された「西航記」では**養育（盲）院**と、両論併記式に書いています。

福沢諭吉は養育院と書いたのかそれとも養盲院か、現代でも確定していないのです

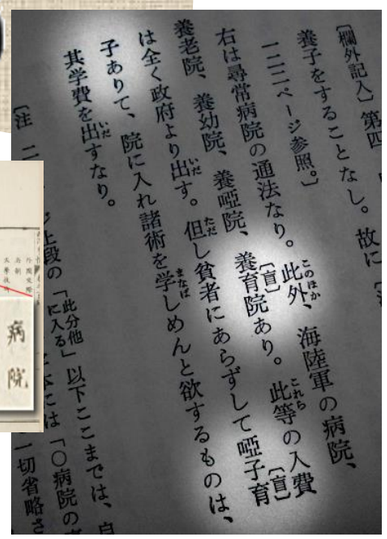


「金沢町絵図」（明治初年）　卯辰山養生所の位置を示す絵図
（金沢市立玉川図書館近世史料館蔵）

コンピューター用フォント
白舟極太草書

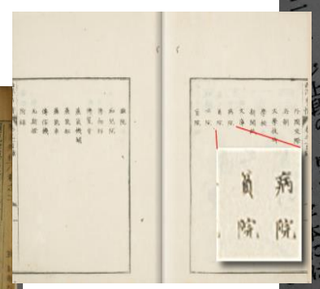


福沢諭吉「西航記」
養育院の名が出てくる部分。



イエズス会士のイタリア人艾儒略(Giulio Aleni, 1582-1649)が編纂した世界地理書「職方外紀」。明（中国）で刊行。日本の蘭学者の間で盛んに伝写されていた。




欧米の制度や技術を、自らの渡米・渡欧体験をもとに解説した福沢諭吉「西洋事情」。

【参考】
稲松孝思：赤門の秘密　養育院の黎明期. 老研友の会講演　2014.3
長沼友兄：明治期における東京養育院立地場所の変遷について. 東京社会福祉研究　8 号　2014　p67-89
荒川清秀：加藤周一氏の「明治初期の翻訳」について. 文明 21　1999　p25-26
島田　肇：社会福祉の論理と倫理の課題-福沢諭吉の被治者観と儒教. 東海学園大学研究紀要　2011　p81
富田正文編：「西航記」「西洋事情」. 福沢諭吉選集　1　1980　岩波書店

ペリー来航から明治維新までの期間は一般に「幕末」と呼ばれます。アジアに進出してきた欧米列強が強大な軍事力を示して日本に開国をせまり、鎖国政策は崩壊。不平等な貿易条約を結ばされることになります。　これ以降、日本国内は国防意識が高まり、幕府や各藩で西洋諸国の社会制度・科学技術の研究（＝洋学）が盛んになります。　こうした幕末の時代背景の中で、西洋式の貧窮者救済施設・病院が作られはじめ、さらに大久保一翁という人物を通して明治の養育院開設につながっていきます。

幕府崩壊により、各藩の上級武士や有力商人は江戸を離れ、100万ともいわれた人口が半減。
東京と改称した首都経済は破綻し、幕藩体制での職を失った大量の深刻な窮民が東京中にあふれていた。

黒船来航

明治維新前の 10 年間

明治維新

明治維新後の 10 年間



初代養育院院長
渋沢栄一

家業の農業・藍問屋業に精励

討幕をめざし、横浜焼き討ちなどを画策

慶喜に仕え、幕臣に

パリ万博使節団に随行

静岡藩に商法会所設立

民部省・大蔵省に出仕

営繕会議所（→東京会議所）の運営にかかわる

東京会議所会頭に就任



西洋式の救済施設を江戸・東京に
大久保一翁

目付・海防掛・蕃所調所頭取・外国貿易取調掛など歴任

西洋式貧病院プラン「病幼院創立意見」を幕府に提案するも実現せず。

若年寄・会計総裁就任

静岡藩権大参事に就任

東京府知事就任

教部少輔に異動

洋学の研究・教育施設「蕃所調所頭取」設置

西洋の「貧院」「病院」「幼院」の知識

江戸

静岡藩

東京営繕会議所へ東京府内の救貧策実施を働きかける

養育院事務長就任

養育院院長就任



アメリカの圧力で、日米和親条約締結。さらにオランダ・ロシア・イギリスともつぎつぎ同様の条約を締結。鎖国政策崩壊。

日米修好通商条約締結。さらにオランダ・ロシア・イギリス・フランスと同様の不平等条約を締結。自由貿易開始。

幕府、長崎に西洋医学教育施設「医学伝習所」設置
※ポンペの指導

日本初の西洋医学病院「長崎養生所」設置」

「医学伝習所」と「長崎養生所」を統合

西洋式病院運営の見本
医師の輩出

遣米使節団　随行

遣欧使節団　随行

？



加賀藩邸
文京区本郷

養育院

明治5年
加賀藩邸内に貧民を収容
＝営繕会議所附養育院の開設

明治4年　前田寧慶、東京の加賀藩邸に移住

東京

貧困者を対象にした病院
東京府病院

医師の派遣



「西洋事情」
福沢諭吉

英学を独学

「養唖院」「養盲院」「養幼院」「養老院」などを視察

「西洋事情」刊行

佐野鼎、東京府病院で死去



洋学者
佐野　鼎

長崎遊学

加賀藩に招聘
江戸で砲術指導

兵部省に出仕

共立学校（→開成学園）を創立

西洋の「貧院」「病院」「幼院」の知識

加賀壮猶館で洋式砲術を指導

西洋砲術・兵術・医学の教育・研究施設「壮猶館」設置



幕末の加賀藩主
前田寧慶

加賀藩

西洋の「貧院」「病院」「幼院」の知識

家督相続し加賀藩主に

藩主前田寧慶、金沢に西洋式病院「卯辰山養生所」設置を命じる
※黒川良安、長崎養生所を参考に

加賀藩知事就任

養育院？？



作図　宮本孝一



櫻園通信　16. 平成 26 年 12 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

養育院・渋沢記念コーナーボランティア
中村　弘（養育院を語り継ぐ会　事務局長）

養育院を語り継ぐ会



本院跡碑の「養育院本院」の文字は
渋沢栄一の墨跡を刻字したものです。
（碑文は櫻園通信 2 号参照）

東京都健康長寿医療センターを利用している方々は、構内の小公園に渋沢栄一の銅像があることは、よくご存じのことと思います。その像の脇に養育院碑があります。同様の碑はこの他に都内の墓地に三か所、栃木県の那須塩原に一か所あります。この通信をかりて、これらの碑を建てるまでの話をしたいと思います。

養育院は明治五年に開設以来、首都東京の社会福祉の大きな部分を担ってきました。平成 11 年 12 月養育院廃止条例をもって廃止されるまで、127 年の歴史がありました。その歴史を見ると日本の福祉・医療の展開に大きく貢献してきています。しかし、人の記憶はだんだん薄れ、記憶を持つ人も少なくなっています。養育院の存在を後世に伝えていくことが大切と考える元職員、退職者が集まって、養育院で亡くなられ、引き取り手のない方々の合葬墓を説明する碑を建てようということになりました。そのための寄付を募ろうということになり何回もの準備会をへて、平成 17 年 7 月「養育院を語り継ぐ会」を結成しました。

養育院合葬塚

景気低迷の折、寄付がどのくらい集まるか全く検討もつかないため、まず、養育院で物故した人々の葬られている東京谷中の大雄寺、了倪寺、栃木県塩原の妙雲寺、多磨霊園の養育院墓地に碑を建てることにしました。ところが、思いのほかのご芳志を戴くことができ、大山の養育院本院の渋沢栄一像のそばに、本院碑を建てることが出来ました。さらに、2 回の講演会、養育院月報復刻版の全 30 巻も寄付することが出来ました。養育院を職場として、多くの人たちのお世話をしてきた方々、春秋に香華を手向けてきた担当者達の熱い思いの結晶です。さて、この碑で何を伝えるか、碑文の起草が始まりました。議論百出でした。この通信で各地に建てられた碑を紹介させていただきますので、是非読んでいただきたいと思います。養育院を語り継ぐ会の活動は、本院碑の設置によって終わりましたが、引き続き養育院は健康長寿医療センターの養育

養育院関係合葬塚

	埋葬時期	埋葬者数
大雄寺（だいおうじ）日蓮宗	明治 6	100 柱
了倪寺（りょうごんじ）天台宗	明治 6-大正 2	3,762 柱
多磨霊園　合葬塚	昭和 8-平成 19	26,450 柱+1
天王寺裏墓地（谷中）	明治 32-大正 2	
芋坂合葬墓地（谷中）	大正 3-昭和 2	多摩霊園に合葬
了倪寺納骨堂（谷中）	昭和 2-昭和 7	
妙雲寺　臨済宗	昭和 19-27	582 柱
	合計	30,895 柱
大福寺　よい子の墓（船形） ※塩原の 56 名、卒園生含む		143 柱

院・渋沢記念コーナーで語り継ぐことが出来るようになったことも嬉しいことです。会の活動は碑の設置のほか、養育院に関する一般、板橋看護学校学生向けの講演会、養育院月報復刻版の寄付などを行いました。この間、北区飛鳥山にある渋沢史料館の協力や資金の少ない中、碑の制作会社、石材店の方々にも一方ならぬ協力をいただきました。この活動を通して元養育院の職員の思いがいかに強いものであったかを実感しました。厚く御礼申し上げます。

養育院義葬之冢　東京都台東区谷中　大雄寺（全文）

養育院は、明治五（千八百七十二）年十月十五日に創設された。維新後急増した窮民を収容保護するため、東京府知事大久保一翁（忠寛）の諮問に対する営繕会議所の答申「救貧三策」の一策として設置されたものである。この背景には、ロシア皇子の訪日もあった。事業開始の地は、本郷加賀藩邸跡（現東京大学）の空長屋であった。その後、事業拡大などのため養育院本院は東京市内を転々としたが、関東大震災により大塚から現在地の板橋に移転した。養育院設置運営の原資は、営繕会議所の共有金（松平定信により創設された七分積金が新政府に引き継がれたもの）である。

養育院の歴史は、渋沢栄一を抜きには語れない。営繕会議所は、共有金を管理し、養育院事業を含む各種の事業を行ったが、渋沢は明治七年から会議所の事業及び共有金の管理に携わり、養育院事業と関わるようになった。明治十二年には初代養育院長となり、その後亡くなるまで、五十有余年にわたり養育院長として事業の発展に力を尽くした。

養育院は、鰥(かん)寡(か)孤独(こどく)の者の収容保護から始め、日本の社会福祉・医療事業に大きな足跡を残した。平成十一年十二月、東京都議会において養育院廃止条例が可決され、百二十七年にわたる歴史の幕を閉じた。

ここ大雄寺には、養育院創設当初の物故者中、引取人のない遺骨の埋葬、回向をお願いしたものである。明治六年中の埋葬者は百名と伝えられ、寺内の一角に義葬之冢がある。この義葬之冢は養育院創立当時の唯一の遺構である。

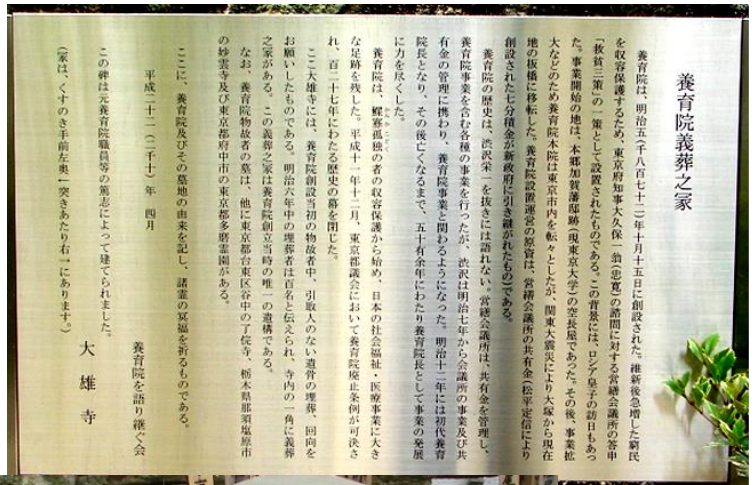
なお、養育院物故者の墓は、他に東京都台東区谷中の了倪寺、栃木県那須塩原市の妙雲寺及び東京都府中市の東京都多磨霊園がある。

ここに、養育院及びその墓地の由来を記し、諸霊の冥福を祈るものである。

平成二十二（二千十）年四月　養育院を語り継ぐ会

この碑は元養育院職員等の篤志によって建てられました。

大雄寺





東京都台東区谷中・大雄寺。
背面の記載：明治六年葵酉始養窮民於養育院其死者葬此

東京都養育院慰霊碑　東京都台東区谷中　了倪寺（抜粋）（前文略　大雄寺と同じ）

ここ了倪寺には、養育院の物故者中、引取人のない遺骨を埋葬、回向をお願いしたものであり、明治六年末から大正二年に至る埋葬者は三千七百六十二名である。

なお、養育院物故者の墓は、他に東京都台東区谷中の大雄寺、栃木県那須塩原市の妙雲寺及び東京都府中市の東京都多磨霊園がある。

ここに、養育院及びその墓地の由来を記し、諸霊の冥福を祈るものである。

平成二十二（二千十）年四月　養育院を語り継ぐ会

この碑は元養育院職員等の篤志によって建てられました。　了倪寺



東京都台東区谷中・了倪（ごん）寺
　碑の設置の最中、激しい雨が降り終わると、きれいに晴れ上がり、物故者が喜んでいるようでした。





東京都養育院合葬碑　栃木県塩原　妙雲寺　（抜粋）

（前文略　大雄寺と同じ）

養育院は昭和十九年、戦禍を避けるため院をあげて塩原に疎開を決定、地元の旅館を買収し、同年八月、塩原分院を開設した（龍泉閣、宮田屋を龍泉寮、宮田寮として事業開始。その後常盤寮、塩釜寮、上富士寮を順次買収。塩原分院は昭和二十一年に栃木分院と改称）。

当初は板橋本院より、老人及び盲人などを疎開させたが、戦局の悪化及び板橋本院の空襲による壊滅により、安房臨海学園、石神井学園の児童及び島嶼（とうしょ）引揚者も加わり、「養育院百年史」によれば、昭和二十年五月には養育院収容者千二百十一人のうち、六百九十四人が在籍、塩原は養育院事業の中心となった。

栃木分院廃止の昭和二十七年までのこの地における物故者は五百八十一名。妙雲寺に埋葬、回向をお願いし、昭和二十八年には養育院合葬碑を建立した。後に一名を合葬、現在は五百八十二名が眠る。

戦中、戦後の物資の不足、特に食糧事情の劣悪な状況の中での地元塩原の皆様のご厚情に対し、この碑を建立するに当たり、改めて感謝の意を表するものである。

養育院は、鰥（かん）寡（か）孤独（こどく）の者の収容保護から始め、日本の社会福祉・医療事業に大きな足跡を残した。平成十一年十二月、東京都議会において養育院廃止条例が可決され、百二十七年にわたる歴史の幕を閉じたが、養育院が行ってきた事業はかたちをかえて現在も引き継がれている。

なお、養育院物故者の墓は、他に東京都台東区谷中の大雄寺、了倪寺及び東京都府中市の東京都多磨霊園がある。

ここに、養育院及びその墓地の由来を記し、諸霊の冥福を祈るものである。

平成二十二（二千十）年四月　養育院を語り継ぐ会

この碑は元養育院職員等の篤志によって建てられました。妙雲寺



栃木県塩原・妙雲寺
先の大戦中の疎開先の栃木分院における無縁仏のお墓です。

養育院合葬冢　東京都多磨霊園　（前文略　大雄寺と同じ）

ここ多磨霊園には、昭和八年以降、養育院の物故者中、引取人のない遺骨を埋葬し、現在も供養をしている。

なお、養育院物故者の墓は、他に東京都台東区谷中の大雄寺、了倪寺及び栃木県那須塩原市の妙雲寺がある。

ここに、養育院及びその墓地の由来を記し、諸霊の冥福を祈るものである。

平成二十二（二千十）年四月　養育院を語り継ぐ会

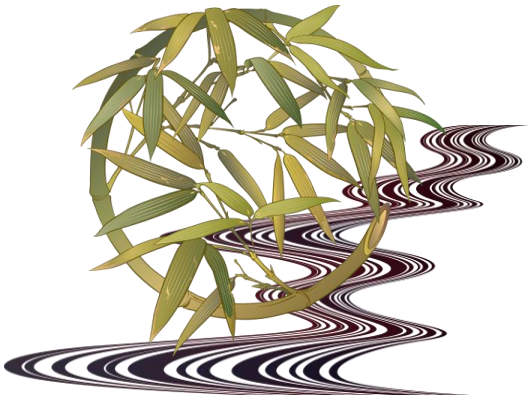
この碑は元養育院職員等の篤志によって建てられました。　東京都福祉保健局



都立多磨霊園養育院墓地
ここ多磨霊園には、この碑文にある養育院創設時の東京府知事、大久保一翁の墓所があります。



櫻園通信　17.
平成 26 年 12 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター



養育院・渋沢記念コーナーの円形ホールには、健康問題に関する図書を集めたサブコーナー「**なるほど！からだラウンジ**」を設けています。

こうした、患者様とご家族の方を対象にした図書コーナーは、一般に「患者図書室」と呼ばれ、全国各地の医療機関に設けられています。

「**なるほど！からだラウンジ**」では、図書だけでなく、模型・インターネット・映像などでも、病気の知識や健康問題への対処についての情報を提供していきたいと考えています。

病院の患者図書室は本の貸出をしていないケースが多いのですが、「**なるほど！からだラウンジ**」では、患者様とご家族の方には本の貸出もしていますので、どうぞご利用ください。

このスペースは、休憩コーナーにもなっております。もちこみでの飲食もＯＫです。



「**なるほど！からだラウンジ**」では、病気や治療法・介護などに関する本を約八〇〇冊置いています。

また、書架にある本の他に、常時一〇〇冊程度の本が貸出で利用されています。



読書の愉しみとしての本も置いています。こちらは貸出の手続きは不要です。

かつては、人の命にかかわる病気と言えば結核などの感染症でした。

現代は、糖尿病・脳卒中・心臓病など「生活習慣病」と言われるものや、平均寿命の伸びとともに発症者増えたガン、認知症といった病気が、人の生命と生活に大きな影響を与えています。

それらの現代の病気には、

・病状の悪化を遅らせることはできても、完全回復はむずかしい。
・後遺症が残る場合がある。
・身体に複数の病気をかかえる。
・再発のおそれがある。
・元の生活・職業に戻ることがむずかしい場合あり。
・長期に続く治療。

といった特徴があります。



大人気「数独」

こうした、現代の病気の特徴に合わせて、「**なるほど！からだラウンジ**」では、次のような情報を提供していきたいと考えています。

現時点でのカラダの問題と対処法
・病気と治療法についての理解を深める

病気予備軍に役立つ知識
・予防法の正しい知識
・病気の兆候に早く気づく、早期発見の方法

治療中の生活
・毎日の自己管理術
・具合の悪いところをもちながらの日々の生活のあり方を見直す、ものの見方、新たな人生観

患者を支える家族
・病気や治療法の理解
・患者を支える生活での人生観

医師とのコミュニケーション
・自分の状態を十分に伝えるコツ
・医師から重要ポイントを確実に聞くコツ

病院外の介護生活
・役に立つ制度
・介護生活のコツや介護の技法

はんらんする健康法・健康食品の情報
・周りの人からすすめられる健康食品、テレビや新聞広告・雑誌で紹介される健康法や健康食品。健康被害や無用の出費を回避するための、医学的な信頼性をチェックする方法

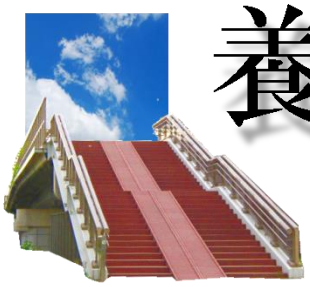




健康食品・サプリメントについての解説パンフレット類


電子版「養育院・渋沢記念コーナー，なるほど！からだラウンジ」

インターネットでの調べものもできます。



養育院の歩道橋

櫻園通信　18．平成 26 年 12 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

宮本孝一（老年学情報センター）

車道や線路をまたぐ、歩行者専用の橋「歩道橋」。

歩道橋は、昭和三〇年代に車社会が到来し、交通事故の多発（交通戦争）が社会問題になったことで、日本各地に作られるようになりました。

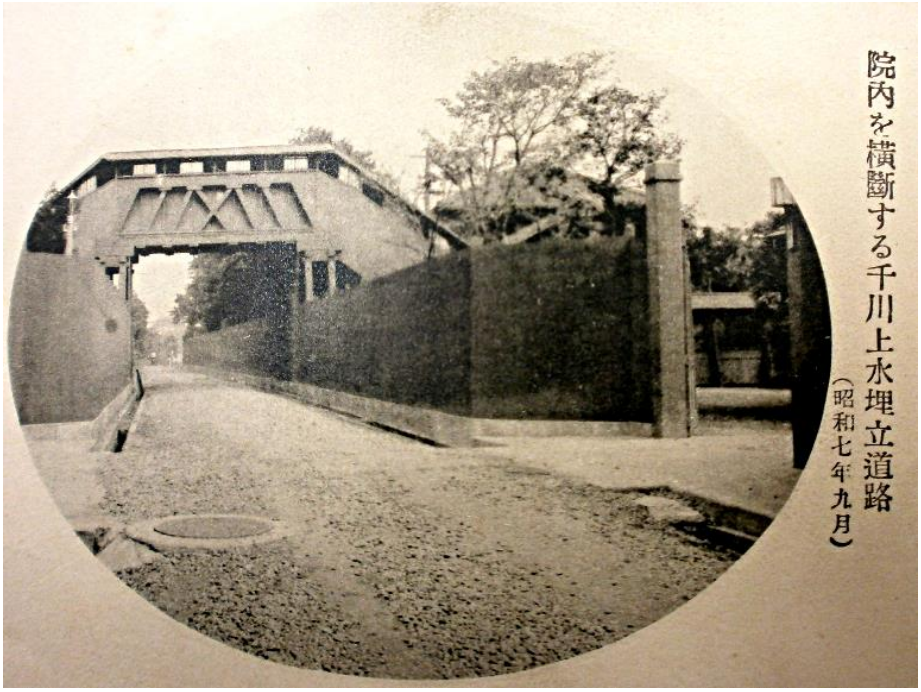
日本初の歩道橋は、一九五九（昭和三四）年に学童専用陸橋として愛知県に作られた**西枇杷島町横断歩道橋**（にしびわじまちょうおうだんほどうきょう）とされています。







「日本初の歩道橋」西枇杷島町横断歩道橋（愛知県清須市）。二〇一〇（平成二二）年に取り壊された。



ここに、一枚の歩道橋の写真があります。よく見ると道路に轍（わだち）が見えます。車道をまたぐ歩道橋です。

撮影は昭和七年九月と記されています。西枇杷島町横断歩道橋に先立つこと約三〇年。もしかするとこれが本当の「日本初の歩道橋」かもしれません。

「院」とは養育院のことです。



この歩道橋の写真は「創立六十周年記念寫眞帖　東京市養育院昭和七年十月」（老年学情報センター所蔵）に掲載されています。

かつて養育院の敷地には千川上水が横切って流れていました。千川上水は、玉川上水から分岐し、西東京市・武蔵野市の境界から西巣鴨まで続く全長二二キロの用水路です。現在、ほとんどの区間は暗渠になっています。

養育院敷地を横切る千川上水も道路になりました。そして、道をまたぐ歩道橋が作られたのでした。

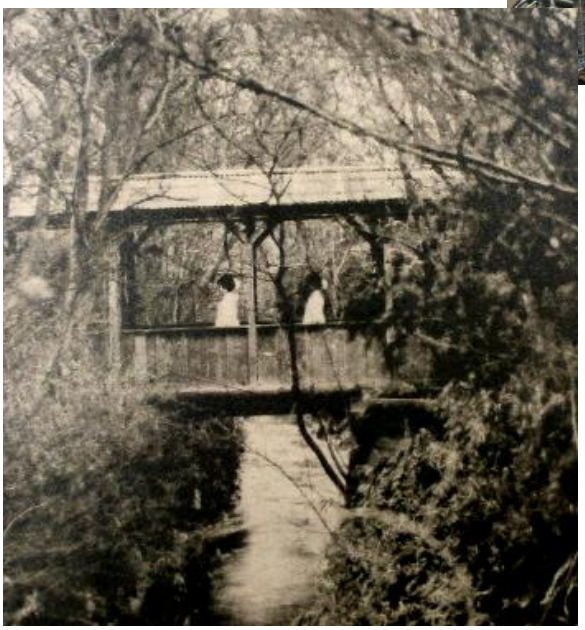


歩道橋はこのあたり？

日本では、一九二三（大正一二）年の関東大震災をきっかけに自動車が急増しました。東京では市電・鉄道が壊滅し、復興資材運搬用でトラックなどの車が大量に輸入されました。市バスやタクシーも増加しました。これが日本のモータリゼーションのはじまりといわれています。

また、関東大震災では、当時大塚にあった養育院本院が崩壊。養育院本院は、もともと分院のあった板橋に急きょ移転しました。日本初の歩道橋（？）「養育院の歩道橋」誕生は、関東大震災が遠因といえるかもしれません。







歩道橋が作られる前は、千川上水に屋根付きの橋が架かっていました。（昭和五年撮影　創立六十周年記念寫眞帖より）

櫻園通信 19

櫻園通信　19.　平成 26 年 12 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

房総・船形の『よいこのお墓』と養育院記念磨崖碑



房総半島の先端、館山の隣に那古の崖観音で有名な大福寺があるが、そこから見下ろす館山湾は絶景である。その一角の墓地に養育院の引き取り手のない物故児童を葬る”よい子のお墓”がある。

その近くに、明治 42 年に建てられた東京市養育院の安房分院があった。今日東京都社会福祉事業団の“東京都船形学園”として運用されている。

ここには養育院の施設の由来を印した巨大な磨崖碑があり、敷地内に関東大震災の物故者の慰霊碑がある。

東京市養育院は、松平定信の七分積金が東京府に引き継がれたのを活用して、明治 5 年に窮民救済施設として創設された。その運営に渋沢は明治 7 年から関与し、明治 18 年には棄児、迷児の救済を始めている。明治 42 年、医長・入澤達吉は、本院の虚弱児の養育に風光明媚な房総の地を選び、虚弱児童の転地療養施設として安房分院を開設した。そして、此の地でなくなった子供達のために、『よい子のお墓』が建てられている。

また、大正 12 年の関東大震災の大津波で、子供達、職員などが亡くなり慰霊碑が建てられている。現在は姿を変えて、擁護と自立支援が必要な児童の施設となっている。

この施設の裏手に、10 メートルに及ぶ巨大な崖を削って作られた、施設の由来を印す磨崖碑があり、日本福祉史の記念碑となっている。



船形町有志によって、大正 6 年 4 月着工、同年 5 月末日竣工した。撰文は二松学舎創立者で、明治の 3 大文人にあげられた三嶋中洲博士、書は青淵の号を持つ、初代養育院長渋沢栄一による。崖の高さは 16m、碑の高さ 10m、幅 6m、一文字の大きさが 30cm 四方という国内有数の碑だったが、岩質のもろい砂岩の房州石に彫られたため風化が著しくわずか数文字がかろうじて判読できるほどになってしまった。そのため、80 周年記念に（1989 年）、碑文を刻むミニチュア碑が建てられた。

また 100 周年（2009 年）に、判読可能なように、大改修が行われた。

磨崖碑　碑文のあらまし



明治維新の後、東京府は、自ら窮状を訴えることのできない老人を上野の護国院の土地に収容し養護した。名付けて養育院という。養育院は、後にまた棄児を四〇年間養育した。その数三万七千余人となる。現在（大正三年）は二千四百人余で、そして児童が最も多い。思うに養育院の元手は、白河藩主で、老中の松平定信が寛政の改革時、江戸町民七分積金制度の蓄積が東京府に引き継がれていたものを充てて創始したものである。

これに慈善家の寄付でふやし、養育院長渋沢男爵が公共のために身を顧みずつくしてきたものである。規模は年毎に拡げられた。明治三十三年に身体の極めて弱いものを千葉県船形町に移し養育した。その数百余人である。

建物を新築し、勉強ができるところを設けた。名付けて養育院支院という。約十年で子どもたちの多くは若死を免れることができ、これを聞く者は本当に感心した。東京慈善会（院長夫人が会長）は、この事業を大いに賛成援助した。土地の名望家で土地や金銭を寄贈する人が大変多かった。

近頃、男爵が来臨視察され大変喜ばれ、これからも一層この事業を拡張しようとされ、私を呼んでこれを崖に刻みつけられた。男爵は、そこで文章をつくっていわれた。本当に悲しいことに身寄りがなくて、さらに加えて身体が弱い児たちを同じ仲間としての心をもつ人が、これを養育院と相談し、この房総の海辺に建物を作った。

ここは冬暖かく夏涼しい。病気の人は治癒し、身体の弱い者は強くなる。ここに生活のための仕事を授け、ここで、物事の大綱を教える。常にかわいそうに思うべきである。

これら多くの児が自立して恩を思い、救済事業の志をもつ人が出ないと誰がいえようか。

櫻園通信　20．平成 27 年 1 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

■宮本孝一　（老年学情報センター）



板橋区の登録文化財

渋沢栄一銅像に区が解説板を設置

平成二十六年十二月二十五日、板橋区教育委員会が、渋沢栄一像の解説板を設置しました。

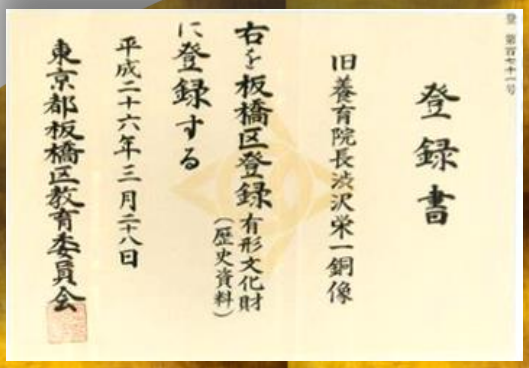
大正十四年に板橋の養育院本院（（現在の板橋第一中学校の校庭）に建てられ、焼夷弾による戦火を乗り越え、施設の敷地内を何度か移動しています。

この、渋沢栄一銅像は、板橋区近代化の歴史を語る重要な史跡として、平成二十六年三月に板橋区の登録文化財に登録されました。



渋沢栄一銅像は昨年３月に区の文化財に

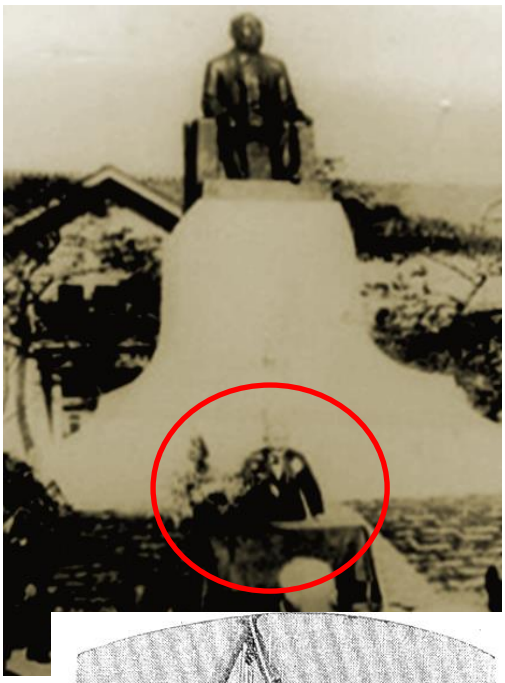
平成 26 年 4 月 14 日、健康長寿医療センター理事長室で、板橋区教育委員会より松下理事長に文化財登録書が手渡されました。



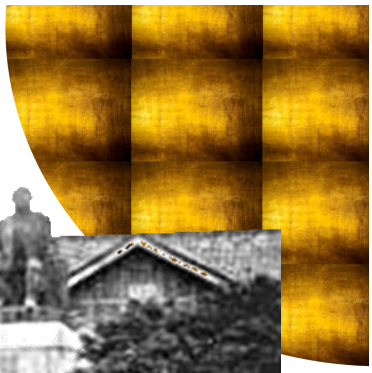




現在、板橋区ホームページ「新規登録文化財のご紹介」に掲載されている、渋沢栄一銅像の解説。

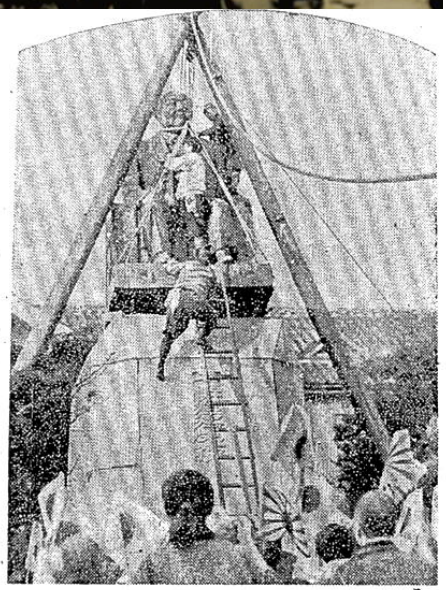


銅像の除幕式の写真。渋沢栄一記念館（深谷市）所蔵。1924（大正 14）年銅像建立。銅像前で渋沢栄一本人が謝辞を述べている。



養育院板橋本院事務所前。
現在の板橋第一中学校。







慈父澁澤さん 征く

1943（昭和18）年12月、銅像の供出を報じる新聞記事。銅像の代わりに、コンクリート像が作られました。



降ろされた銅像は交通事情などで供出できず。防火壁の陰で空襲による破壊をまぬがれました。

銅像の代わりに据えられたコンクリート像は、空襲で焼夷弾に焼かれ、焼け焦げてしまいました。



戦後、作者の監修のもとに銅像を修築。その後、銅像は移転を繰り返しました。
写真はグリーンホール横の三角地に立つ銅像。
（参照：櫻園通信 3　渋沢栄一銅像のお引越し）







灰色の保護膜で塗装。
鳩のフンが目立たなくなる。

櫻園通信２１．平成２７年３月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター



超現代語訳「病幼院創立意見」

病幼院創立意見と雑誌「江戸」

明治も末になると、旧幕臣を中心に江戸期の事跡を残すためにいくつかの雑誌が出版された。

「江戸」はそのひとつで、江戸旧事采訪会による。明治末に徳川の遺臣が記録の散逸を恐れて出版したものである。平山省齋の子孫が、出版元の『江戸旧事採訪会』の主要メンバーで、平山家資料によると思われる記事も多い。この雑誌が出る頃、平山家に伝わる文書を典拠に作られたものと推察される。

その中に**病幼院創立意見**がある。提出したのは目付**大久保右近将監忠寛**。

この人は、幕末にペリーの黒船が来航したとき、老中の阿部正弘が再編成した海防掛に抜擢された 500 石の中堅旗本である。当時講武所設立に関与しており、新設された**蕃書調所**の総裁に兼務で任命されている。当時古賀謹之助が頭取として蕃所調所の準備を整えていたが、大久保総裁が突然上から降ってきて、相当不満であったようだ。此のときの総裁職の期間は短く、**病幼院創立意見**提出直後に長崎奉行に任命されている。しかし赴任を辞退したために、抗命のために駿府奉行に左遷されている。

長崎奉行の後任に岡部長常が赴任しているが、この時期にオランダの海軍伝習所にオランダ軍医ポンペが来日し、医学伝習所、その実習の場として長崎養生所が作られたが、これが日本における西洋式の近代病院の初とされ、今日の長崎大学医学部の源流とされている。病院建設のとき、ポンペは長崎奉行・岡部永常の理解と協力を激賞している。当時の長崎の海軍伝習所では、永井尚志、岡部永常、木村喜毅ら、江戸幕府開明派が実務に当たっているが、大久保忠寛（後に隠居名・一翁を名乗る）の同輩・後輩の近しい関係にあり、そこには幕府開明派の西洋医学に対する共通理解がある。勝海舟は、大久保が発掘し育てた 7 歳下の微禄の旗本で、伝習生である。

病幼院創立意見原文のコピーの一部は、額装して展示ケースに飾ってあるが、理解しやすいように超現代語訳し、横書きにした。上記写真は、幕末に開成所で撮影された大久保忠寛（隠居名・一翁）。　（稲松孝思）

超現代語訳　病幼院創立意見

「蕃書調所」が作られ、蘭学もだんだん盛んになってきました。近頃、西洋各国では一般に慈悲仁恵を重んずるようになり、各国の首府では、病院や幼院をつくり、鰥寡孤独（かんかこどく：独居のやもめ、孤児）を可哀想に思ってお世話するようになっています。江戸には以前から**小石川養生所**があり、困っている人のお世話をしてきましたが、費用もかかり、いろいろ面倒もありますので、永続的なやり方、資金繰りを考えた上で、私案を提出しますのでご検討願います。

病院

1. 医師　医長　200 俵　1人
   副医長　150 俵　2 人
   管理職は世襲せず。（小石川療養所後期の沈滞は、肝煎・小川家の世襲が一因）
   医師　10 人
   藩醫、町醫などにかかわらず、西洋医学を勉強し、治療の腕の良い人を選んで。（幕府と諸藩、武士と町民の垣根を取り払っている。蕃書調所・大久保の共通原則）
   給与は一人　10 人扶持　半日ずつ当番制で勤務、治療を専門にする。　計 180 石
   薬料は1貼銀 5 分で、毎月支給、詳細は別添
   これまで醫薬館と小石川養生所などで厚くお世話し、薬種なども支給してきたが、その弊害もあり、（一括支給、ピンはねが小石川養生所で横行）実際に治療した分だけ、支払うようにする。
2. 介保人　170 人（利用者 3 人に一人）
   西洋医家で修行中の人で、病人を実際に臨床で数日お世話している間に、種々の工夫し治療方法もうまくなる。医術修行中のひとは、病家に泊り込み、数日介保方法を修行する。前述の医師は、門人・塾生などの中で、師匠の見込みを以て介保者にする。なお、病人 1 人に付 1 日銀 3 匁ずつとし、介保料を支払う。
   病人 500 人と見積もって、1 か年銀　1,400 貫目
3. 利用者（患者）
   ・薬料・・・病人 1 人に付き　5貼/日
   一日銀　1 貫 250 匁　1 月　37 貫 500 匁
   1 年銀　450 貫
   ・扶持米・・・1 月　75 石　1 年　900 石
   ・塩、味噌、雑費・・・1 日　銀 2 貫 500 匁　1 月　75 貫目
   1 年　900 貫目
4. 医師 3 人の賄料：勤務時
   ・米　1ヶ月 4 斗 5 升　1年 5 石 4 斗
   ・塩、味噌、雑費：1 日銀 6 匁　1 月 180 匁　1 年 2 貫 60 目
5. 介保人
   ・米　1ヶ月　25 石 5 斗　1年　306 石
   ・塩、味噌、雑費：一人に付き銀 2 匁
   1 日 500 目　1 月　16 石 200 目　1 年 194 貫 400 目
6. 幼院を兼ねて取締役人　1 人（事務長）
   1 年の役料　20 人扶持　この石数 36 石　お役金 15 両
   信実綿密な人物。お目見え以上持高は廉い方が良い
7. 幼院を兼ね雑用掛　8 人
   1年 10 人扶持　石数 144 石
   お役金・・・20 両　1年 160 両
8. 病人夜具
   500 人前　一揃い 3 両　全 1,500 両
   繕い、予備含めてこれ位
9. 雑具類そのほか雑用
   医師、介保人病人あわせて 673 人
   一人に付き 2 分　1年　336 両 2 分
   米 1,391 石 4 斗　金 2,011 両 2 分　銀 2,946 貫 560 匁　計：52512 両 1 分 1 朱 5 分 1 厘（但し1国1両の積もり）

幼院

小児 300 人収容の予定

1. 白牛 100 匹
   金 300 両　但し1両/匹
2. 牛飼い　50 人
   1月 15 石　1年 180 石　1 年 250 両　二人口 5 両

3. 扱い女　300 人
　　扶持　1月　45 石　1年 540 石
　　賄い料　1月　600 目　1年 7 貫 200 目
　　給金　1 年　1,500 両　(5 両/日)
4. 小児、阿母　夜具　300 人前　一揃い 3 両　1 年 3,000 両
5. おむつ料　一人につき 1 両　1 年 300 両
6. 衣服料(1 歳以上)　一人に付き夏冬共 2 両　1 年 600 両
7. 於御場所？　小児 300 人扶持　1 月 45 石　1 年 540 石
8. 同雑用　一人 2 匁　1 月 600 目　1 年 7 貫 200 目
9. 雑具代　2 分/人　1 年 300 両
　　計　1,260 石　5,950 両　銀 14 貫 400 目
　　総計　金 7,450 両

病幼院全体で　金　59,962 両 1 分 1 朱 5 分 1 厘

凡その支出を調べた所上記の通りであった。此の支出は官庫に頼らず、人々にも迷惑にならないよう、方法をいろいろ熟考し、江戸の家持町人に其の趣旨を説明し、1 年に 1 両ずつ上納し、病幼院の必要経費を賄えば支障はない。(七部積金のような資金計画)

寄付を納金して貰うのも有り難く、人々の差し出す費用はとっても意義のあるものです。御仁徳限りなく施す趣旨が生きると思います。江戸府内の家持町人の調査をしたところ、町奉行所支配の分だけで13,822 人程います。これらの人に年1両ずつ出してもらうと、一月銀 5 匁、1 日に割ると銀1分 6 厘 7 毛ずつとなり、拠出する側にも意義深い。それでも、余分に上納することになり、少額でも負担に思うでしょうから、年々の祭礼にかかるお金の内、家持町人一人に付差し出す1両を減らし、病幼院の用途に回すよう仰せつければ、より一層差障りは少ないでしょう。地位の高い人やお金持ちの寄付もあるでしょう。家持町人の一人平均1両、総計13,822 両を集める予定ですが、地位の高い人、お金持ちはもっと出してくれるように奉行から仰せつければよいと思います。

この上納金を両方の施設の費用に使い、余った分は、身元の確かな町人に両施設の必要なものを納めさせる費用として、金 50 両に付銀 15 匁の利息で貸出します。利息収入がだんだん増えてくれば年々元金に加え、だんだんそれが増えてくれば、病人や子供で施設を使いたい人が多数に増えても、差障りなくなるのではないでしょうか。

上記の出費と貸付金の運用方法はこのようです。

1. 江戸の家持町人13,822 人
2. 年に 1 両納めると一年で総額は 13,822 両
3. このうち病院費用は 7,520 両、幼院費用は 2,152 両 3 分と 100 文　計　金 9,772 両と 100 文
4. 残金 4,493 両 3 分　永 150 文
　　このうち金 1,000 両は建築費
　　残り 3,049 両 3 分永 150 文
　　年々の両施設の運営に使用した残金は、貸し出し、利息は計算の通りです。ただし年 5 分

初年度の元金･･･3,049 両 3 分永 150 文
　　この利金 152 両一分永 150 文
2 年目･･･元金 3,202 両 1 分永 45 文　このうち 3,202 両 145 文
　　初年元利合計 4,049 両 5 分永 150 文
　　この利金　362 両 2 分永 114 文 8 分
3 年目･･･元金10,642 両 3 分永 59 文 8 分
　　このうち 7,614 両 3 分 159 文 8 分
　　2 年元利合計　4,049 両 5 分永 150 文
　　この利金　583 両永 240 文 4 分
4 年目･･･元金16,297 両 3 分永 100 文 3 分
　　このうち 12,248 両永 50 文 3 分
　　3 年元利合計　4,049 両 5 分永 150 文
　　この利金　814 両永 3 分永 147 文 5 分
5 年目･･･元金 21,160 両 2 分永 247 文 8 分
　　このうち 17,112 両 3 分永 97 文 8 分
　　4 年元利合計　4,049 両 5 分永 150 文
　　この利金　1,058 両永 137 文 4 分
　　元利合金 22,220 両 3 分永 135 文 2 分

右の通り準備金が年々増加する件については、差し支えはありません。仁政が行き届くようになるでしょう。場所については高爽地でなければ、療養も幼育も行き届きかねるので、三番町御薬園を、病幼院全体の立地にして頂きたい。ほかの詳細はそれぞれの掛に言いつけ、経験しながら順次述べてゆきたい。見込みの概略を調べ町奉行に提出した案を添え、以上を申し上げます。

安政 4 年正月　大久保右近将監忠寛(⇒　幕閣に提出)

今度病院幼院は番町御薬園へ建築され江戸府内の鰥寡孤独で難渋している下々末端まで、順次援助する趣旨です。就きましては府内の家持町人は 1 年に 1 両ずつ、このような用途の為に納めてください。尤も地位の高い方、金持ちも居ますので、神事、祭礼など、無益の町入用を減らし、地面 1 箇所につき平均 1 両渡してください。このお金の納め方の詳細は、掛が居ますのでご相談ください。(江戸)

◆解説･･･昭和 51 年、東京市史稿編纂者の意見
案ハ平山敬忠(省斎)筆ニ成ルト云フ。幕府多事ノ際之ガ実施ヲ見ルニ至ラザリキト雖、現時ノ養育院制度ノ夙ニ有識者間ニ唱道セラレタルヲ推知ス可シ。

病院幼院創立意見の背景とその後の展開

蕃所調所の最初の具体的な仕事として提出されたのが、この大規模な西洋版小石川養生所の創設意見である。その直後に大久保忠寛は長崎奉行の辞令が出たのだが赴任せず、懲罰的駿府町奉行の辞令が出て赴任することになる。長崎奉行の後任には水野忠徳勘定奉行の兼任のあと、岡部永常が赴任し、翌年ポンペの提案を実現する長崎養生所の建設が幕府の手で行われた。江戸では西洋医学の導入に反対する漢方の多紀一派の抵抗を抑えてお玉が池の種痘所が作られ、翌年には官営の西洋医学所となった。咸臨丸はサンフランシスコ出発時、乗員に熱病が流行し、アメリカ海員病院へ入院させたが、これを仕切ったのが船医の牧山脩卿である。彼は帰国後、西洋医学所の頭取となっている。文久遣欧使節団の任務のひとつに『夷情探索』があり、当時の蕃書調所頭取を大久保一翁が勤めている。大久保は箕作や、福沢諭吉などの蕃書調所スタッフをこの任務のために派遣している。

これらの情報は幕末の騒乱の中で生かすことは出来なかったが、明治になってからの駿府藩立病院、東京での**養育院**・東京府病院の建設へと繋がっていくのである。

幕府開明派の西洋医学導入

1845:海防掛再編:阿部正弘(川路聖謨、永井尚志、大久保忠寛、木村嘉毅)
1855:海国図志を江戸で出版:塩谷甲蔵、箕作阮甫、川路聖謨
1857:病幼院創立意見:蛮書調所総裁　大久保右近将監忠寛
1857:長崎医学伝習所･長崎養生所:ポンペ、岡部永常長崎奉行
1858:お玉が池種痘所:川路聖謨、伊藤玄朴････坪井信良、牧山脩卿
1860:遣米使節･咸臨丸桑港病院体験:牧山脩卿、福沢諭吉、(佐野鼎)
1862:竹内遣欧使節、夷情探索:箕作阮甫、松木弘安、福沢諭吉、佐野鼎、大久保一翁(忠寛隠居名)
1867:徳川昭武パリ万博使節団(渋沢栄一、高松凌雲、A, シーボルト)

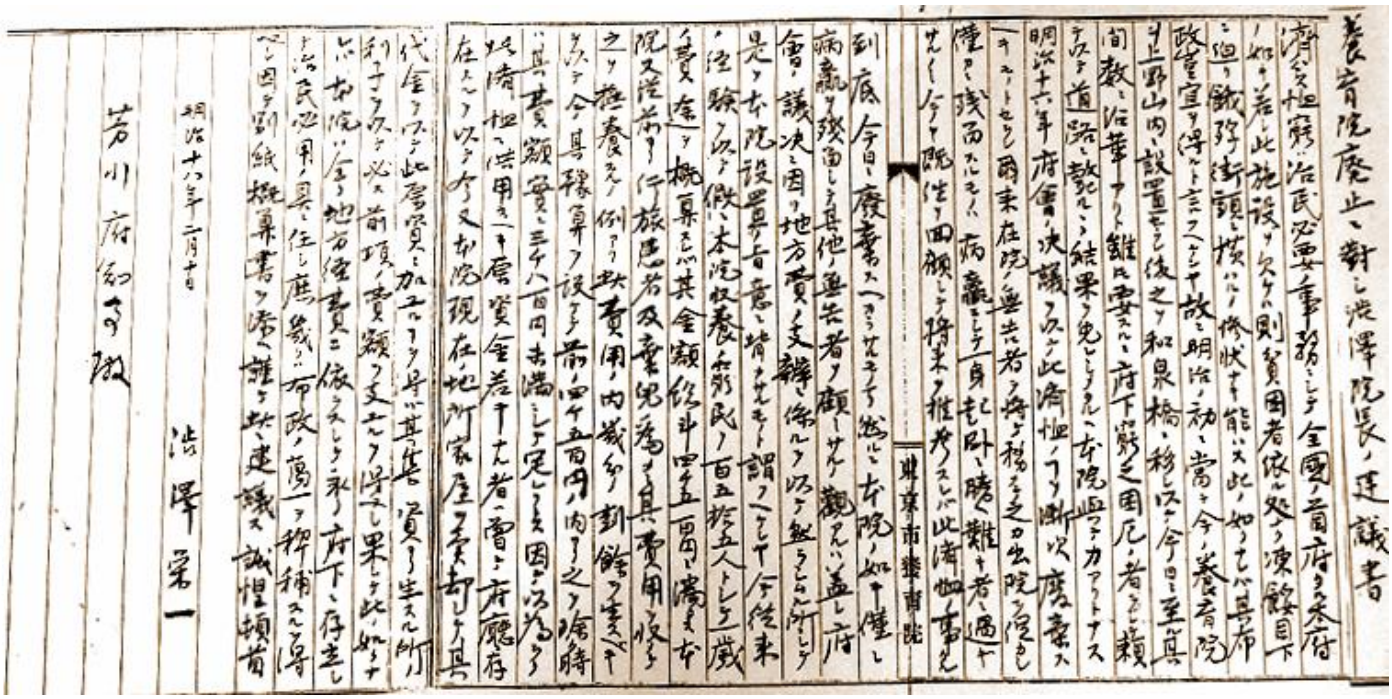
明治維新後

1869:藩立駿府病院･沼津病院･沼津兵学校
1869:救育所:芝、麹町(七分積金による)
1872:養育院(七部積金による):大久保一翁、渋沢栄一
1873:東京府病院:大久保一翁、坪井信良、牧山脩卿
1874:渋沢栄一･･･養育院の維持･運営、
1891:渋沢栄一･慈恵会(東京府病院下取)の財政基盤確立



櫻園通信２２．平成２７年３月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

超現代語訳「養育院廃止に対する渋沢院長の建議書」



養育院廃止に対する渋沢院長の建議書　の歴史的背景

明治５年、静岡の徳川家（当主・家達。前将軍慶喜は謹慎中。）を支えていた大久保一翁は、静岡藩中老→権参事を務めていたが、明治５年の廃藩置県により、家達とともに上京。文部省２等出仕を命じられ、すぐに東京府知事に任じられた。

七部積金の用途は大蔵大輔の井上馨の内喩により、都市基盤の整備などにも使用できるようになっていた。

大久保知事は営繕会議所に対して、明治５年の９月に救貧策を諮問し、10 月には救貧三策の答申を得、そのひとつとして、恒久的救貧施設『養育院』の建設に至った。上野の護国院の一部を買収し、増改築し、翌年２月にはオープンしている。この間、ロシアのアレクセイ王子が国賓として訪れたが（このときの外務・内務卿で接待の責任者は、幕末の４賢候の一人宇和島藩主の伊達宗城）、東京の街を浮浪者が徘徊するのは文明国の恥と言うことで、浮浪者を駆り集め、旧加賀藩の空き長屋に集められ、浅草の長谷部善七（直前のエタ解放令により自由人となり長谷部を名乗る）に委ねられ、５日後に浅草溜めに移された。

明治６年２月には上野の養育院施設が完成し、恒久的救貧施設しての運用が始まった。

明治９年まで、養育院は営繕会議所営（旧・町会所）で、共有金（旧・七部積金）を運営費に当てていたが、明治９年６月には東京府の経営となった。大久保府知事退任後の明治 12 年、上野には博物館や公園を作る計画となり、養育院の拡張計画は阻止され神田の藤堂邸あと（現・三井記念病院の近く）に追いやられた。さらに、府会の決議により、貧しい人の施設に税金を使うのは無駄だと言う論議が出された。

明治７年以来、大久保府知事に共有金の使途を任され、明治８年には、養育院事務長として運営を担ってきた渋沢は、これに抵抗したが、明治 13 年、税金の支出はとめられた。

養育院の存続を願う渋沢は、それなら俺が経営を‥と言う府知事宛の手紙がこれである。そして、伊達宗城（元外務卿）、松平定教（定信の後継者）、橋本綱常（橋本佐内の弟で、東大教授・日赤病院長・軍医総監）、財界人の三井三郎助、青地四郎左衛門、大蔵喜八郎、川村傳衛らを集めて養育院委員会を作り、寄付集めに奔走し、養育院の存続に尽瘁するのである。

此の府知事に当てた渋沢の養育院に対する思いがあふれる手紙は、養育院の最も重要な基本文書であり、現在は東京都公文書館にある。原文を活字に書き起こしてみたが、それでも現代人には難解なので、超現代語訳を付した。（稲松孝思）

済貧恤窮ハ治民必要ノ事務ニシテ、全国ノ首府タル本府ノ如キハ若シ此ノ施設ヲ欠ケバ則貧困者依ル処ナク、凍餒目下ニ迫リ餓殍街頭ニ横ハルノ惨状ナキ能ハス。此ノ如クナレバ其ノ布政豈適宜ヲ得ルト言フベケンヤ。故ニ明治ノ初ニ當テ今ノ養育院ヲ上野山内ニ設置セラレ、後此レヲ和泉橋ニ移シ以テ今日ニ至ル。其間数ニ沿革アリト雖モ要スルニ府下窮乏困危ノ者ヲシテ頼テ以テ道路ニ斃スルノ結果ヲ免レタルハ本院興テ力アリトナス。明治十六年府會ノ決議ヲ以テ此の済恤ノ力ヲ漸次廃棄スベキモノトセラレ、爾来在院ノ無告ノ者ヲ将ニ務メテ之レガ出院ヲ促シ僅カニ残留セル者ハ病羸ニシテ一身起臥ヲ危難キ者ニ過ギザルヲ今ヤ既往ヲ回顧シテ将来ヲ推考スレバ此ノ済恤ノ事、到底今日廃棄スベカラザルモノナリ。然ルニ本院ノ如キ僅カノ病羸ヲ残留シテソノ他ノ無告ノ者ヲ顧ミザル観アルハ蓋シ府会ノ議決ニ因リ地方費ノ支弁ニ係ワルヲ以って然ラシムル処ニシテ此レヲ本院設置ノ旨意ニ背カザルモノト謂ウベケンヤ。今従来ノ経験を以テ仮ニ本院収養ノ窮民ヲ壱百五拾五人トシテ、一歳ノ費途ヲ概算スレバ、其ノ金額総計四千五百円ニ満タズ。本院マタ従前ヨリ行旅患者及ビ棄児ノ為其ノ費ヲ収メテ此レヲ撫養スルノ例アリ。此ノ費用の内〇のカク余ルヲ生ズベキヲ以テ今其ノ予算ヲ設ケテ前ノ四千五百円ノウチヨリ余リシ時ハ、其の費額実ニ三千八百円未満ニシテ足レリトス。因ミニ以テナシタル此ノ済恤ヲ供用スベキ原資金若干ナルモノハ寡ッテ府庁ニ存在スルヲ以テ今又本院現在ノ地所家屋ヲ売却シテ其ノ代金ヲ以テ此ノ原資ニ加エルヲ得ラバ其ノ集資ヨリ生ズル処ノ利子ヲ以テ必ズ前項ノ費用額ヲ支エ得ルベシ。果タシテ此ノ如くナレバ本院ハ余リ地方経費ニタヨラズ、永ク府下ニ存立シテ治民必要ノ具ニ任セ庶民ニハ府政ノ万一裨補スルヲ得ルベシ。因テ別紙概算書ヲ添エ謹ミテ此ヲ建議ス。

誠惶頓首　明治十八年二月十日　　渋沢栄一　　芳川府知事殿

養育院廃止に対する渋沢院長の建議書　超現代語訳

貧しい人を助け、苦しむ人を救うのは、社会を維持するうえで必要な政治の仕事です。首都東京にこのための施設がなければ、貧しい人は頼るところがなく、街角で飢えて凍えて死ぬ人が出るのはやむをえないでしょう。このため、明治の初めに上野に養育院が設置されました。養育院はその後神田の和泉橋の所に引っ越し、今日に至っています。その間に収容人員はいろいろ変わっていますが、東京の貧しい人は頼りにしていて、街頭で亡くなる人がいないのは養育院のお蔭です。明治 16 年に府会は、この人を救う力となっている施設を、漸次、無くするように決議し、在院者を出院するように仕向け、わずかに残った人は寝たきりの弱った人達だけでとなりました。過去のことを思い起こし、将来のことを考えると、無くしてはいけない施設なのです。それなのに現在の当院の様に府会の決定で、物言わぬ困窮者を顧みず、税金を浪費するからと言って無くしてしまうのは、養育院を創立した趣旨に背いています。これまでの経験から、仮に収容者を 155 人とすると、一年間の費用を見積もっても、4,500 円に満ちません。また、養育院は街頭の病人、捨子を収容して保護してきましが、上記の金額を超えても 3,800 円未満です。府の管理する共有金・土地の売却・寄付金などの利息だけでこれらの資金は賄うことができるのです。こうすれば地方税にあまり負担をかけないで永く人々を支える施設を運営することが出来ます。このように考えて別添の概算書を付けて養育院の存続を提案いたします。

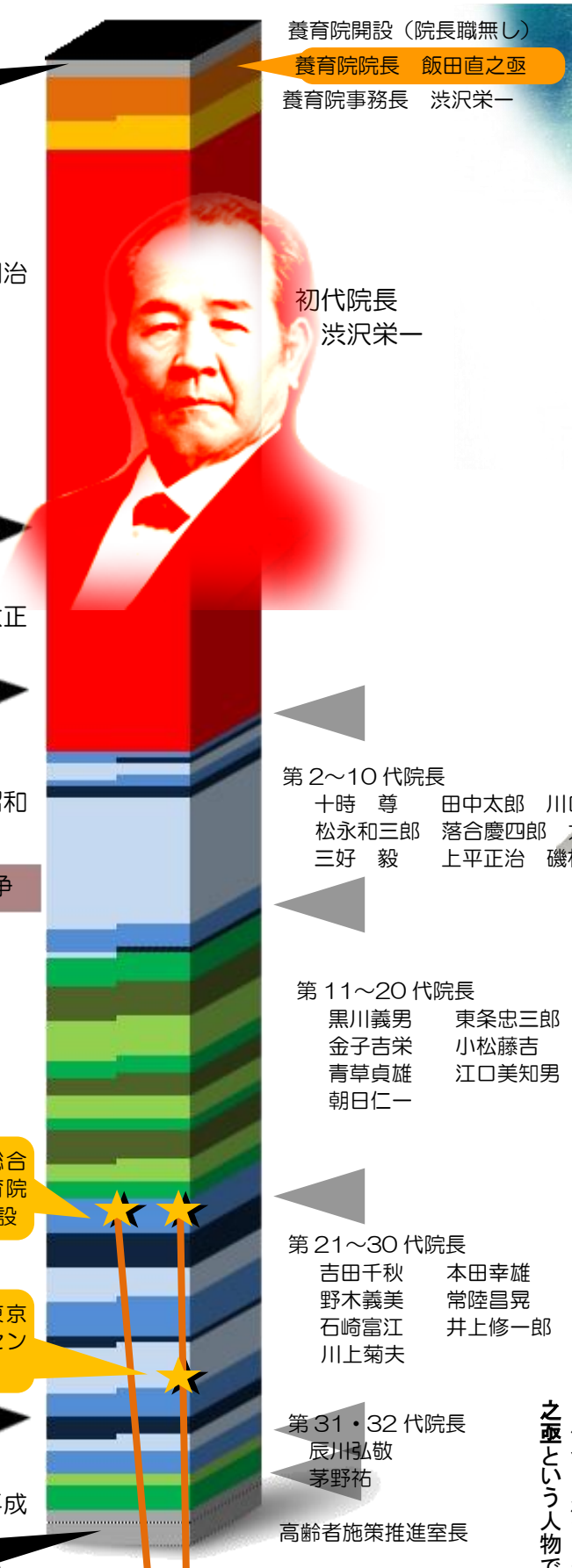
明治 18 年 2 月 10 日　渋沢栄一　　芳川府知事殿

櫻園通信２３　平成２７年３月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

宮本孝一（老年学情報センター）

幻の初代院長





【参考】
東京市養育院編「養育院六十年史」1933
東京都養育院編「養育院八十年史」1953
大植四郎編著「明治過去帳：物故人名辞典」1988

この図は、明治五年の養育院開設から、平成十二年の養育院廃止（東京都の養育院廃止条例）までの、歴代院長の在任期間です。

約百三十年にわたる養育院史における、渋沢栄一院長の存在の大きさがよくわかります。

渋沢栄一は亡くなるまで院長に在任していました。その後は、東京市・東京都の職員が養育院長に就くようになります。在任期間の境目に段差があるのは、一年の途中で交代することがあったためです。

さて、歴代院長というと初代は渋沢栄一とされていますが、実はその前に院長に任命されていた人がいました。**飯田直之亟**という人物です。

飯田直之亟を養育院院長に任命

酉＝明治六年
癸酉（みずのととり）の年

記

月給金弐拾圓

飯田直之亟

右養育院々長申付候間諸事不取締無之様實精可相勤候也

酉一月八日

會議所

渋沢栄一



飯田直之亟

（写真無し）



23 歳　倒幕のため
高崎城のっとりを画策

24 歳　一橋慶喜に仕える

26 歳　慶喜将軍に
渋沢栄一は幕臣に

江戸幕府

28 歳　直之亟、江戸城諸門を警備する撤兵の指図役に抜擢

29 歳　彰義隊参加

渋沢　大蔵省へ

1870

東京会議所

営繕会議所（東京会議所）
附属養育院　設立

直之亟　文部省へ
渋沢　大蔵省辞任

34 歳　直之亟
養育院院長に任命（東京会議所）

東京会議所の
共有金取締役就任

渋沢
養育院事務長に

直之亟
院長制廃止により養育院掛に

明治政府

40 歳　直之亟
養育院副幹事に

39 歳　渋沢
職制改定で事務長は
「院長」に

1880

以後
渋沢栄一は
亡くなるまで
養育院院長　↓

神田

本所

東京府

この時期の飯田の
動向は不明

外国語学校教授、下谷区会議員、東京府学務委員など

49 歳
神奈川県監獄の教誨師
就任

1890

東京市

養育院

59 歳
横須賀監獄署の
教誨師就任

62 歳
教誨師辞任

68 歳　飯田直之亟死去

墓は、渋沢栄一
と同じ谷中霊園に



明治五年開設当初の養育院は臨時収容所で「院長」職はありません。

翌年の上野移転前に東京会議所内に院長職を設けることが決まり、呼び出されて明治六年一月に任命されたのが**飯田直之亟**でした。

渋沢栄一が養育院事務長・院長になったときも、養育院掛・副幹事として養育院運営に携わっていました。

養育院六十年史などの年史は、飯田直之亟の院長職は、渋沢栄一以降の院長職とは職制の性質が違うとしています。そういう見方があるためか、**初代院長渋沢栄一**が今は一般的なイメージとして定着しています。ただ、飯田直之亟院長の職務内容や権限について語る歴史史料は、今現在なにも見つかっていません。

渋沢栄一の院長就任後も養育院の運営に関わっていた飯田直之亟は、創立以来どのような役割を担ったのか。養育院史で語られることのない、幻の初代院長です。



櫻園通信 24．平成 27 年 6 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

白河楽翁の心願書と渋沢栄一の解説

渋沢栄一の時代から、旧養育院長室に、額が飾られていた。昭和 20 年 4 月の米軍による空襲で、養育院の多くの部分が焼夷弾に焼かれた。本院の多くの建物は焼失、107 名の犠牲者が出、コンクリートの代替像になっていた渋沢像も焼け焦げた。養育院に関する多くの歴史的資料もこのとき焼失したが、養育院長室からこの額は持ち出された。それほど大切にされてきたものであり、現在は表装しなおして展示ケースに収まっている。江戸時代、白河藩主松平定信(白河楽翁)が筆頭老中になり寛政の改革に乗り出したとき、吉祥天に納めた心願　書の写しである。松平定信の作った七部積金の制度に対する感謝の念こめられた渋沢の賛(解説文)が組み合わされて、一つの額にしてあるのである。



まず右側の白河楽翁の心願書であるが、桑名の松平家(白河から移封)の家宝となっている。

養育院研究家の長沼友兄氏によれば、現物は三重県桑名市の桑名城本丸跡の、鎮国守国神社(ちんこくしゅこくじんじゃ)にある。松平定綱(鎮国公)、松平定信(守国公、楽翁公)を祀る神社の宝物のひとつとなっており、ここに掲げられているのは能筆の養育院幹事、前田源平の手になる写しである。

現代語に意訳すると、以下の内容であり、今日でも為政者のあるべき決意として、しばしば引用されている。

天明八年正月二日松平越中守奉懸一命心願仕候、當年米穀融通宜しく格別の高直無之下々難儀不仕安堵靜謐仕竝に金穀融通宜、御威信仁恵下々へ行届き候様に越中守一命は勿論之事、妻子之一命にも奉懸候事必死に奉心願候事、右條々不相調困窮御威信御仁徳不行届人々解體仕候萬々御座候はゝ、只今之内に私死去仕候様に奉願候、生ながらへても中興の功出來不仕汚名相流し候より、只今の英功を養家之幸並に一時之忠に仕候へば死去仕候方却反つて忠孝に相叶ひ候義と奉存候、右の仕合に付き以憐愍金穀融通下々不及困窮、御威信御仁恵行届、中興全く成就之義偏に奉心願候
敬白

天明八年正月二日。松平越中守の一命に懸けて心願があります。今年のお米の融通がうまくゆき格別の高値無く安定し、政道の権威が保たれて下々にも行き渡りますよう、私自身の一命は勿論のこと、妻子の一命にもかけ、必死に心願致します。

右のことがうまく行われず、人民困窮し政治がうまく行われず、万が一、人々が困るようなことがあるようなら、今すぐにでも私が死んでしまうようお願い申上げます。

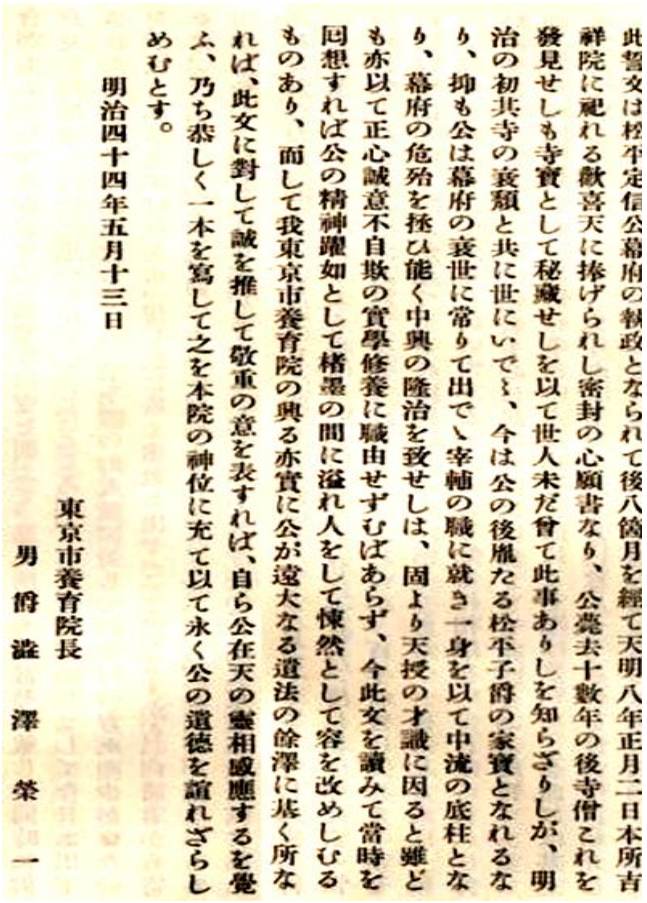
生きながらえて世の中を再生することができず汚名を流すようであれば、現在の老中という地位の栄光は養家の一時の幸い、忠義に過ぎませんから、死んでしまった方が却って忠孝にかなうと思います。そのようなわけですから、憐れみを以て経済がうまくゆき、人々が困らないように政道の権威、仁恵が行き届き、世の中の立て直しが成就しますよう偏にお願いいたします。



七部積金の恩恵に深く感謝する渋沢栄一は、この制度を創った松平定信（楽翁）に深く傾倒している。白河市の地元市民や定信を崇敬する人々が、定信を祭神とする南湖神社の造営を願うとき、神社設立認可への政治的援助、多額の寄付、揮毫などを行い、大正11年（1922）の立柱式（地鎮祭）に参列している。また、院長としての養育院への出勤日は楽翁の月命日とし、伝記である『楽翁公伝』の出版に力を尽くしている。養育院における昭和4年6月の楽翁公百年祭で次のように述べているので引用する。

［中略］私が公（松平定信）を知ったのは明治七年。東京府共有金の取締の事を、時の府知事大久保一翁氏から申しつけられてからでありまして、［中略］　然らば此の金はどこから来たかと調べて見ると、これは楽翁公の経営せられた、例の七分金と称する江戸市中の積立金でありました。公は特に申述べるまでもなく、政治上非常な緊縮方針を執られ、節倹を勧められ、自ら実行した方であります。其処で当時の江戸に於ける各町の費用を節約せしめることとし、町奉行と相談の上、年々の経費を出来るだけ節して、その一分を給与金に振当て、二分を此の経費を納めた人に割戻し、而して残り七分を積立て利殖したのであります。即ち此の資金はあるいは貸金とし、又は土地を買入れ、更に穀類をも買持ちして、資金の維持と増殖とを図った、これが七分金と名づけられたもので、明治維新後、総額百五・六十万円が東京府に引継がれて共有金となって居ました。私は斯様な楽翁公の余徳を知り、公がただの政治家でなく、経済的にも社会的にも充分手腕のある方であると覚ったのであります。［中略］養育院の経営上の費用は共有金から支出されていましたので、現在の東京市養育院は楽翁公あったればこそ今日の壮大なる規模を有するに至ったのでありますから、公の命日たる五月の十三日には毎年必ず楽翁公祭を養育院内で開いて居ります、又共有金は此の外に只今の商科大学の前身たる、商法講習所とか、瓦斯会社となった瓦斯局とか、東京府市庁舎、その他道路・橋梁・墓地等諸設の公共事業に用ひられたのであります。

然し乍ら、当時は未だ公が変ったお方であるという位の考しか持って居ませんでしたが、後に公が本所の吉祥院に納めて居られた心願書を養育院の関係者から示されまして、その荘重な而も真剣な意気に感じ入りました、［中略］　初めて之を拝見した私は先ず疑ったのであります。何故なればあれだけ優れた政治家であり学問も広く、文雅に長じ而も経済上のことにも深く意を用ひられる人にして、「若し自分の願いが聞届けられないなら、一命を取って下さい」とまで記されたのはどう云ふ訳か、少し業々し過ぎるではないかと云ふ風に感ぜられたからであります。然しよくよくその事情について考へて見ますと、公の老中になられた当時は、実に日本の国の政治を執るには容易ならぬ時でありまして、全く一身を捨てかかる大覚悟を要する場合であつたのであります。［中略］　兎に角公が老中として立たれるについては真に悲壮な御考えであつたとお察しするのでありまして、右の心願書の如きは公の確固たる御覚悟の程を知る唯一のものであると思ひます。［中略］　誠に当時の幕政は日に乱れて、一大危機に立って居たのでありますから、その衝に当るに際しては、右のような一身をかけた必死のこの心願書を認められたのも道理でありましょう、そしてどことなく強硬な願意が籠めてある処に真実悲壮な感じがあり、真剣さが現れて居るのだと思ひます。［中略］　今日こういう人が廟堂に立って居たらと思ひます。殊更現代の政治の善し悪しを私が申すのではありませんが、ただ公の如き賢相があつたらと心から渇仰の念を禁じ得ないのであります。［後略］（六月十四日東京商工奨励館に於ける講演）



此誓文は松平定信公幕府の執政となられて後八箇月を経て天明八年正月二日本所吉祥院に祀れる歓喜天に捧げられし密封の心願書なり、公薨去十数年の後寺僧これを發見せしも寺寶として秘藏せしを以て世人未だ曾て此事ありしを知らざりしが、明治の初其寺の衰類と共に世にいでゝ、今は公の後胤たる松平子爵の家寶となれるなり、抑も公は幕府の衰世に當りて出でゝ宰輔の職に就き一身を以て中流の底柱となり、幕府の危殆を拯ひ能く中興の隆治を致せしは、固より天授の才識に因ると雖ども亦以て正心誠意不自欺の實學修養に職由せずむばあらず、今此文を讀みて當時を回想すれば公の精神躍如として楮墨の間に溢れ人をして悚然として容を改めしむるものあり、而して我東京市養育院の興る亦實に公が遠大なる遺法の餘澤に基く所なれば、此文に對して誠を推して敬重の意を表すれば、自ら公在天の靈相感應するを覺ふ、乃ち恭しく一本を寫して之を本院の神位に充て以て永く公の遺德を讀れざらしめむとす。

明治四十四年五月十三日

東京市養育院長

男爵　澁澤　榮　一

額の左半分の渋沢栄一の解説を活字にしたものです。
養育院本院碑の『養育院本院』の文字は、この書の字体を写したものです。

福澤諭吉の養育院？

宮本孝一
（老年学情報センター）



櫻園通信 25.
平成 27 年 6 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

ペリー来航から西洋諸国の外圧が本格化し、幕政が混乱。それから明治維新に至る約十五年間は幕末と呼ばれています。

幕末期では、西洋諸国に関する情報収集が緊急の課題となり、西洋式の軍事・医療などの研究・教育が盛んになります。

この時期、西洋情報の収集にたずさわっていた幕臣大久保忠寛は、洋式の救貧施設を江戸に作るプランをまとめて、幕府で建議しました。このプランは実現しませんでしたが、明治にはいって東京府知事に就任した大久保忠寛（一翁）は、営繕会議所に働きかけ、貧民があふれる東京に救貧施設「養育院」を作ります。

さて、この「養育院」という名称はどこからきたのでしょうか？

幕末期の西洋の医療・福祉施設情報（病院・貧院・幼院など）の中で「養育院」という施設名を書き記した文書がひとつありました。

洋学者福澤諭吉のヨーロッパ見聞録「西航記」です。



福沢諭吉



大久保忠寛
（＝ 一翁）

黒船来航

目付・海防掛
（外国に対する政策の立案）

洋式救貧施設の知識

蕃書調所頭取（西洋情報の収集、洋学教育、外交折衝）

幼院 病院

西洋式の救貧施設「**病幼院**」設置を幕府に建議。
実現せず。

幕政の混乱で解任。失脚。

幕政復帰。蕃書調所頭取、外国奉行を歴任。

大政奉還論、大開国論を唱え免職。自宅謹慎。

自宅謹慎中、隠居を願い出て、「大久保一翁」と改名。

再び幕政へ。会計総裁に。大政奉還後の幕府内の事態収拾を命じられる。勝海舟とともに江戸開城。

徳川家達に従って静岡に移住。

東京府知事就任。
営繕会議所に救貧策の実施を働きかけて、**営繕会議所附養育院**設立。



地方独立行政法人
東京都健康長寿医療センター

明治維新

幕府崩壊による江戸市中経済の破綻で東京は貧民があふれる事態に。

蘭学塾「適塾」の塾頭に。

藩命により江戸に蘭学塾を開校。英学を独学。

使節団に随行。アメリカへ。

使節団に随行。ヨーロッパへ。

洋式救貧施設の知識

西航記…病院 養老院 養幼院 養癲院 養唖院 養育院

「西航記」執筆。洋学者たちの間で読まれる。

洋式救貧施設の知識

西洋事情…病院 貧院 唖院 盲院 癲院 痴児院

「西洋事情」刊行。

英学塾「慶應義塾」開校。

「慶應義塾」三田に移転。

「学問のすすめ」刊行。

「西航記」は活字化されています。これをみると、養唖院につづけて「養育院あり」と書かれています。本書の「西航記」で養育院の文字が出てくるのはここだけです。

ここで奇妙なことに気づきます。「育」の字の横に「盲」が付記されています。

同様に、「唖子育子」という言葉にも「盲」が付記されています。

「唖子育子」では意味が分かりませんから、ここは「唖子・盲子」であると考えられます。

そうすると、先の「養育院」も、「養唖院、養盲院」と書いたのでは？　ということになります。



ここでは「養育院」がいかなる施設なのか、なにも記されていません。

福澤諭吉の自筆「西航記」には、貧民対象の医療・教育・福祉施設に関して解説する紙片がはさまれていて、それも、活字化されて本書に収録されています。

それによると、「養育院」の記述はなく、かわりに「養盲院」が説明されています。

点字での読書指導や、計算・音楽・手工芸、就学年限などが解説されています。

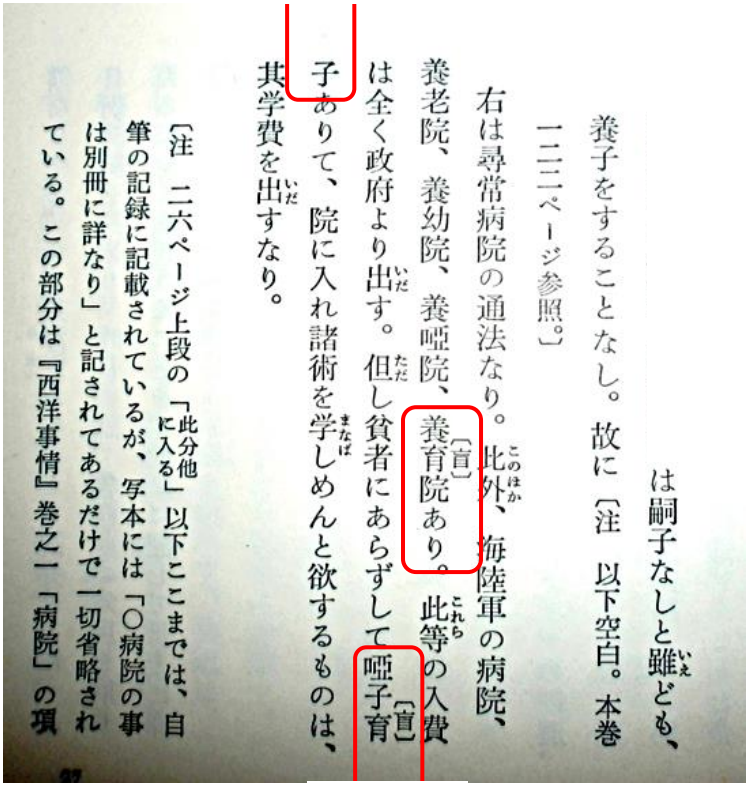
やはり、「西航記」の「養育院」は、本当は「養盲院」のようです。「養育院」や「唖子育子」に「盲」を付記しているのは、この紙片の文脈から「盲」と考えるのが妥当ということでしょう。

では、なぜ、活字版では「養育院」としているのでしょうか？

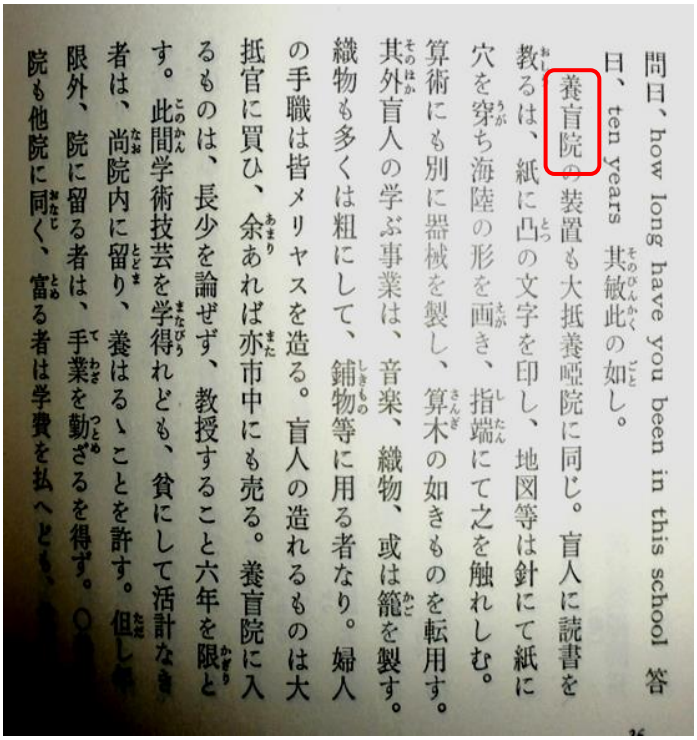
その謎を解くには、福澤諭吉自筆の「西航記」を見る必要があります。

福澤の自筆文献は、マイクロフィルム化されて、慶應義塾大学の付属図書館である三田メディアセンターで所蔵していることがわかりました。

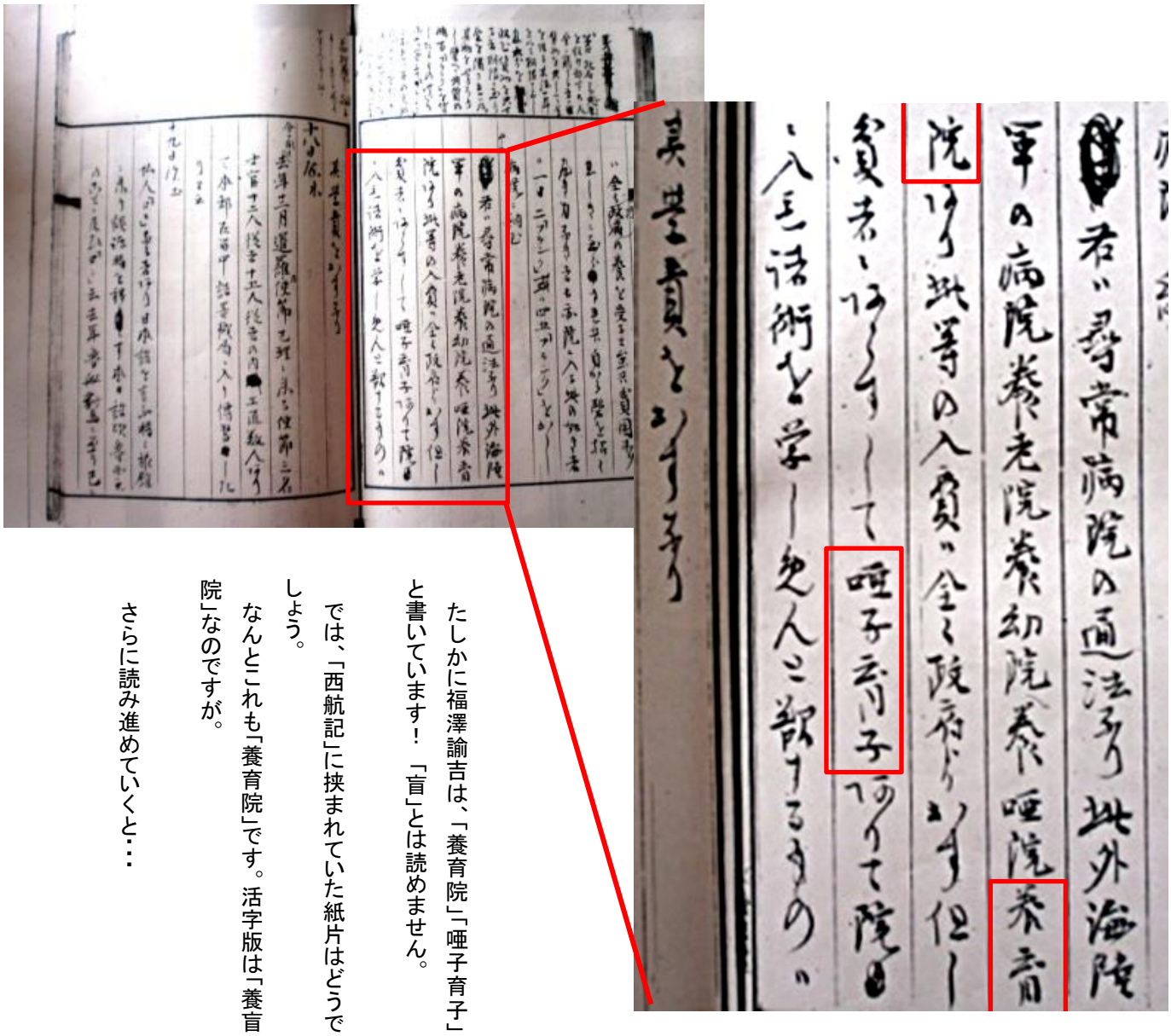
そこで、閲覧申込みの手続きをして、三田メディアセンターに出かけ、マイクロフィルムの自筆「西航記」をプリントアウトしてきました。



は嗣子なしと雖ども、
養子をすることなし。故に〔注　以下空白。本巻一二二ページ参照。〕
右は尋常病院の通法なり。此外、海陸軍の病院、養老院、養幼院、養唖院、〔盲〕養育院あり。此等の入費は全く政府より出す。但し貧者にあらずして〔盲〕唖子育子ありて、院に入れ諸術を学しめんと欲するものは、其学費を出すなり。
〔注　二六ページ上段の「此分他に入る」以下ここまでは、自筆の記録に記載されているが、写本には「〇病院の事は別冊に詳なり」と記されてあるだけで一切省略されている。この部分は『西洋事情』巻之一「病院」の項



問曰、how long have you been in this school 答曰、ten years 其敏此の如し。
養盲院の装置も大抵養唖院に同じ。盲人に読書を教るは、紙に凸の文字を印し、地図等は針にて紙に穴を穿ち海陸の形を画き、指端にて之を触れしむ。算術にも別に器械を製し、算木の如きものを転用す。其外盲人の学ぶ事業は、音楽、織物、或は籠を製す。織物も多くは粗にして、鋪物等に用る者なり。婦人の手職は皆メリヤスを造る。盲人の造れるものは大抵官に買ひ、余あれば亦市中にも売る。養盲院に入るものは、長少を論ぜず、教授すること六年を限とす。此間学術技芸を学得れども、貧にして活計なき者は、尚院内に留り、養はるゝことを許す。但し
限外、院に留る者は、手業を勤ざるを得ず。〇
院も他院に同く、富る者は学費を払へども、



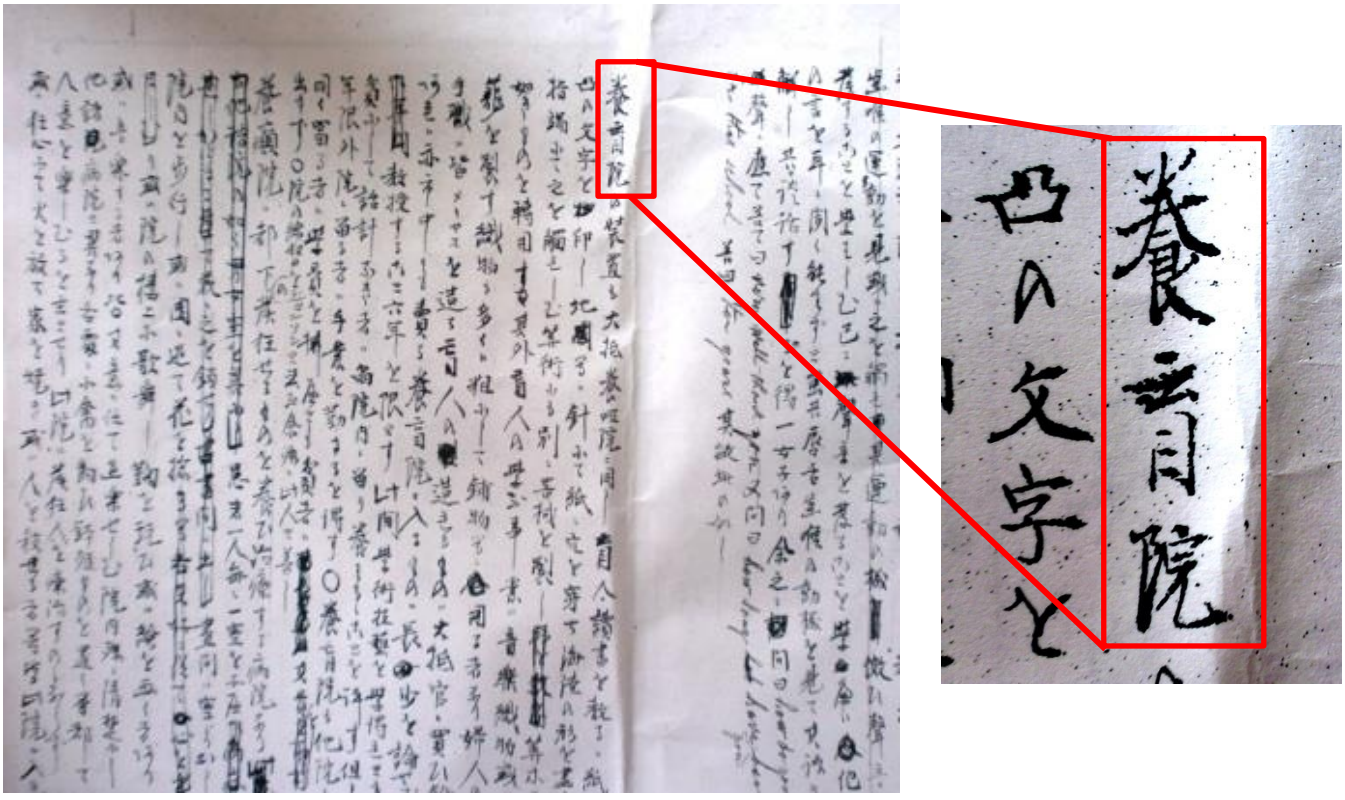
君ハ尋常病院ノ通法ヲ以テ此外海陸軍ノ病院養老院養幼院養唖院養盲院ヲ設ケテ此等ノ入費ハ全ク政府ヨリ支出シ但シ貧者ハ之ヲ無料ニシテ唖子盲子ヲ育テ院ヲ設ケテ人工ヲ以テ手足ノ用ヲ補ヒ又ハ人工ヲ以テ言語ヲ学ハシメ以テ人ヲシテ人ニ非ラサルモノヲ

たしかに福澤諭吉は、「養育院」「唖子育子」と書いています！「盲」とは読めません。

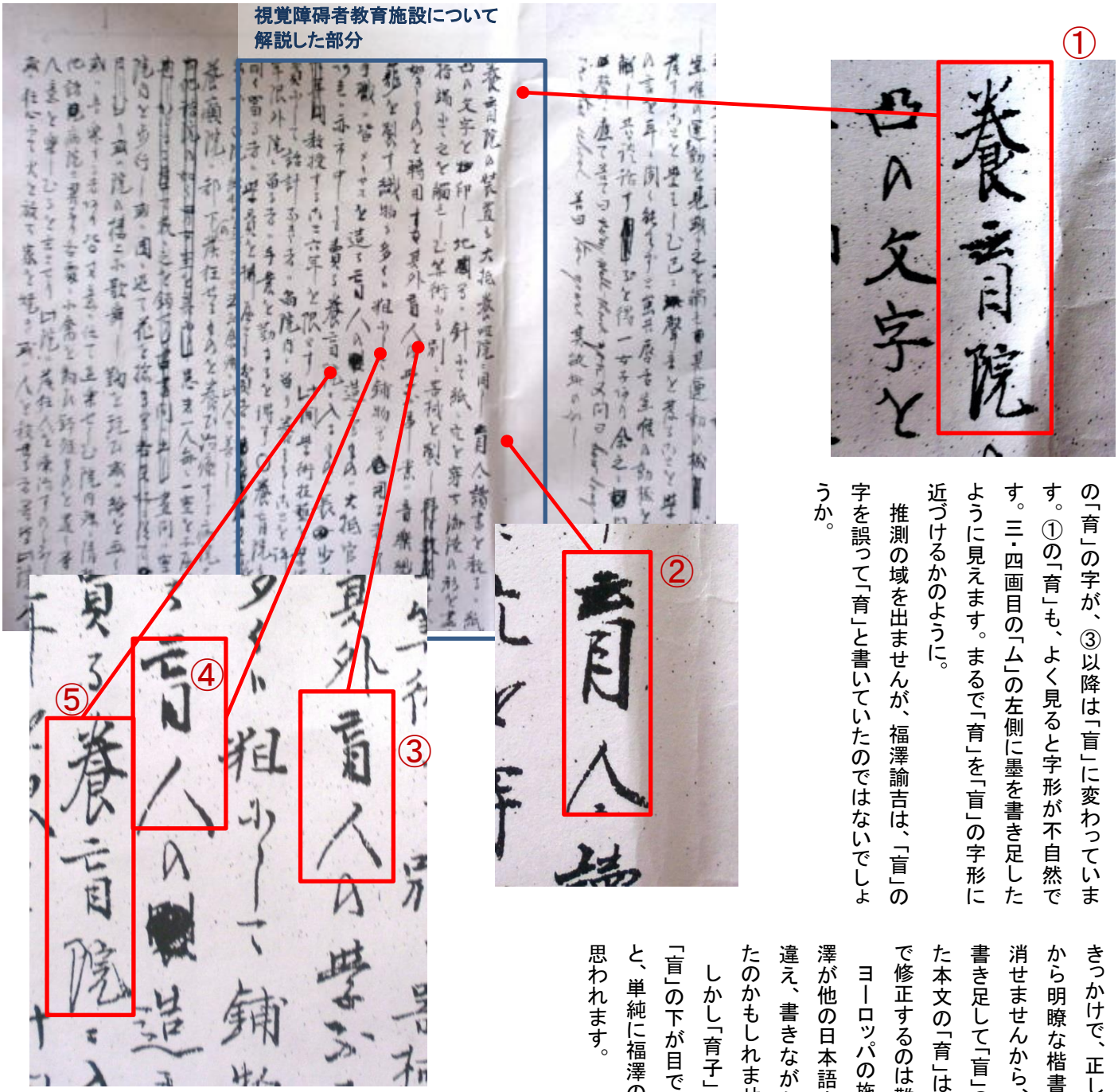
では、「西航記」に挟まれていた紙片はどうでしょう。

なんとこれも「養育院」です。活字版は「養盲院」なのですが。

さらに読み進めていくと・・・



養育院ノ設置ヲ大抵養唖院ニ同一ニシテ



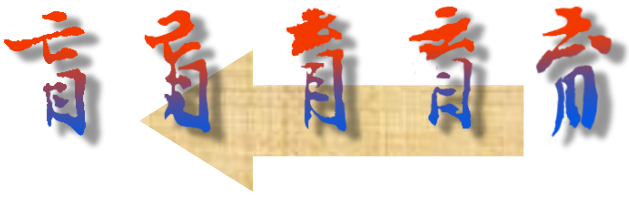
活字版の「養盲院」記述と同じ範囲で、①②の「育」の字が、③以降は「盲」に変わっています。①の「育」も、よく見ると字形が不自然です。三・四画目の「ム」の左側に墨を書き足したように見えます。まるで「育」を「盲」の字形に近づけるかのように。

推測の域を出ませんが、福澤諭吉は、「盲」の字を誤って「育」と書いていたのではないでしょうか。

この紙片を書き進めているときに、なにかのきっかけで、正しくは「盲」だと分かり、③以降から明瞭な楷書で「盲」と書き始めた。墨字は消せませんから、先に書いた「育」には少し墨を書き足して「盲」の字形に近づけた。最初に書いた本文の「育」は・・・これは墨を書き足す程度で修正するのは難しいように思います。

ヨーロッパの施設名を和名表記する際に福澤が他の日本語文献を参照して、盲・育を見間違え、書きながら「育ではなく盲だ」と気づいたのかもしれません。

しかし「育子」「育人」と書いているところや、「盲」の下が目ではなく月であるところを見ると、単純に福澤の誤字であった可能性が高いと思われます。



福澤諭吉
自筆表記の変化

大久保一翁（忠寛）は福澤諭吉と親交が深かったといわれています。森有礼が明治八年に商法講習所（現　一橋大学）開設で苦労した時には、渋沢栄一とともに、大久保一翁や福澤諭吉が援助をしていますし、明治十年に慶應義塾が財政難になった際には、福澤諭吉は大久保一翁や勝海舟に相談し徳川家に資金援助を申し入れています。

養育院設立のキーパーソン大久保一翁が福澤諭吉の「西航記」を読んでいたかどうかはわかりません。また、養育院命名の経緯についての記録も残っていません。

しかし、明治の救貧施設の命名に、福澤諭吉記述の「養育院」が参考にされたかもしれず、それが諭吉の誤字だったとしたら、激動の幕末期に源流をもつ養育院史の、ユニークな歴史こぼれ話ということになりそうです。

櫻園通信

櫻園通信 26.
平成 27 年 7 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

養育院と谷中 前編 谷中の大久保一翁

坂部明浩（谷中在住，養育院・渋沢記念コーナーボランティア，介助＆文筆業）

東京の下町、台東区谷中（やなか）というと、本通信十六号でも紹介されているが、了倹（ごん）寺に、養育院で明治～大正初期に亡くなった引き取り手のない無縁仏のお墓があり、いまも手厚く管理されている。





了倹（ごん）寺の
東京都養育院慰霊碑

今回、その谷中にさらなる発見があった。舞台は江戸時代に遡る。

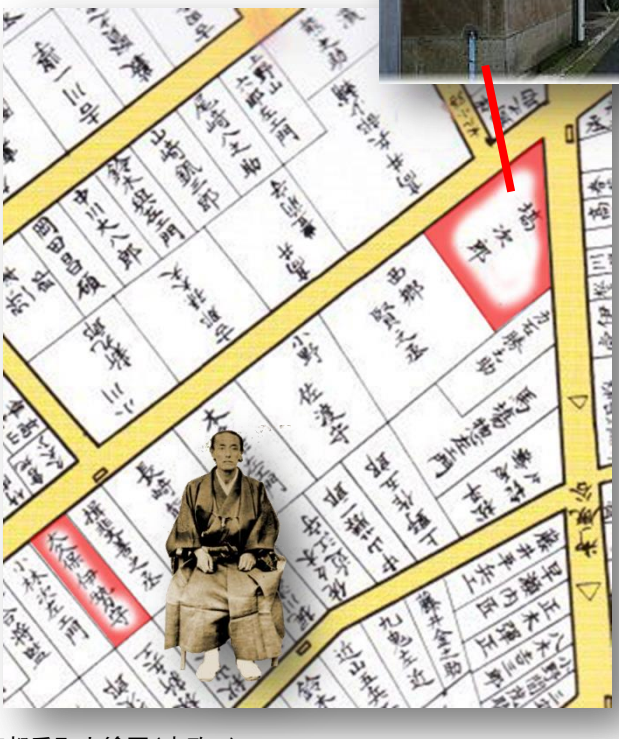
文久二年、谷中の地（了倹寺より七、八分の一乗寺隣）で、大久保一翁（当時は大久保越中守）が近藤七郎右衛門の屋敷を授受したという記録が残っていたのだ（『東京市史稿（市街篇四六）』）。



暗殺現場である塙次郎邸跡前
（東京都千代田区九段）



養育院を創った、のちの
東京府知事　大久保一翁



東都番町大繪図（安政 5）
塙次郎（=塙忠宝　はなわただとみ）と
大久保一翁（伊勢守）の屋敷

もちろん、この記録をもって即、よく知られている番町（東京）の大久保一翁邸から本格的にこちらに引っ越したかどうかは分からない。

また、その年は幕臣の大久保一翁にとっても浮き沈みの激しい年で十一月には左遷もあった。

が、一方で、この時期には、文久二年十二月に盲目の国学者塙保己一の息子で、国学者の塙次郎が尊王攘夷派によって自宅前で暗殺されている。

それが番町の大久保一翁の屋敷と同じ並びの数軒ほどの距離。

その意味では一翁は左遷されたとはいえ、身の安全を考え、谷中の地に移住した可能性も大いにあろう。

どんな状況にあっても、大政奉還論の先駆けになる提案をするなど、つねに先見の明をもつ大久保一翁にあってみれば、谷中の地でも頭脳はフル回転。江戸城明け渡しを早々に考え、その混乱後の「江戸」に行倒れの者などが増えることも想定されたであろうし、その受け皿として、後の養育院の場所の候補を、江戸の頃から構想していたと考えることもあながちあり得ないことではなさそうだ。

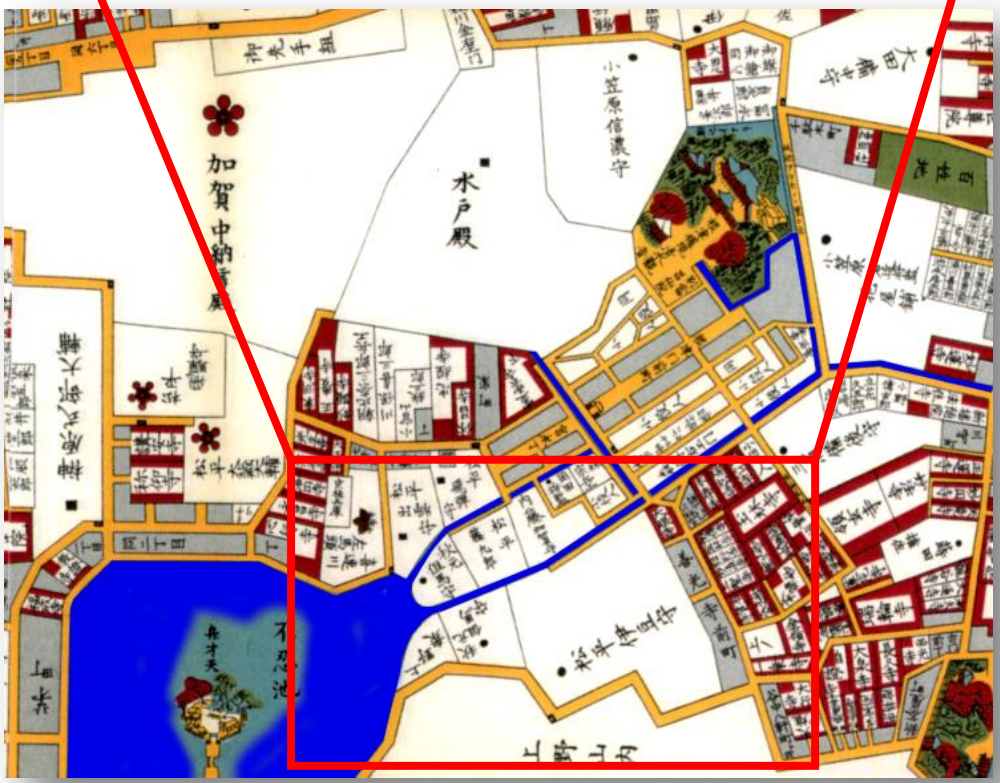


不忍池

ちなみに、この谷中の大久保一翁の屋敷（現・谷中一丁目）から、上野時代の養育院（護国院）までは歩いて五分の距離である。



小石川谷中本郷繪図（萬延 2）
真ん中より右の「上ノ」とある辺りが文久 2 年になって、大久保一翁の屋敷となった。真ん中下の「上野山内」表示の辺りが「護国院」。



■本稿は『江戸切絵図を歩く』の中の菊地明氏の論考「土方歳三の運命を決した道」と直接の助言を谷中の大久保一翁についての執筆の端緒とした。感謝したい。

櫻園通信

櫻園通信 27.
平成 27 年 7 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

養育院と谷中 後編 番町で“目”を瞠(みは)る？

坂部明浩（谷中在住，養育院・渋沢記念コーナーボランティア，介助＆文筆業　）

国学者・塙次郎の暗殺については、もう一つ見落とせない事実がある。

それは生前、外国船が頻繁に訪れるようになり、小笠原の領有を確固たるものにするため、幕府は塙保己一が集めてきた過去の文書の中で証拠となるような文書を、保己一のあとを継いだ塙次郎に探させていたことである。



暗殺の前年（文久元年）には、大久保一翁も一年ほど外国奉行、小笠原島開拓事務江戸取扱いであったことからも、二代にわたる国学者に小笠原のことを調べさせたのは、一翁自身の指示であった可能性が高い。

大久保一翁の盲目の塙保己一への敬意、そして尊王攘夷派への憤り、いかばかりか。



塙保己一のことをうたった川柳「番町で目あき目くらに道をきき」を思ったことだろう。道は学問を指す。目あきでも「見えて」いない者が、暗殺を企てる？

しかも肝心な、その塙次郎を襲った側の人物が、長州藩の伊藤博文と山尾庸三だったのだ。



松下村塾で学び、尊王攘夷運動に参加。薩長政権で力を伸ばす。
初代内閣総理大臣
伊藤博文

ただ当時は犯人は分からず、なんと六十年後の一九二一年、塙検校百年祭の席上、保己一の顕彰団体の温故学会を代表して渋沢栄一が挨拶した際、その暗殺事件に触れ、突然暗殺者の名前を明らかにし、参列者を驚かせたと言われる（『素顔の塙保己一』堺正一）。

もっとも、一翁には犯人名を渋沢栄一は早くから伝えていたはず。

ところが、ここにも歴史の不思議がある。

この山尾庸三と言う人は、文久三年には伊藤博文と一緒に英国に行き、造船所で障害者が働いている姿に強い印象をもち、帰国後、明治四年には（工学頭になっていたが）盲唖教育に関する建白書を政府に出すのであった。



明治維新後、工学関連の重職を歴任。のちの東京大学工学部の前身となる工学寮を創立。

日本工学の父
山尾庸三

番町で「見えなかった」道を新しい時代に瞠目し開こうとしたのである。

その後、養育院が出来てのち、じつは明治八年には、津田仙や中村正直や古川正雄らによって訓盲院設立願い（養育院の盲人室からの独り立ち？）が大久保一翁府知事に出され、一翁は会議所に審議を委託する。（会議所側の回答では訓盲院を養育院の附属にしようとしたようだ）



東京府知事
大久保一翁

こうした中で東京日々新聞は中村正直の話を載せる。中村は、明治四年の山尾庸三の建白書のことなどを挙げて訓盲院認可を促すコメントを残したのだ。

大久保一翁も府知事として（知人でもある）中村正直のコメントを読んだとすると、あの（暗殺者）「山尾庸三」の建白のことに触れた箇所を読んでなんと思ったことだろう。

盲人のもつ記憶力や収集力（塙保己一）によって小笠原の問題が助けられたのに、その盲人の子ども（塙次郎）を暗殺しておきながら、よくもまあ、盲唖の建白もあったものではない、と一翁は思ったか。いや、それよりも、山尾庸三の苦悩を一翁は読み取ってその先を考えていたか・・・それは分からないが、この養育院と訓盲院設立こそ、“目”まぐるしい江戸から明治への道しるべであったと私には思えてならない。（次の楠本府知事の時代に認可された訓盲院の母体、楽善会に山尾庸三も明治九年に入会している。）



楽善会訓盲院 （築地）

■訓盲院と山尾庸三については、『わが国特殊教育の成立』（中野善達・加藤康昭）を参照。



櫻園通信 第28号

出会い

櫻園通信 28.
平成 27 年 10 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

大久保一翁（忠寛）　　渋沢栄一

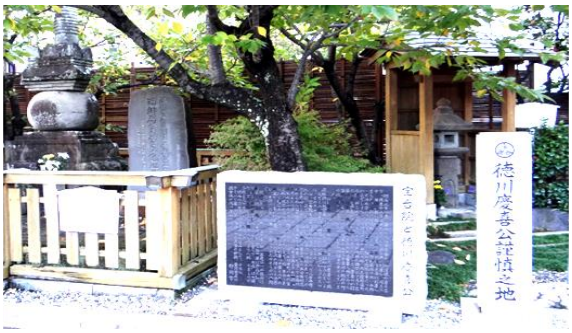
養育院を創設した大久保一翁と、それを引き継ぎ、半世紀以上にわたってその維持発展に尽力した渋沢栄一の、初めての出会いについて述べて見たい。

大久保一翁と渋沢栄一　大久保忠寛が『病院幼院設立意見』を、蕃書調所総裁として幕閣に提出したのは、安政 4 年（1857）41 歳の時である。黒船来航後、幕府の海防掛に抜擢され、貿易取調御用、蕃書調所総裁の立場で作ったものである。その後、直言居士の大久保は、昇任と左遷を繰り返しながら、長崎奉行（辞退）、駿府奉行、禁裏付、京都東町奉行、御側御用取次、勘定奉行（５日間）などを勤め、幕末には隠居の立場ながら（隠居名一翁）、会計総裁・若年寄として、勝海舟とともに江戸の無血開城を果たした。

維新後は、静岡藩の中老として、徳川家の移封に中心的な役割を果たした。幼い家達を後継者とし、謹慎中の慶喜家の家令の立場で、徳川家の代替わりを果たし、家臣団のための沼津兵学校、静岡学問所、駿府藩立病院の旗揚げなどに重要な役割を果たしている。

一方、安政 4 年頃の渋沢栄一は、秩父の豪農の倅で、血気にはやって尊皇攘夷運動に手を染め、心配した親が嫁を持たせた 17 歳の若者である。縁あって一橋家に仕えて武士身分を得、慶喜が将軍になるに及んで、26 歳の時には幕臣となり、慶喜の命で徳川昭武の幕府使節団の庶務掛として、1867～1868 年にパリを中心に、ヨーロッパ生活を体験することになる。

しかし、この間に徳川幕府は崩壊し、急遽帰国、1868 年 12 月 8 日に、徳川慶喜の謹慎する静岡に帰国報告に訪れることになる。此の場面は渋沢に自伝にしばしば述べるところである、慶喜が謹慎する駿府の宝台院の一室においてのことである。



徳川慶喜謹慎の寺、宝台院　駿府の宝台院は、徳川家康の側室、秀忠の生母である愛姫の葬られる徳川家には由緒の深い大寺で、国宝の伽藍を有した。かつて駿府町奉行を経験している大久保一翁はこの寺を慶喜の謹慎の寺に選んでいる。この間の事情が、石碑に書いてあるが、維新後、勝海舟や渋沢栄一がしばしば訪れたと言われる。



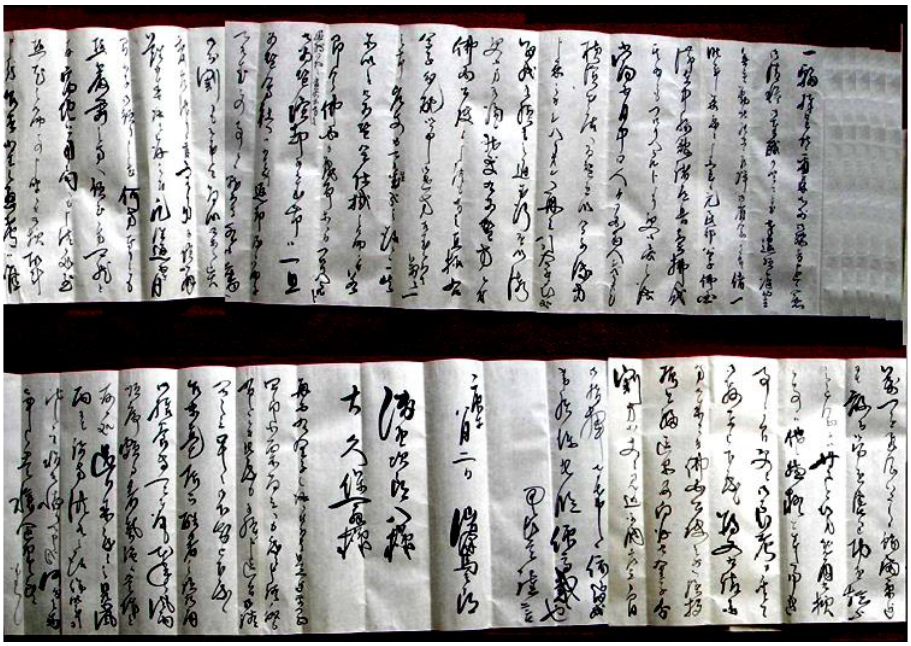
昭和 15 年の静岡大火で旧国宝の本堂を失い、さらに昭和 20 年の空襲で壊滅した。現在は鉄筋コンクリート造りの寺となっている。

大久保一翁と渋沢栄一の接点　明治元年にパリから帰朝した渋沢は、当初、慶喜に報告後、昭武のいる水戸に赴くつもりであったが、慶喜の配慮で静岡に留まり、

勘定頭支配同組頭格御勝手懸り中老手附ということになった。

このころ渋沢（篤三郎と名乗っている）が、大久保一翁・浅野次郎八に宛てた手紙が、大久保家の御子孫の家に残されている。

渋沢の流麗な筆で、パリ生活の過程で、幕府からの拝借金を運用して得た残金の処理方法について意見を求めた手紙である。詳細は次号で述べる。



当時、幕府からの使節団や留学生の、幕府からの拝領金の処理はかなりルーズであったと言われるが、渋沢のヨーロッパでの業務・会計報告の公正さは括目すべき内容であったらしい。大久保が渋沢を高く評価するきっかけとなったと思われる。

このあと大久保は、幕府から静岡藩に貸与された巨額の太政官札の運用を渋沢に任せることになる。

渋沢は、これにパリでの残金、静岡の豪商の投資などを合わせて、商法会所を立ち上げることになるが、総額の 88%は太政官札である。このように資本をあわせて（合本して）会社組織を運営したことから、これは日本最初の株式会社組織との考えがある。

かつて光岡八郎（後の由利公正）が福井藩で藩札を用いた商法会所の運営で大きな利を上げ、福井藩の財政を立て直し、藩主松平春嶽の幕末の政治活動の元となった。財政問題を抱えた明治新政府は、由利公正を財務担当とし、その手法を全国的展開したのが太政官札の発行である。しかし、信用の低下から正金への交換があちこちで行われ、その価値の維持のため、正金への交換が禁じられた。

渋沢は静岡で、太政官札の運用による「商法会所」の商業活動などで大きな利益を得たが、中央政府（由利公正）からのクレームがあり、大久保の提案で「商法会所」は「常平倉」に名を改めている。

渋沢栄一の上京　大久保忠寛は将軍家茂の御側御用の時、「日本は開国すべきで、朝廷がこれに反対するのなら、委任されている大政を奉還し、国是は諸侯の会議で決めるべき」と主張し、松平春嶽や山内容堂の度肝を抜き、慶喜、板倉勝静らには左遷された。

その 5 年後に徳川慶喜自身が大政奉還することになる。その後は慶喜を中心に、有力諸侯の松平春嶽、伊達宗城、山之内容堂、島津斉彬・久光らによる合議制、公武合体路線を想定しているのであり、維新政府が成立したとき、松平春嶽、伊達宗城らは、政府高官となっている。

明治 2 年段階で、松平春嶽ついで伊達宗城は、大蔵・内務卿の立場にあるが、これらの人は幕末から大久保一翁と親しく交わっている人であり、新政府に幕府の人材を生かそうとしてきた人である。しかしその後は、薩長閥中心の政権運営となり、表舞台から去ってゆくことになる。

渋沢栄一が明治政府に任官する過程は興味深い。

上京を命ぜられたとき拒否したが、「徳川家は人材の出し惜しみをしている」といわれては、慶喜に迷惑がかかると大久保一翁に説得されて上京している。

また上京後、大隈重信に「国家創業の八百万の神のひとりたれ」と説得され、明治政府の大蔵省に任官することになり、改正掛（シンクタンク）として維新政府の運営に貢献してゆくことになる。渋沢の明治政府への任官には、このような背景があるようである。

また後に大久保一翁が東京府知事のとき、共有金（江戸幕府からの七分積金）の運用、養育院の運営を渋沢栄一に託したのも、このような二人の信頼関係に基づくものであったろう。　　〔稲松孝思〕



櫻園通信 29.
平成 28 年 1 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

渋沢栄一から大久保一翁への手紙

渋沢栄一の若い頃からの代表的な社会的貢献事業として『養育院』関係のものがしばしば上げられる。しかし、その設立に関しては、渋沢自身はその講演の中で関与を否定している。

これらの事業は大久保一翁が明治五-七年の東京府知事の時代に、共有金（江戸期の救貧資金である**七分積金**の名前を変えたもの）を原資としてなされたものであり、幕府目付け時代から暖めていた構想の実現である。

また、『商法講習所』は、森有礼、ホイットニーの構想によるものであり、その破綻を防ぐために大久保府知事が共有金をあてたものであり、当初このことにも渋沢は反対している。しかし、大久保一翁東京府知事が、共有金（七分積金）の運用を渋沢に委託したことから、渋沢はこれらの社会事業に関与するようになる。

渋沢の関与は、大蔵大輔・井上馨の内諭により、本来、江戸の救貧対策基金である七分積金の名を「共有金」に改め、町会所の運用を東京の新興財閥などによりなる営繕会議所に託し、財政難の折、東京のインフラ整備やガス灯街路設置にも使用できるようにしたことにある。

これに対して、救貧策はどうするのですかと大久保知事により諮問が出され、その答申の「救貧三策」を具体化するものとして、明治五年に**養育院**は設立されたのである。

この関係は、静岡藩に割り当てられた太政官札の運用を渋沢に託し、これをもとに静岡の商法会所を立あげて成功させた先例にさかのぼる。

その信頼の醸成に、以下に挙げる手紙がある。二人の絆のきっかけとなった、若いパリ帰りの渋沢と、静岡の徳川藩の中枢を支える大久保の二人をつなぐ手紙がこれである。

手紙の背景：大久保忠寛（一翁）　1817～

鳥羽伏見戦争後、徳川慶喜は江戸に戻り、恭順体制のための組閣を行い、会計総裁に大久保一翁、陸軍総裁に勝海舟、海軍総裁に和田堀を当て、江戸幕府の幕引きにあてた。この時老中は不在で、大久保は本来大名の職である若年寄・参政に引き上げられており、幕府の政権移管時の実務担当最高責任者である。

この後、静岡における徳川藩（家達）の移封に働き、家臣団による沼津兵学校、静岡学問所、駿府藩立病院などを立ち上げに奔走。旧藩士救済に茶生産の基礎を作っている。また、慶喜家の家令を努めているが、この時（明治元年（1870）12 月）に渋沢が訪れるのである。

明治 3 年静岡藩権大参事　更に廃藩置県により、静岡県家達と共に東京に戻っている。なお、明治 3 年に明治政府参議を要請されたが辞退。

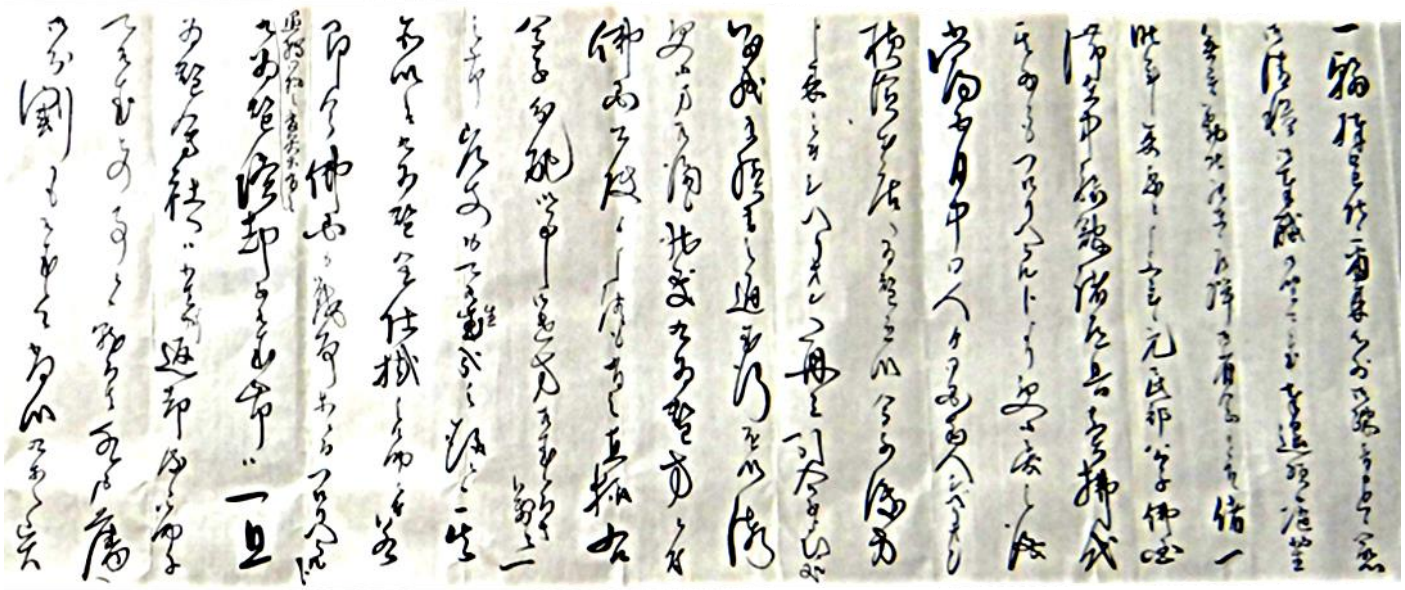
手紙の背景：渋沢栄一　1840～

埼玉の豪農の跡継ぎであったが、政治運動に関わり、縁あって一ツ橋藩に仕官し、武士身分を得た。慶喜が徳川将軍になるに及んで、図らずも幕臣となる。徳川昭武を首班とするパリ万博派遣団、万博後の昭武のヨーロッパ巡検、パリ留学の庶務、会計担当官として働く。

幕府崩壊により、徳川昭武と共に帰国し、その報告に静岡で謹慎中の徳川慶喜を訪れる。家令の大久保が間に立つが、このときが二人の始めての出会いである。

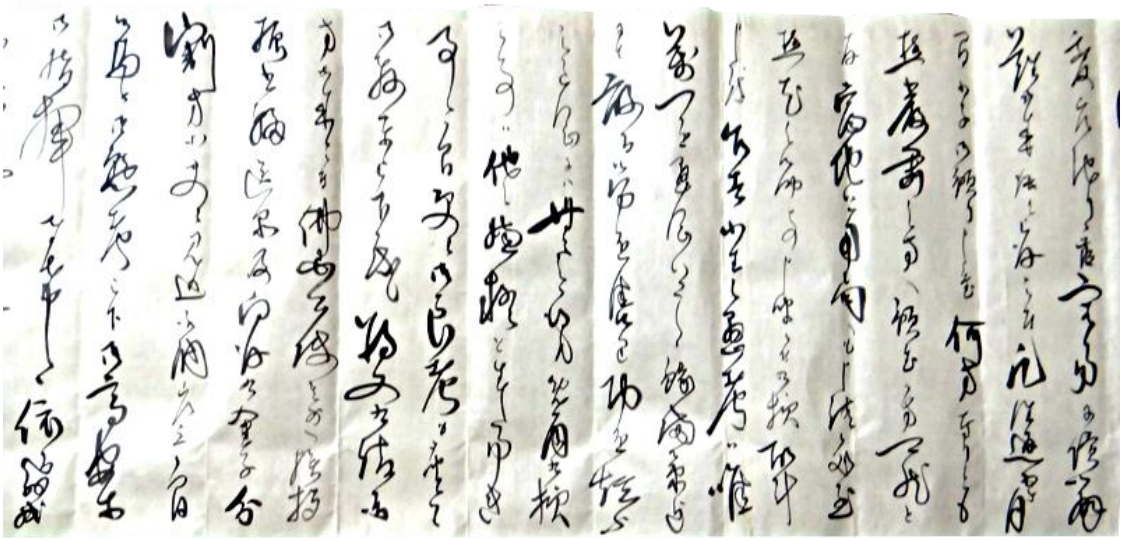
渋沢は、静岡の慶喜の下にあることを希望し、ヨーロッパでの幕府預かり金の運用で得た資金の使い道を担当者に相談するが埒が明かず、静岡藩の要路の浅野次郎八、大久保一翁に当てたのがこの手紙である。

大久保がその公正さに渋沢を高く評価する気かけになったと思われる。なおこのころ栄一は篤三郎を名乗っている。



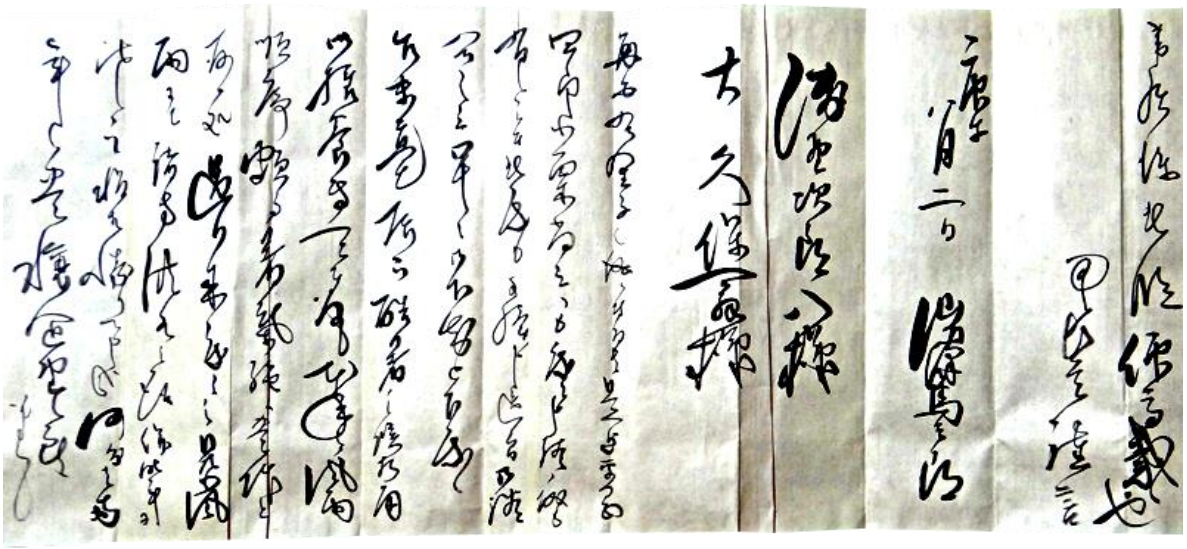


渋沢栄一（27 歳）
1867 年　パリで撮影





大久保一翁
（50-51 歳？）
1868 年頃



渋沢栄一と大久保一翁間の手紙

渋沢栄一と大久保一翁との関係を考えると、相当のやり取りが想定されるが。それを求めて、大久保一翁の直系のご子孫を訪ねた。

見せていただいた多くの資料の中に、3 通の渋沢の手紙を見出した。その一つがこの書状である。もう1通は営繕会議所の始末にかかわる、他の1通は抄紙会社にアメリカ人技師を雇い入れる際の許可をもとめたものである。

これらは、写真に収められ、東京都公文書館で閲覧可能な状態にしていただいた。

また判読困難な文字を、公文書館の西木氏に読んでいただいた。

元の手紙、西木氏により活字化したもの、これを現代文に稲松が意訳したものを掲げた、三種を比較していただきたい。

逆に大久保が渋沢にあてたものが想定されるが、渋沢は徳川家関係の大量の資料を兜町の旧邸宅に集めていたものに含まれていた可能性が高い。

しかし、これらは、関東大震災の時に灰燼に帰しており、残念なことである。

大久保家文書

大久保家の直系ご子孫のもとにいくkつかの文書が残されていた。令心形刀令流目録、辞令類、家譜、大総督府から江戸の治安維持を依頼する沙汰書、松平春嶽・横井小楠・中根雪江・大久保利通・川路利・福沢諭吉らの書簡、木戸孝允あての手紙の写し、勝海舟の軸、薩英戦闘図、ハリスの登城図、個人的なメモなど・・・これらの写真は東京都公文書館で閲覧可能な状態になった。

大久保一翁の関係文書

大久保一翁関係の文書には、亡くなったときに勝海舟が集め私家版の歌集として発行した「櫻園集」、国立図書館に収められているもの、海舟全集に収められているもの、松平春嶽関係の文書、松坂の射和文庫所蔵のものなどが現存している。他にもある筈であるが未見である。

江戸時代のものは、江戸開城時、関係者に塁が及ぶことを危惧して、一翁自身が多数焼却したと伝えられている。

西木氏（東京都公文書館）による解読

一翰俸呈仕候、爾来以外御疎音申上候、愈
御清穆御奉職御坐被成奉遙賀候、蘆笙
無異勤仕罷在候、乍憚御省念可被下候、偖一
昨年来度々申上置候元民部公子仏国
滞在中旅館諸道具売払代
其外ニもフロリヘラルトより受取戻之儀
当五月中同人より同国商人シベリオン
横浜本店へ為替を以金子渡方
申来候ニ付、シヘリオンへ再々引合およひ候処
別紙手続書之通成行を以漸
受取方相済候、此度右為替方ニ付
仏国公使より申談も有之、直様右
金子分配いたし御遣方相成候ては万々一
之節差支も可相生哉之趣ニ候、其
所以は右為替金仕掛之筋ニ付、若
即今仏国も戦争等ニ付フロリヘラルト
退転御帰之変異等有之、右為替債却可相成節ハ一旦
為替会社へハ小生より返却致候筋に
可相成との事ニ候、就ては水戸藩へ
御分割ニも相成候ハヽ尚以右等之異
変差起り候節容易に償解
難相成儀ニ被存候ニ付、凡往返五ヶ月
間小子御預り申置、何方なりとも
極厳粛之方へ預置候方可然と
存、當地御用局へも申談候処至
極尤之筋との申聞ニ付、右様取計
申度、乍去小生之愚考ハ唯
万一を懸念いたし候予備策迄
にて、敢て労を焦り功を競ふ
之意念ニハ無之候得共、兎角右様
之事ハ他之嫌疑を生し易き
事ニ候間、更ニ御良考も御坐候ハヽ
御教示被下度候、将又右請取
方相成候ニ付仏国公使其外へ挨拶、
振出輸送品及向後右金子分
割方ハ夫々見込取調差上候間
篤と御懇考被下御高案
御指揮奉希候、依て別紙

書類添此段仰高裁候也、
匆々頓首謹言

庚午八月二日　渋澤篤三郎

浅野次郎八様
大久保一翁様

再白、右金子之儀ニ付ては是迄平岡
四郎小栗尚三へも度々申談ノ儀も
有之候ニ付、此度も手続申送候間御談
合之上早々御下知被下度候、
乍末毫辰下酷暑之候折角
御摂養専一ニ奉存候、本年之風雨
順序頗る暑気強く豊作と
存候処、過日来度々之暴風
雨にて諸方洪水之趣、併昨年に
比し候ハヽ稍相悖り可申哉、何分は当
年之豊穣企望之至ニ御坐候、

（超現代語訳　稲松）

ご無沙汰いたしておりますが、不躾ながら、お手紙を差し上げます。ますますお元気に、ご公務に励んでいるようにお見受けし、喜ばしい限りです。

小生は相も変らぬ様子ですが、はばかりながら、お考えいただきたいことがあります。

一昨年から度々申上げてきました、元民部公子がフランスに滞在中の宿舎の道具の売却代金、その外に、フロリヘラルドから受け取った戻し金（配当金）は、五月中にフランス商人シヘリオンの横浜本店に為替で振り込まれております。

シヘリオンにたびたび問い合わせ、別紙の手続き書のように暫定的に受け取りました。

この度フランス公使も言ってきていますように、お金の分配に万一差し支えがあるかもしれません。その訳は、若し今フランスが戦争をすることになると、フロリヘラルトは帰国してしまい、この為替の仕組みからいって、この為替の扱いが一旦為替会社に返してしまう事になります。

ついては、このような異変が起こってしまい、簡単には現金化しにくくなり、水戸藩に分割することが難しくなるように思います。

そのため約五ヶ月間私が現金化して預かり、その後に、何れかの最善の割合で配分したほうがよいのではないでしょうか。

当地静岡の担当局に申し入れましたところ、それも尤もだということで、このように取り扱いたいと思います。

しかし、私の愚考するところに寄れば、万が一のことを心配して、予備の方法としてこのようにいたしました。あえて、面倒を避けてさっさとけりをつけたいわけでは在りません。

兎角このようなことは、あれこれ他人からの嫌疑を受けやすいので、もっとよい考えがあれば、お教えください。

また、受け取ってしまっておりますので、フランス公使などへの挨拶、送られてきた輸送品や、右の金子の分割方法の見込みを提案いたします。

そのための書類を添付いたしますので、ご判断ください。恐れながら申し上げる次第です。

庚午（明治三年）八月二日　渋沢篤三郎（栄一）

浅野次郎八様（家老）

大久保一翁様（中老）

追伸

このお金のことについては、これまで、平岡四郎、小栗尚三にも度々申しいれてきましたので、相談のうえ、早々にご指示願います。

最後ながら、聊か酷暑の季節ですのでお体大切にしてください。今年のお天気具合は大変暑く、豊作のようです。しかし、先日来暴風雨で、あちこち洪水もあり、昨年に比べますと心配なところもあり、今年の豊饒を願っております。

当時の幕府の外国派遣団や留学生は、資金の使用が、いい加減であったが、渋沢の態度は公正無私かつ正確で、彼への信頼が一気に高まった。

当時静岡藩は、明治政府から割り当てられた50万両の太政官札の貸付金の運用法を模索していた。これに対する渋沢の商法会所立ち上げ建言が採用され、先のパリから持ち帰ったお金、豪商からの資金を合わせて（合本）して、静岡商法会所を立ち上げた、日本的な会社組織のはじめとされている。因みに、商法会所の元手となる資金の90％以上はこの太政官札である。



静岡市の宝台院にある徳川慶喜謹慎の地の碑
詳細は櫻園通信 28 号参照

櫻園通信第30号



櫻園通信 30
平成 28 年 1 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

昭和 47（1972）年頃の養育院附属病院

現在の東京都健康長寿医療センターの沿革は、明治 5 年に設立された『養育院』に遡ります。その時代ごとの社会的要請に応じて福祉・医療の役割を担ってきました。

今から40数年前の1970年頃、将来の高齢者時代を見据えた東京都の方針転換で、養育院の運営形態が大きく変わりました。

それまで養育院の施設利用者を主な対象とした養育院付属病院は、一般都民に開かれた大病院に転換し、老人総合研究所を併設、従来からの老人施設も拡充する方向になったのです。このための新病院と研究所がオープンしたのは、昭和 47（1972）年の夏前のことです。

その任に当たったのが、当時国立金沢大学の第二内科教授から養育院付属病院長に就任した村上元孝先生と、東大病理学教授から、老人総合研究所長に就任した大田邦夫先生です。

当時は大学紛争の余波で、各地の大学医学部は大きな混乱の中にありました。両先生の関係のある東大、京大、金沢大、長崎大、鹿児島大、東京医科歯科大、東北大などの医局からの派遣や、新天地を求める医療者が新施設に集まりました。当時金沢大学から参加した山之内博先生は、長く当院で神経内科の診療に当たり、10 年ほど前に当院の副院長から、大森日赤病院院長に栄転されましたが、山之内先生に当時の様子を書いていただきましたので、櫻園通信に掲載いたします。なお、「櫻園通信」表題の写真の手前の三つの建物は、現在解体工事中の、旧病院、旧研究所、旧ナーシングホーム、奥が今のセンターです。　〔稲松孝思〕



村上元孝先生



亀山正邦先生



新しい革袋には新しい酒を　－ 集まる人材 －

東京都老人医療センター（現　東京都健康長寿医療センター）元副院長　山之内博

この病院を辞めて 10 年の今年（2015 年）の秋、私は骨折し、新装なった病院の世話になりました。見舞いに来た当時の同僚、稲松医師（現、顧問）から昔の病院のことを何か書け、当時のことを知っている人が少なくなったから、と注文されました。

私は 1972 年、新病院となった「東京都養育院付属病院」で働きはじめ、以後 33 年間この病院に勤務しました。当時の新しい病院の頃を思い出しながら医師のことを中心に書いて見ます。

ずっと前から、キャンパス内の特別養護老人ホーム、あるいは老人ホームの入居者を対象とした小規模の養育院付属病院はあり、内科系は東大第二内科の医師、外科は同第一外科の医師が主となって診療に携わってきました。

1960 年代の後半、当時の美濃部都知事は、東京都



昭和 47 年までの旧々養育院附属病院

民全体に開かれた老年者のための本格的な病院を造りたいとの構想をもち、今のこのキャンパス内に約 700 床の当時としては画期的な老人専門病院を建設することが決まりました。
器だけでは動きません。組織は人です。病院の場合、もちろん医師だけでやれるわけではありませんが、ポイントはどれだけ優秀な医師が集まるかにかかっています。まずはトップの人事。院長として適切な人はいないか・・・

尼子富士郎先生

杉並区に浴風会病院という関東大震災後に作られた老人専門病院が以前からあります。
当時、そこの病院長は尼子富士郎先生（尼子城主の末裔）で、この人は日本の老年医学の基礎を築いたとさえ言われた人です。

美濃部知事は小さい時からの学友だった尼子先生に相談したところ「村上元孝しかいない」と当時、金沢大学の教授だった村上先生を強く推薦されたと聞いています。もちろん、他にも相談したでしょうが、病院長は村上先生に決まりました。

余談ですが、当時、浴風会は「浴風会調査研究紀要」という雑誌を定期的に刊行しており、いま見ても立派な医学論文が多数あり、しかも報告者の多くが後に大学の教授になっています。この雑誌の横文字名は たしか Acta Gerontologica Japonica でした。

村上先生は浴風会病院でおもに脳卒中を診療、研究していた亀山正邦先生を副院長として指名しました。おそらく次の後継者候補にと意識されていたと思われます。

人材の結集

あの村上元孝先生が来るのかと新しい病院へ医長クラスの優秀な医師が集まりました。村上先生からの誘いもあったと思います。当時、大学紛争が続き、大学での生活に嫌気を感じ、新天地を求めた方もおられたでしょう。

内科系の各科の責任者（医長、部長）を見ますと、循環器科は東大第二内科から、消化器科は東北大、呼吸器科は東大第三内科、内分泌科は同第三内科、感染症科同第一内科、神経内科は同神経内科、血液科は群馬大学、精神科は東京医科歯科大学、放射線科は東大と横浜市大、研究検査部門は東大第三内科、など。そしてリハビリテーション科には久留米大学出身で長くアメリカで活躍された人が赴任しました。

外科系では、外科（消化器外科）は東大第一外科、整形外科は東大、脳神経外科は東京医科歯科大学、眼科東大、皮膚科東大、泌尿器科東大、耳鼻咽喉科日本大学、麻酔科日本医大、歯科口腔外科は東京歯科大から、と記憶しています。

医長クラスは東大が多いですが、若手の医師は全国から集まりました。新病院数年間の若手医師の出身を見ますと、北から、北大、岩手医大、東北大、福島医大、新潟大、群馬大、金沢大、筑波大、東大、東京医科歯科大、日大、慈恵医大、順天堂大、日本医大、岐阜大、京大、徳島大、広島大、九州大、長崎大、熊本大、鹿児島大、等です。自分から求めて来た人と、良い病院だからそこで研修させたいと大学から派遣された人、そして医長にくっついて来た人もいます。自分からやってきた人が割に多かったと記憶しています。私は当時、村上先生の教室に在籍していましたが、村上先生を慕い、そして亀山先生の下で脳卒中を勉強したくて上京しました。

これだけの人が集まったという事実は村上先生のもつ魅力が小さくなかったことを意味していると思います。もちろん、日本で初めての本格的な老人専門病院であることも少なからぬ要因だったでしょう。でも、まだ実績がないのですから新しい構想、新しい建物だけでは人は集まりません。誰が選ぶのか、誰を選ぶのか、人事では大切なことです。ことに病院の場合―他の組織でも同じでしょうが、トップがどういう人かは重要な要素です。

新病院がスタート

1972 年、新病院のスタートと同時に併設の老人総合研究所も太田邦夫先生（前東大病理学教授）を所長に迎え、スタートしました。研究所には病院と同じように全国から優秀な研究者が集まりました。ここでは研究所については省略します。

新病院の開始に向けてだいぶ前から入院予約を受け付けておりましたが、その数が膨大になり、とても全部をひきうけることはできず、その対応に病院の管理側は苦慮したようです。こうした患者さんだけでなく旧病院の入院患者も移り、あっという間に満床になりました（看護師不足で最初は 700 床より少ない数でスタートしました）。

入院患者の多くは寝たきり状態等の今では療養型病院の適応となる状態の患者さんが多く、急性期疾患に重点を置きたいとの病院側の思惑とは違ったようです。当時、慢性期になっても受け皿になる病院や施設は整備されておらず（今でも不十分ですが）、結果として在院期間が長くなり、3 か月を越える人はざらでした。都立の老人専門病院ができたのだからできるだけ長く入院させてほしい、というのが患者側の希望でもありました。だが、そうなると今度は新たになかなか入院できない事になります。これが大きな問題でした。病状が落ち着いたら退院をうながす以外に良い解決方法はありませんでした。



昭和 50 年ころの
養育院板橋キャンパス航空写真

黒数字
① 東京都養育院付属病院
② 同 核医学棟
③ 同 外来棟
④ 老人総合研究所
⑤ 養育院講堂
⑥ 光風寮
⑦ 和風寮
→板橋ナーシングホーム
⑧ 明々寮
⑨ 恵風寮
⑩ 希望棟：板橋老人ホーム
⑪ 旧養育院付属病院
⑫ 板橋高等看護学校
⑬ 養育院看護婦・寮母宿舎
⑭ 医師公舎
⑮ 渋沢栄一銅像

赤数字
① 板橋大山公園
ゲートボール場
② 板橋大山公園
③ 板橋区産業文化会館
④ 板橋第一中学校
⑤ 板橋区文化会館
（地図の外）
⑥ 板橋警察養育院前交
⑦ 御茶ノ水女子大学寮
⑧ 豊島高等看護学校
⑨ 都立豊島病院

赤字の⑦⑧⑨ 以外は、昭和 30 年頃まで養育院の敷地！

もう一つの問題は内科系の病棟を臓器別にするかどうかという点でした。前からおられた医師は「老人は複数の病気を持っていることが多い。だから臓器別にわりきって分けることは難しい。患者を急性期と慢性期と病気の時期別に分けた病棟として、診療科の専門医は病棟にコンサルトに行き指導すればよい」との考えで既に病棟の配分等を決めておりました。そこへ新たに来た医長たちが臓器別病棟を強く主張したわけです。

当時は、内科は内科全般を診るとの考え方が主で、循環器、消化器、呼吸器等の臓器別診療科の考えかたはまだ始まったばかりの頃でした。後者はおもな疾患別に病棟を分けた方が診療上合理的だと主張したわけです。

両者ともっともな意見であり、しばらく決まりませんでしたが、結局、臓器別の病棟になりました。やはり、この方が診療する側も、受ける側も自然だったからと思います。この臓器別病棟は全国的にも早いほうだったと記憶しています。外来診療も最初は内科全般外来でしたが、やがて専門外来が独立して併設されました。

当時は高齢だからとの理由で、一般には、診断のための検査を控えたり、また積極的な治療を控えることが少なくありませんでした。高齢者に対して積極的にきちんと診療する、というのが新病院の使命です。

新病院では、たとえば外科では高齢者の悪性腫瘍を積極的に手術しようとの姿勢でしたし、内科系でも同じように積極的対応を心がけていました。リハビリテーションを重視したのはこうした姿勢の表れのひとつです。

今では当たり前のことを 40 年以上前から始めたわけです。



1972 年にオープンした養育院付属病院（中央）と老人総合研究所（右手前）
左手前は和風寮、後に板橋ナーシングホームとして運用。開院当初リハビリテーションが重視され、3 階東西の 2 病棟が当てられた。
他の病棟配置に多くの論議があった。

勉強できる病院

村上病院長は新病院の発足に際し、「皆が勉強する病院、勉強できる病院」であること、そして「病理解剖を重視する」ことを主な目標として掲げました。

前者についてはそのためにも研究所を併設し、互いに交流できるようにしました。

そして病院と研究所合同で内容の充実した図書館を創設しました。当時、病院がこれだけ立派な図書館を持つということは画期的なことでした。これは大きな財産でした。

病理解剖は旧病院時代から重視され継続されていました。これを引き継いだわけです。

当時、不幸にして病気で亡くなられた方を病理学的に調べること、いわゆる病理解剖は全国的にあまり重視されておらず、剖検率は全国的に低かったと記憶しています。

病理学的に調べて、はたして生前の診断は正しかったか（CT や MRI 等の検査機器はなかった時代です）、治療はこれでよかったのか、さらには主病変以外の副病変を見落としていなかったか、など、臨床医にとっては裁判の場に立つようなものです。さらには、生前の診療がきちんとしていて、納得されるものでなければ、病理解剖させてほしいと頼んでも遺族側は了承しないでしょう。こうしたプレッシャーによって医師個人の診療レベルは向上するでしょうし、病院全体としてもレベルが高くなるはずです。もちろん、単なる診断名にとどまらず、病気そのものが細胞組織学的にどんな特徴があるのか、その本態を探求するのも大きな目的です。

病院全体としては月に 2 回、各 2 症例ずつ、臨床病理検討会が開催されました。今も続いていると思います。最初の頃は剖検率が 80%以上と高かったのですが、その後、徐々に低下してゆきました。この低下にはいろんな理由があるのでしょうが、残念です。

病院の医師で希望する者は研究所の兼務研究員の資格が与えられました。私達はそれぞれが希望する方面で、研究所の生化学部門、生理部門、病理部門などで調査・研究する基盤が与えられたわけです。これは病院側にとって大変ありがたい制度で、病院医師の調査・研究の多くはこの制度を利用してなされました。

当時は老年者の病気に関しての調査・研究が進んでおらず、未知のことが多くありました。新病院で毎日、診療をきちんと行い、そうした症例を積み重ねるだけでそのまま研究発表や論文の内容になりえましたし、また、病理解剖所見と生前の臨床所見を対比検討しただけであらたな問題点が見つかったことも少なくありません。

数年後、副院長の亀山先生が京都大学の教授として招かれました。京都大学が東京大学出身者を教授として迎えるということは例外的な出来事で、京大教授の一人が「あの人しかいない」と強力に推薦した結果だと聞いております。

その後、京都大学の老年科、神経内科が急速に発展したことは広く知られています。

ただ、村上院長は「あの人がいなくなって一番困るのは僕だよ。でも偉くなって行く人を止めることはできないからね」と嘆いておられました。

スタートから 10 年ほどは年々発展していったように思われます。医師のみならず各分野で学会発表や論文が数多く報告され、日本の老年医学・医療の進歩に少なからぬ貢献をしたと自負しています。

その後も病院から数多くの医学部教授が誕生しました。一つの病院からこれだけの数の教授が出たのは例がないのではないかと当時言われたほどです。

もちろん、教授が多数誕生したからといってその病院が良い病院だとは断定できません。でも、教授に選ばれるということは臨床面での実力が評価され、そして研究面での実績が評価された結果でもあります。個人の資質も重要な要因ですが、「きちんとした診療をしよう、勉強しよう」との病院の姿勢も大きな要因だったと思っています。各診療科で差はあるでしょうが、全体としてかなりレベルの高い老人専門病院だったと私は思っています。

いつまでも発展し続けるだろうと思っておりましたが、いつのまにか停滞期に入っておりました。停滞期以後のことはまた別に述べる機会があるでしょう。今回は昭和 47 年の新病院の発足から、その後の発展期について書きました。



『養育院』創立 100 年記念式典 1972.10.25
. 左から大田邦夫研究所長、村上元孝病院長、
吉田千秋養育院長、美濃部亮吉都知事



現在の東京都健康長寿医療センター
研究所を併設し、診療部門は急性期病院に特化して
運用されています。

櫻園通信 31.
平成 28 年 1 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

絵で見る 終戦直後の養育院

宮本孝一（老年学情報センター）



東京都健康長寿医療センターの職員用図書館“老年学情報センター”に 110cm × 70cm の大きな油絵が保管されています。

額の中には「昭和 25 年当時　養育院板橋構内」という画題が貼られています。 絵には「T.Ohbuchi　1950」のサインが書かれています。

この絵は、旧施設の倉庫に保存されていたもので、新医療センター移転時に老年学情報センターに運びました。作者がどういう人物で、いつどういう経緯で所有することになったのかは不明です。

この絵では、養育院の南側には家が無く、広い緑地になっています。しかし実際は終戦直後から民家が建ち始めていました。

養育院の再建

■1945（昭和 20）年
終戦。養育院の残存施設と隣接する軍事施設の寮を使用して病院機能の確保が図られる。

■1946（昭和 21）年
施設設備復旧のため、炊事場を新設。
浮浪者・浮浪児の収容者激増。
板橋区に養育院立退き運動が起こる。区は養育院敷地への文化センター・中学校建設に関する嘆願書・請願書を都議会に提出。

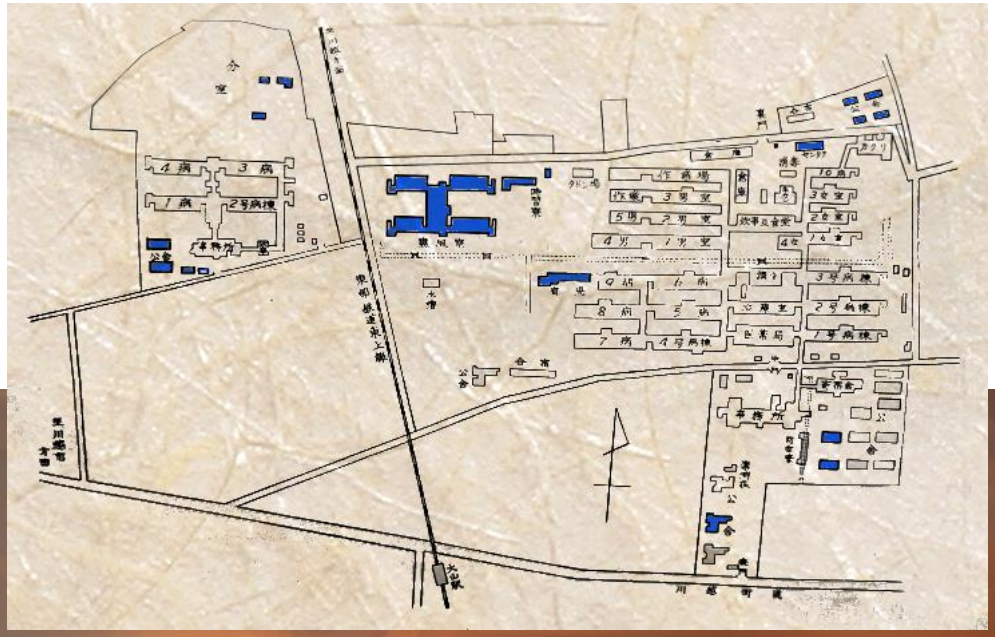
■1947（昭和 22）年
印刷工場と本院事務所を新設。民生局・養育院と区で交渉開始。養育院本院敷地の公園化が協定書に盛り込まれる。しかし養育院移転候補地の選定は難航。

■1948（昭和 23）年
養老施設「明々寮」、浴場、ポンプ室、作業場兼講堂を新設。

■1949（昭和 24 年）
GHQ 軍政部キャロー女史が養育院の現地再建を指示。

■1950（昭和 25）年
成人保護寮、養看護施設開設。

■1951（昭和 26）年
養育院付属看護学院設置。改正東京都養育院条例の公布。



青い建物が終戦直後の残存施設です。
空襲で、養育院の建物のほとんどが失われました。

年学情報センターで保管している油絵を、コンピュータで画像処理し、夕暮れ時の養育院の光景を再現してみました。

重要文化財
宇和島城

櫻園通信 第32号

櫻園通信 32. 平成 28 年 3 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー

穂積橋 ほづみばし

越前藩の松平春嶽、宇和島藩の伊達宗城、土佐藩の山内容堂、薩摩藩の島津斉彬は、幕末の政局において公武合体を目指し、幕末の四賢侯といわれた。

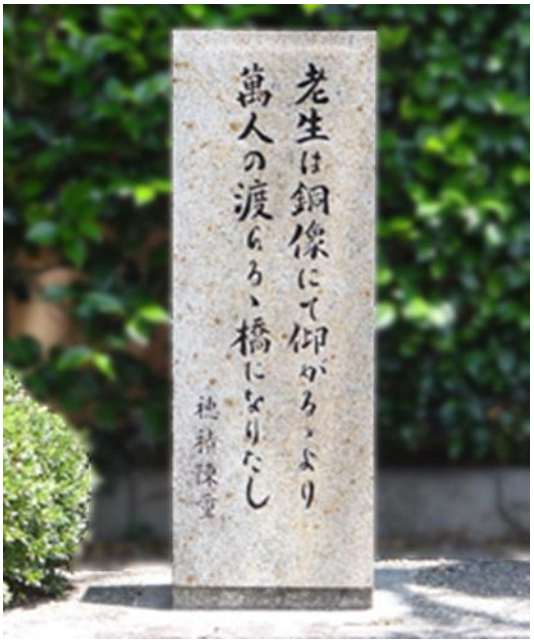
その一人の伊達宗城の城下町が四国の宇和島にある。今日は古いお城が主な観光資源となっているひっそりとした小さな町であるが、宗城治世の幕末には、高野長英、大村益次郎、二宮敬作(F.シーボルトの弟子)、お稲さんなども住み、当時先進的な文化の栄えた町である。



穂積橋　宇和島市の中心部の辰野川にかかる

町の中心を流れる辰野川に、「穂積橋」という観光名所がある。小さな橋であり、橋のたもとに大きな郷土料理の店「ほづみ亭」がある。橋のたもとに四国ガス寄贈の古めかしいガス灯がある。

橋のたもとの小公園に、郷土出身の偉大な法律家、穂積陳重(ほづみ　のぶしげ)のことばが、解りやすい言葉でかかれた新しい石碑がある。



> 老生は銅像にて仰がるるより
> 萬人の渡らるる橋になりたし

と書いてある。

さて、橋の名前の由来となった穂積陳重のことであるが、宇和島出身の人で、旧宇和島藩の貢進生として、 16 歳の時上京、南校(東大)を卒業し、日本で最初の帝国大学法学博士になっている。

日本における民法の生みの親と言われているが、縁あって、渋沢栄一の長女歌子と結婚している。しっかり者の長女歌子とその婿の穂積は渋沢家・家法の制定など、一族に強い影響を与えている。

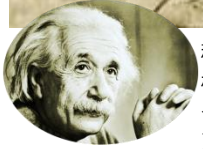
渋沢栄一が静岡藩から明治政府に移る明治 3 年、伊達宗城が松平春嶽の後の民部・大蔵卿を務めている。明治政府設立当初の議定(重要閣僚)であった松平春嶽と伊達宗城は、もともと公武合体が身上であるが、新政府に徳川人の登用を試みている。伊達宗城大蔵・外務卿の秘書の郷純造の推薦で渋沢は明治政府にリクルートされることになる。

始め渋沢は固辞しているが、断れば静岡の徳川慶喜の立場が悪くなると大久保一翁に説得されて上京、さらに大隈重信に説得されて、

日本最初の法学博士
穂積陳重

渋沢栄一の長女
歌子





穂積陳重は大正十一年に小石川植物園で開催されたアインシュタイン夫妻公式歓迎会にも出席。アインシュタインは日本に向かう途中でノーベル物理学賞受賞の知らせを受けた。

明治3年に改正係長に就任している。

山本七平の書に詳しいが、改正掛というシンクタンク的な組織の長となり、旧幕臣の前島密、杉浦愛蔵らも引き込むことになる。大久保は旧幕時代から、松平春嶽や伊達宗城とは気脈を通じている関係があってのことである。次第に明治政府の要衝は薩長閥に占有されては行くとはいえ、後の明治５年に、大久保一翁や勝海舟が明治政府に任官する布石となっている。また、渋沢家の長女の婿に伊達宗城地元の俊英・穂積陳重を配した背景には、渋沢栄一と伊達宗城とのこのような関係がある。

陳重は学究一途にとどまることなく、貴族院議員、帝国学士院第1部長、文政審議会委員などの要職に就き、晩年には枢密院議長をも務めたが、1926(大正15)年4月７日、71歳で死去している。また、本業の民法関係のほかに隠居論という大部を出版しており、社会への強い関心は、は彼の法学の骨格をなすものと言えよう。

さて、穂積橋のことであるが、橋の袂の古い石碑には、命名の由来が詳しく書いてある。橋のたもとのほづみ亭側に石碑がある。もともと宇和島尋常小学校に、昭和 3 年の御大典記念に建てられたものが移築されているのだ。



橋の命名の由来を書いた古い石碑

ほづみばし　　橋名の碑

法学博士男爵穂積陳重先生は、我が郷土の生んだ偉人であり、われら市民の慈父である。曽て同郷有志の間に、先生の銅像を建設したいという相談が起こった際先生は徐にこれを志りぞけ、先生は、「銅像にて同郷萬人に仰ぎ視らるるよりは、橋となって公衆に履んで渡らるるを以て無上の光栄とす。」と仰せられて、容易にこれをご承認下さらず。偶々本年の春、本開橋が改築されたので、茲に有志は県の許可を得てその名を改め「ほづみばし」と称して先生永久の記念とした。ああ、橋名すでに命ぜられて先生今や亡し、我等は銅像を仰いで高徳を敬慕できぬけれど、この橋をわたって伏して深恩に感謝することを忘れてはならぬ。

御即位大禮記念事業の一つとして
昭和五年十月十日　これを建つ。
宇和島高等尋常小学校職員児童一同

穂積陳重夫妻は、渋沢銅像の設立に関しては、一家こぞって参加している。

穂積にとって銅像は、岳父の偉大な姿であり、多くの銅像を見せられて、俺は結構だという堅い気持ちがあったように思われる。

今日、石碑や観光パンフレットの「ほづみ橋」の記載の中では、渋沢栄一には全く言及されていない。

穂積は 71 歳と比較的長命ではあったが大正 15 年に死去している。渋沢は 91 歳とさらに長命であり、橋のできたとき渋沢栄一はまだ存命で、国民的英雄視されていた。橋の名がつけられた当時は、穂積と渋沢の関係は、宇和島の関係者の間では周知の事であったろう。しかし、渋沢への遠慮が碑の説明に反映されているのであろう。ただ、渋沢が文明国の象徴として東京に瓦斯灯建設に心血を注いだガス灯が橋の脇にあることが、辛うじてそのことをしのばせる。



東京・板橋区の巨大な渋沢栄一銅像。板橋区の登録文化財に指定

ほづみ亭で、郷土料理の昼食をとったが、湯飲み茶碗にこの名言が焼き付けてあった。店員は渋沢のことは全く知らず、ただ穂積橋の袂の料亭という意味で名付けられたという。事情を話して、同店開業記念の湯飲み茶碗をいただいた。このような次第で、展示ケースに、穂積の「隠居論」、湯飲み茶碗と、穂積橋の写真を展示している。

（稲松孝思）



ほづみ亭の湯飲み茶碗



隠居論　高齢者への社会的対応のあり方を説いた**世界的にも老年学の先駆け**といえる書



櫻園通信 33. 平成 28 年 4 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

草木塔 1



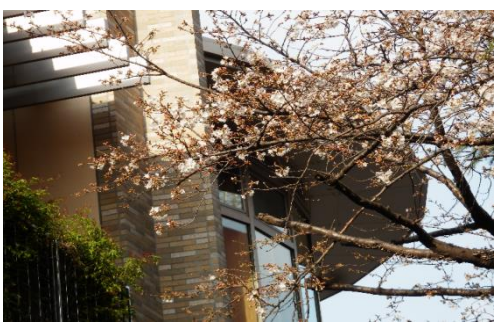
以前、東北を旅していて、ある家の庭先に『草木塔』と書いた石碑を見つけた。いろいろ鉢植えを買ってきては、花期が済むと枯らしてしまうことを繰り返していて、なんとなく罪悪感があったのですが、この家の主もそうなのかなと、いたく感銘した。枯らした草木の成仏を願う姿を想像したのです。

その後いろいろ調べて見ると、草木塔（そうもくとう）とは、「草木塔」、「草木供養塔」、「草木供養経」、「山川草木悉皆成仏」などという碑文が刻まれている塔の総称で、国内に 160 基以上の存在が確認されているそうです。建立されている地域の約 9 割は山形県内の、特に置賜地方と呼ばれる地域に集中するようで、独特な石造物文化遺産ということがわかりました。最も古い「草木塔」は、江戸時代中期の安永九年（1780）に山形県米沢市に建立されたものだそうです。現在のところ、江戸時代に建立された草木塔は 34 基が確認されており、その気持ちで新たに建てられるものもあちこちにあるようです。当院にもあってもいいように思いますが、さしあたっては敷地内の草木案内を『草木塔』と称して、櫻園通信集のひとつのシリーズとしてみたい。

① サクラ（桜）







以前から板橋の養育院はちょっとした桜の名所で、春一番に咲く彼岸桜、通路を貫く道の左右に並木をなす染井吉野の老木、大きく聳える菊咲きの桜、花が黄緑色の鬱金桜、老研のまわりの八重桜、大島桜の古木など、花めぐりはこの季節の大きな楽しみでした。10 年ほど前に、板橋の旧養育院敷地の桜の木の数を調べたことがあります。桜木を数えながら線路向こうの敷地まで歩き回っりましたが、100 本を超えていました。中学校や大山公園などの旧養育院敷地を含めると、更に多くなるでしょう。新施設の建設などで、その多くは伐採され、近隣住民のお小言も頂いた。せめてもの罪滅ぼしにと、桜材の一部が新施設に使われている。病院設計者のせめてもの気持ちが養育院記念コーナーや外来の内装に使われています。またこの冊子を『櫻園通信』と名づけたのにも、伐採された桜木たちへの、「山川草木悉皆成仏」という思いがあってのことです。そんなこともあって、「養育院渋沢記念コーナー」の窓から、咲き誇る染井吉野が見られるのはうれしいことです。

新施設の建設後、多くの桜をめでた職員は去り、そして若い職員が加わりました。植栽にも、病院玄関の山桜、屋上庭園の小ぶりの豆桜（フジ桜）の新顔が加わりました。渋沢銅像の周りには、染井吉野の老樹が咲き誇っています。通りすがりの 3 歳児が、その足元にいたので、お母さんの許可を得てパチリ…時代は流れてゆきます・・・

②ツルニチニソウ（蔓日日草）







センターの玄関を入ったところの円形花壇の中央はケヤキ（欅）の木で、その根元などに植えられているのが、キョウチクトウ科のツルニチニチソウです。もともとヨーロッパの地中海沿岸が原産地ですが、日本には明治時代に観賞用グランドカバーとして導入されました。早春から夏にかけて青色の花を咲かせ、長く楽しませてくれるます。繁殖力が強く、今や花壇から逸出して、人家の近くのあちこちに野生化しています。同様のことは南北アメリカやオーストラリアにも起こっているそうです。野生化しているものは葉に斑が無く、白い斑の入るものは園芸種が多いようです。

屋上庭園にはこれよりも花が小ぶりのヒメツルニチニチソウが植えられています。花の色も濃い青紫で、かなり雰囲気は異なります。

昔から親しまれてきたニチニチソウ（日日草）は、同じキョウチクトウ科ですが、西インド諸島の原産です。花は短命で 3～5 日しか保ちませんが、盛りの時期には毎日絶え間なく白、紅、赤、ピンクなどの新しい花を咲かせるところから、日々草の名前があります。江戸時代中期に観賞用に導入されたようで、主に夏から秋に花壇や鉢植えで楽しむ昔からの草花です。日本では霜の降りる頃に寒さで枯れることが多いので、一年草として扱い、野生化することは無いようです。種々のアルカロイドを含み、ビンクリスチン、ビンブラスチンなどの抗がん剤の原料となっています。初夏、センターの前の家の前に例も年鉢植えで育てられ、花を咲かせています。

③ジンチョウゲ（沈丁花）



ジンチョウゲ（沈丁花）は常緑低木で、チンチョウゲとも言われ、漢名：瑞香、別名：輪丁花という名前もあります。 原産地は中国南部で、日本では室町時代頃にはすでに栽培されていたようです。2 月末から 3 月に花を咲かせ、強い芳香を放つポピューラな庭木で、センターの庭園にも多数植えられています。つぼみは濃紅色で、開いた花は淡紅色でおしべは黄色、枝の先に 20 ほどの小さな花が手毬状に固まってつき、花を囲むように葉が放射状につきます。白花のものもあります。葉の形は月桂樹の葉に似ていますが、より軟弱です。日本にある木は、ほとんどが雄株で雌株はほとんどなく、挿し木で増やします。類縁の灌木にミツマタ（三俣）があり、センター近くの民家の庭に咲いています。



櫻園通信 34. 平成 28 年 4 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

草木搭 2



『草木塔』は、山川草木悉皆成仏を願う塔の総称ですが、『櫻園通信』のひとつのシリーズとして、敷地内の草木案内を書こうと思った経過については前号に記しました。

新病院設計の段階で、植栽に関してクライアントの意見を設計者が聴取する機会が持たれました。そのときは、終末期医療に関わる場合もあるから、椿のような首がポロリと落ちる椿はやめようかとか、匂いの強いものは避けようとか言う意見はありましたが、みんな植物のことはよく解らず、専門の植木屋さんにお任せという様子だったように思います。

しかし、出来てから幾つかのことに気づきました。屋上庭園にオレンジ色の花が咲くボケが植えてあり、植物名を書いた札に「ボケ」と書いてありました。認知症患者の診療にかかわることが多く、ボケの花盛りも困りますねという話をしていたら、後日、「ボケ」の名札が「木瓜」に書き換えられていました。認知症でなくても読めない人が続出しそうです。


ボケ(木瓜)

完成した庭の、名札をつけた植物を見て驚いた。カタカナ名の植物が多く、人の名前も覚えつらくなる老年期に、全くアウトである。「ラミウム」、「アベリア」、「アガパンサス」、「ガウラ」、「アスチルベ」「リグラリア」、おまけに和名で呼ばれているものもカタカナで書いてあり、少しは詳しいつもりの私にも、何がなんだかよく解らない。認知症などの心理療法として行われる「回想法」では、タンポポやスミレ、レンゲを見て、幼い日々を思い起こし・・・そんな配慮は設計者や植木屋さんにはないようです。この号では、春に咲く英語そのままのカタカナ名の植物を集めてみます。

④ ラミウム（蔓踊子草）

センター正面から入ってすぐの所に、地を這う銀白色の斑入りの葉があります。春には踊子草のような形の黄色い花を咲かせますが、「ルミナリア」と書いてあります。

もともとヨーロッパからアジアに分布しているシソ科オドリコソウ属の常緑多年草で、林内の半日陰に生え、高さ１０～２０センチになります。匍匐枝を多く出して広がります。葉は緑ですが、銀白色やクリーム色の斑入り品種がたくさんあり、葉を楽しむ目的でグランドカバーにも用いられます。春から夏にかけて、ピンクや黄、白色などの花を咲かせます。当院に植えられているのは、黄色の花を咲かせるラミウム・ガリオドブロンという種類です。我が国に自生するオドリコソウ（踊子草）の仲間であり、「蔓踊子草」という和名があります。

現在日本固有の踊子草はたいへん少なくなり、まれにしか見られません。替わりにもともとヨーロッパ原産ですが、明治の中頃日本に帰化したヒメオドリコソウが大いに繁茂しています。町や近郊でどこにでも見られます。野原に普通に見られるホトケノザ（仏の座）とも近縁ですが葉の形が異なります。なお、七草粥にするホトケノザは、コオニタビラコ（小鬼田平子）という黄色い花の咲く別の植物です。






オドリコソウ


ヒメオドリコソウ


ホトケノザ

⑤アベリア（花園衝羽根空木)




ハナゾノツクバネウツギ

入り口のグランドカバーに、斑なしと斑入りの小さい葉が多数みられます（タイトル背景)、春になると白かピンクの小さなロート状の花をつけます。これがアベリアで、和名は「花園衝羽空木」といいます。

本来、アベリアとはツクバネウツギ属のラテン名です。山で見る野生のツクバネウツギは、高さ-1-2 メートルの灌木で、2 センチくらいの釣り鐘型の薄クリーム色の花がペアで咲きます。

一方、街のあちこちに植えられている園芸品種のアベリアは、中国原産の Abelia chinensis（タイワンツクバネウツギの母種）と Abelia uniflora の交雑といわれています。垣根、街路などに大量に用いられ、いまや町のどこででも見られます。春～秋のかなり長期に渡って、鐘形の 1 センチ未満の小さい花を多数咲かせます。花の香りは強いようです。関東以西では真夏の酷暑の時期に花をつける在来植物が少ないため、花には多様なハチやチョウが蜜を吸いに集まります。


ツクバネウツギ

⑥アガパンサス（ムラサキクンシラン　紫君子蘭）





梅雨時期を中心として、光沢のある細長い葉の中心から長く延びる花茎の先端に数十輪の花を放射状に咲かせます。

君子蘭に姿が似て紫色の花を咲かせるという意味の和名でしょうが、縁もゆかりもない別属の植物で、あまり似ているとも思えません。アフリカ原産の植物ですが、今日 300 種以上の園芸品種があり、開花時期や草丈などのバラティーに富んでいます。梅雨の季節の風物詩になりつつあり、紫陽花人気に迫っているかのようです。


君子蘭



櫻園通信 35. 平成 28 年 4 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

草木搭 3

⑦ヒメイワダレソウ



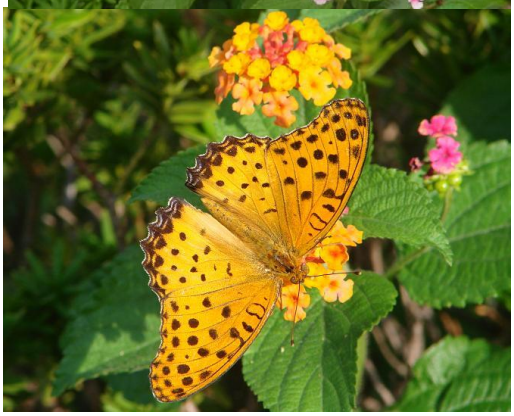


遠くから見ると、緑のカーペットのようで、初夏の頃白っぽい花が点在し、花の季節にはクローバのように見えます。庭の隙間に沢山植えられており、グランドカバーの基本になっているのがヒメイワダレソウ（姫岩垂草）です。低い背丈で広がるので、芝生のように使用されています。

南アメリカのペルー原産のクマツヅラ科イワダレソウ属の常緑多年草で、園芸的にはリピアとも呼ばれています。日本には昭和初年に渡来しました。成長が早く、茎は地面を這って広がります。７月から９月ごろ、淡いピンク色にオレンジ色の斑紋がある白やピンク、中間色の 3～4mm ほどの小花が集合し、直径 1～1.5cm 程度の球状の小さな花をつぎつぎに咲かせます。耐寒性や耐暑性があり、地面に這い蹲るように茎を出すので、丈夫で育てやすい植物で、グランドカバーに適しています。水田の畔や法面（のりめん）の雑草を抑制するためにも利用されます。おまけに小さな可愛い花も咲かせてくれることで緑化事業にもよく利用されます。不稔（ふねん）性植物で種子によって増殖することはないので株分けで増やすのですが抜いてその辺にポイしたのも勝手に根付くくらいの繁殖力です、「高速絨毯」と言われる所以です。**手間いらず。みるみる増えて、花も咲き、雑草も負かす、姫岩垂草**と詠まれるように人気急上昇中のグランドカバーです。以前は見かけなかったのですが、新しく造園されるところでは盛んに植えられているようです。しかし、庭園の他の植物を駆逐して広がるので、注意を喚起する人もいます。

同じクマツヅラ科のランタナ（和名「七変化」）、美しい花を咲かせ丈夫なため、多数植えられ、また一部は野生化して、いまや、中部以南のどこにでも見られる植物になっています。旧病院の玄関にあり、よく蝶が訪れていた花です。しかし、ランタナ属は中南米や南欧原産の約 150 種の低木または多年草を含む。熱帯・亜熱帯では広く野生化し、オーストラリアや東南アジアではやっかいな雑草として問題になり、世界の侵略的外来種ワースト 100 に選定されています。ヒメイワダレソウがそんな風になっていくことが危惧されます。





旧病院玄関のランタナ（七変化）と
ツマグロヒョウモン

⑧ビヨウヤナギ（美容柳・未央柳）

梅雨のころセンターの入口辺りに、直径５ｃｍほどの５弁の黄色の美しい花を咲かせているのがビヨウヤナギ（美容柳）です。

オトギリソウ科の半落葉低木ですが、中国原産で、約 300 年前に日本に渡来し、よく栽培されています。キンシバイにも似ていますが、特に雄蕊が長く多数あり、よく目立ちます。先がやや垂れ下がり葉がヤナギに似ているので、ビヨウヤナギと呼ばれますが、ヤナギの仲間ではなく、中国では金糸桃と呼ばれています。ビヨウヤナギに未央柳の字を当てる由来は、白居易の「長恨歌」に**太液の芙蓉未央の柳此にむかいて如何にしてか涙垂れざらむ**　と、玄宗皇帝が楊貴妃と過ごした地を訪れて、太液の池の花を楊貴妃の顔に、未央宮殿の柳を楊貴妃の眉に喩えて 未央柳の情景を詠んだ一節があり、美しい花と柳に似た葉を持つ木を、この故事になぞらえて未央柳と呼ぶようになったといわれています。また最近は「美容柳」などを当てることも多いようですが、語源は不明で、単に未央を美容と置き換えたもののようです。





⑨ノシラン・ノシメラン・ヤブラン・ジャノヒゲ・玉龍

庭園の木陰を中心にグランドカバーとして多数植えられている細長い 30cm ほどの暗緑色の葉が、ノシラン、縦の白い線のあるのがノシメランであり、初夏に白い小さい花が咲きます。ノシラン(熨斗蘭)は関東以西の本州、四国、九州、琉球諸島の海岸近くの林のなかに生える常緑の多年草です。葉は光沢のある深緑色、夏に白い清楚な花を開き、秋には鮮やかなコバルトブルーの実が熟し、3 月ごろまで冬枯れの中で特に目立ちます。葉の形から、ランの名前がついていますが、ユリ科の植物です　名前の由来は、茎も葉も火熨斗（ひのし：昔のアイロン）で伸ばしたように平べったいことからきています。葉に白い線のある園芸品種は、ノシメランと名付けられています。ところどころにこれより葉が少し大きく、青い花が咲くものがあり、これが藪ランです。葉の斑入りのものも、市中に普及しており、駅からセンターに来る間にも植えられています。

銅像・養育院本院碑の前の石畳の間に植えられているのがタマリュウ（玉龍）です。ノシランと葉の形が似ているジャノヒゲ（蛇の髭）は、日本各地の林床などに自生する常緑の多年草です。蛇には髭がないはずだからと竜の髭になり、葉が短く苗がてまりのようになるのが玉竜であるということです。しかし、元をたどると、「尉（じょう）の鬚」の意であり、能面で老人の面を「尉（じょう）」といい、この葉の様子をその面の鬚（あごひげ）に見立てたもので、ジョウノヒゲが転訛して、ジャノヒゲになったと考えられます。





ノシラン・ノシメランの花



玉竜・タマリュウ（玉龍）



斑入りのヤブラン（藪蘭）



櫻園通信第 36 号

草木搭 4

櫻園通信 36. 平成 28 年 5 月
東京都健康長寿医療センター
養育院･渋沢記念コーナー
連絡先:老年学情報センター

春、次々と花つけ　『草木塔』間に合わず、と言う風情ですが、幾つかの草木のこと書き継ぎます。どこに何が生えているかを記載する便宜上、大雑把な地図を示します。



A：養育院記念中央ひろば、銅像、水場の一角
B：自主管理歩道東沿い、歩道分離帯
C：自主管理歩道線路沿い
D：自主管理歩道北沿い
E：駐車場周囲
F：大山公園（旧養育院敷地）
G：屋上庭園：一般公開（３階リハビリ外来待合室より一般入園可）リハ訓練用、緩和ケア（一般入園不可）

⑩馬酔木：アセビ

「スズラン」のような白い花が連なり、次第に長くなり、花期も長い。また、新緑も美しいツツジ科アセビ属の常緑低木です。日本に自生し、万葉集にもいくつも歌われ、古くから愛されてきたが、一首を紹介します。

我が背子に　我が恋ふらくは奥山の
馬酔木の花の　今盛りなり

当院の庭のあちこちに植えられていまする。別名「あしび」などと言われ、漢字で書くと「馬酔木」です。「馬」が葉を食べると毒に当たり酔っぱらったようになることが名前の由来です。葉、樹皮、茎、花、すなわち全株にグラヤノトキシン、アセボプルプリン、アセボイン、ジテルペン、アンドロメドトキシンなどの毒素成分があり、毒症状は、血圧低下、腹痛、下痢、嘔吐、呼吸麻痺、神経麻痺などです。鹿などの食害の多いところでこの木が食べ残されて増え、鹿の多い奈良にアセビが多い理由とされています。有毒植物であり、近年では、殺虫効果を自然農薬として利用する試みがなされているそうです。

よく似た花を咲かせるものとして、西洋イワナンテンが地図のＣ領域の南の辺りに植えられています。ドウダンツツジ（満天星）も鈴蘭型の白い花を咲かせますが房にはならず、紅葉が美しい。街などでよく見かけますが、当院では見かけません。


アセビ


西洋イワナンテン

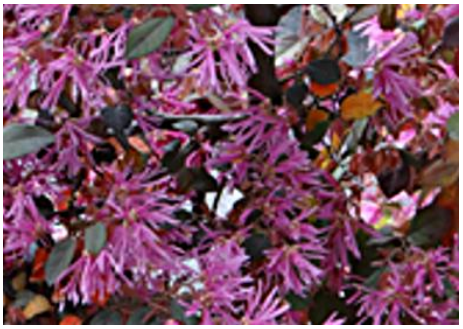
⑪ベニバナトキワマンサク：紅花常盤万作

マンサクは、早春、枯れ木に葉が出る前に、黄色いリボンのような花を咲かせる。日本全土に分布する高木である。古くから庭木と


マンサク

して愛され、蠟梅、山茱萸とともに早春の先駆けの黄色い花を咲かせる。和名の由来は、春の早い時期にまず咲くからという説と、花が枝に満ちる様子からついたという説があります。

この近縁種で、葉が赤褐色の常盤で、花がピンクのトキワマンサクが、近年造園業者により盛んに植えられています。当センターでも線路際の歩道際Ｃ初めて見た 10 数年前は、ホーと思ったが、今はいささか食傷気味である。



⑫ツツジ：躑躅







ツツジの類は４月から５月にかけて漏斗型の特徴的な形の花（先端が五裂している合弁花）枝先につけます。ツツジ属の植物はおおむね常緑若しくは落葉性の、低木から高木で、葉は常緑または落葉性と書かれているように、何でもありの花木です。主にアジアに広く分布しますが、日本の野生種として、ヤマツツジ、ミツバツツジ、レンゲツツジ、モチツツジなどがあります。江戸時代に久留米藩で品種改良が盛んにおこなわれ、小ぶりの花の多くの美しい品種が生まれました。久留米つつじと言われる一群です。また同じころ平戸藩んで大きな花を咲かせる品種が開発され、オオムラサキなどの花の大きい種が生まれています。今日園芸業者が多用する結果、ツツジの代表的な品種とみなされるようになっています。白花、ピンクのはなのもあり、当センターでも多用されています。

ツツジの語源は、「ツヅキサキギ（続き咲き木）」の意味や、「ツヅリシゲル（綴り茂る）」の意味などの説があります。漢字では躑躅と書きますが、読めてもかけない漢字の代表的なものでいつもパソコンのお世話になっています。「躑躅」は「てきちょく」とも読みます。昔中国で、羊が誤ってシナレンゲツツジの葉を食べると、「足もとがおぼつかなくなり、死んでしまう」ので、「羊躑躅」（ヤンチーチュー） と呼んだ、と言います。また、羊は毒であることを知っているので、シナレンゲツツジを見ると、前に進まなくなるから、とも言います。「躑躅（てきちょく）」には「行っては止まる」「躊躇」という意味がありことから、見る人の足を引き止める美しさから、この漢字が使われたとも言われますが、後から付けた屁理屈のようです。

⑬シャリンバイ：車輪梅



4-6 月に白または淡紅色の 5 弁の梅のような花（両性花）をつける常緑低木ですが、バラ科の植物です。枝の分岐する様子が（葉の配列の様子とも）車輪のスポークのようで、花が梅に似ることから車輪梅と名付けられています。当センターでもあちこちに植えられ、特に線路際に沢山あります。

東北地方南部以南の日本、韓国、台湾までの海岸近くに自生します。艶のある常緑葉が美しく、乾燥や大気汚染に強く、良く刈り込みに耐えることから、道路脇の分離帯などの植栽や公園授、庭木として多用されています。10-11 月に直径 1 cm 程の球形の黒紫色の実がなります。



櫻園通信 37. 平成 28 年 6 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

草木搭 5

あっという間に梅雨。今年も半年終わりで、草木を見ていると、季節の流れの速さに唖然とするばかりです。敷地の草木案内『草木塔』を書き継ぎます。

⑬スダ椎：スダジイ



渋沢栄一銅像の傍らに、大きく枝分かれしたスダシイの木があります。また、南側の道路沿いに、古いスダジイの木が 15 本くらいあります。大山公園にも 10 本くらいあります。樹齢はいろいろですが、古いものは養育院の板橋本院が作られた大正 12 年頃に植えられたもののようです。板橋本院が昭和 20 年に米軍の空襲で焼けたとき、破壊の傷跡が幹に残されたものもあるようです。古い先輩が言っていましたが、どの幹の傷がそれなのか判然としません。



スダジイは本州の新潟県以南の日本各地、朝鮮半島にも分布する常緑の高木で、20m 以上の高さになります。タブノキとともに日本の常緑広葉樹林を代表する樹木です。５月から６月にかけて遠方から見てもすぐにわかるほどの花序を形成し、雄の花には強い栗の花のような香りがあり、虫を引き寄せています。昨年は、むせるような匂いにヘキヘキする時期もありましたが、今年はそれほどでなく、年によって花のつき方が違うようです。近年、公園木や街路樹、法面の緑化などで植栽されることが多くなったようです。用材として利用される他、シイタケの原木としても利用されています。秋には実がなり、あく抜きしなくてもそのままで食べられる貴重なドングリということで、子供の頃食べた記憶があります。しかし、いまどきの子供は興味がないようで、昨年秋、拾われることもなく沢山のドングリが落ちているました。ためしに口にしてみましたが、あまり美味しいものではありませんでした。



⑭紫陽花：アジサイ

雨空にアジサイの花が映えます。昔は花が空色の鞠のようなホンアジサイ（シーボルトがオタクサンと名づけてヨーロッパに持ち帰った）と、ガクアジサイが殆どで、土の酸度が高いと赤っぽい花が咲くといわれていました。今、新しいセンターの庭で咲いているのは、色の薄い空色の小振りの花が咲く、ガクアジサイです。これまであまり見なかった子アジサイのような雰囲気の新種のように思えます。敷地内には昔からのホンアジサイもあります。現在解体工事中の敷地に、大きな渦アジサイがあったのですが、工事で抜かれ



てしまったようです。カシワバアジサイが円錐形に白い花をつけています。





アジサイは、ヨーロッパやアメリカで盛んに品種改良され、それが逆輸入されて更に品種改良されて、巷では多様な園芸種が見られます。スミダノハナビ、アメリカアジサイ、クレナイなど、沢山の種類が出回っています。プレゼント用に花屋には珍しい品種が出回っていますが、目の飛び出るような値段のものもあるようです。











・ホンアジサイ（赤）・アナベル（白、ピンク）
・紅・渦紫陽花・ホンアジサイ
・スミダノハナビ（一重、八重）







⑮ヤマボウシ：山法師





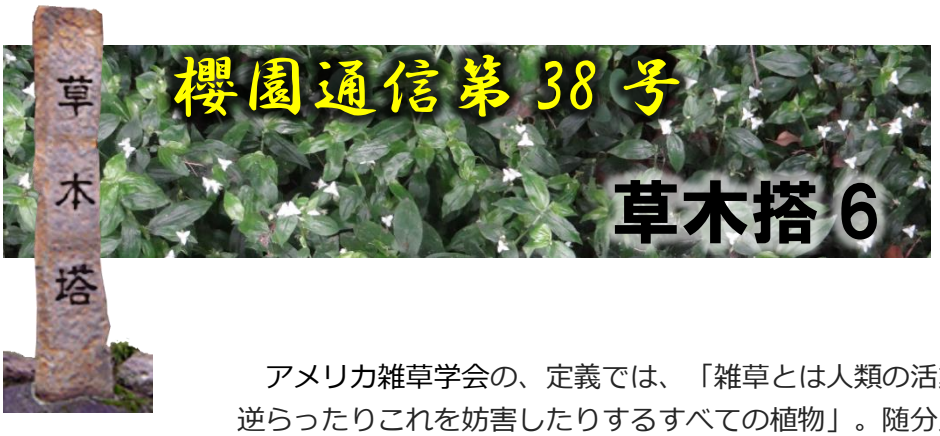


ヤマボウシは日本の本州から九州、および朝鮮半島、中国の山地に普通に生える樹木です。梅雨の頃、白い十字架型に花弁のような総包片が４枚開き、青々とした葉とのコントラストが雨に美しく映えます。９月頃には、直径 1～3 センチの赤い集合果が熟し、食べられます。果実酒にも適するようです。昔から庭園樹として愛され、多くの俳句にも読まれています。ネットで拾ったが、

・雨誘ふ花の白さよ山法師　　今成公江

近縁にアメリカハナミズキがありときどき間違えられます。

数年前の秋、ある女性から電話があり。区役所前の駅の街路にヤマボウシみたいのが咲いている、今秋でしょ、私の頭がおかしくなったのかしら・・・・そんなはずはない、狂い咲きだろうかと見に行ったが、確かに山法師。板橋区が街路樹として新たに植えた木がこれで、説明版がついていました。二季咲きの新品種“ブルーミングテトラ”と書いてあります。写真は病院の横断歩道の脇にあるもので、、公孫樹の黄葉を背景に、山法師が白い花を付け、おまけに赤い実がなっている。なんとも俳句の季語には使えない珍種山法師です。



櫻園通信 38. 平成 28 年 6 月
東京都健康長寿医療センター
養育院･渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

アメリカ雑草学会の、定義では、「雑草とは人類の活動と幸福・繁栄に対して，これに逆らったりこれを妨害したりするすべての植物」。随分人間の身勝手を主張するものだなと思うが、妥当なようにも思えます。庭園は人間が美観と癒しをもとめて作る疑似空間であり、目的を持った造園業者の作品と言えます。この人工の園に、造園業者の目的に逆らって勝手に生えてくるものが、庭園における雑草です。それを除くために整備する・・・ということですが、それは人間の身勝手で、植物に罪はありません、勝手に人間が雑草と名付けているだけで、個々の植物には、個性、その来歴があります。その中で、センター庭園に見られる外来帰化植物のいくつかを取り上げてみようと思います。

⑯おっ立ち片喰：オッタチカタバミ



道路の片隅にへばりつき、春から秋にかけ黄色の花を咲かせる昔からの雑草である。地下に球根を持ち、さらにその下に大根のような根を下ろす。匍匐茎をよく伸ばし、地表に広がる。このため、繁殖が早く、しかも根が深いので駆除に困る雑草である。意匠化され。片喰紋として汎用されてきたが。生命力の強さが好まれたようです。

ムラサキカタバミ、イモカタバミなど外来帰化種も増えたが、、近年カタバミの世界が激変している。旧来の片喰が、茎が地表を這い、葉の色が時に暗紫色なのに対し、オッタチカタバミ地下茎は水平に伸びるものの、そこから地上茎が縦に立つため、この和名がある。葉の緑がは鮮やかで、おっ立った分大きくて、鮮やかな黄色の五弁花をつける。北アメリカ原産。日本では 1965 年に京都府で見つかり、現在では、都内も席捲し、当施設でも従来種を凌駕している。そしてほとんどの人は、この変化に気づいていない。

⑰常盤露草：トキワツユクサ



やや湿っている日陰や水辺に生え、大群落を形成します。草丈は 50cm ほどで、初夏に白い花弁の三角形の花を咲かせる、ちょっと雰囲気のある洒落た植物です。

日本には昭和初期に観賞用として持ち込まれた、南アメリカ原産の帰化植物ですが、今や野生化して、あちこちに大群落をつくっています。外来生物法により要注意外来生物に指定されていますが、北アメリカ、ヨーロッパ、オーストラリアにも定着して、コスモポリタン化しているようです。それが当院敷地にも入り込んできたようです。

⑱掃溜菊：ハキダメギク



道ばたや庭などによく生えている雑草だが、春から秋の長期間頂部に小さな花を咲かせる。その後、急に葉腋から岐散状に盛んに分枝を繰り返し、各枝の先の小さな頭花は直径 5mm 程度。5 枚前後の先端が 3 中裂する短い白色の舌状花があり、および多数の黄色の筒状花からなるキク科コゴメギク属の一年生植物です。

オオイヌノフグリ、ヘクソカズラと並んで可愛そうな名前の代表ですが、著名な牧野富太郎が世田谷の掃き溜めで発見したのでこの名前を付けたそうです。よく見ると結構可愛い花です。

熱帯アメリカ原産。南アメリカやヨーロッパ、アフリカ、アジア（日本を含む）に移入分布する。日本では明治時代の初期に渡来したといわれ、1920 - 1930 年代に報告され始めた。現在では全国に帰化植物として定着しており、都会地の道端や空き地などに広がりつつある

⑲犬酸漿：イヌホウヅキ







高さ 80Ｃｍくらいの路傍に生える雑草。世界の温帯から熱帯にかけて広く分布する。日本でも古くから全土に分布する。ところが近年北米原産のアメリカイヌホウズキ急増している、従来種に比べて葉が薄く、花も実も小さいが、直接比較しないとほとんど区別できない、

黒い実をつけるナスカの植物であり、バカナスの別名がある。近縁種に、キチュガイナス、バカナス主に畑や道端、民家の庭先などに生息する。一般的な家庭の庭にも生え、雑草として家主を悩ます。ワルナスビ

⑳蔦葉雲蘭：ツタバウンラン

ヨーロッパの地中海沿岸原産。大正４年に観賞用に導入、逸出していまや全国の道端・住宅街などの石垣のすき間，小川の岸辺などに広がっている。

葉は掌状に浅く 5～9 裂、春～初夏に白～淡青色で暗紫色のすじがあり上唇は 2 裂して直立，下唇の背面には 2 個の黄色いふくらみがあって花口をふさぐ．花冠の後端は距となる、葉の形も花も美しく植物であるが、広がる。



敷石や石垣の隙間を好む一年草もしくは多年草。無毛で，茎は細くて地上を這い，長さ 10～40cm．所々で不定根を出す。脈は射出。花冠は、長さ 7～9mm、上下 2 に分かれ、雄ずい 4、雌ずい 1。果実（さく果）は径 5～6mm の球形、長絵によって下垂、熟すと裂ける。種子は径 1mm 弱、黒色～褐色で不規則なしわを持つ。



櫻園通信 39. 平成 28 年 7 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター
稲松孝思

養育院大塚本院時代の渋沢栄一

渋沢栄一は、明治維新後の日本の代表的な経済人で、日本型資本主義の父ともいわれます。若いころから社会事業にも熱心であったことが近年大きく再評価され、多数の書籍が出版されています。図-1 は、病院敷地にある渋沢栄一の大きな銅像で、昨年板橋区の有形文化財に登録されていますが、渋沢が半世紀以上養育院事業に関わったことを顕彰し、東京市民の寄付で建てられたものです。養育院事業は、渋沢の代表的な社会事業ですが、その養育院の歴史の中で、大塚・巣鴨を拠点としていた明治の後半から大正時代にかけての養育院は日本の医療・福祉体制に大きな役割を果たしています。



●渋沢栄一の生涯

渋沢栄一の生涯を図 2 にまとめてみました。生地は埼玉県の深谷で、藍も商う豪農の長男で、今日でも大きな屋敷が残されています。栄一は、若いころ尊王攘夷運動の熱気の中にいましたが、いろいろな事情で徳川慶喜の一橋家に仕官して武士となり、慶喜の将軍任命に伴い、幕臣となりました。身分制度の厳しい江戸時代に、農民が幕臣になるということは大変なことで、大出世と言えるでしょう。さらに、パリで行われる万国博覧会の江戸幕府の将軍の名代として万博に徳川昭武が派遣されますが、ヨーロッパの王室から国賓待遇を受けています。その使節団の会計掛として、渋沢は 2 年近くヨーロッパ生活を体験します。しかし、その最中に幕府が崩壊したため、帰国しています。静岡で、謹慎中の徳川慶喜に報告に行くのですが、この時、駿府藩中老として徳川家を差配する大久保一翁に出会っています。そこの出会いが、その後の渋沢の運命を大きく展開させたのです。

渋沢栄一とは？



- 埼玉の豪農、一橋家に仕官、武士・幕臣に
- 1867年、パリ万博使節団の会計庶務担当
  - 静岡の徳川慶喜へパリ帰朝報告、会計報告
  - 大久保一翁に会い→商法会所
- 明治2～6年、明治政府改正掛など（井上馨の懐刀）



- 府知事：大久保一翁に営繕会議所の運用を託され、養育院事業、ガス事業に関与
- 日本資本主義の父
  - 第一国立銀行、王子製紙など500を超える企業に関与
  - 論語と算盤を標語に経済活動



- 若いころから600以上の社会事業に関与
  - 福祉・医療：養育院、慈恵会、済生会、赤十字運動、聖路加…
  - 商業教育・女性教育：一橋大、女学館、日本女子大
  - 国際協力：対米、対仏
- 70歳以降は，実業界から引退し，各種の社会・公共事業にひろく関係した。

当時、静岡の徳川家は「太政官札」という政府紙幣（不換紙幣）を大量に抱えていました。その処理について、渋沢は民間資本を合本して商法会所を設立し、産業振興に役立てることを提言しました。そして、商法会所の運営を実行し、大きな利益を上げています。その能力を買われてか、明治政府に招かれ、大蔵省に入省。改正掛（維新政府のシンクタンク）を立ち上げて明治維新の様々な経済改革に尽力することになるのです。その中で人脈もでき、第一国立銀行（現在のみずほ銀行）という日本最初の銀行を創り頭取に就任し、成功を収めました。最終的には、約 500 社を超える会社の設立に関係することになり、日本型資本主義の父と言われました。

●養育院と白河楽翁・大久保一翁・渋沢栄一

その渋沢が、若い頃から大変熱心に養育院に関わるのです。そのきっかけは当時東京府知事であった大久保一翁に、七分積金の管理と活用を命じられたことにあります。大久保一翁は、幕府の目付海防係（蕃書調所総裁を兼務）だったときに幕閣に提案した、西洋風の幼院・病院設置プランに基づいて、明治になってから養育院、東京府病院を設立しています。後にその養育院の運営を渋沢に託したのです。

時代は遡りますが、江戸時代の寛政年間に老中松平定信（白河楽翁）は、「七分積金・町会所」の制度を立ち上げ、貧民救済に当たっています。町の地主階級から集金した基金を貧民の生活援助にあてたのです。これは社会福祉事業として、

養育院とは？

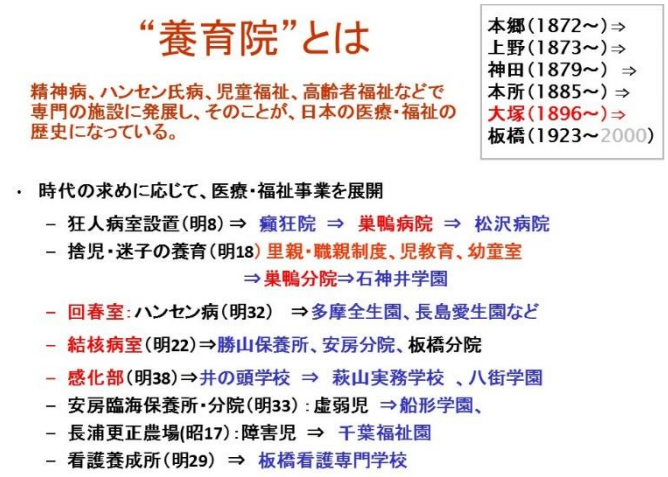


- 明治維新後、松平定信の作った七分積金を用いて、臨時の救貧施設（三田、麹町救育所）を運営。
- 大久保一翁府知事の諮問への救貧三策の答申により恒久施設を計画。
- ロシアのアレクセイ大公の来朝を機に、加賀藩上屋敷に臨時収容(明治5年10月15日)
- 上野の護国院に恒久的な救貧施設として養育院を開院（明治6年2月12日）。
- 『論語と算盤』を標榜する経済人・渋沢栄一が半世紀以上にわたってその維持発展に尽力した。

世界的にも極めて早い時期の成功例といわれています。その「七分積金」が、明治維新の際に、幕府から明治政府に渡されました。江戸開城時に任にあった大久保一翁が東征大総督府に、もともと市民を救済するための資金ということで渡したそうです

その後幕府の徳川家は静岡の一大名に移封になり、その立ち上げに大久保一翁や勝海舟が働くことになります。しかし、明治5年に廃藩置県になると、大久保一翁は徳川家達と共に上京を命ぜられます。文部省二等出仕、次いで東京府知事に任ぜられます。その時、貧民救済のために上野の護国院(現東京芸術大学)に恒久的な救貧施設を作りましたが、その仮施設として加賀藩上屋敷跡の長屋に浮浪者を収容しました。その後、大久保府知事は、七分積み金(共有金)の運用、養育院の維持管理を渋沢栄一に託します。このようにして、「論語とそろばん」を標榜する経済人の渋沢が、社会事業としては養育院の維持・運営に力を注ぎ、他の社会事業にも関わるようになるのです。

なお、渋沢は、共有金の多くをガス灯会社の設立にもあてています。当時の東京は夜になると真っ暗ですから、ロンドン・パリのように光り輝く街にしたい、東京に街灯を造ろうという志を立てて、共有金を使用しています。こうして、渋沢は、早い時期から養育院に大変関心を持ち、社会公共事業に幅広く尽くしていきました。養育院事業への関与をきっかけとして、慈恵会(東京府病院が払い下げられた)、済生会、赤十字運動、女子教育の学校設立などの社会事業、教育事業にも携わりました。70歳からは実業界から引退していますが、引退後も各種の社会公共事業には、91歳で死亡するまで関わりつづけました。

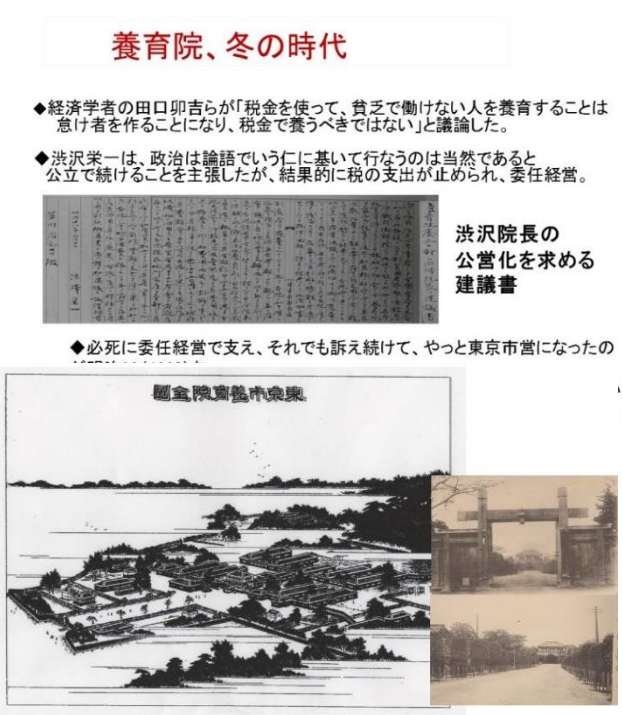


●養育院の冬の時代

養育院は、初めは本郷の加賀藩長屋あと(現在の東京大学)を仮施設として浮浪者を収容していますが、明治6年2月に上野(現在の東京芸大)に恒久施設を建てています。この場所が東京美術学校や、上野の博物館、上野公園になると、その後の養育院は、神田、本所、大塚、板橋と転々としています。大塚に本院が建つ前、養育院は厳しい状況におかれました。

当時の経済学者が「貧民のために税金を充てるのは無駄である」と提議したのです。現在でも「生活保護制度は、受給者を怠けさせる」と意見する人がいます。そのような考え方から「養育院に税金を使うな」という意見が、強く出されたのです。それに対し、渋沢は、一生懸命寄付を集めて維持を計ったのですが、税金が絶たれたため、施設は維持が困難になり潰れそうになります。そこで、公営化を求める建議書を出し、養育院運営は東京市が担うこととなり、再び公営化されたのです。

加えて、施設が各所を移転することは、良くないと指摘されました。ヨーロッパには大きな慈善施設があり、大日本帝国にも、それ相応の施設を設置すべきという意見が出され、大塚の養育院本院が建設されたのです。古い地図では、大塚の本院と巣鴨の分院、精神病院の巣鴨病院は、広い意味での巣鴨村一帯に点在していたということになります。明治19年にできた大塚の養育院本院の絵図、写真を示しますが、現在の大塚病院、監察医務院、大塚公園を含む広大な土地に建てられた立派なものです。



・現在の大塚病院、監察医務院、大塚公園

●養育院の大塚本院。巣鴨分院時代

養育院は、この大塚に開院した時代に、日本の医療・福祉史上、大変重要な事業を成し得ました。それまでの養育院は、捨て子や高齢者など、あらゆる状況の困窮者をひとまとめに収容した施設でしたが、それぞれの収容者の必要に応じて、分化されていきました。そして、精神病、ハンセン病、結核、浮浪児の感化教育、高齢者福祉などの専門福祉施設に発展しました。日本の医療・福祉体制の変化を体現してきたわけで、福祉の原点と言える組織なのです。これが、大塚の本院時代の養育院の仕事だったのです。

養育院の機能分化の始まりは、古くは、精神障害の方に対しては狂人病室を設け、これが、上野から移転するときに東京府病院に移管されて癲狂院(てんきょういん)となり、巣鴨病院、それから現在の松沢病院へと発展してゆきました。また、児童の処遇では、捨て子とか家庭に問題のある子のうち元気な子は、大塚本院から巣鴨分院を独立させ、やがて石神井学園へと事業を引き継ぐことになります。結核の患者に対しては、板橋の分院を設置しました。ハンセン病患者に対しては、回春病室を設置し、多摩全生園へと発展していくわけです。浮浪少年の扱いも、初めは大塚の本院で処遇していましたが、周囲の患者の悪影響を避けるために巣鴨分院、井の頭学校で対応することにしました。このように、患者のニーズに応じて、より専門的に対応するために、分類処遇を行なっていったのが「大塚・巣鴨時代の養育院」と言えましょう。

なお、巣鴨地域に真宗東本願寺系の大学がありましたが、養育院の巣鴨分院は、この学校を買い取って作った施設で、明治 42 年に大塚本院から独立して問題児童の処遇のために独立させた施設です。ある時期、ここが養育院のシンボル的な施設になり、高松宮や皇族の方々が訪問されました。現在は、石神井公園の方に移転し、福祉事業団・石神井学園として運営されています。巣鴨から石神井に移転する際に運んだ２つの石碑が残されていますが、巣鴨分院で育った子供が、成長して石屋職人になって社会人として自立し、その恩義を感じて、寄付したものです。

このように「大塚・巣鴨時代」に養育院は精力的な活動を行なっていたのですが、徐々に周囲に民家が建つようになり、町の中で施設を維持することが難しくなってきました。加えて、取り扱う医療・福祉分野の規模も拡大し、施設の敷地も狭くなり、建物も老朽化してきました。そこで、板橋へ移転するべく工事をしていたのですが、その矢先の大正 11 年、関東大震災が起きて、建物が倒壊。板橋の建設工事を急ぎ、急遽、板橋の大山に移転したのです。

養育院・大塚本院

（明治29.3.31.～大正12.9.20.）

- 明治23.養育院は委任経営から東京市の経営へ
- 明29.本所から大塚への引越し
- 混住から分類処遇　⇒　専門施設へ
  - 虚弱児童：　安房分院：明治33.8.5.
  - 感化生：感化部：明治33.7.22.　⇒　井の頭学校
    M38.10.29.、萩山学校
  - ハンセン病：回春室：明治.36.4.　⇒　全生病院
  - 児童：巣鴨分院：明治41.4.　⇒石神井学園
  - 結核：板橋分院：明治3.10.　⇒板橋本院
- 大正12.9.1.関東大震災で崩壊



養育院と安達憲忠



渋沢を補佐して社会事業に邁進し、東京市の運営となった大塚の養育院を舞台に、実質的な企画運営を担い、回春病室、井之頭学校、安房分院、巣鴨分院、板橋分院の創設等にかかわり、養育院の発展に尽力。

1919（大正8年）年退職するまで、安達が企画し、渋沢が政治的な仕組み作りと資金集めを行い、安達が運営の実務をこなすと言う二人三脚とも言える形であったようだ。

●渋沢栄一を支えた人たち●

◇安達憲忠

「大塚・巣鴨時代」に養育院の活動を担ったひと達について述べます。渋沢は、実業家として多忙なため、実際の組織運営は、安達憲忠と田中太郎らが行ないました。彼らは、渋沢を補佐して社会事業に邁進した人物です。東京市の運営する大塚の養育院本院を舞台に、幹事として実質的な企画・運営を行い、回春病室、安房分院、巣鴨分院、井の頭学校、板橋分院の創設などに尽力しました。渋沢は、時間を割いて、月に1回は必ず養育院に顔を出しました。安達が社会事業を企画し、運営の実務をこなす。一方、渋沢が政治的な仕組みづくりと資金集めをするという、二人三脚で運営したようです。安達がいたから渋沢が活動できたし、渋沢がいたから安達が活躍できたという関係だろうと思います。



安達憲忠

- 1857年、岡山県で生まれる。幼時、母と死別
- 遠戚の天台宗寺院で育ち、仏教を修める一方、岡山の藩校遺芳館で経学を学ぶ。
- 新聞記者となり、山陽新報、中国日々新聞、福島新聞などの記者を務める傍ら、自由民権運動に携わり、「岡山自由党の四天王の一人」。また、集会条例違反で逮捕された事もある。
- その後上京し、1887（明治20年）、林徽音20歳と結婚。
- 1888年、東京府に奉職する。
- 東京市養育院院長であった渋沢栄一の勧めで、1892年、明治24年、養育院幹事となる。
- 渋沢栄一の補佐役として、養育院運営の実務を担当
- 1919年、スキャンダルで養育院を退職する。
- 報徳会、上宮教会などに関与
- 1930年12月2日死去。享年74。





安達憲忠は、安政四年に岡山県に生まれました。幼少期に母親を亡くし、親戚の天台宗寺院で育ち、仏教を修め、明治期に

新聞記者となって、自由民権運動に加わり逮捕されるという波乱の人生を歩んでいます。自由民権運動がらみで福島から逃れて上京、漢学の先生の元でアルバイトをし、その娘と結婚しました。結婚して無職では困るため、東京市に奉職しました。実は、彼の妻の林徽音は、日本で最初にヨーロッパ看護学を勉強した方です。「拝志(はいし)よしね」と名乗り、明治二十年に東京慈恵医院看護婦教育所に入り、学生時代に養育院の大塚本院にいた安達と結婚しました。新婚早々、那須セイとイギリスに渡り、日本初の看護婦留学生としてロンドンの看護婦学校で学びました。フローレンス・ナイチンゲールのいた病院です。東京慈恵医院の高木兼寛が、留学をすすめ、若い看護婦2人を海外へ送り出したそうです。そのうちの1人が新婚ホヤホヤだと知っていたかどうかはわかりませんが・・・。安達は、林徽音が留学中、東京都に勤務していましたが、その折に渋沢から、養育院の管理を引き受けました。林徽音は帰国後東京慈恵医院で看護長兼手術室係などを務めました。安達憲忠は養育院で忙しく、彼女は看護業務で忙しい。親戚の記録によると、夫婦共に多忙で、一緒に過ごせたのは、日曜・祭日のみだったそうです。林徽音は、明治 25 年、27 歳の時に結核で亡くなりました。おそらく、安達憲忠は、彼女のことを思いながら、一生懸命に福祉の仕事に打込んだのでしょう。

◇入沢達吉

また、養育院の発展に貢献した人物に、入沢達吉がいます。東京帝国大学から派遣されて、養育院の医長を兼任していた医師ですが、この人が養育院の医学的な発展に大きな影響を与えました。ここでお年寄りを診断した経験を生かし、大学に戻ってから「老人病学」という老人医療専門書を出版しました。世界的に見ても「老人病学」という言葉を、極めて早い時期に用いた本と評価されています。現在読み返してみても、諸外国の引用が多く見られる、レベルの高い教科書です。彼は、東京帝大のベルツが退職したあとを継いで教授になって、日本の内科学を確立しました。日本医学会の会長なども務めています。医学史、米ぬかエキスが脚気に効くなど、様々な研究成果を残しています。助教授時代、元気のない虚弱な子どもは臨海学校施設で育てたほうがいいのではないかと指摘し、房総に施設建設を算段したことも、大きな成果です

入沢達吉 1865-1938(慶応1-昭和13)



新潟県生れ。東大で、ベルツに内科学を学び、ドイツに留学したのち、宮内省侍医局勤務。足尾銅山鉱毒事件に委員として参画。

1895年東大助教授　。

1897～1902年養育院医長兼任。

安房分院、板橋分院などで、結核対策に尽力。

養育院体験を元に『老人病学』出版、

老人病学の草分けとなる。



1901年ベルツ退職のあとを受けて帝大教授となり入沢内科を創始。主宰すること24年に及び、日本内科学の確立に貢献。

◇光田謙輔

また、光田健輔という医師がいました。山口のひとで、済生学舎を野口英世とほぼ同じ時期に卒業しています。医師開業試験に合格し、東京帝大病理の山際勝三郎の研究室に入り、養育院に派遣されました。山際勝三郎は、ウサギの耳にタールによる人工癌を発生させることに成功した人物です。光田健輔は養育院にきてから、ハンセン病の勉強を一生懸命し、感染症対策として回春病室という隔離病室を作りました。また、養育院にとって大きな功績は、大学から1年、2年と短期間で派遣されてくる若い研修医師を、光田が指導したことでした。さらに、養育院の「大塚・巣鴨時代」に、日本で極めて早い時期の看護教育の責任者を務めています。彼は、明治 41 年に多摩全生園の副医長として栄転しています。ハンセン病対策に活躍し、後に文化勲章を受賞、新聞では「東洋のシュバイツアー」と褒めたたえられていました。渋沢が彼を政治的に支援することで、日本におけるハンセン病患者隔離制度が確立しました。ところが戦後になって、ハンセン病の原因菌に対する治療薬が導入され、隔離の必要性が薄れ、彼が引退したあとも、国はその隔離政策を変えることができませんでした。このことがハンセン病患者の国家による差別問題と指摘されました。このため、光田はハンセン病撲滅に力を尽くした人物と評価される一方、こうした人権問題の元凶と批判する人もおり、現代において光田を評価するのには複雑な面もあります。

光田健輔 1876-1964(明治9-昭和39)



- 明治9年(1876)山口県(現・防府市)生れ
- 明治28～29年(1896)済生学舎。(野口英世と同時期)
- 医業開業試験に合格
- 明治31年、東京帝大病理撰科(山際勝三郎教授)、
- 東京市養育院派遣(癩患者に接し、癩病に関心をもち，同院内に癩患者専用の〈回春病室〉を設営した。
- 養育院では入澤達吉に内科臨床医学の手ほどき
- 大学派遣の若手医師指導
- 看護婦陽性の任にあり
- 明治38年養育院医員、明治41年副医長

光田健輔

- ハンセン病対策を渋沢の元で推進：東京銀行クラブで講演
- 明治42年全生病院院長、昭和5年、国立療養所長島愛生園園長
- 光田反応など癩医学の面での業績も多い
- 日本の救らい事業に尽くす
- 昭和9年、日本癩学会会長、
- 昭和26年文化勲章
- 昭和35年、ダミエン　ダットン賞
- 昭和39年逝去



養育院の古参医員として、
若手医師教育、看護婦教育、
安房分院、結核対策など
安達憲忠と共に養育院の運営に尽くす

後に
ハンセン病隔離論者として、
一部から批判

●まとめ

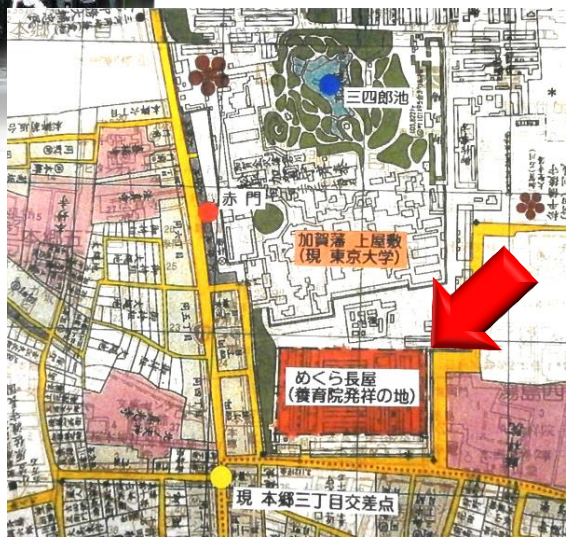
まとめますと、渋沢栄一は、安達憲忠、入沢達吉、光田健輔や、後任の田中太郎らとともに、日本の医療・福祉の歴史において大きな功績を残してきました。その養育院事業を大きく発展させた場所が、大塚と巣鴨の一帯でした。繄寡孤独(カンカコドク)の窮民の混住状態を分類処遇し、今日の日本における専門福祉施設の創設など、日本の医療・福祉体制の原点はこの地にあったのです。

養育院板橋本院建設 と 東上線仮側線敷設

櫻園通信 40. 平成 28 年 7 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

玉越慶弘
養育院・渋沢記念コーナー維持ボランティア





【創業時代】

養育院の創設は、明治五年に貧窮者を収容保護する施設として文京区本郷に在った元加賀藩上屋敷の“めくら長屋”（維新政府・文部省管轄）を使用して設立されたのが始まりである。

その後、上野・神田・本所を転々とし、二四年間の創業時代を経緯して、この施設も狭隘となり、年苑増加する貧窮者などの収容が仕切れない状況になった。

【発展時代】

各方面に敷地を探し、明治二九年に本院を小石川区大塚辻町の地（現 大塚病院）を選び移転することになった。

以前の本所長岡町の施設と比べると、敷地が約三・四倍と拡がり、多大な貢献を社会に寄与する発展時代であったが、二〇余年の諸社会情勢から新しい運営展開が求められていた。

院長渋沢栄一翁は、大正一一年一一月二六日に挙行された養育院創立五〇周年記念式典において、次のように述べられている。

「大塚本院は段々狭くなりましたと同時に、其附近が繁華の場所となりましたため、窮民等の収容所としては、適当なるとも思われなくなってきました。」「建物の腐朽が甚しく、修理にむしろ経費を要する…」「市内の人口増加に伴って、住宅難の声も聞かされる時、広大な面積を市内繁華な地に救済施設を存するのは必ずしも策を得たことではなく、むしろ市民公共のために開放…」などが新天地への理由であるといわれている。



【養育院本院 板橋へ】

新しく展開する先として、北都島郡板橋町で明治四一・四二年に開設されていた板橋競馬場の跡地と周辺で広大（約二七、〇〇〇坪）な敷地の取得が見込まれ、移転計画が進められた。板橋分院（現 仲町）は、大正三年一〇月には竣工し、開院式が行われている。

大正一〇年一一月より本院敷地の造成工事を開始。大正一一年に本院建設の起工式が挙行された。建設工事は、入札の結果、清水組（清水建設）が落札請負（工費八四億円）、大正一二年三月には、遅れている付帯設備工事を除き、建物は完成された。

■東上線仮側線

板橋本院建設の状況を記した資料は少ないが、その過程で、東上線より【仮側線】を敷設して、工事現場へ引き込み、建設資材の運搬が行われている。

現代に残る仮側線敷設の記録

①側線敷設認可

申請：大正 11.8.11　　認可：大正 11.8.22

（板橋本院建設起工　大正 11.7.15）

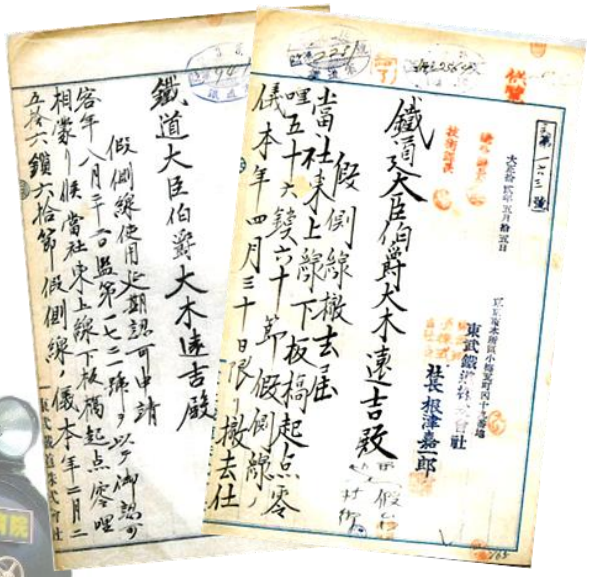
②仮側線の使用延期

申請：大正 12.3.6　　認可：大正 12.3.16

③仮側線の撤去

撤去届：大正 12.5.15　　側線撤去：大正 12.4.30

（大部分完成　大正 12.3）



■仮側線の線路はどこに？

仮側線（引き込み線）は敷地の西側を通る東上線の大山駅付近（当時はまだ未設置　駅開設は昭和６年）より、線路の東側沿いにある路地を経て建設用地（現　交番）に達していた。

東京法務局の不動産登記によると、この路地所有が、半分ほど東武鉄道の私有地である。このことから、引き込み線の経路が推測できる。

東京都健康長寿医療センター





東上線を走っていた
B1 型蒸気機関車



大正 12 年頃は、東上線はまだ単線運転で、電化されるのは昭和４年。当時はまだ畑の広がる長閑な風景。

蒸気機関車（B1 型）が煙を吐きながら走るのは、幻想的な一面でしたでしょう。



参考資料
養育院六十年史　養育院八十年史　養育院百年史
養育院百年史年表稿　　その他　養育院月報

櫻園通信 41. 平成 29 年 4 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター



養育院の思い出　1　空襲

久保田嘉一郎
養育院・渋沢記念コーナー維持ボランティア

板橋在住の久保田さんが、自分史を書かれていて、その中で戦中戦後の旧養育院の様子について書かれたとの事で原稿を拝見した。昭和 20（1947）年 4 月の空襲のこと、進駐軍が来たときのこと、昭和 24 年の昭和天皇行幸のことなど、子供の目で見た当時の様子が書かれている。櫻園通信への掲載の了解いただいたので、3 号に分けて掲載することにする。

その頃の養育院のあらましについて述べる。



関東大震災後、大塚から板橋に引越をした養育院本院は、鰥寡孤独の収容、授産事業、保育、感化事業などの社会事業を活発に行い、昭和１８年度末には分院を含めて 1,702 人の入所者がいた。昭和 19 年に、戦時疎開のため、塩原温泉に疎開施設を作り、本院利用者の半数、房総の船形学園の子供たちを疎開させた。食糧難の時代に苦しい対応を迫られた。養育院 80 年史によれば板橋の本院には、養育院利用者の半数と、離島小笠原や八丈島住民の疎開を受け入れていた。戦局の押し迫る昭和２０年 4 月 13 日には米軍の東京大空襲に引き続き、東京北部のＢ29 による空襲があった。当時の板橋養育院本院には、疎開島民 725 名を含めて 1599 名が生活していたが、施設の 9 割が灰燼に帰し、利用者 107 名が死亡した。この頃、養育院の男性職員の多くは召集され、看護婦、寮母主体の施設運営であったようである。このときの板橋住民の様子が、大久保氏の手記に詳しい。

東京都の焼夷弾による無差別爆撃で、1945 年だけで終戦までに 35 波の空襲で、100,632 以上の死者が出ている。焼夷弾による、無差別爆撃で、軍事基地、軍需工場のみでない。養育院の罹災は、戦時の東京のこのような状況の中での一こまである。大久保氏の手記には、子供の目でこのころのことが記載されています。

（センター顧問医　稲松孝思）

昭和二十年四月のわが家の状況

私は昭和十五年三月に十人兄弟（八女二男）の家に生まれました。下から数えて二番目でした。大正八年生まれの長女夫婦と三歳の女の子一家も同居して大家族でした。

長女夫婦の夫（義理の兄）は出征中でした。わが家は製麩業（焼き麩の製造と販売）を営んでいましたが、原料である小麦粉が手に入らず休業中でした。店舗と二階建ての住宅と工場とが川越街道に面したわが家でした。



昭和二十年四月頃のわが家は、四女の姉は板橋高等女学校三年生でしたが、陸軍造兵廠に勤労動員されていました。六女の姉は板橋第六国民学校五年生、長男の兄は三年生でともに水上温泉で学童疎開中でした。七女の姉は学齢になりましたけれども、板橋第六国民学校は休校状態で入学できずにやむおえず、母の出身地である長野県飯山市の母の実家に寄留して、地元の国民学校に入学しました。

住み込みの男性もいましたが出征中でしたから、この時に大人の男は当時五五歳の父ひとりでした。防空壕は工場内に一つと川越街道の歩道部分に十人位は入れる防空壕がありました。

当時五歳になったばかりの私ですが、空襲の記憶はあります。空襲警報のサイレンの音や闇夜に光る探照灯（サーチライト）の光芒やB-29の機体とゆっくりと落ちてくる照明弾などです。空襲が激しくなると一階の座敷は畳を上げて土足で出入りしていました。夜も衣服を着て寝ていました。昼間も空襲はありましたが、艦載機P-51によるもので機銃掃射されるおそれがありました。

川越街道の中丸町寄りのタクシー会社の万年塀には機銃掃射の跡が私の中学校時代まで残っていました。

ある夜、大規模な空襲がありました。足の悪い母と私は父の引くリヤカーに乗って布団をかぶって避難しました。行先は川越街道を下って下頭橋方面でした。下り坂の途中に左に見える建物が燃えていました。「日大病院が燃えている。」と父が叫びました。幸い、その夜は家も家族も無事でした。日大病院とわが家は直線距離にしておよそ三百メートル、B-29から投下された焼夷弾がわが家を直撃するおそれは大いにあったのです。わが家が焼け残ったのは偶然の結果と言えます。

この夜の記憶をもとに板橋公文書館（旧板三小）で調べたら、この日は板橋区にとっては大変な日であったことが分かりました。昭和二十年四月十三日の夜の空襲で板橋区役所、板橋駅、氷川神社、養育院、日大病院などが焼失したと記録にありました。

縁故疎開

空襲の危機が迫ると、家にいる幼い子供を安全なところへ疎開させようと両親は考えました。両親が考えたのは父方の祖父の出身地である長野県飯田市近郊です。昭和二十年五月、疎開の依頼をするために両親は飯田に行きました。私も連れってくれました。その時の旅行の思い出は断片的に覚えています。夜行列車は混んでいましたが、両親の間に座ることが出来ました。列車の窓は板で打ち付けられて車内の光が漏れないようにされていました。前の席の人が水筒で水を飲むのを見て、私も水を飲みたいと言って、呑ませてもらいました。

疎開の願いは、一軒目は断られ、一里（約四キロ）離れた二軒目は引き受けてくれました。その時にご馳走になった手打ちうどんはおいしかったです。その時に母に言われた一言を覚えています。「カイチロ、今日はよく歩いたね。」私は大きな下駄を履いていました。疎開するのは、長女の姉（当時二五歳）と姉の子（三歳）、私（五歳）、妹（三歳）の四人でした。生活する場所は農家の庭に立っている物置の二階の座敷でした。自炊が条件でした。

疎開生活は六月に始まり、終戦を挟み十一月まで続きました。東京に帰ってきて、家族の面々がそろって大きなテーブルで夕食を食べました。出てきたのは「すいとん」。母に「ご飯ないの？」と聞きましたら、「今のがご飯よ。」と言われたのを覚えています。疎開先では何とかご飯（米）を食べることが出来ましたが、東京の食糧事情は悲惨でした。

翌年、昭和二一年四月に板橋第六国民学校に入学しました。



空襲の跡がのこる養育院の敷地と渋沢栄一銅像



養育院の思い出　2
米軍の進駐

櫻園通信 42.　平成 29 年 4 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

久保田嘉一郎　養育院・渋沢記念コーナー維持ボランティア

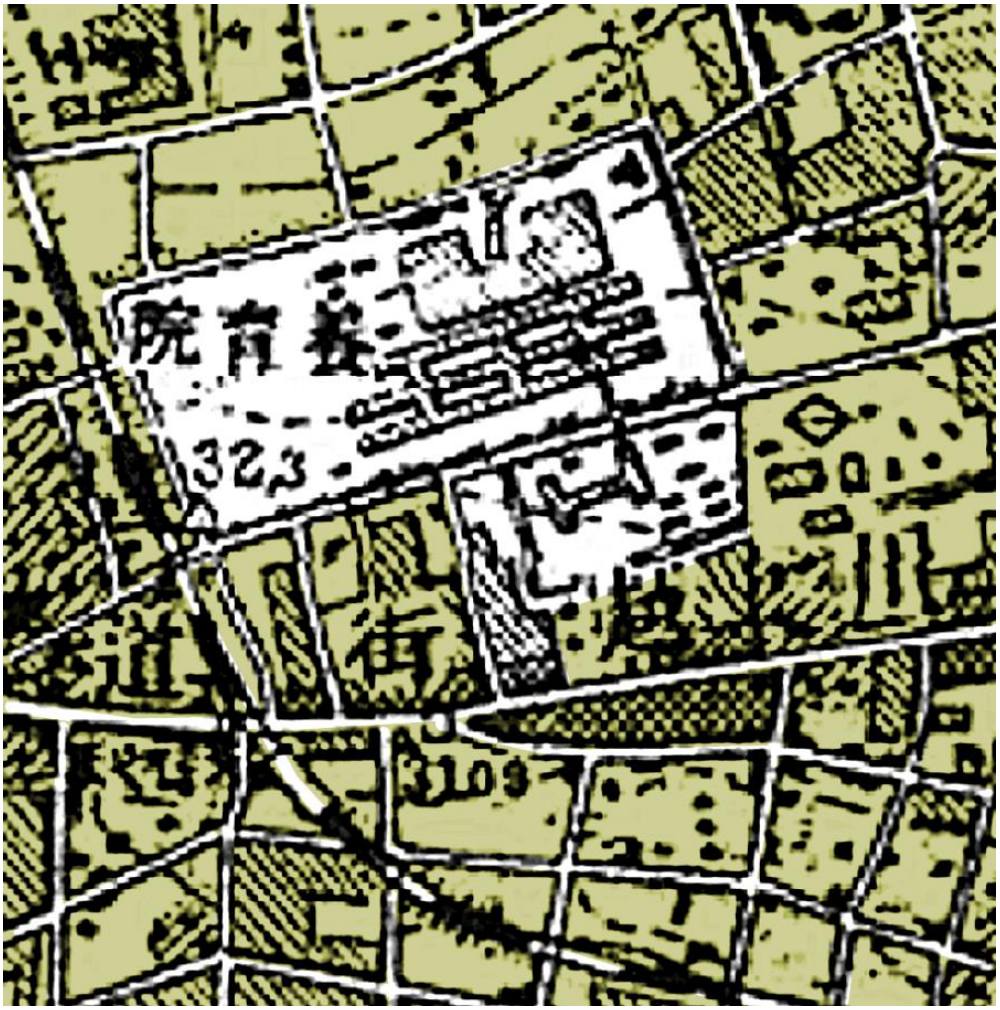




養育院の広場で初めてダンプ・トラックを見た

昭和二十年九月に米軍の進駐が始まりました。わが家は川越街道に面していましたから、米軍の動きが分かりました。米軍の進駐先は朝霞の広大な陸軍予科士官学校跡地と決めて、兵士、車輌、戦車などの移動に川越街道を使いました。夜中に戦車がごうごうと移動するのを寝床で聞きました。基地は「キャンプ・ドレイク」と名付けられました。現在の光が丘公園（練馬区）のあるところは「グランド・ハイツ」と名付けられて米軍将校用の宿舎となりました。

昭和二一年春になると米軍は板橋区、北区にある陸軍造兵廠などの武器、兵器、弾丸などの軍需品の処分を始めました。私が目撃したのは養育院の広場です。当時の養育院は私の記憶によれば、かなり変わっています。



現在、健康長寿医療センターの正門前は片側二車線の大きな通りですが、当時は違いました。東上線踏切から板一中横を通って板橋区役所への道は千川上水を暗渠化してできた道でした。渋沢栄一像も板一中の近くにありました。当時の養育院への車の出入りは旧川越街道から今の板橋文化会館の前を通っていました。

処分の様子を私は三歳上の兄に連れられて見に行きました。米軍のトラックが兵器や軍需品を運んで来て、荷台を傾けると荷物がザァーと地面に落ちました。初めてダンプ・トラックを見ました。周りの人々も皆ビックリしていまし

た。アメリカは凄いものを持っているなぁーと見ていた人たちは目を見張りました。見張り役は米軍のＭＰ（憲兵）二人が銃を持ってガードしていました。大人が近づくと銃で制止されたが、子供には甘かったです。

どんな物を処分していたのか？軍関係の雑多な物を処分していました。歩兵銃、銃剣、火薬のない大砲の弾丸、機関銃の弾、通信機などです。ある程度溜まるとガソリンかけて火をつけて燃やして処分して、次の荷物を迎える。

兄と私は連日、見物に行きました。ＭＰの隙を見て、一人の子供が荷物に近づき、物を取ってきました。その成功を見て、子供たちは荷物に近づき、それぞれ物を盗みました。私たち兄弟もそれに倣い、いろいろな物を盗みました。米兵の警戒が厳重になる前まで続きました。〝戦利品〟としては、銃剣二振り、大砲の砲弾数個、弾丸ケース（鉄製）、通信機、屈折双眼鏡（偵察の時に使う）などがありました。

そんな中に厳重に梱包された木の箱がありました。大きさはミカン箱位の大きさでした。それを兄と協力して、家に持ち帰りました。父親がバールで開けて見たら、中にはぎっしり包帯とガーゼが詰まっていました。食料を期待していましたのに、ガッカリしました。

三八式歩兵銃も沢山焼却されました。木製の銃架は焼けますけれど、銃身は残ります。やがてその焼けた銃身を地面に差し、鉄条網をぐるぐる巻いて子供たちが近づけないようになりました。

〝戦利品〟のその後について話します。工場の隅に隠していましたが、昭和二五年六月に朝鮮戦争が勃発して、世の中が変わりました。占領軍司令官のマッカーサー元帥の指令に基づき警察予備隊を創設しました。日本は朝鮮戦争で戦う国連軍の補給基地になりました。戦後復興を目指す日本にとっては追い風になりました。「かねへん景気」、「いとへん景気」と呼ばれました。「かねへん景気」とは、金属関係の会社が景気が好くなり、「いとへん景気」とは、繊維産業の会社の景気が好くなることです。

街には「くず鉄屋」が存在して、金属類を目方で買ってくれました。当然、鉄より銅や真鍮は高く買ってくれました。鉄を高く買ってくれるぞという噂が広まり、兄と相談して屑鉄屋に持って行き、全部売ってしまいました。



台座から降ろされた渋沢栄一銅像



敗戦後全国に、米軍を中心とした連合軍が進駐した。板橋の養育院は明々寮などの一部のみが使用可能で、急遽焼け残っていた練馬の兵舎をも使用し、昭和 22 年には延べ 4,402 人の収容者を抱えていた。焼け跡の広場は、近辺の軍需工場などの武器の処分場の役割を果たした。米軍のダンプ・トラックが旧軍の銃などの兵器を次々と運び込み、子供の目には機械化された米軍の様子が新鮮に見えたようである。

渋沢銅像は、昭和 19 年に金属回収のために地上に降ろされ、「渋沢栄一の応召」として、写真入で新聞報道されている。しかし降ろされた巨像は、運搬条件の厳しい中で、ボイラー横の防火壁の傍らに温存されていた。（櫻園通信 20 号）。別の住人の話であるが台の上には焼け焦げのコンクリート像があり、地上には降ろされて供出を待っていた銅像があった。子供心にどうして 2 つも似たものがあるのかと不思議に思ったそうである。戦後養育院はこの跡地での再建を望んだが、板橋区は養育院を追い出して、区の施設を建てる計画を立て，両者の激しい論争が繰り返された。

（センター顧問医　稲松孝思）



養育院の思い出　3
昭和天皇の行幸

櫻園通信 43.　平成 29 年 4 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

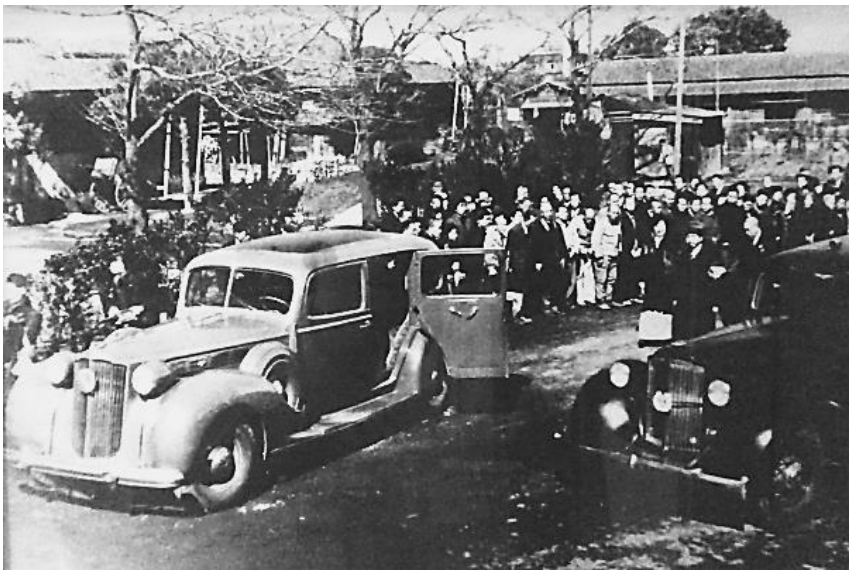
久保田嘉一郎
養育院・渋沢記念コーナー維持ボランティア



養育院で昭和天皇をお迎えする

現在の東京都健康長寿医療センターの二階には、「養育院・渋沢記念コーナー」があります。私は一枚の写真に注目しました。それは戦後すぐに行われた昭和天皇、皇后両陛下の養育院への行幸の写真です。母と私は、写真には写ってはいませんが、その場にいました。

私の記憶によれば、小学校低学年の時、母に連れられてと近所のおばさんたちと養育院を訪問される天皇陛下をお迎えしました。その日はいつかを知りたくていろいろ努力しました。国営昭和記念公園にある昭和天皇記念館にも行き調べました。戦後の全国巡幸の事は分かりましたが、養育院への行幸は判りませんでした。ところが、「昭和天皇実録」が完成して一般公開しているとの記事が新聞に報じられました。一般公開は皇居東御苑のある宮内庁書陵部庁舎で行われていると聞き、早速出かけました。（平成二六年十月九日）



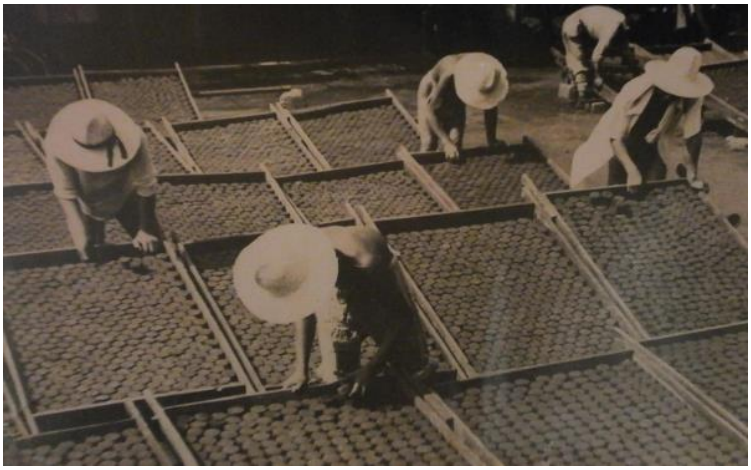
一時間位待って、私の番になりました。閲覧室に入ると、長いテーブルに「昭和天皇実録」全六一巻が備えてあり、閲覧者は二名でした。そんなセットが四つ、計八八名が一時に閲覧出来ました。閲覧時間は四十分でした。私の目的は、昭和天皇の養育院への行幸の日と内容を知ることです。簡単に分かりました。コピーや写真禁止ですから、書き写しました。



昭和二四年三月一日（火）東京都内社会事業施設の御視察の為、午前九時四十分皇后をともに御出門になり、初めに板橋区の東京都養育院を御訪問になる。院長事務取扱い磯村英一（東京都民生局長）より東京軍政部福祉課長キャローの紹介を受けられ、キャローに御握手とお言葉を賜う。○殿において磯村院

長事務取扱いの奏上をお聞きになる。終わって高齢者収容施設である、明々寮及び炭団工場を御視察になり、お言葉を賜う。ついで豊島区の東京都中央児童相談所に向かわれる。
（文中の○は急いでメモした為、判読できず。）

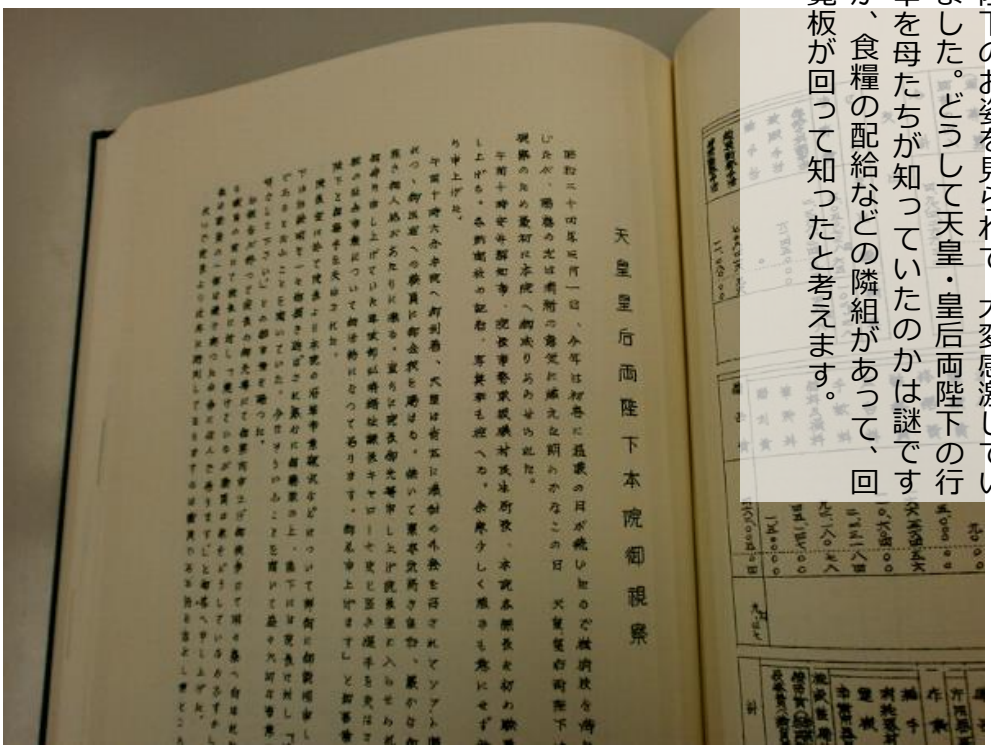
私が知りたいと思っていた月日が、昭和二四年三月一日（火）と判明した。皇居を九時四十分にお車で出発された天皇皇后両陛下の養育院到着は正午前と思われる。平日の昼間に板六小三年生の私がどうして養育院にいたのか、不思議に思いますが、その頃は二部授業でした。急



養育院での炭団づくり

増する児童に教室が足りずに私の在学中にも板九小、板十小、大山小が造られています。

天皇、皇后両陛下も数人の侍従を連れられて、私たちの目の前を通られました。今ほど厳重じゃなかったです。ほんの一メートル先を、中折れ帽を手にして両側に挨拶されて通られました。迎える人もそう多くはなく、母は天皇、皇后両陛下のお姿を見られて、大変感激していました。どうして天皇・皇后両陛下の行幸を母たちが知っていたのかは謎ですが、食糧の配給などの隣組があって、回覧板が回って知ったと考えます。



天皇皇后両陛下本院御視察
東京都養育院月報　第 448 号
（昭和 24 年 4 月発行）
復刻版東京都養育院月報
第 2 巻　不二出版 2016 より



復刻版東京都養育院月報
【明治期全 6 巻】1-143 号 1901-1913 年
【大正期全 12 巻】144-305 号 1913-1926 年
【昭和期全 12 巻】306-425 号 1927－1938 年
【戦後編全 12 巻】426-586 号 1946-1964 年
は、当センター内の老年学情報センターで閲覧することができます。

昭和天皇は明治三四年（1901）四月二九日生まれ、母は明治三四年三月二三日生まれです。この時は四八歳でした。

戦後、戦災孤児や海外からの引揚者も受け入れ、昭和 21 年度末の在籍者は 2,272 人に上っている。当時、GHQ の占領政策で、ララ物質による援助が行われた。アメリカの福祉施設慰問団も度々が訪れている写真が残されている。

戦後、昭和天皇は全国を行脚したが、昭和 24 年 3 月 1 日には、板橋の養育院にも行幸された。利用者、従業職員にも親しくお言葉をかけられた模様は、養育院月報に記載されている。当日、安井都知事、磯村民生局長、GHQ 軍政部厚生福祉課長のキャロー女子らが、案内している。久保田氏の手記には板橋を訪れた昭和天皇の様子が書かれている。養育院を板橋の現地に再建するか否か、板橋区の行政当局と激しい論争が行われ、膠着状態に陥っていた。しかし、行幸の翌月、キャロー女史の鶴の一声で、再建に関する養育院と板橋区の論争は決着し、敷地の一部を区の学校や公園、文化施設に提供し、養育院の板橋再建が決まった。当時の福祉施設を巡る占領政策を含めての政治状況が興味深い。

（センター顧問医　稲松孝思）

櫻園通信 44. 平成 29 年 8 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

渋沢栄一の健康法
坂本屈伸道

宮本孝一　老年学情報センター

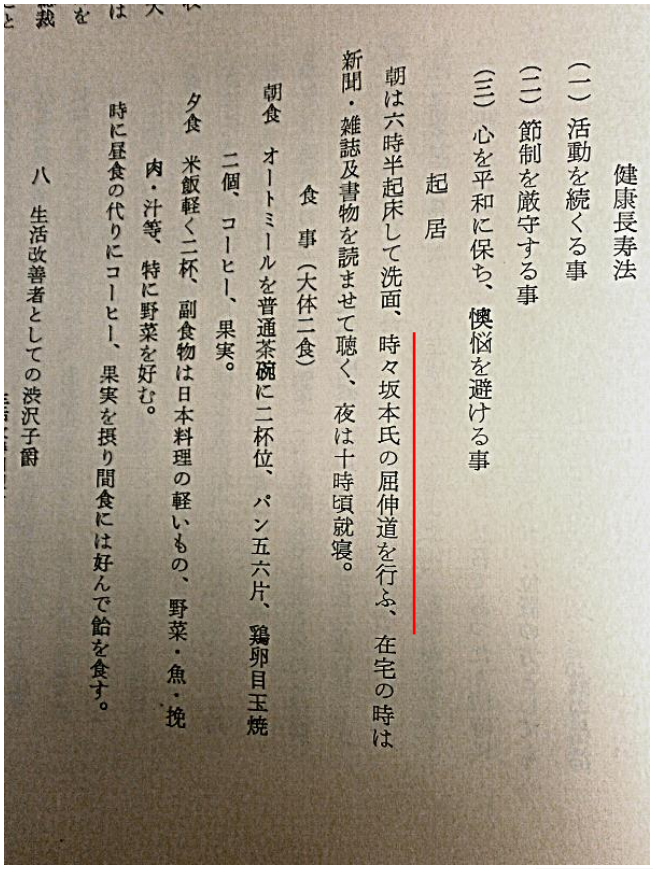
渋沢栄一が**八〇代**で始めた健康法があります。柔術家坂本謹吾が提唱した健康体操「坂本屈伸道」です。

渋沢栄一はときどき坂本を自宅に呼んで、熱心にこの体操を実践したと言われています。

一九二九（昭和四）年に出版された坂本謹吾の著書「坂本屈伸道」では、渋沢栄一自らの実演写真を掲載して推奨しています。

渋沢栄一伝記資料四九巻には、最晩年の日課として次のように書かれています。

「朝は六時半起床して洗面、時々**坂本氏の屈伸道**を行ふ。在宅のときは、新聞・雑誌及書物を読ませて聴く。夜は十時頃就寝。」



健康長寿法

（一）活動を続くる事

（二）節制を厳守する事

（三）心を平和に保ち、懊悩を避ける事

起　居

朝は六時半起床して洗面、時々坂本氏の屈伸道を行ふ、在宅の時は新聞・雑誌及書物を読ませて聴く、夜は十時頃就寝。

食　事（大体二食）

朝食　オートミールを普通茶碗に二杯位、パン五六片、鶏卵目玉焼二個、コーヒー、果実。

夕食　米飯軽く二杯、副食物は日本料理の軽いもの、野菜・魚・挽肉・汁等、特に野菜を好む。

時に昼食の代りにコーヒー、果実を摂り間食には好んで飴を食す。

八　生活改善者としての渋沢子爵



二の其　業修の爵子澤渋

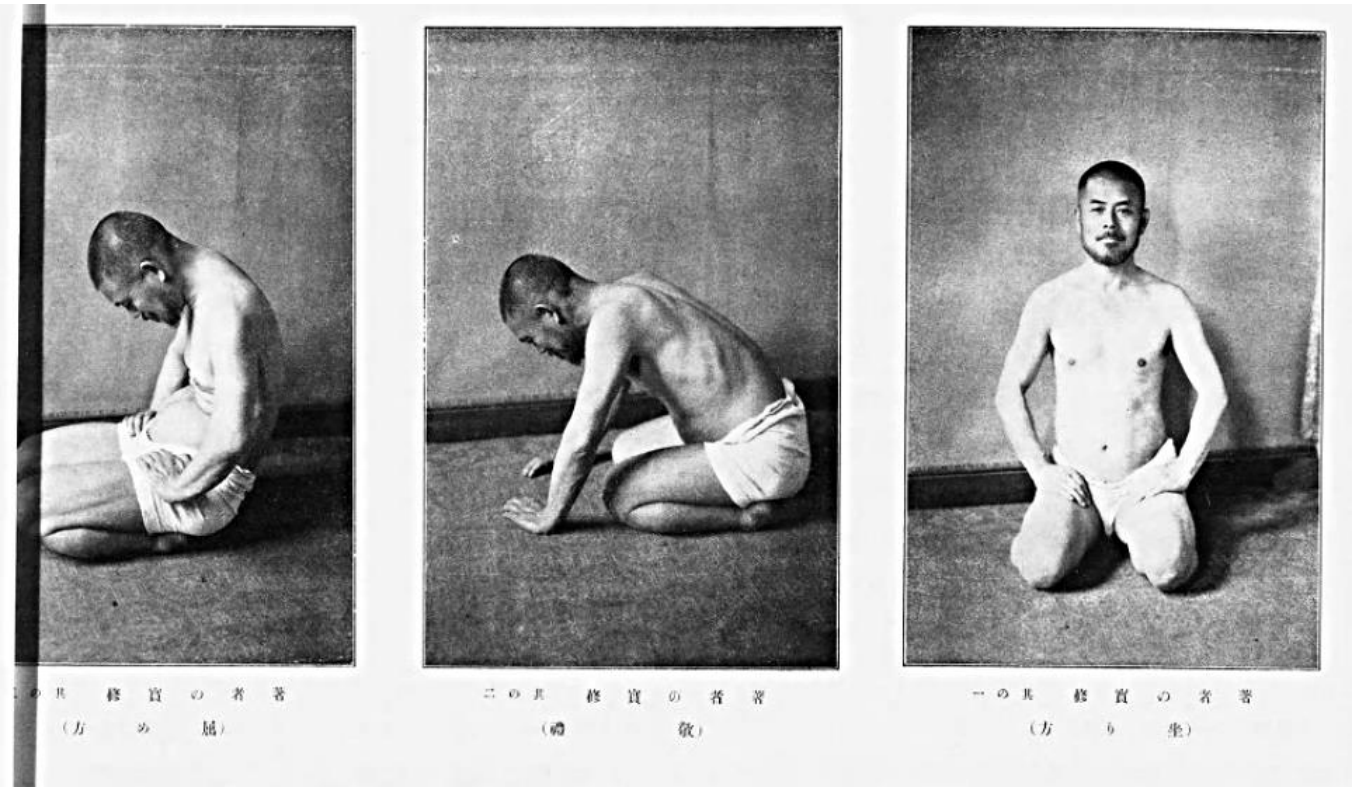
一の其　業修の爵子澤渋

坂本謹吾著「坂本屈伸道」に掲載
坂本屈伸道を実演する渋沢栄一の写真

坂本謹吾著「坂本屈伸道」







正座で座り、上体をゆっくり前に倒してお腹を最大限へこませる、次に、腹のへこみを戻しながら上体を起こして首だけ後ろにそらせる体操。

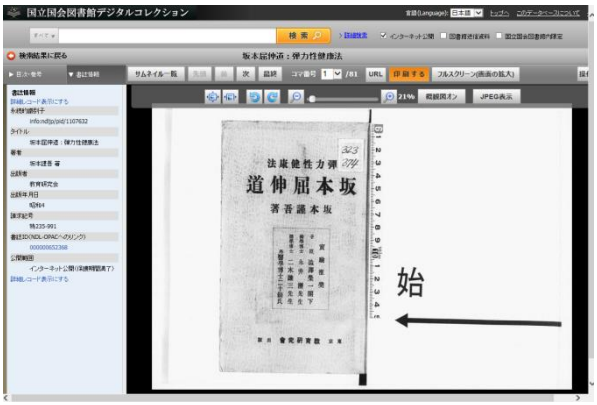
立って同じような動作をする方法もあり。

これを五～十回繰りかえすだけ。朝晩行うことが効果的といいます。

ポイントは腹。めいっぱいへこませてはゆっくり戻すという繰り返し。これにより全身の血行を良くして心身の調子を整えるのだそうです。腹をアコーディオンの蛇腹のように動かして、全身の血行をよくするというイメージかもしれません。

現代では、「横隔膜のストレッチ」などと呼ばれる健康体操で坂本屈伸道とそっくりの動作をする場合があるようです。

ただし、現代の医学では人体にどんな影響があるのか調べられていないので効果は不明です。

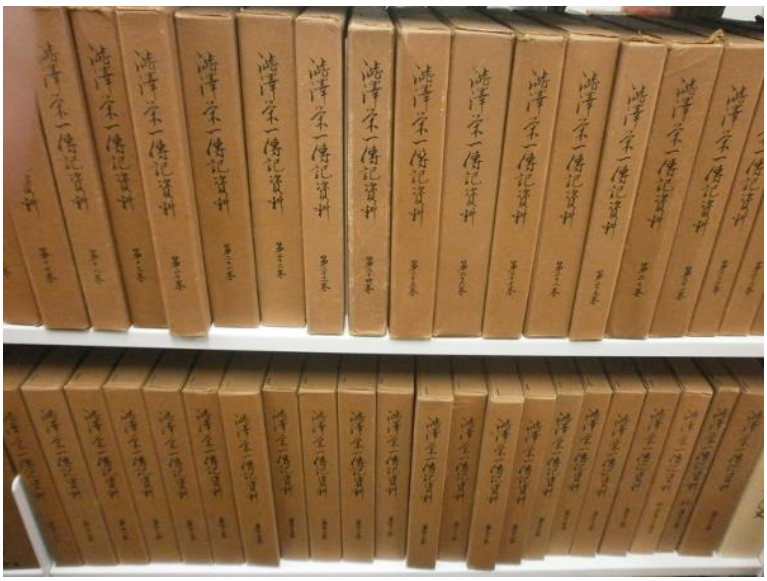


坂本謹吾著「坂本屈伸道」は、インターネットで無料で読むことができます。
→　国立国会図書館デジタルコレクション
http://dl.ndl.go.jp/

渋沢栄一伝記資料

老年学情報センター（東京都健康長寿医療センターの職員用図書館）で所蔵しています。養育院・渋沢コーナー維持ボランティアに加入しますと、養育院の歴史資料や渋沢栄一伝記資料をご覧いただけます。







斎藤家と養育院

宮本孝一
老年学情報センター

櫻園通信 45. 平成 29 年 8 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

1872	明治 5	養育院開設	上野本院	精神病院の分化		
1873	明治 6					
1874	明治 7					
1875	明治 8					
1876	明治 9					
1877	明治 10					
1878	明治 11					
1879	明治 12		神田本院		癲狂院	
1880	明治 13					
1881	明治 14					
1882	明治 15					
1883	明治 16					
1884	明治 17					
1885	明治 18		本所本院		巣鴨病院	
1886	明治 19					
1887	明治 20					
1888	明治 21					
1889	明治 22					
1890	明治 23	1890 渋沢栄一 養育院院長就任				
1891	明治 24					
1892	明治 25					
1893	明治 26					
1894	明治 27					
1895	明治 28					
1896	明治 29		大塚本院			
1897	明治 30					
1898	明治 31					
1899	明治 32			児童収容施設の分化		
1900	明治 33					
1901	明治 34					
1902	明治 35					
1903	明治 36					
1904	明治 37					
1905	明治 38					
1906	明治 39					
1907	明治 40					
1908	明治 41					
1909	明治 42			巣鴨分院（のちの石神井学園）		
1910	明治 43					
1911	明治 44					
1912	大正 元					
1913	大正 2					
1914	大正 3					
1915	大正 4					
1916	大正 5					
1917	大正 6					
1918	大正 7					
1919	大正 8					
1920	大正 9					
1921	大正 10					
1922	大正 11					
1923	大正 12	1923 関東大震災	板橋本院		松沢病院	
1924	大正 13					
1925	大正 14	1925 渋沢銅像建立				
1926	昭和 元					
1927	昭和 2					



学生芥川龍之介、医師斎藤茂吉と出会う

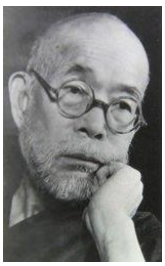
1919 年から作家芥川龍之介と歌人斎藤茂吉の交流が始まる。

しかしそれ以前に一度、養育院から分岐した病院（巣鴨病院）の中で 2 人は偶然出会っていた。



東京府巣鴨病院

斎藤茂吉



芥川龍之介



1910 東京帝大医科大卒業
1911 医科大付属病院と巣鴨病院に勤務
1914 斎藤輝子と結婚
1916 斎藤茂太誕生
1917 付属病院と巣鴨病院辞職 長崎医学専門学校教授に
1921 欧州留学

巣鴨病院

1910 第一高校入学 同期入学に渋沢秀雄（渋沢栄一の四男）、菊池寛がいる
1913 東京帝大に進学
1914 帝大学生だった芥川龍之介、巣鴨病院と医科大付属病院を見学 この時案内した医員が**茂吉**

長崎

1919 菊池寛と芥川龍之介が茂吉の元に訪れ、交流開始

留学

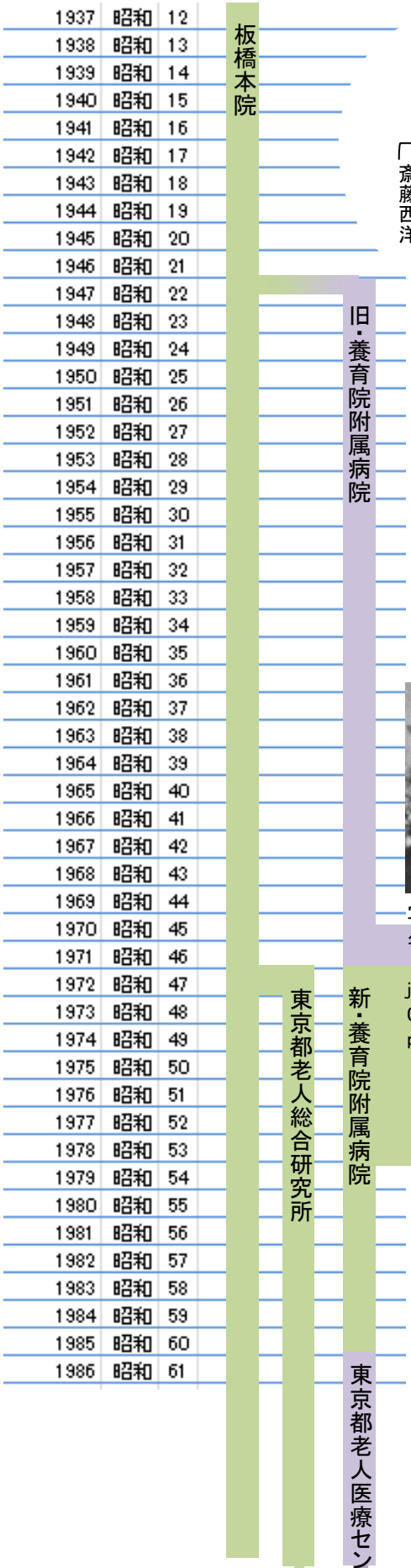
青山脳病院

1925 帰国 青山脳病院全焼
1926 青山脳病院再建
1927 茂吉青山脳病院の院長就任 斎藤宗吉（北杜夫）誕生

1926 神経衰弱で青山脳病院に通院
1927 茂吉が処方した睡眠薬を大量に飲んで自殺

斎藤茂吉の弟
養育院附属病院の副院長に

北杜夫は、叔父（齊藤茂吉の弟）のアルバムをみて信州の旧制松本高校に進学。
北杜夫が憧れた叔父は、のちに（新旧）養育院附属病院の副院長になった。



斎藤紀一
- 斎藤西洋
- 斎藤米国
- **斎藤紀仁**
- 齊藤茂吉（養子）
  - 斎藤茂太
  - **斎藤宗吉**（北杜夫）

1945　旧制松本高校入学

1948 東北大学医学部入学

北杜夫



私はいずれ自分が死ぬことを怖れてはいなかった。しかし憧れの白線帽をかぶり、中学とはおのずから別世界であろうせっかく入学できた松本高校に、一刻でもあれ入ってみたかった。**私の叔父**はかつて松高生で、当時は出征していて日本にいなかったが、その残されたアルバムを見ると、私の松本に対する憧れはいやがうえにもかきたてられて行った。残雪を戴く峨ケとした高山や一面のお花畠を背景に、いかにも颯爽とした黒マントを羽織った松高生の写真、それはまだ箱根くらいまでしか旅をしたことのない私にとって、さながら別天地のように思われた。それに加えて、当時昆虫マニアであり、信州には特産の珍種が沢山いた。（北杜夫「母の影」）

参考：竹内 正：松本時代の北杜夫 其の一『寂光』に映された父茂吉の陰影．信州大学附属図書館研究 第 6 号 2016 .p33-77

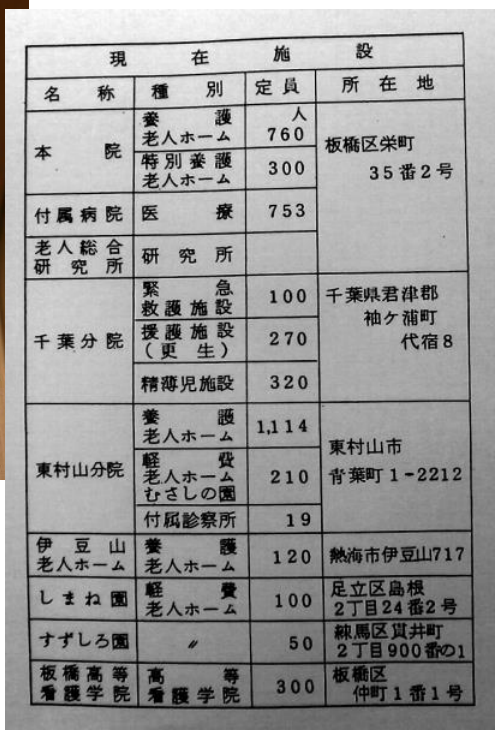
新・旧 養育院附属病院
副院長 斎藤紀仁



写真：「鶴巻温泉病院 30年尾歴史」より
http://www.sankikai.or.jp/tsurumaki/medical/2009/11/24/30th_history.pdf



「養育院史ノート 1972-4」
当時の養育院施設の事業規模がわかる貴重な史料。養育院・渋沢記念コーナーで展示中。斎藤副院長はこの資料を使って、当時の職員に施設の歴史を説明しました。



現在施設			
名称	種別	定員	所在地
本院	養護老人ホーム	760人	板橋区栄町35番2号
	特別養護老人ホーム	300	
付属病院	医療	753	
老人総合研究所	研究所		
千葉分院	緊急救護施設	100	千葉県君津郡袖ケ浦町代宿8
	援護施設（更生）	270	
	精薄児施設	320	
東村山分院	養護老人ホーム	1,114	東村山市青葉町1-2212
	軽費老人ホームむさしの園	210	
	付属診察所	19	
伊豆山老人ホーム	養護老人ホーム	120	熱海市伊豆山717
しまね園	軽費老人ホーム	100	足立区島根2丁目24番2号
すずしろ園	〃	50	練馬区貫井町2丁目900番の1
板橋高等看護学院	高等看護学院	300	板橋区仲町1番1号



櫻園通信 46. 平成 30 年 2 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

渋澤栄一・養育院・慰霊協会による松平定信公の顕彰

稲松孝思（顧問医）

楽翁公関連講演会の小冊子が「松平楽翁公墓前祭講演記録集」として一冊にまとめられた（平成 29 年）。



渋沢栄一は、「養育院」が、寛政の改革の中で、老中松平定信が定めた七分積金・町会所の制度で得た資金によることを深く感謝し、定信（隠居名・白河楽翁）の顕彰に務めた。

一連の渋沢栄一と養育院による、松平定信公顕彰の活動は、東京都慰霊協会に引き継がれている。

渋沢栄一生前の活動

- 月命日に渋沢が養育院を訪問。安達憲忠幹事らの、現場の人たちと養育院の運営について協議、指示。院の子供たちや利用者にお菓子を配り、話をするなど親しく接する。
- 養育院の守り神として、「吉祥院歓喜天誓願書」の坂本源平元幹事による写しと「渋澤の賛」をひとつに額装し、養育院本院（大塚）と巣鴨分院の院長室に掲げた。養育院本院の額は現存し、養育院・渋沢記念コーナーに展示している。「吉祥院歓喜天誓願書」の現物は、渋沢が当初所蔵したが、桑名の松平家に返却し、松平家の鎮国・護国神社（桑名市）の宝物となっている。なお、白河の松平藩は、文政 6（1823）年、隠居していた楽翁の意向もあり、桑名に移封となっている。
- 墓前祭・明治 43 年 5 月 13 日、第一回楽翁公記念会：巣鴨分院講堂。昭和 6 年まで定例で行われる。（昭和 4 年）以降、松平楽翁公遺徳顕彰会と東京市共催で江東区白河の霊巌寺で墓前祭が行われた。
- 南湖神社（祭神松平定信）：
  白河市の中目瑞男の首唱で、公の偉大な御遺徳を敬慕する白河市民を始め、各地の崇敬者の熱烈な至誠と、渋沢栄一の御尽力により、大正 9 年神社設立が認可され、大正 11 年御鎮座大祭が執行された。
- 松平楽翁公遺徳顕彰会（昭和 4 年 6 月 14 日）徳川家達総裁、渋沢栄一会長、平塚廣義（東京府知事）副会長、堀切善次郎（東京市長）副会長。講演会（三上参次）。展覧会：商工奨励館。
- 昭和 17 年 10.15.創立 70 周年記念式。来会者に「楽翁公心願書」コロタイプ刷り配布。

昭和 6 年 11 月 11 日　渋沢栄一逝去

- 昭和 8 年 5.13.楽翁記念会祭典取り止め。本院にて法要。各分院にて偲徳講話。
- 昭和 11 年 5.13.楽翁公記念会、外部関係者招待、法要、講演「楽翁の人格」（三上参次）。
- 昭和 12 年 5.13.第 27 回記念会、本院。楽翁公記念講演集 1（明治 43―大正 3 年）再版配布。
- 昭和 12 年 11.11.楽翁公伝出版　岩波書店、平泉澄・中村孝也編（生前の渋澤栄一の指示で準備が進められたが出版は逝去後となった。）
- 昭和 15 年 5.13.楽翁公記念会・本院。6.14.楽翁公墓前祭、本所公会堂。記念講演（国府犀東）。
- 昭和 16 年 5.13.楽翁公記念法要。6.14.楽翁公墓前祭、講演会「楽翁公時代の国防」（中村孝也）
- 昭和 17 年 6.14.楽翁公墓前祭、楽翁公を偲ぶ夕（日比谷公会堂）。講演会「経世家としての楽翁公」（中村孝也）。

東京都慰霊協会、養育院による松平定信公顕彰

●昭和 22 年、東京都慰霊協会が設立され、関東大震災、戦災罹災者の慰霊目的である。江東区の旧被服廠跡に、講堂、慰霊塔（三重塔）を有する。あわせて、東京の公共功労者の慰霊も行い、楽翁公顕彰会の行事も、事実上継承していた。昭和 45 年に楽翁遺徳顕彰会は解散し、慰霊協会に行事、財産を引き継いだ。この間・東京都慰霊会で、楽翁公関連講演会が行われ、その内容は前掲の小冊子に編まれた。

●昭和 30 年 5.13.楽翁祭記念講演会「楽翁公と近代日本」（藤井甚太郎）。

●昭和 34 年 5.13.松平楽翁祭､本院挙行(金子吉衛)。

●昭和 41 年 1.22.渋沢敬三が養育院に寄付した渋沢コレクションを東京都公文書館に寄託。

●昭和 41 年 4.28.月刊「楽翁」創刊、利用者報のタイトルとなったが、内容的には楽翁への言及は少ない。

松平定信墓・霊巌寺（江東区白河）





白河市南湖神社前の楽翁銅像

楽翁公記念講演集
1－4 巻



楽翁公記念会講演集目次

第１巻（明治 43 年～大正３年）

松平楽翁公頌徳の辞	安達憲忠
松平楽翁公と三日月池	安達憲忠
青年時代における楽翁公の逸話	江間政發
松平楽翁公頌徳の遺徳	渋澤栄一
楽翁公と青年の育成	井上友一
松平楽翁公入閣当時の事情	江間政發
松平楽翁公に就いて	渋澤栄一
松平楽翁公に就いて	阪谷芳郎
松平楽翁公の逸事について	三上参次
楽翁公の逸事について	富士川遊
七分金の由来	安達憲忠

第２巻（大正４年～大正 10 年）

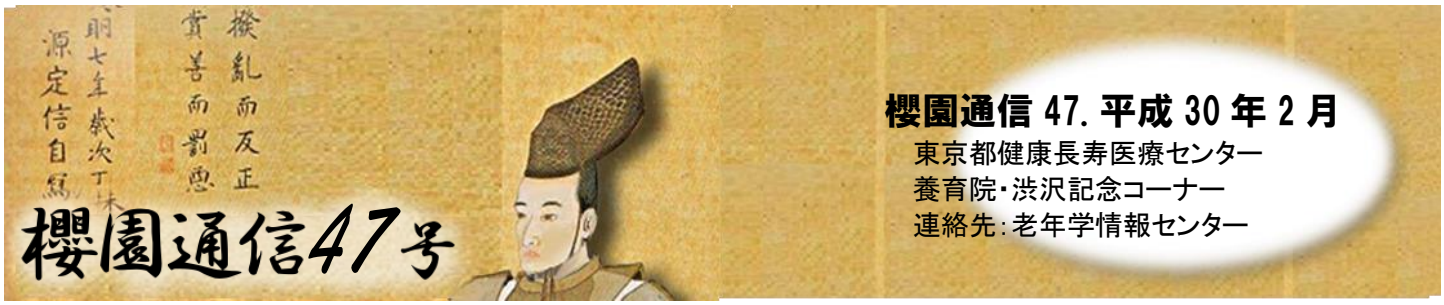
松平楽翁公の逸事について	佐久間長敬
松平楽翁公の逸事	戸川残花
所謂田沼執政時代に就いて	辻善之助
白河楽翁公と水戸文公	栗田勤

第３巻（大正７年～10 年）

松平の対外政策	井之邊茂雄
考古学上より見たる楽翁公	沼田頼輔
楽翁公の人格	三上参次
賢宰相楽翁公	黒坂勝美
楽翁公の心事	渋澤栄一
楽翁公の犠牲的精神	渋澤栄一

第４巻（大正 11 年～昭和 10 年）

孔子教より見たる楽翁公	宇野哲人
寛政の治について	滝　粛
白河楽翁公の遺著	渋澤栄一
経済史上より見たる白河楽翁公	中村孝也
楽翁公の寛政医学の禁について	花見朔巳
楽翁公の住吉奉・百種和歌に就いて	渋澤栄一
楽翁公に対する誤解	平泉　澄
楽翁公の壁書に就いて	渋澤栄一
白河楽翁公の伝記編纂について	渋澤栄一
徳川家康公と白河楽翁公	高柳光寿
松平楽翁公記念会に就いて	渋澤栄一
楽翁公の政治について	岩橋小耶太
皇国精神と楽翁公	松平稲吉



養育院の原資・松平定信の七分積金について

稲松孝思（顧問医）

松平定信（白河楽翁 1759*－1829）について

父は御三卿田安宗武。徳川吉宗の孫。安永3(1774)年陸奥国白河藩主松平定邦の養子となる。兄が亡くなり、絶家の危機の田安家への復帰は実現しなかった。養子に出し、復帰を妨げたのは、田沼意次の策略といわれる。

天明 3(1783)年白河藩主となり、天明飢饉に餓死者を出さず名君と讃えられた。

天明 6 年将軍徳川家治が亡くなり、一橋家の 15 歳の家斉が将軍となった。定信が田安家にいれば将軍になった可能性は十分にあり、将軍になり損ねたといえる。

天明７年江戸の大規模な打ちこわしを引き金に田沼派が失脚すると、老中に就任し、翌年、幼い家斉将軍を補佐し幕府の全権を掌握、寛政の改革を推進した。

大飢饉、百姓一揆・打ちこわしの激化、農村荒廃、幕府の財政危機、ロシアの接近など内外の深刻な危機打開のため、自分と妻子の命を賭けるとの決意を込めて難局に当たった（吉祥院歓喜天請願書）。

寛政の改革について

荒廃農村の再建、飢饉対策の米備蓄、七分金積立と町会所設立、人足寄場設置などの社会政策を採用した。

棄捐令により、困窮した旗本、御家人を救済。また、朱子学を正学とする寛政異学の禁を出し、湯島の聖堂を幕府の学問所として整備拡充し幕臣教育に当たらせ、医学館、和学講談所の整備など文教を重視。大政委任論を表明し、朝廷との関係を明確にして、京都御所再建では朝廷側の復古的造営要求に応えて幕府権威の強化をはかる一方、尊号事件では天皇の要求を拒否して公家を処罰した。

ロシア使節ラクスマンの通商要求に、鎖国は祖法であると表明し、江戸湾防備計画を自ら視察して立案。また北方防備のため北国郡代の新設など国防体制を模索。財政節減のため朝鮮通信使の延期・対馬聘礼も決定した。その政策には当初強い支持が集まったが、大奥などから次第に反発も強まり、しかも将軍家斉が成人し補佐役定信としっくり行かなくなり、寛政 5(1793)年辞職した。

老中失脚後の定信は、白河藩の藩政に専念する。幕政は定信の意を組んだ老中が運営、幕末まで影響力を残した。隠居後白河楽翁を名乗り、江戸に住んだが、浴恩園（現築地市場）を中心に文化活動に励み、多数の著書を残している。この間の文政 6（1823）年、松平藩は白河から桑名に転封となり、幕末に至った。

七分積金―町会所制度について

七分積金－町会所制度の成立、運用については、安達憲忠、川崎房五郎らの文献に詳しい。要するに天明の飢饉後の政情、米価の不安定に対し、寛政 2（1790）年に老中松平定信により構想が打ち出され、寛政 4（1792）年に町会所の籾倉の運用が始められた制度である。すなわち、自治、祭礼など町方の行事のために家持町人から徴収されていた町入用を節約させ、その７割に、幕府資金２万両を加え、籾の備蓄を行い、飢饉、災害時に困窮者の救済に備えたものである。その徴収と運用は、町の用達商人の自治組織である町会所で行い、幕府の町方勘定は立ち会うのみであった。幕末までに、向柳原、筋違い大橋内、深川大橋内、小菅村などに合わせて 43 棟の籾倉を運用し、また、土地を担保にした富商の金融資金として利用された。救済的土木事業なども行い、福祉的な制度としてはそれまでの世界に類をみないものであり、今日の福祉事業の魁（さきがけ）を成すものである。この制度は、明治三年まで引き続き、困窮者救済基金として莫大な額となっていた。

七分積金蓄積財産の明治政府への移管

大政奉還、鳥羽伏見戦争などの激しい政局の中で、江戸幕府は幕を下ろすことになるが、この局面で収拾にあたったのが、隠居して一翁を名乗っていた大久保忠寛である。左遷の身から、鳥羽伏見戦争後の事態収拾のため、徳川慶喜に会計総裁、若年寄（この時期老中は空席で実質的に事務を総攬する立場）に任じられ、勝海舟の背後にあって、江戸開城の実務を果たすことになる。いわゆる江戸無血開城時、田安家の徳川慶頼、若年寄の大久保一翁、陸軍総裁勝海舟は、大総督府に江戸の治安、静寛院（和宮）の安全確保を託され、上野戦争開戦まで、江戸の治安維持の責任も持つことになる。また、いわゆる無血開城時、徳川幕府の事務の代表として、幕府権力・財産、の大総督府への移管を果たすのである。また、上記の七分積金は、もともと町人のものであり、制度は従来通り運用することになった。

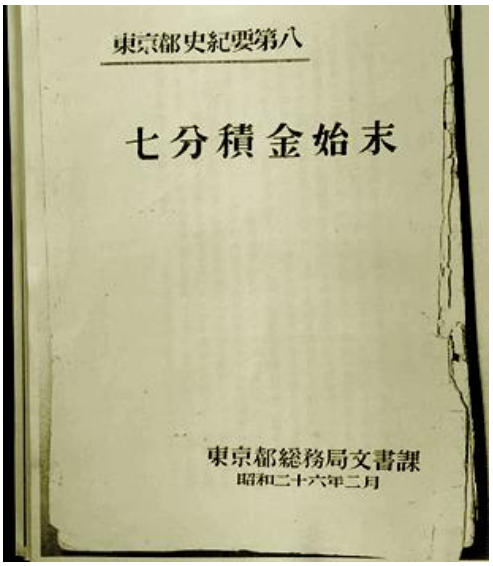
明治元（1867）年５月、鎮台府官吏の立会いで点検された、七分積金で蓄積された金穀は以下のとおりである。玄米296余石、白米193余石、籾320,710石余、現金 31,195 両余、貸付滞金 207,675 両余、別段貸付金 25,000 両、附属地 100 箇所余。上地 1,705 箇所（その後担保として得た土地は地租改正で名義獲得）。

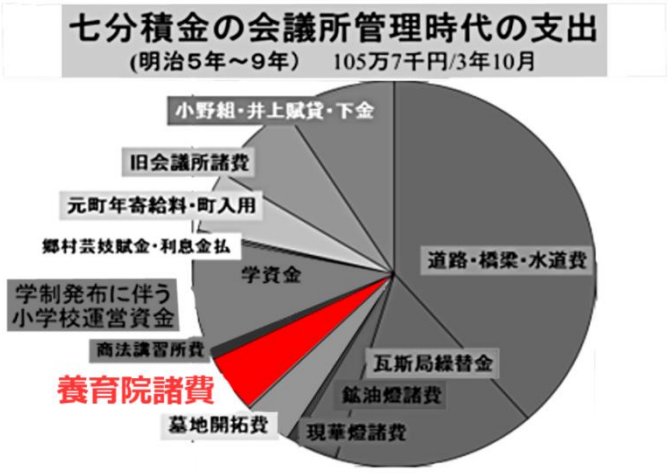
江戸幕府からこれらの財産・制度がそっくり明治政府に引き継がれたのである。

明治維新後の七分積金（共有金）の利用

昭和 30 年代に川崎房五郎氏の手になる『七分積金始末』と題されたガリ版刷りの古い史料がある。後に、東京都から出版された東京都市紀要『七分積金』のもとになるものである。この本に七分積金の収支がくわしく記載されている。

幕末までに莫大なものとなった七分積金の金穀は、明治２-３（1869-70）年の三田、高輪、麹町の救育所の運用に使われるなど、厳密に救貧目的に使用されている。一部は戊辰戦争の戦費として貸し出されているが、その後返金されている。明治 5（1872）年に大蔵大輔・井上馨の内諭により、町会所・七分積金は、営繕会議所・共有金に名前を変え、橋梁建設、瓦斯灯建設などの都市基盤建設にも使用されることになった。





上記の円グラフは、共有金と名前を変えた後の使途をまとめたものである。学制発布時の東京の小学校制度の立ち上げ、養育院設立、商法講習所運営、公共墓地開拓など、大久保一翁府知事の府政の中で使用されている。馬車の普及による橋梁や道路の損傷対策、夜の東京を明るくするための街灯建設など、文明開化への渋沢の夢の実現にも利用されている。このとき渋沢は明治政府の大蔵省・改正掛長であり、井上馨の腹心の部下である。

渋沢は大蔵省退官後、明治７年からは、大久保府知事に、この共有金の運用を託されている。このことが、渋沢栄一が生涯にわたって“養育院”にこだわり続けるきっかけとなっている。

画期的だった 養育院附属病院の リハビリテーション導入



櫻園通信 48. 平成 30 年 2 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

山本信行
介護老人保健施設 四季の里

昭和 47（1972）年頃の養育院附属病院：現在の東京都健康長寿医療センターの沿革は、明治５年に設立された『養育院』に遡ります。その時代ごとの社会的要請に応じて福祉・医療の役割を担ってきました。今から半世紀近く前になりますが、1970 年頃、将来の高齢者時代を見据えた東京都の方針転換で、養育院の運営形態が大きく変わりました。それまで養育院の施設利用者を主な対象とした養育院附属病院は、一般都民に開かれた高齢者専門の病院に転換し、老人総合研究所を併設、従来からの老人施設も拡充する方向になったのです。このための新病院の役割として、高齢者を対象としたレベルの高い医学知識の蓄積、治療レベルの向上でした、そのための人材の確保、最新医学検査機器の導入でした。また、当時まだ知られていなかったリハビリテーション医学を重視し、アメリカで専門医として活躍していた荻島先生、ＰＴ、ＯＴ、ＳＴ、心理士の導入でした。このときＰＴとして活躍した山本さんが、当時のことを紹介してくれました。〔稲松孝思〕





私は昭和 47 年。**東京都養育院附属病院**開設時、理学療法士の養成学校に入学しました。

昭和 50 年卒業時、先輩に**「65 歳以上はリハビリの適応ではない」**と言われた私は、65 歳以上を対象とした病院に就職しました。

小児・成人は将来があり、リハビリで回復させる意味があるが、老人は先が無くリハビリを行っても意味が無いと専門職でも考える者がいた時代です。

配属されたのが、リハビリテーション（リハ）部**理学療法（PT）**科でした。

1 名の PT 採用すら困難と言われた時代に、10 名を超える PT だけでなく、作業療法士、言語聴覚士、臨床心理士、義肢装具制作士がおり、それぞれに広い訓練室が用意されていただけではなくすでに、リハの中にデイホスピタル（今の通所リハ）がありました。

当時、リハは医療行為の後に位置すると考えられていましたが。**なんとそのリハが病院の 1 階に**、一般診療外来が 2 階にありました。

老人リハの中心が、地方の温泉病院であった時代に、**リハを前面に押し出した老人の総合病院**がなぜ都心にできたのか？この疑問を解き明かしてみたいと思い、当時の状況を調べてみました。

◆

老人のリハは、脳卒中から始まり、当時は肺炎で亡くなられる者が多かったが、抗生物質が普及してからは、命が助かった後も、3 ヶ月間の安静を必要とすると考えられていました。そのために、寝たきりによる拘縮、褥瘡など廃用症候群や残された麻痺への対応が問題となっていました。脳卒中リハは、昭和 31 年鹿教湯温泉療養所からとされ、昭和 49 年診療報酬改定まで診療報酬はほとんど無いに等しかったようです。

リハを行うには、広い訓練室とリハ職を雇う必要があり、都心では、地価が高く老人リハの病院は建設が困難であったため地価が安く、生活費、人件費の安い地方の温泉地に老人リハ病院は作られたようです。

欧米ではリハは都市型でした。それは、欧米の病院が国公立、協会などの非営利組織によるものが基本であったためで、日本では病院数の８割、病床数の９割を民間病院が占め、民間での都市型は採算がとれないためでした。

都市型リハ病院がなぜ必要であったのか。

脳卒中後リハを行うため、地方の温泉病院に移送するには、それに耐えるだけの身体的条件が満たされるまで待つ必要がありました。

その間に廃用（過度の安静・運動不足による心身の機能低下）が進み、転院後も廃用の回復から始めなくてはならないため、温泉病院での入院期間も長くなりました。

退院後都心からの外来通院は困難であるため、自宅復帰までの回復にはより長い入院期間を要しました。この為入院待ちの待機患者も増加しました。また、退院後の職場復帰、地域社会復帰の課題に直接対応できなくなっていきました。

都市型のリハ病院であれば、早期からリハを始められ、退院後外来通院が可能であり、職場復帰、地域社会復帰に対応が可能になりました。

都心に老人総合病院を作っても、リハが無ければ、寝たきりで、自宅退院ができない患者で占め、病院が機能しなくなる可能性があったとも考えられます。

75 歳以上の老人医療費無料化を行なった美濃部都知事の時代、板橋キャンパスには約 1 万坪の土地がありました。人が集まる場所で、人件費、収益の補填を非営利組織の東京都であれば可能であったことから、リハ機能を持った病院を都心で作ることが出来たと考えられます。

◆

当時を知る蔵本先生（元病院長）によれば、東京都の新規事業として、昭和 43 年施設内診療所から都民に開かれた老人専門病院の設立が計画されたそうです。

新しい病院では、元々あった第一診療部（内科系）、第二診療部（外科系）以外に、新規事業とし研究検査部、核医学放射線部、リハビリテーション部の設置が計画されました。

リハビリテーション部はこれからの高齢者の増加に伴って、その自立機能を保持する重要性が認識され、**総合的なリハビリ部門**が計画されたと伺いました。



リハビリ病棟の浴室



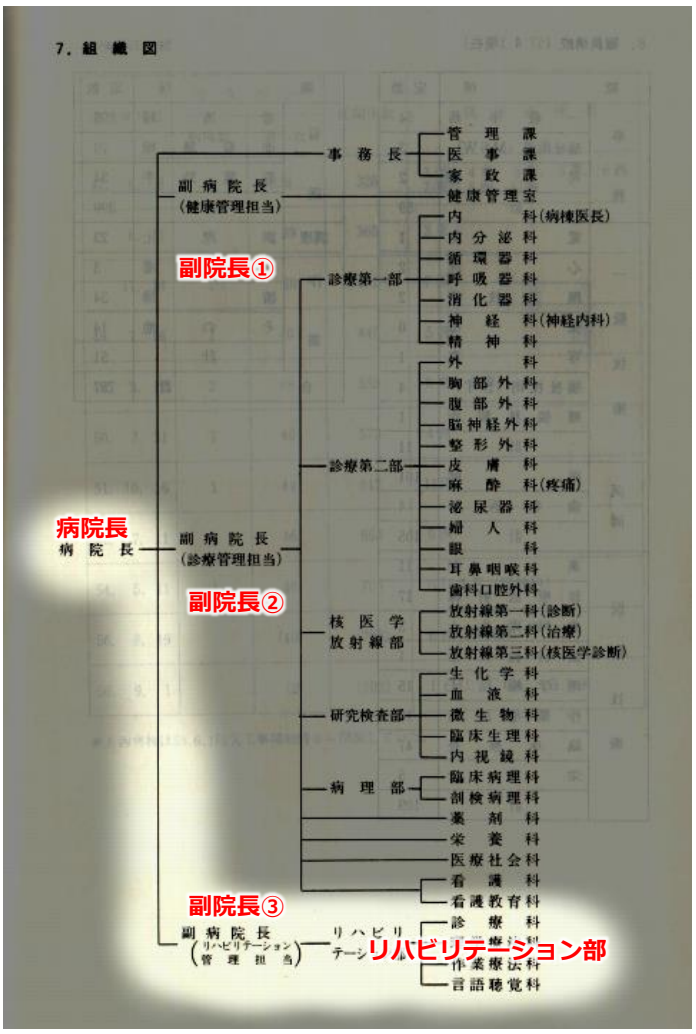
撮影
昭和 47 年



リハビリ ADL 室

リハビリテーション部の位置づけ

「東京都養育院附属病院-最近 10 年の歩み-」（昭和 58 年）より



櫻園通信 49. 平成 30 年 8 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター



元陸軍兵器工場の寮で始めた
終戦後の養育院附属病院

文・編集　宮本孝一　老年学情報センター
資料提供　玉越慶弘　養育院・渋沢記念コーナー維持ボランティア

1945 年（昭和 20）終戦
1946 年（昭和 21）元陸軍造兵廠大山宿舎に医務課（養育院の病院部門）を開設
1947 年（昭和 22）医務課を**養育院附属病院**に改称

※1958 年（昭和 33）元陸軍造兵廠大山宿舎を国に返還



陸軍造兵廠大山宿舎（北区戦後 70 年誌　記憶が紡ぐ平和への願い　北区役所総務部　平成 28 年発行より）

1958 年（昭和 33）本院敷地に養育院附属病院開設



1972 年（昭和 47）養育院附属病院　改築



1986 年（昭和 61）東京都老人医療センターに改称

2009 年（平成 21 年）地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター発足

2013 年（平成 25 年）新病院に移転



現在の敷地にあった養育院本院は、昭和 20 年のＢ29 による空襲で、施設の 9 割を焼失しました。

終戦後、すぐに復旧することは難しかったため、軍の施設での事業再開が図られました。最も急を要していたのは病人の治療・入院体制の確保でした。

昭和 21 年、板橋区内にあった元陸軍造兵廠の宿舎を使って養育院本院の病院部門**医務課**が再開されました。翌年、医務課は**養育院附属病院**と改称されます。敷地にはレントゲン室（昭和 23 年）や手術室（昭和 25 年）も新たに作られました。

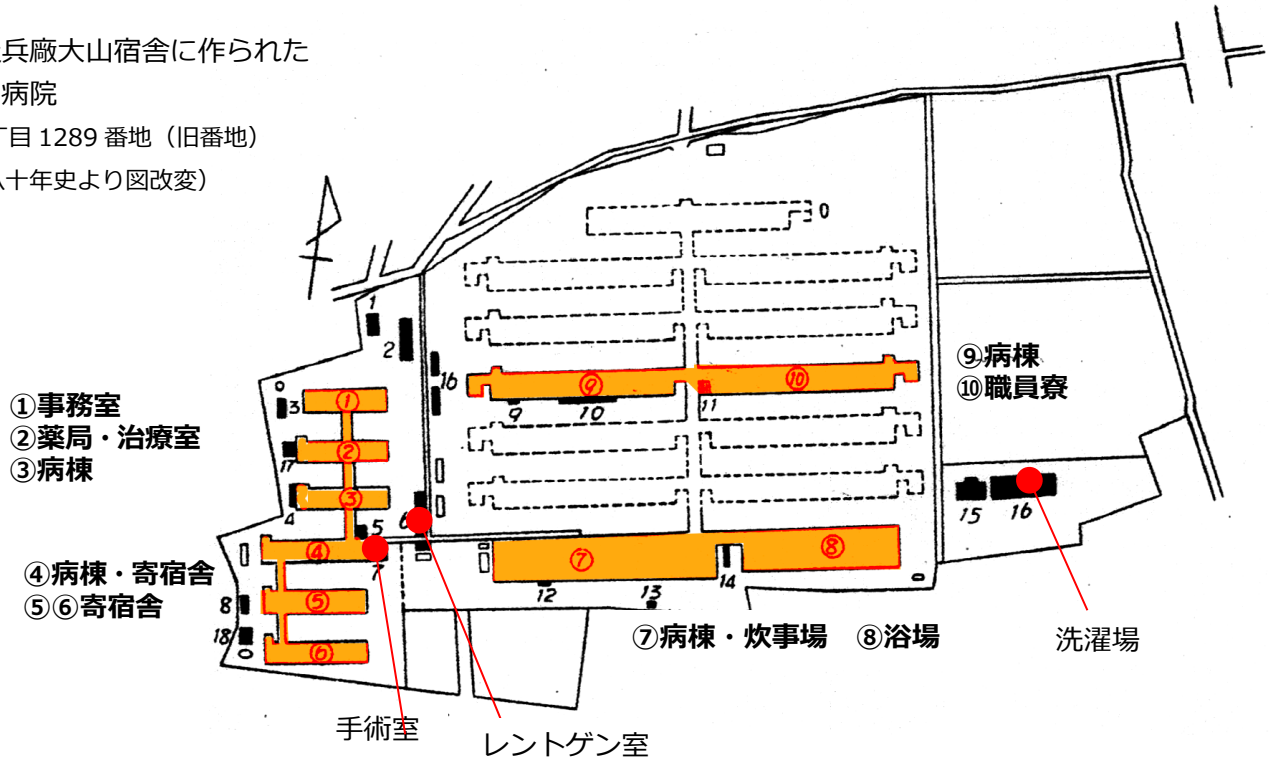
開設直後から在院の患者年間約 600 名のほか院外からの外来患者も受け入れ、多忙を極めました。長期入院の患者も増え、新しい患者を受け入れることも困難でした。また、宿舎の建物は木造で老朽化が激しく、防火上の不安がありました。そこで昭和 25 年に、新病院建設の検討が始まります。

新しい附属病院は、現在の敷地の中に昭和 33 年に開設。同時に大山宿舎は国に返還されました。

昭和 40 年代になると都内の寝たきり老人の増加が問題視され、都で老人専門病院設置（老人病と老化の基礎研究を行う研究所を併設）の検討が始まりました。その結果、養育院在院者専用病院ではなく一般都民を対象とした病院として、昭和 47 年に新たな**養育院附属病院**と**東京都老人総合研究所**がスタートしました。

養育院附属病院を改称した**東京都老人医療センター**と**東京都老人総合研究所**は、平成 21 年に経営統合し、現在の**東京都健康長寿医療センター**になりました。

陸軍第一造兵廠大山宿舎に作られた
養育院附属病院
板橋区 4 丁目 1289 番地（旧番地）
（養育院八十年史より図改変）





google マップより



google マップより
航空写真

現在の旧養育院附属病院跡地
板橋区幸町 45 番地（現在の番地）



櫻園通信 50. 平成 31 年 2 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー

明治６年に建立の大雄寺の養育院『義葬之冢』について

稲松孝思

養育院は明治５（1872）年に創立された東京の福祉・医療施設である。当初は鰥寡孤独の人を収容する施設であったが、150 年近い歴史の中で各種福祉・医療施設に発展分化した。その歴史については、養育院 60 年史、70 年史、80 年史、100 年史、120 年史が編まれている。大久保一翁がその設立に、渋沢栄一が、半世紀以上に亘ってその維持・発展に大きく貢献している。「養育院」の文献資料の一部は残されているが、明治・大正期の建造物など、施設の多くが木造であり、関東大震災、先の戦災、施設の引っ越しなどで、形あるものはほとんど失われている。同時期に渋沢が関与して創設された富岡製糸場が、今日、世界遺産として残されているのと好対照をなす。そこで、僅かに残されている養育院史を語る、“形ある物”のうち、もっとも古い、谷中の大雄寺にある『義葬乃冢』について述べる。

黎明期の養育院

明治５年 10 月､ロシア大公アレクセイを国賓として迎えるに当たって、急遽収容された浮浪者を本郷の加賀藩上屋敷の空き長屋（現東京大学）に収容した事が、養育院事業のはじめとされる。五日後に収容者は浅草溜に移され、長屋は事務所として使用されたが、その痕跡はない。明治６年２月、上野の護国院の一部（現東京芸術大学美術学部）を買い取って恒久施設を建設し、大久保一翁府知事が開院時に視察しているが、その痕跡もない。漢方の町医村上正名が任用され、健康問題に対応したが、同年 12 月までに 104 人が死亡した。遺骨の引き取り手がなく、賄方赤井善蔵の菩提寺、台東区谷中の真言宗・大雄寺に葬り、「義葬之冢」が建てられた。この「義葬之冢」が、明治初期の養育院を語る唯一の“形ある物”である。

- 明治5年10月､ロシア王子アレクセイの来日（国賓）
- 東京府内の浮浪者を加賀藩上屋敷空長屋に250人収容
- 5日後､浅草溜め移管､長谷部
- 明治6年2月､上野･護国院の一部を購入､改装し養育院恒久施設開院
- 大久保一翁東京府知事視察
  - 鰥寡孤独廃疾の者を収容
  - 養育院掟書:伍長規則､看護人規則､患者の心得､食堂規則､浴室規則･･･
  - 賄:赤井善蔵
  - 町医:村上正名､医療担当
- 引き取り手のない遺骸を赤井家の菩提寺大雄寺に埋葬
- 明治6年12月合葬塚建立　104名



大雄寺（ダイオウジ）について

大雄寺は、台東区の谷中霊園の近くにある日蓮宗の寺院であり、地図に示すように、ＪＲ日暮里駅より徒歩８分のところにある。慶長９年(1604)、神田土手下に創建され、万治元年(1658)に現地へ移転。境内には、推定樹齢 200～300 年の都内最大級のクスノキ（幹回 6.2m、樹高 13m、枝張 12m)があり、「台東区みどりの条例」保護樹木に指定されている。春には枝垂桜が美しく、四季折々の風景を楽しめる。幕末の三舟の一人、高橋泥舟のお墓がある。

明治５年に「養育院」が作られたとき、その賄を赤井善蔵が受注した。養育院収容者が亡くなり、御遺体の引き取り手が無い場合、赤井が、自身の菩提寺である大雄寺に頼み込み、葬ったのがそのはじめである。境内には赤井家の大きなお墓がある。

左手の墓地の奥に、隣との境界のブロック塀に接してお墓がある。高さ 151ｃｍの扁平な角柱型の三段墓である。正面には『義葬之冢』と彫ってある。無縁墓の意であるが、「義葬」・・・に、この塚を作った人の思いがにじむ。隣家との境のブロック塀に近接する墓石の裏に、なにやら彫ってあるが、全体は読めない。狭い空間にカメラを差し込んで、何とか全体を判読した。『明治六年葵酉始養窮民於養育院其死者葬此』と彫ってある。「明治６年に養育院ではじめて窮民をお世話したが、そこで亡くなった人をここに葬った。明治６年」という意味である。

住職にお願いして寺の過去帳を拝見した。古ぼけた霊簿に当寺に葬られた諸霊が墨書されているが、その中に養育院関係の 104 名の記載がある。



年齢、性別なく、戒名は 6 名に付され、他は俗名である。姓はなく、吉蔵や常女などの名前だけが記載されている。名前から性別を推測すると、男 81 名、女 22 名、不明 1 名である。

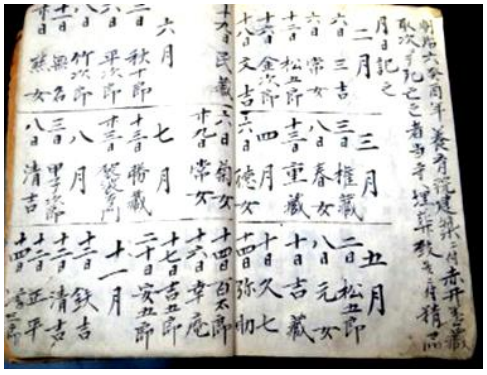




義葬之冢　背面の記載
明治六年葵酉始養窮民於養育院其死者

ちなみに養育院 60 年史を紐解き、年齢記載がある 22 名の死亡者についてみると、1-20 歳　3 名。21-40 歳　11 名歳、41-60 歳 5 名、61-80 歳　6 名、不詳　1 名であった。この義葬之冢は養育院創立当時の唯一の遺構である。長年この塚を東京都で維持し、春秋に香華・卒塔婆を手向けてきたが、養育院廃止に際し永代供養の手続きをした。平成 22 年には『養育院を語り継ぐ会』の由来碑が立てられた。

なお同寺境内には、勝海舟、山岡鉄舟とともに、幕末の三舟と言われる高橋泥舟も葬られている。勝、山岡の幕末における活躍は有名であるが、高橋はあまり知られていない。本名は高橋精一郎であり、山岡鉄舟の義兄にあたる。旗本の槍の名人で、徳川慶喜の側近であった。江戸開城交渉で西郷との交渉を勝に託されたが、慶喜の警護役のため、交渉を山岡に託したという。維新後は、徳川家に節を通し、骨董の鑑定や書を以って糊口とした人である。ちなみに、旧旗本であった、勝麟太郎：海舟、山岡鉄太郎：鉄舟、高橋は“かちかち山の泥舟さ！”と「泥舟」と称した。3 人とも書を良くし、維新後は多数の墨蹟を残したため幕末の 3 舟といわれている。ちなみに大久保一翁（勝海舟を世に出した人、江戸開城時の若年寄、養育院を作ったときに東京府知事）は石舟（？）、幕末、明治初期の外交官として活躍した田辺太一（遣米、遣欧、岩倉使節団）は蓮舟、木村喜毅（咸臨丸提督、幕末の勘定奉行）は芥舟と号している。幕末に江戸幕府の高官であった人たちの号の舟尽くしに、なにやら意味深長なものを感じている。





櫻園通信 51 号

櫻園通信 51. 平成 31 年 2 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー

板橋の養育院キャンパス　　稲松孝思

「養育院」は、1872（明治5年）に大久保一翁府知事の時に作られた、身寄りのない困窮者を保護する施設である。その維持、発展には半世紀を越える渋沢栄一の尽力が大きく貢献している。養育院運営の中枢である本院は、本郷⇒上野⇒神田和泉町⇒本所長岡町⇒大塚辻町と転々としている。大規模化し、目的に合わせた分院が次々と設置されたのは、東京市営となった大塚本院の時代である。渋沢養育院長のもとで、幹事の安達憲忠や田中太郎、医師の入沢達吉、光田健輔らの尽力でなされたことである。また、大塚が繁華になり、施設の大型化に伴い手狭になったため、大塚の敷地を売却し、多方面からの寄付を集め、板橋の地主の協力を得て、広大な土地を確保した。1914（大正3）年に慢性疾患患者（結核）用に板橋分院を東武東上線の西側に開設した。引き続き東側の競馬場跡地の南側に、本院の移設工事を行っていた。新築完成直前の1923（大正12）年に、関東大震災で、大塚本院が壊滅したため、急遽本院を板橋に移転した。

板橋に移転後、渋沢の貢献を顕彰する東京市民の会が作られ、1925（大正 14）年に台座を含めて高さ 8m の巨大な銅像が作られた。除幕式には渋沢本人も参列し、銅像の前で謝辞を述べている。写真は新築の板橋本院を背にする渋澤銅像である。

昨年、旧養育院職員の営繕課長を勤めた故金山栄治さんのご遺族から、「養育院建築史」と関連資料を寄託された。養育院 100 年史の基礎資料として作られた手書きの資料である。その中に、1970 年ころまでの、板橋キャンパスの推移を書いた興味深いものがあった。その後、独立法人化に伴う大きな変化もあるが、それを含めて板橋キャンパスの変遷についてまとめてみた。

板橋キャンパス
1940（昭和 15）年ころまでの変遷

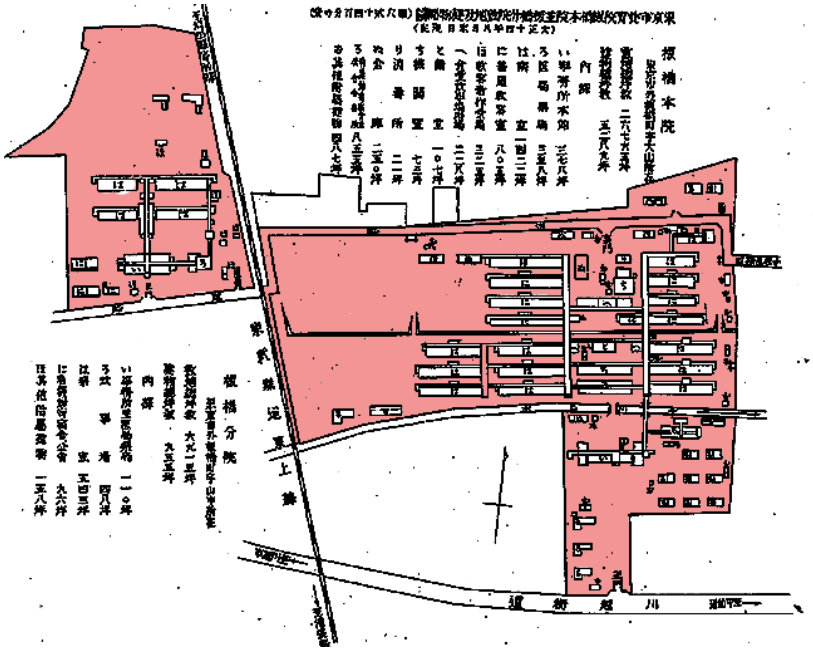
大正 14 年に板橋本院が完成したころの地図を示す。旧川越街道に面して、本院事務所。銅像を中心とした庭園、職員宿舎、楽翁亭が作られた。敷地内を貫く千川用水を隔てて、老人ホーム（恵風寮4棟+食堂）、育児室、礼拝堂、家族室、自習寮、ボイラー室、防火壁などが 30 棟ほどの建物が作られている。本院から施設に行くために千川用水に橋がかけられた。昭和5年に千川用水は暗渠化され、都市計画道路（養育院通りが作られ、用水の橋は道路をまたぐ上屋附陸橋となった（櫻園通信 16 号）。

“養育院”とは

精神病、ハンセン氏病、児童福祉、高齢者福祉などで専門の施設に発展し、そのことが、日本の医療・福祉の歴史になっている。

- 時代の求めに応じて、医療・福祉事業を展開
  - 狂人病室設置（明8）⇒ 癲狂院 ⇒ 巣鴨病院 ⇒ 松沢病院
  - 捨児・迷子の養育（明18）里親・職親制度、児教育、幼童室
    ⇒巣鴨分院⇒石神井学園
  - 回春室：ハンセン病（明32） ⇒多摩全生園、長島愛生園など
  - 結核病室（明22）⇒勝山保養所、安房分院、板橋分院
  - 感化部（明38）⇒井の頭学校 ⇒ 萩山実務学校 、八街学園
  - 安房臨海保養所・分院（明33）：虚弱児 ⇒船形学園、
  - 長浦更正農場(昭17)：障害児 ⇒ 千葉福祉園
  - 看護養成所（明29） ⇒ 板橋看護専門学校





また、東上線を超えた西側の敷地には、慢性疾患患者の板橋分院があり。昭和 10 年に外来診療棟で一般住民の診療も始めている。男子病棟 6 棟、女子・児童棟3棟、回復期棟 1 棟、隔離病棟 1 棟、分室等 4 棟。地域住民の訴えで、周辺は高い塀で囲まれていた。大正 14 年の段階で板橋本院は敷地総坪数 26.535 坪、建物 5.289 坪、板橋分院敷地 6915 坪、建物 955 坪であり、大塚本院の敷地 15.090、建物 3560 坪と、倍以上の広さになる。



北部大空襲(昭和 20 年 4 月13日)

米軍の B29 による焼夷弾の無差別爆撃の洗礼を受け、板橋本院の建物 78 棟 5.627 坪、ボイラー、厨房設備、附属工作物など、9割の建物が灰燼に帰し、当日の在院者 1.599 人中、107 人の犠牲者を出した。焼け残ったのは、恵風寮と育児室のみの1割程度の建物であった。この日の北部大空襲では都民 2459 人の死亡が報告されている。

焼け跡からの復興

終戦当時の在院者は従来からの 1200 人程度であったが、これに加え、戦災被害者、戦後の外地引揚者、戦災孤児などの新たな収容が求められ、昭和 20 年末の在院者は11422人を数え、若年者も多く混乱を極めた。昭和 21 年には元陸軍造兵廠大山宿舎を医務課・養育院附属病院とし、昭和33年に、板橋区栄町に新病院が出来るまで稼動した。(櫻園通信 49 号)。

また、第一陸軍練馬造兵廠への本院移転も模索されたが、GHQとの関係でうまくいかず、一部を使用して昭和22年 12(9)月に練馬分院を稼動させた。開設1ヵ月後の在院者は 232 名、昭和27年3月には 486 名であった。昭和 30 年に東村山分院完成後、収容者は移り、練馬分院は閉鎖された。(櫻園通信x)

戦後の特殊事情として、昭和 21 年には上野などの浮浪児化した戦災孤児を毎月2～3 回、40～50 人程度収容した。逃亡者が続出して 35%に上り、逃亡を阻止する様にとの GHQ の指示で、竹囲が作られた。

板橋区の都市計画との葛藤

養育院は、戦災跡地に新しい施設を建てることを検討していた。一方、板橋区ではこの機に養育院を移転させ、跡地を公園などにする都市計画を提案し、養育院施設を追い出すキャンペーンが張られた。種々の困難な協議が行われた。昭和 24 年 4 月の協議会におけるGHQ民生局のキャロー女子の発言で、養育院の現地復興が決定し、用地の一部を、学校、文化施設、公園用地を割譲することで、妥協が図られた。この辺の事情については、櫻園通信 52 号の金山氏の記録に譲る。なお、戦後、アメリカの大量のララ物資の供与、慰問団の訪問が行われている。また、皇室の高松宮、梨本宮妃、が訪れ、昭和24年3月には、昭和天皇ご夫妻が行幸された。東京の代表的な福祉施設である養育院の民生上の重要性を考えた判断と思われる。

昭和 47 年の板橋の養育院

東京都の中期計画で美濃部都知事の時代に、将来の高齢化時代を見据えた計画が実施された。従来からの養育院高齢者を対象とする老人ホームを維持する一方、一般都民をも対象とした 11 階建ての新病院、老人総合研究所、板橋ナーシングホームなどの新規高齢者施設が次々建てられ、板橋の養育院事業は老人問題に特化して行く。また、板橋分院は、看護学校、職員寮、一部病院の建物となった。病院−高齢者施設−研究所の三位一体の運営が試みられた時代である。昭和 50 年ごろの各施設の模型を写真に示す。またこの時期に、東村山に養育院分院、第二附属病院が作られ、養育院事業のひとつの柱となった。



養育院の廃止と関連施設の独立法人化

平成 10 年に、養育院の本院機能は新宿の都庁に移り、養育院条例は廃止された、東京都は、都立病院、福祉施設、研究所

の全都的再編を行い、その中で、養育院の板橋施設は、平成 21 年に地方行政独立法人東京都健康長寿医療センターとなった。高齢者の急性期病態に特化した病院と研究所を合体させたセンターである。新センターの建設、板橋看護学校移転、公設民営化の老健施設クローバーの里が設置された。また、区民用の自転車置き場、周辺道路用地など、用地の蚕食が続き、余剰地は東京都の用地として、利用方法が模索されている。新たな高齢化時代への対応を地域の医療機関、福祉機関との連携で、進めてゆくことになるが、その行方を渋沢銅像は見つめている。養育院一渋澤の精神を生かした施設建設が望まれる。

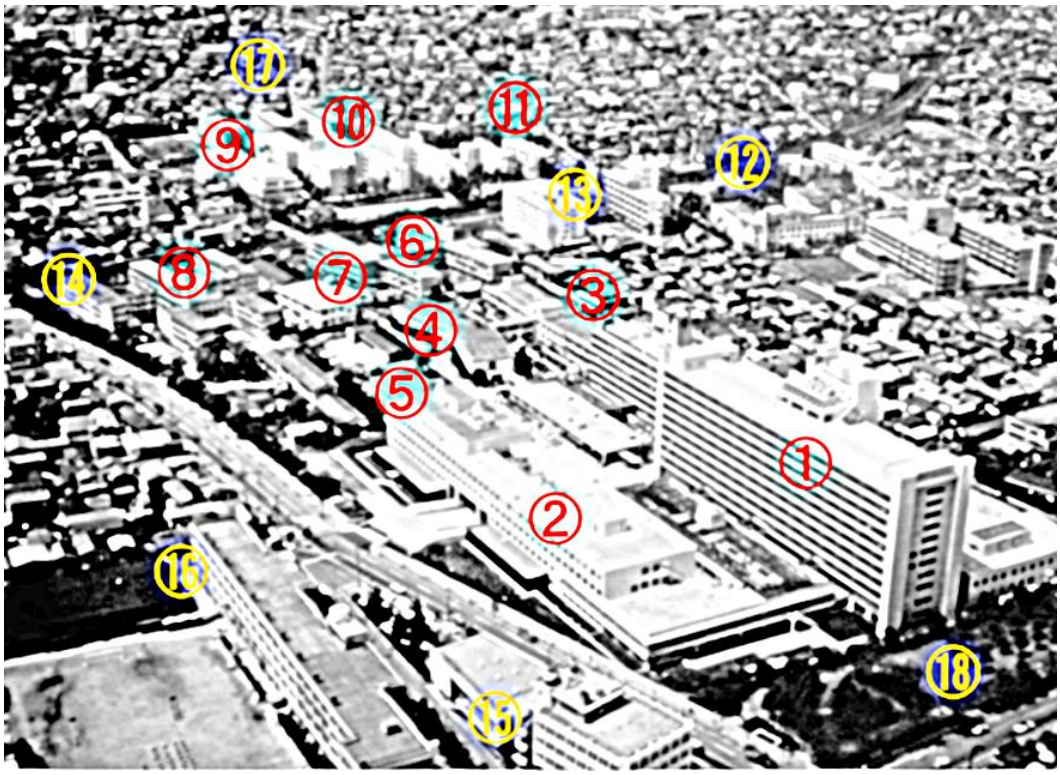
昭和 30 年ころの養育院用地の板橋区への移譲

板橋一中、板橋大山公園、文化会館などが作られた

養育院用地
1945→1960



昭和 50 年ころの板橋キャンパスの全景



①旧老人医療センター　②旧東京都老人研究所　③旧板橋ナーシングホーム　④旧旧東京都養育院付属病院
⑤養育院講堂　⑥恵風寮(老人ホーム)　⑦養育院作業棟　⑧明々寮(老人ホーム)　⑨板橋看護学校
⑩養育院看護・保母寮　⑪医師公舎　⑫豊島病院　⑬豊島看護学校　⑭養育院前交番　⑮板橋産業文化会館
⑯板橋第一中学校　⑰御茶ノ水大学寮　⑱板橋公園

健康長寿医療センターの敷地

旧養育院用地（1940）と健康長寿医療センター（2019）
①→②→③→④→⑤は渋沢栄一銅像の位置の変遷を示す。



手前は老人医療センター・老人総合研究所
左奥の建設中の建物が、現東京都健康長寿医療センター




元祖ヒポクラテスの木
（ギリシャ　コス島）

西洋医学の源流から時空を超えてやってきた 生きた遺跡

櫻園通信 52.　平成 31 年 2 月

東京都健康長寿医療センター
養育院･渋沢記念コーナー

稲松孝思　顧問医
宮本孝一　老年学情報センター

東京都健康長寿医療センターの大きな白い看板のうしろに、プラタナスの木が植えられています。センターの新施設建設・移転の際にこの場所に植えられました。

この木はもともと、東京大学医学図書館（文京区本郷）の前にあるプラタナス（ヒポクラテスの木）の下に生えていた実生苗でした。2012 年に許可をもらって苗を入手し、写真のように植木鉢で育てて、リハビリテーション前の屋上庭園に地植えし、2014 年春に現在の場所に植え替えました。

東大の木は、1976 年にギリシャのコス島から入手した苗が育ったものです。さらにその親の木は、ヒポクラテスの生まれたコス島の、西洋医学の源流となった場所に立つプラタナスの木です。西洋医学に大きな影響を残し、今も「医聖」「医学の父」と呼ばれるヒポクラテスが、その木の下で医学教育を行ったとされ、**ヒポクラテスの木**と呼ばれています。

東京都健康長寿医療センターの正門脇で育っているプラタナスは、西洋医学の源流からはるばるやってきた“生きた遺跡”なのです。（櫻園通信 11 号　2014 年）

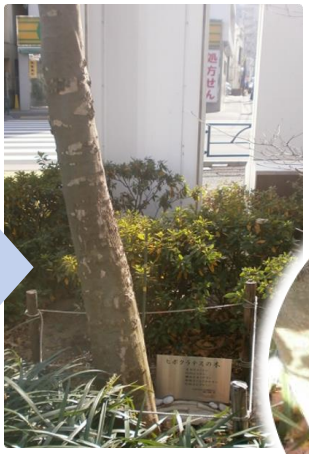


2012 年から育てられた健康長寿医療センターの**ヒポクラテスの木**の、2019 年現在の姿をみてみましょう。



撮影 2014 年 4 月





撮影 2019 年 1 月

細い苗を支えていた支えの棒を、成長した幹がのみこんでしまいました。



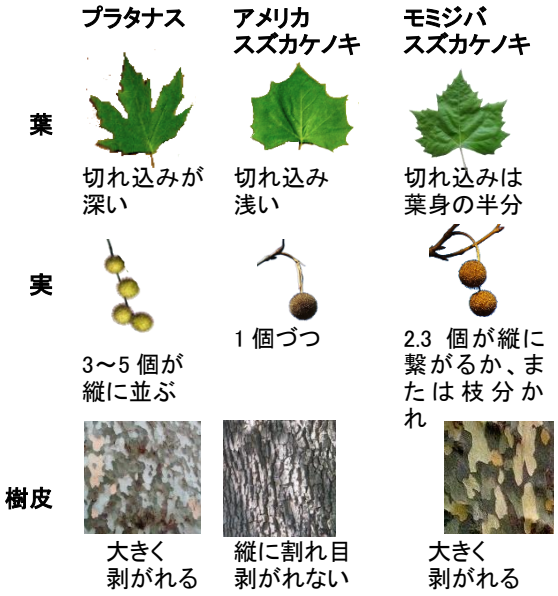
植えた時に指の太さぐらいだった幹は、だいぶ太くなりました。
木の高さも、センターの大看板を越える高さに成長しています。

プラタナス（スズカケノキ）は大別して 3 種類あります。（櫻園通信 12　2014 年）。

①プラタナス･･･ヒマラヤ原産。ヨーロッパにも分布。**ヒポクラテスの木**もこの種類。

②アメリカスズカケノキ･･･北米原産。

③モミジバスズカケノキ･･･①と②を、18 世紀のイギリスの植物ハンターが、庭に並べて植えておいたら自然交雑して出来た雑種です。その後、品種改良され、2 種の遺伝子が混ざりあった多くの株が作られましたが、これらを総称してモミジスズカケノキと呼ばれます。





赤･･･1 つの柄に 3、4 個ぶらさがるヨーロッパ型
黄･･･2 個づつぶらさがるモミジバ型
その他･･･1 つの柄に 1 個

日本各地に植樹された**ヒポクラテスの木**の子孫は、挿し木で増やされたもの、実生苗から育てた木など、日本全国の医育機関などに 100 本以上植えられています。その、葉や実や幹を仔細に見ると、それぞれに異なる点があり、アメリカプラタナスの遺伝子が混じっているようで、ギリシャの親木の単純なクローンではないようです。

健康長寿医療センターの**ヒポクラテスの木**はどうでしょうか。写真は葉が落ちたあとに撮影したものですが、中東型（縦に数個）、アメリカ型（1 個づつ）、モミジバ型（2 個セット）が混在しています。もっと早い時期に観察した時も 3 通りの実が見られました。

幹の樹皮をみると、タテに細かくひび割れるアメリカ型と、不定形に剥がれる部分とが混在していました。全体的に見ると、若い木のせいか樹皮が剥がれていない部分が目立ちます。プラタナスの樹皮に種の違いが顕著に表れるのは老木になってからです。



同じ幹で、場所により樹皮の形状がちがっている

ヒポクラテスは 2000 年以上昔の人で、ギリシャの**元祖ヒポクラテスの木**も何代目かの子孫です。健康長寿医療センターの**ヒポクラテスの木**も単純なクローンではなさそうです。

医学の道も、時を経る中で、少しづ変わってゆくのでしょうか・・・

なお、実は集合果で、その形からスズカケノキとも言われます。



スズカケとは、
山伏が着る装束の名前

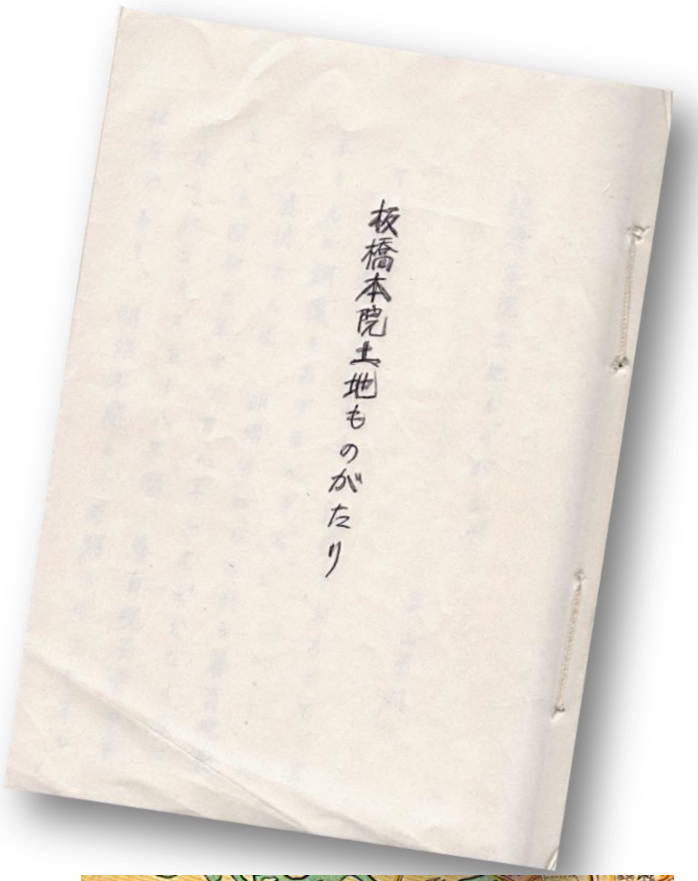


板橋本院 土地ものがたり

櫻園通信 53. 平成 31 年 3 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター
稲松孝思　宮本孝一

旧養育院職員であった故金山栄治さんのご遺族から、**養育院建築史**と関連資料、そして**板橋本院土地ものがたり**と題した手記がセンターに寄贈されました。形見品の散逸を恐れ、保存してもらえないかとお持ちくださいました。

金山氏は大正２年のお生まれで、長く養育院関連施設に勤務し、課長職で定年を迎えました。



板橋本院土地ものがたりは、手書きの手記を糸で綴じた小冊子です。手記の終半に「昭和四十五年吉春稿」という記載があります。

養育院の勤務を終えて帰る途中の金山氏が「**養育院は澁沢さんの銅像をおろして、宮本さんの銅像をあげるべきだ**」と語る老人に出会う場面から話が始まります。

宮本さんとは誰なのか？板橋の養育院とどんな関係のあった人物なのか？「渋沢銅像をおろせ」という老人は何者なのか？

渋沢栄一を尊敬してやまない金山氏はたいへん驚き、その老人の意見に立腹します。

そして、養育院本院の経緯をあらためて調べることにしました。

■

大塚にあった養育院本院が関東大震災で被災し、板橋競馬場があった広大な荒地が移転先に選ばれると、地元の多くの地主が反対運動を始めました。

東京府議会議長花井源兵衛氏や**板橋町長宮本知達氏**の支援を頼って地主の説得が進められましたが、用地獲得は非常に困難な道のりでした。金山氏はこの手記に当時の事情を綴っています。

地主と養育院・東京市の間に立たされた宮本町長自身の所有地も、養育院の入口を川越街道に面して作る必要から、養育院の用地計画に含まれてしまっていました。





■

手記の後半では、養育院の移転から、大空襲、戦後の土地計画、養育院立ち退き問題を経て、手記執筆当時に至る経緯が整理されています。

■

大震災後で被災した養育院の移転（大正時代）も戦後の事業復興も、地元との摩擦の中での大変な難産だったことを、この手記から知ることができます。

その難産の渦中で養育院の事業再開・復興の道を切り開いた人たちの中に **2 人の宮本さん**がいたことを金山氏は明らかにしています。初代宮本知達氏（板橋町長）と二代目宮本知達氏（戦後の板橋区議）です。

かつて老人が主張した「養育院の恩人は宮本さんだ」とは、おそらくこのことだったのでしょう。



金山氏「板橋本院土地ものがたり」をスキャンして、再製本しました。養育院・渋沢記念コーナーに置きますので、ぜひ手にとってご覧ください。

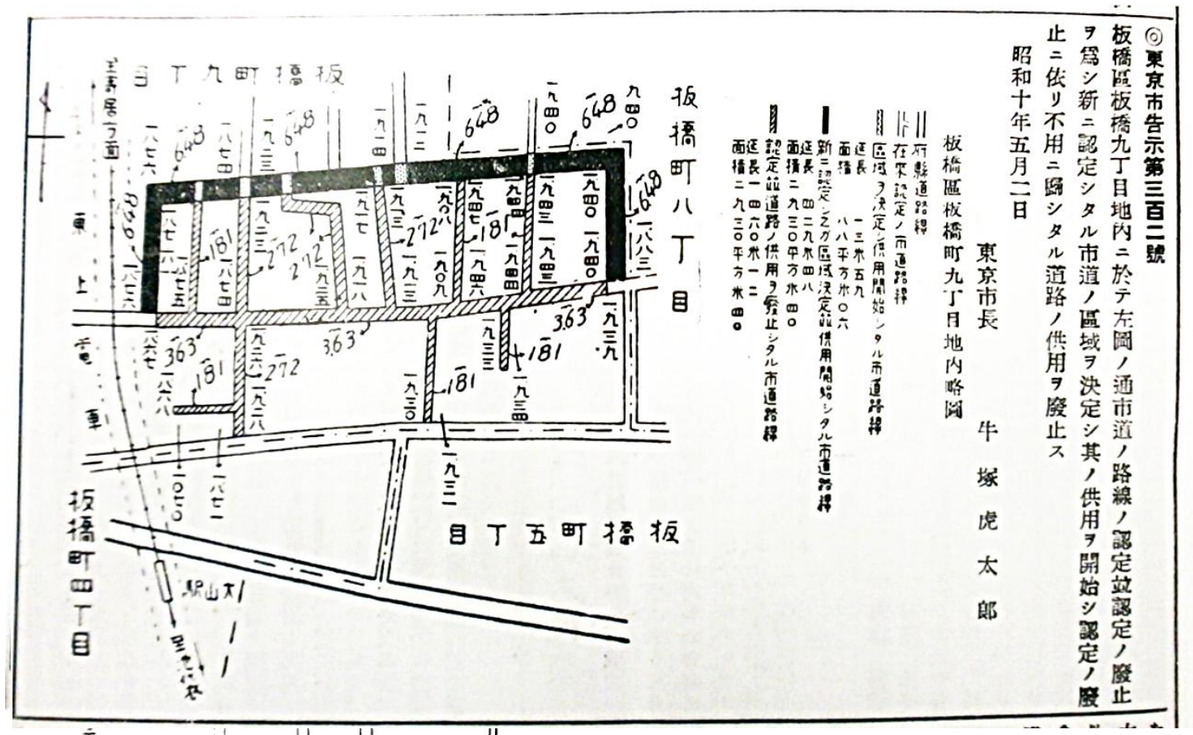
貸出・持ち出しはできません。コーナーでご覧ください。

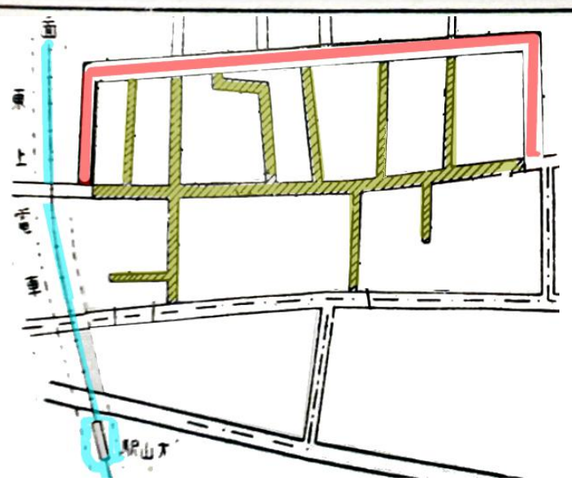


板橋本院土地ものがたりと併せてご寄贈いただいた**養育院建築史**は、手書きの文章と写真や図面のコピーが綴られた、厚さ ４ｃｍほどの冊子です。

大塚本院、板橋分院・本院、千川用水暗渠化、巣鴨分院、石神井学園、安房分院、井の頭学校、長浦分院、栃木分院、八街学園、伊豆山老人ホーム、東村山分院、練馬分院、東京都むさしの園、付属病院などの施設の情報が、建築面を中心に詳細にまとめられています。

定年後の昭和 40 年ころに、養育院百年誌（一番ヶ瀬康子編纂）の基礎資料として作成した冊子とのことです。







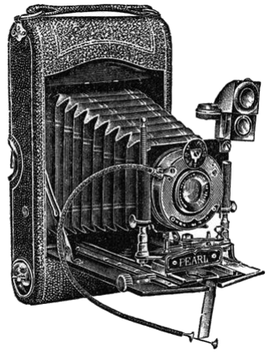
現況

古道の付け替えと、新道の市道認定

養育院板橋本院本院の建設（大正10~）により、**小松屋横町道とその側道**（緑）は、養育院を迂回するように付け替えられた（赤）

1935（昭和10）年の東京市告示第302号（都庁議会図書館所蔵）に、旧道の廃止と新道の市道化が記録されている。

東京法務局の道路移転登記では、新道の登記がなぜか1962（昭和37）年になっている。養育院の敷地も新道も東京都の管轄だからだろうか？



写真が語る 大正初めの養育院

櫻園通信54　令和元年9月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

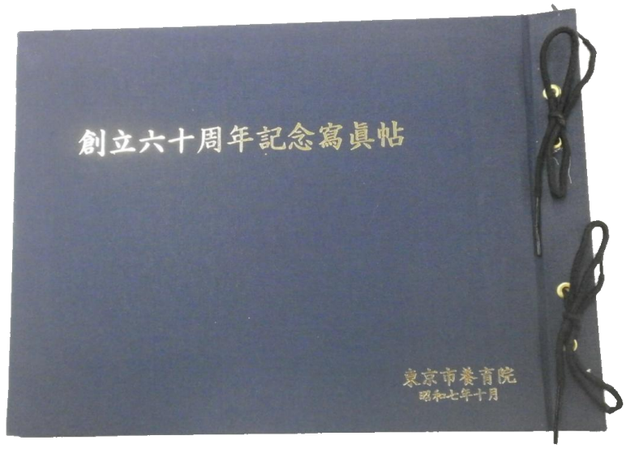
玉越慶弘　養育院渋沢記念コーナー維持ボランティア
編集：宮本孝一　老年学情報センター

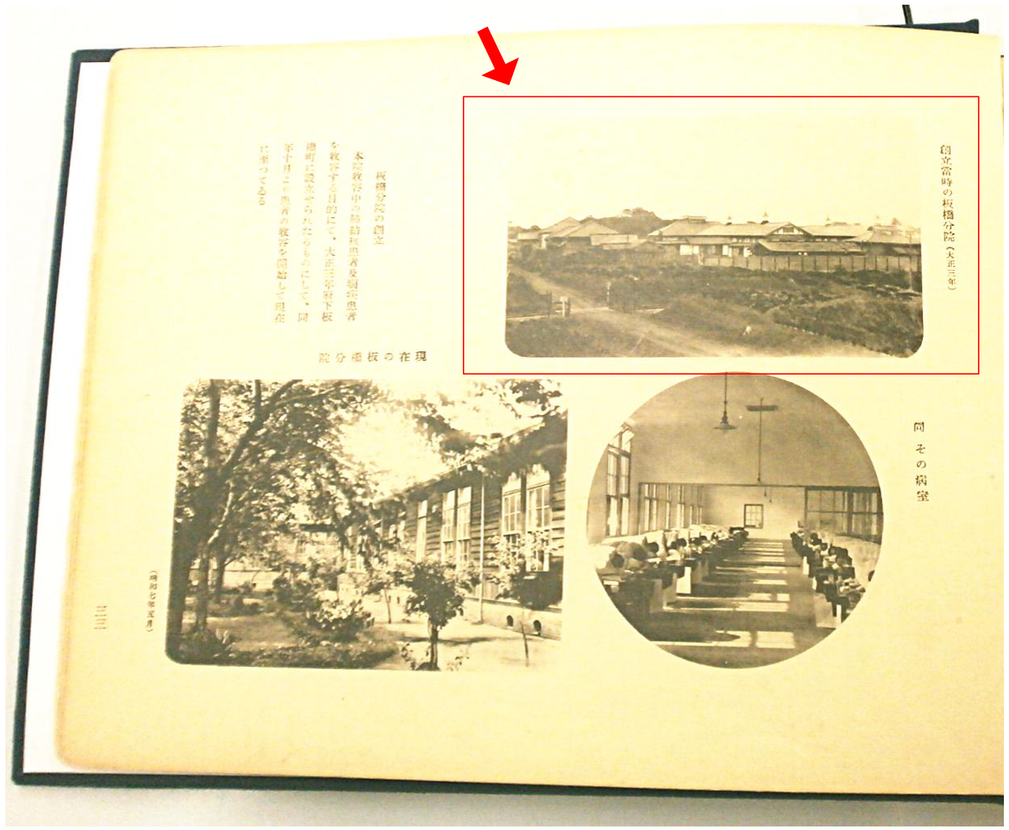
板橋分院の写真　（裏面の図①）

養育院刊行の「創立六十周年記念寫眞帖」に、開設当時の養育院板橋分院の写真が載っている。

板橋分院は、本院の移転より早く、結核患者や痼疾患者を隔離収容する施設として1914（大正3）年に設置された。

木造平屋瓦葺の本館1棟、診療室1棟、収容病者３棟、および付属建物11棟で構成され、総建坪は698坪余りであった。

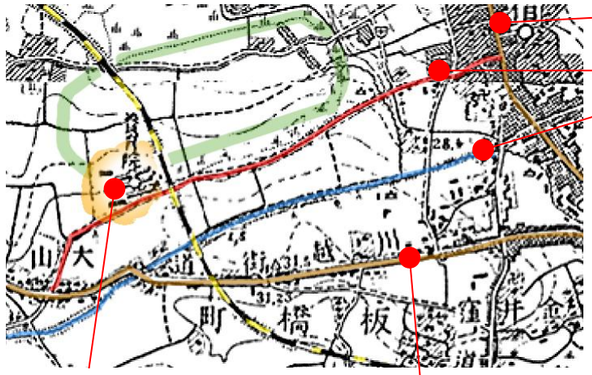




東京ジョッケー倶楽部「板橋競馬場」

板橋競馬場は1907（明治40）年8月に認可を得たが、明治40年に1回、明治41年に2回開催されただけで廃止された。計11日間だった。

1911（明治44）年加工の地図「東京府北豊島郡板橋町」（逓信協会）には、競馬場のトラックが描かれている。

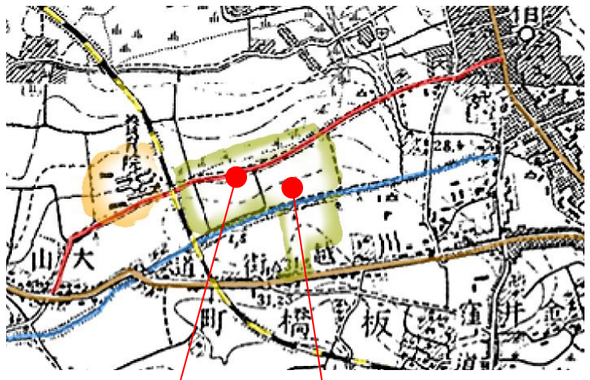


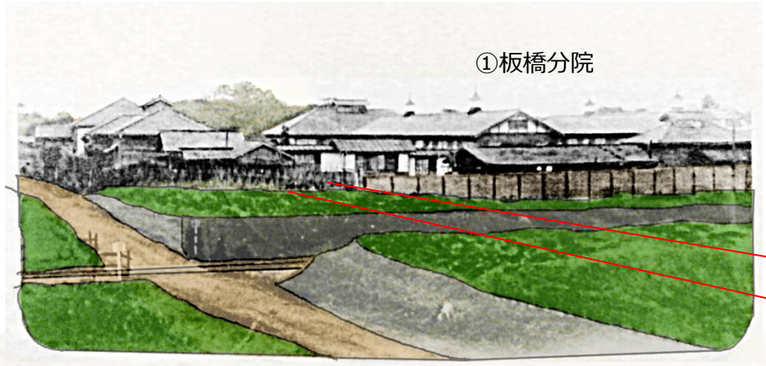
古道「小松屋横町道」の付け替え

大塚にあった養育院本院は1923（大正12）年の関東大震災で大破した。そのため本院も板橋分院の近くに移転した。

本院予定地には中山道と川越街道を結ぶ小松屋横町道③という古道があった。中山道からの分岐に「小松屋」という江戸時代から続く酒屋があった。

小松屋横町道は、本院敷地の外側に付け替えられた。

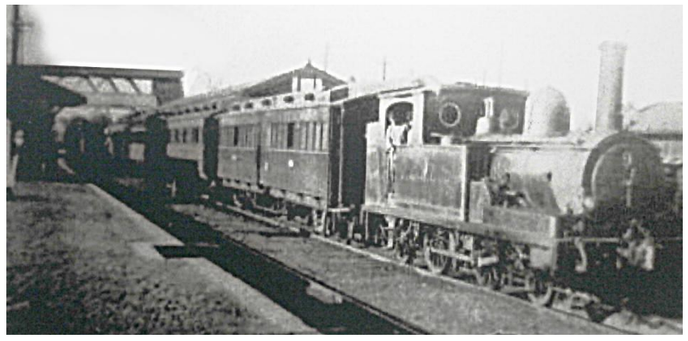




④小松屋横町道（至　中山道）

「創立六十周年記念寫眞帖」の写真を撮影し、パソコンで着色





開設当時の川崎市駅

東上鉄道の開設

分院開院と同じ年に、東上鉄道（現　東武東上線）が開通した。

上の写真には、線路を通すための切通し④が写っている。

駅は11駅（池袋　下板橋　上板橋　成増　朝霞　志木　鶴瀬　上福岡　新河岸　川越市　田面沢）。大山駅はまだ無かった。

蒸気機関車は貨車と客車を牽引して1日8往復。約2時間に1本発着した。

昭和4年に早くも電化し、昭和6年には大山駅も開設。昭和10年以降に段階的に複線化が進んだ。

高齢者のからだに合った医療を創る

日本の老年医学のはじまり



櫻園通信55.　令和元年9月
東京都健康長寿医療センター
養育院･渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

宮本孝一　老年学情報センター

老年医学（老年病学）は、高齢者特有の病気についての原因解明、予防、診断、治療を目的とした医学の一分野です。

一般に医療は、消化器科・循環器科のように、体の各部分（臓器など）別に区分されています。しかし、特定の臓器だけみる治療は高齢者の病気にはなじみません。

全身の臓器の状態、精神状態、生活上の必要動作への障害、生活環境の整備など、人の存在まるごとに関わるのが老年医学の特徴です。

子ども特有の健康問題に対しては、すでに昔から小児科学という分野が内科から分離独立しています。「小児科」です。同様に、高齢者に特有の健康問題に対しては、独立した分野「老年医学」が必要です。そのことを尼子富士郎は80年以上も前に主張し、浴風会病院と東京大学で老年医学の研究と指導を進めました。





養育院開設
1872（明治5）年

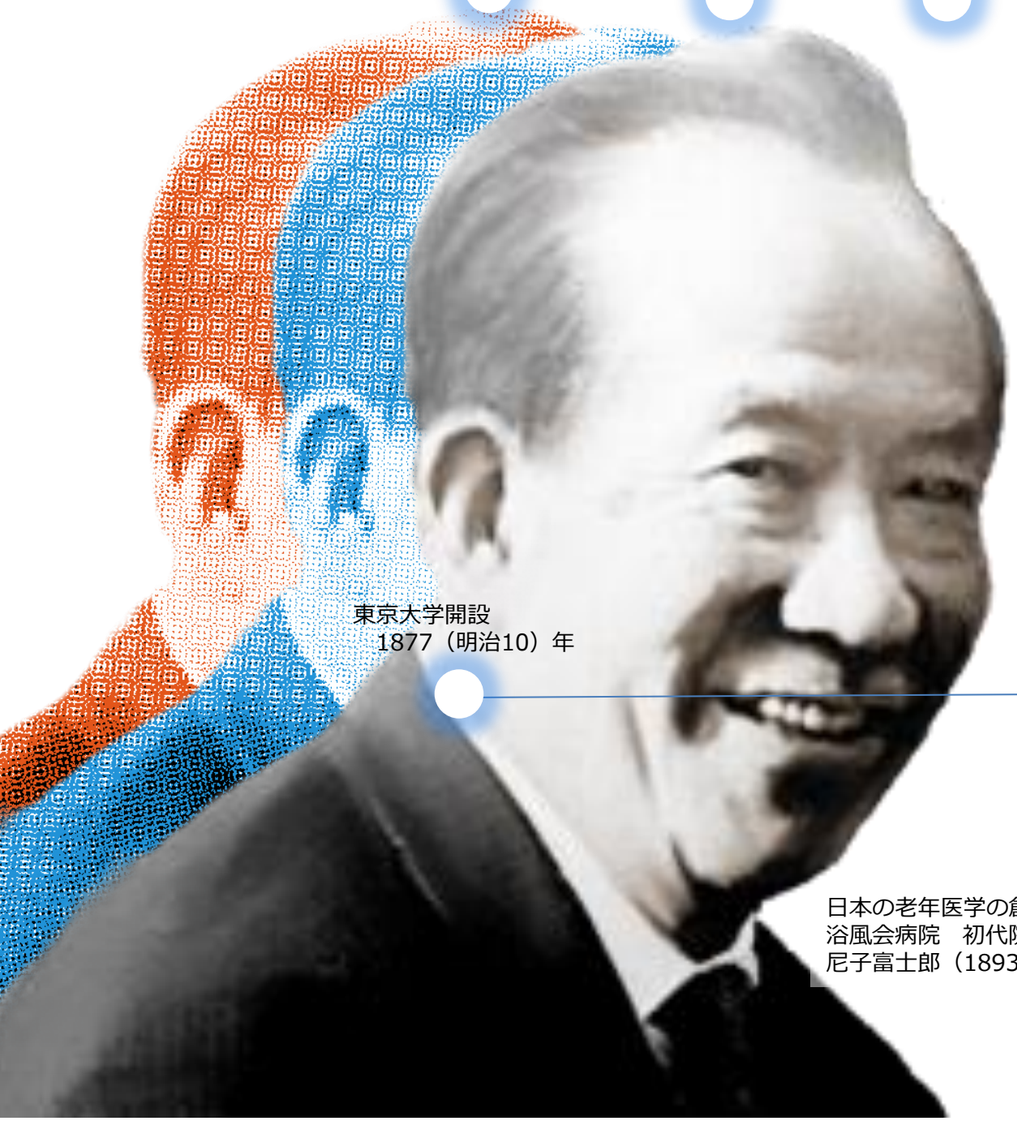
養育院に医療施設を開設。医療は東京府病院に委任。
1874（明治7）年

養育院の医療を東京帝国大学に委任。
1890（明治23）年

震災で大塚の養育院本院が倒壊。板橋に移転。1923（大正12）年

渋沢栄一銅像建立。
1925（大正14）年

尼子富士郎
老年医学の創設に邁進
（医療・研究・教育）



東京大学開設
1877（明治10）年

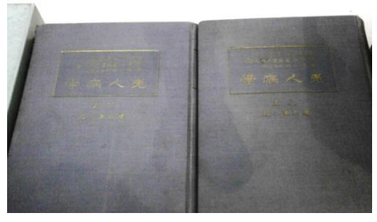
日本の老年医学の創設者
浴風会病院　初代院長
尼子富士郎（1893-1972）

入澤達吉、東京帝大から養育院へ。（1897～1902）



尼子富士郎、東京帝国大学医学部を卒業。そのまま医学部内科に所属。
1919（大正8）年

入澤達吉、養育院での経験をもとに**日本初の老年医学の教科書「老人病学」**を刊行。上巻1911年　下巻1913年



「老人病学」は、養育院・渋沢記念コーナーでも展示中。

関東大震災

内務省が、震災で被災した身寄りの無い高齢者を保護する財団法人**浴風会**を設立。
1925（大正14）年
翌年、施設**浴風園**開設。

尼子富士郎、浴風園に赴任。病室の医長に。
1926（大正15）年

尼子は、師の稲田達吉教授から「誰も手をつけていない老人医学を極めなさい」と、浴風園勤務を薦められた。

1972年、東京都は養育院に新しい病院を創りました。そこには村上元孝（初代院長）をはじめ、尼子富士郎の元で老年医学を学んだ専門家が集められ、高齢者対象の医療・医学研究の新拠点となりました。

養育院の病院（東京都老人医療センターに改称）は、東京都老人総合研究所と経営統合し、現在の東京都長寿医療センターになりました。

「健康寿命を保つにはどうしたらよいか」「健康問題があってもよりよく人生を生きるためにどのようなことが有効か」･･･超高齢社会が到来した現在も、尼子富士郎がめざした老年医学の確立・発展の営みは脈々と受け継がれています。



村上元孝　附属病院初代院長
亀山正邦　副院長
豊倉康夫　第2代院長
蔵本　築　第3代院長
小澤利男　第4代院長
　そのほか、東京大学と浴風会で老年医学を学んだ全国各地の専門家が養育院附属病院へ。

養育院板橋キャンパス
高齢者専門の
医療+研究+福祉総合センター





養育院附属病院の開院式では、
皇太子（現 上皇）ご夫妻がご臨席。

東京都老人医療センターと東京都老人総合研究所を経営統合して、**地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター**設立。
2009（平成21）年



養育院条例廃止により、都の組織上「養育院」は無くなる。
2000（平成12）年

養育院附属病院を東京都老人医療センターに改称。
1986（昭和61）年

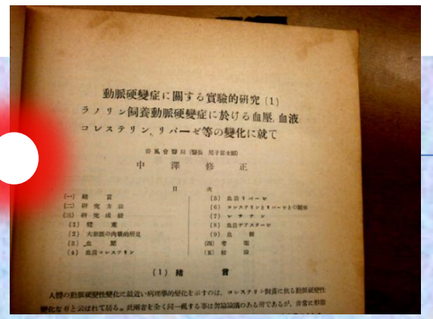
板橋ナーシングホームの開設。
1976（昭和51）年

板橋老人ホームの開設。
1978（昭和53）年

日本初の老人専用総合病院**養育院附属病院**の開設。日本初の老年学・老年医学の総合研究機関**東京都老人総合研究所**開設。
1972（昭和47）年

渋沢栄一死去。
1931（昭和6）年

尼子富士郎、**世界初の老年学専門の学術雑誌「浴風園調査研究紀要」**刊行開始。
1928（昭和3）年



太平洋戦争

浴風会の管理は、内務省から厚生省に変更。
1938（昭和13）年

病室は**浴風園病院**に改称。尼子富士郎は初代院長に就任。
1959（昭和34）年

浴風会病院に改称。
1971（昭和46）年

尼子富士郎、院長退職。
1968（昭和43）年

老年医学・老年学の国内外の論文を網羅した文献目録「老年学文献集」発行開始。
1962（昭和37）年

尼子富士郎、死去。
1972（昭和47）年

入所者専用病院から、地域の一般の患者を治療する高齢者専用病院に方向転換。1981（昭和56）年

高齢者保健医療総合センター（浴風会病院+老健くぬぎ）オープン。
2014（平成26）年



社会福祉法人浴風会　（杉並区高井戸）
日本の老年医学発祥の地
敷地内には、浴風会病院のほか、養護老人ホーム，特別養護老人ホーム　軽費老人ホーム，グループホーム、在宅サービスセンター，ヘルパーステーション，介護老人保健施設、認知症介護研究・研修東京センターなどの施設で高齢者福祉事業を行っている。

尼子富士郎、東京帝国大学で老年医学の講義を担当。
1928（昭和3）年～1953（昭和28）年



「老人期における疾患は壮年期の夫れとは種々異なる特徴を示し、又老年期のみに現る特異な疾患も存在する」とし、内科学から小児科学が独立したのと同様に老人病学の独立性を主張・・・尼子富士郎「老年者の生理及病理概論」1935（昭和10）年

尼子富士郎、東京大学で1953（昭和28）年まで講義。



日本初の老年病学教室を開設。
1962（昭和37）年

大戦前の老年医学は「いかにして寿命を延ばすか」を目的にしていた。　大戦後、老人の人口が増えてからは「健康な身体、生活の経済的な安定、知性の衰えを防ぐこと、をめざすのが老年学の目的である。医学・心理学・社会科学の研究者が協力して研究を発展させなければならない。･･･第2回日本老年学会総会　尼子富士郎会長講演　　1961（昭和36年）

高齢社会総合研究機構を設置。
2009（平成21）年



東京大学

養育院が出来た時代
ー明治５年の東京ー

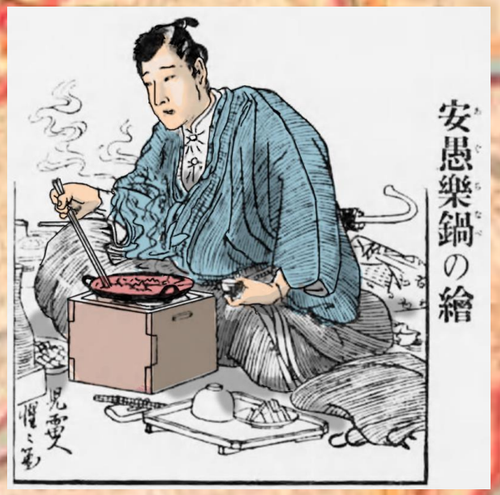
櫻園通信56　令和元年9月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

宮本 孝一　老年学情報センター

参考：鳥越一朗「おもしろ文明開化百一話」ユニプラン2018

明治5年、政治・経済の様々な課題と改革の混乱期に、東京市中の貧民を収容する養育院事業がはじまりました。現代からはなかなか想像できない「養育院が出来たころの東京」はどのような風景だったでしょうか。

もともと江戸人口の半数は各藩の武士（大名・旗本など）でした。幕府が倒れるとその武士たちは一斉に帰郷して江戸からいなくなります。そのため武士以外の住民は生計を立てる職のしくみを失い、貧民が激増しました。さらに不作で農村からも貧民が流入し、新首都東京は浮浪者が増え続けます。「幕府瓦解の余波は江戸市中を非常な混乱状態に陥れ、働くに職なく、食うに糧なき窮民が一時に激増し、飢えて途に横たわる者が数知れぬという有様であって、その惨状は実に名状す可からざるものがあった」（渋沢栄一）



明治5年に明治天皇が牛肉を食したことで、肉食解禁。すぐに牛鍋が大流行。

明治10年には東京市内に牛肉料理店が500件以上あった。



明治時代のカレーライス

明治5年に西洋料理のレシピ本「西洋料理指南」「西洋料理通」が出版された。

それらの本の料理から、コロッケ、カレー、エビフライなど日本人好みにアレンジされたさまざまな「洋食」が誕生した。



明治4年に散髪脱刀令が出ても、チョンマゲの断髪は進まなかった。床屋にはまだ洋式の理髪技術がなく、さまざまな珍髪型が登場した。

明治5年に東京市内の町火消は消防組に改称。
輸入の手動ポンプと蒸気ポンプが使われた。

手動ポンプは放水能力を発揮して活躍したが、道路が狭い東京市中では蒸気ポンプはあまり使われなかった。







明治5年、渋沢栄一35歳。
民部省・大蔵省に仕官。
長男篤二生まれる。



印刷物では東京の京の字に「亰」も使われていた。

文字だけでなく読みもトウキョウとトウケイの2通りが使われていて、どちらか定まっていなかった。

明治4年、両・分・朱を廃止して貨幣の単位を円・銭・厘に改定。明治5年に初の西洋式印刷の紙幣「明治通宝」を発行。ドイツで印刷された。

伊豆に住むおばあさんが海でお札を拾い、お金と思わず、金比羅さんのお札と勘違いして神棚に貼ったという記事が当時の新聞に載った。





明治5年、郵便事業が全国的にスタート。郵便物の集配員には、失業した飛脚が優先的に採用された。

明治6年、東京見物に来た男が「郵便箱」を「垂れ便箱」とまちがえて用を足して巡査に取り押さえられた。

明治5年、学制発布。全国に小学校を設置。6歳～10歳の4年制だったが、その年齢は丁稚や子守などをしているため就学率は低かった。

「子どもを学校に集め、唐人（外国人）が生き血を絞る」という岡山のデマ騒動の記事が明治6年の東京日日新聞に載った。

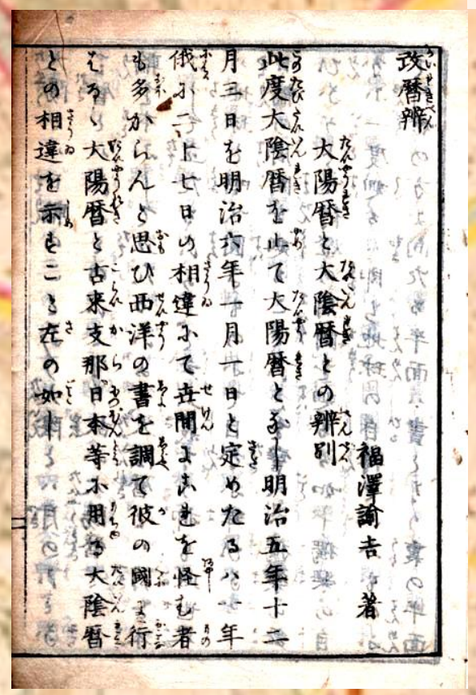






明治初期 帯刀時代の珍服装

明治9年に廃刀令が出されるまで、和洋ごちゃまぜの奇妙な服装の人が多かった。



旧暦（太陰暦）から新暦に切り替え。明治5年12月3日が明治6年1月1日に。

かんたんな詔書を出して23日後に改暦。国民はなにがなにやら。福沢諭吉はすぐに改暦の解説書「改暦弁」を出版。

この時期に改暦をしたのは、財政難の明治政府が官吏の人件費を節約するためといわれている。

旧暦だと12月のあとに閏12月があるが、この改暦により、12月と閏12月の給与を払わずにすんだ。

ウサギの飼育が大流行。毛色や耳の形が変わったウサギが高値で売れたため。

価格の変動が激しく、無一文になる没落士族もいた。ウサギバブル。

明治6年にウサギ1匹1ヶ月1円課税したところブームが下火になった。





明治7年、東京にガス灯設置。

ガス工場（港区　金杉橋あたり）から地下のガス管を通してガスが送られた。

人の表情や動きがやっとぼんやり見える程度の明るさしかなかった。



生きることは絵を描くことに値するか　上

破天荒な日本のゴッホ、長谷川利行と養育院

監修：稲松孝思顧問医
作　：栄畑南美（えばた　なみ）　**老年学情報センター**

櫻園通信 57　令和 2 年 4 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

絵を描くことは、生きることに値するといふ人は多いが、生きることは絵を描くことに値するか

そう問うたのは、昭和初期の東京を描いた放浪画家、長谷川利行です。利行は、破天荒な生き方とその画風から「日本のゴッホ」とも呼ばれています。

最近では、2020 年 2 月 25 日テレビ東京系にて放送された「開運！　なんでも鑑定団」という番組で、利行の未発表の作品ではないかという絵が鑑定されていました。

この絵は残念ながらニセモノだったのですが、2009 年に同番組で鑑定された本物の利行の作品は、なんと 1800 万円の鑑定額が付いたとのことです。



この作品が、番組で鑑定された作品「カフェ・パウリスタ」です。現在は、東京国立近代美術館が所蔵しています。

利行の絵は自由奔放な筆致が特徴ですが、利行自身もかなり自由奔放で壮絶な生き方をした人物だったようです。

そして、利行が人生の最後を過ごしたのが、東京都健康長寿医療センターの前身である養育院でした。

では、長谷川利行という人物と**養育院**のつながりを、紐解いてみましょう。

長谷川利行、愛称「りこう」は、1891 年に京都府で生まれました。

青春時代は文学に熱中し、詩や短歌を創作しました。

独学で絵を学び 30 歳頃に上京しますが、関東大震災で被災し一時京都へ戻ります。

その後再び上京し、第 14 回二科展で樗牛賞（ちょぎゅうしょう）、第 3 回 1930 年協会展で奨励賞を受賞するなど、徐々に画家としての評価を高めていきました。



この作品は、第 14 回仁科展で樗牛賞を受賞した作品「麦酒室」です。利行は決まったアトリエを持たず、街を放浪して絵を描いていました。

利行が描いたのは、バーやビアホール、カフェ、ガスタンクや地下鉄の雑踏などの東京の風景とそこに生きる人々でした。

利行は街を歩き回り、カンヴァスだけではなく、チラシの裏やタバコの空き箱にまで、嵐のように猛烈な早描きで絵を描いたといいます。そして、日々の生活費のために、友人・知人にスケッチや油絵を強引に売りつけました。

利行の生活は、毎晩酒場で安酒を飲み、浅草や山谷、新宿の簡易宿泊所を転々とするなど荒れたものであり、その素行の悪さから、画家仲間たちからは嫌われていたといいます。

（つづく）



生きることは絵を描くことに値するか　下

破天荒な日本のゴッホ、長谷川利行と養育院

監修：稲松孝思顧問医
作　：栄畑南美（えばた　なみ）　**老年学情報センター**

櫻園通信 58　令和 2 年 4 月
東京都健康長寿医療センター
養育院･渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

利行は、酒癖と放浪癖から、だんだんと胃を病み体が衰弱していきます。

ついに 1940 年春、三河島駅近くの路上で行き倒れ、養育院に収容されます。胃癌でした。

矢野文夫編『長谷川利行全文集』に、利行が養育院から親友・矢野文夫宛てに出した葉書の文が載っているので、以下引用します。利行は、養育院の第 5 病棟に収容されていたようです。

> 昭和 15 年 5 月 31 日　矢野文夫宛
>
> 養育院第五病室二胃ノ手術デ居リマス。午前中二一度ミニ来テ下サイ。〔中略〕（至急来テクレナイト死亡スル、動ケナイノデス）市電板橋終点ヨリ一丁ホドノ処デス。
>
> 板橋区板橋町東京市養育院第五病棟内　長谷川利行出
>
> （矢野文夫編、1981 年、p.305）

この葉書を受け取った矢野は、友人と一緒に養育院へ駆けつけます。

その養育院での面会の様子が、矢野の前提書に記載されています。

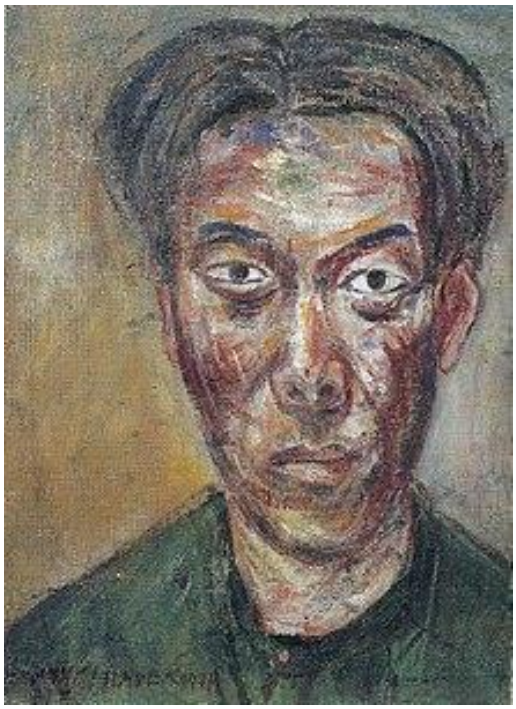
> 陰湿な消毒薬の匂いが水のように漂う暗い病棟―そこは百畳敷ほどの広さで何十というベットが二列に並んでいた。土色をした粘土のような顔が一斉にわれわれ闖入者を冷たく凝視するような気がした。
>
> 長谷川は磨り切れた白衣を着ていたが、むくっと起き上がった。
>
> 〔中略〕
>
> 「外に出よう、裏に花畑がある」
>
> 〔中略〕
>
> 花圃には白い雛菊の花が一めんに咲いていた。「その花の中にしゃがめよ、一枚撮ろう」

一枚うつすと、彼は、突然大声を発した。それは烈しい怒りに燃えた何ともいえぬ不気味な動物のような唸り声とも聞けるものであった。

「糞っ！　死んだろか！」

ごろっと花の中に仰向けにひっくりかえった。白眼をむいて、抉るように私を鋭く凝視した。（前提書、pp.305-307）

自画像



矢野の記述から、当時の養育院と利行の暗い様子が伝わってきます。矢野は、この面会時に「長谷川は死ぬ」と予感したといいます。

そして、1940 年 10 月 12 日、利行は 49 歳で亡くなりました。

矢野（1981）は、「誰ひとり看取る者なく死んだ。遺品のスケッチブックや手記など、養育院の規則によりことごとく焼却された」（p.315）と書いています。

焼却処分は当時の規則なので仕方ないのですが、もしスケッチブックなど遺品が現在に残っていれば、いったいいくらの値段が付いたのだろう、と思ってしまいますね。

さて、1969 年（昭和 44 年）、上野不忍池のほとりに利行碑が建立されました。石碑の文字は、親交のあった熊谷守一が書きました。

その隣には、利行が詠んだ歌二首が刻まれた歌碑があります。そのうちの一首を最後に紹介しましょう。

人知れず朽ちも果つべき身一つの いまがいとほし涙拭わず

養育院で亡くなった破天荒な画家、長谷川利行。彼は、「今」を純粋に愛した画家だったのかもしれません。

【参考文献】
近藤祐（2011）『洋画家たちの東京』彩流社
矢野文夫（1974）『長谷川利行』美術出版
――――編（1981）『長谷川利行全文集』五月書房
吉田和正（2000）『アウトローと呼ばれた画家―評伝　長谷川利行』小学館
「長谷川利行」『Wkikipedia』https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%95%B7%E8%B0%B7%E5%B7%9D%E5%88%A9%E8%A1%8C　2020 年 4 月 20 日最終閲覧



明治大学

明治大学校歌を作詞した
詩人・児玉花外と養育院

栄畑南美（えばた　なみ）　老年学情報センター

櫻園通信 59　令和 2 年 5 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

「白雲なびく駿河台　眉秀でたる若人が…」で始まる明治大学校歌。東京六大学野球の応援等で、聞いたことがある方もいらっしゃるのではないでしょうか。この校歌を作詞したのは、詩人・児玉花外（こだま　かがい）です。1972 年に編纂された『養育院百年史』の年表には、「昭和 18 年 9 月 20 日、明大校歌『白雲なびく』の作者、熱血の詩人児玉花外（傳八）本院にて没（69）」（p.181）と記されています。養育院で亡くなった児玉花外とは、どのような人物だったのでしょうか。



児玉花外

児玉花外（本名：児玉伝八）は、1874 年（明治 7 年）に京都で生まれました。花外は 5 歳の時に母を亡くします。新島襄が創立した同志社予備校に進学しますが、14 歳の時、母代わりだった姉千代をも亡くしました。その後、慕っていた新島襄も病死し、花外は同志社を退学、京都を出ていきます。仙台の東華学校、札幌農学校、東京専門学校（後の早稲田大学）に入学しますが、いずれも中退します。

花外は、東京専門学校在学中に詩作を始め、『早稲田文学』に寄稿するようになります。そして、だんだんと新進詩人として認められていくのでした。

花外は、社会主義詩人として活動していました。1903 年、著作『社会主義詩集』を刊行しようとしましたが、発禁処分となり、一躍有名になります。その後は、詩集『ゆく雲』などを発表、文芸誌の詩欄の選者も務め、後進の指導にも当たりました。

明大校歌を作詞したのは、1920 年（大正 9 年）、花外 46 歳の時でした。当時、花形スポーツであった隅田川の学生選手権ボートレースで、応援歌が必要になりました。三人の明大生が教授の紹介状を持って花外の家を訪問したところ、花外は作詞を快諾したといいます。花外の書いた歌詞に曲をつけたのが、作曲家の山田耕作でした。晩年、養育院に収容されていた花外は、明大関係者の訪問を大変喜んだそうです。子どもがいなかった花外にとって、さながら我が子の見舞いのようだったのかもしれません。



1943 年　晩年の児玉花外

花外は、最初の妻とは離別、再婚した二人目の妻とは死別しました。また、大の酒好きで酒を飲み出すと止まらなかったといいます。長年の多量の飲酒によって、花外は健康を損なっていきます。ついに、1934 年（昭和 9 年）、多発性関節炎で東京帝国大学の附属病院に入院することになりました。1936 年に帝大病院を退院しますが、引き取る家族がいなかったため、養育院へ移ります。62 歳でした。部屋は分室 3 号棟だったそうです。

花外は、養育院で思いのほか穏やかな生活を送ったようです。窓の外の桜を眺め、詩を作り、印税が少し入った時には、酒を誰かに買いに行ってもらって、こっそり夜遅くに近くの患者たちと楽しんでいたといいます。また、晩年は日蓮宗を信仰し、心の支えにもしていました。

戦時下だった 1943 年（昭和 18 年）9 月 20 日、花外は急性腸疾患のため、69 歳で亡くなりました。穏やかな最期だったといいます。その後、花外がいた分室 3 号棟は、1945 年 4 月 13 日夜半からの東京大空襲によって、養育院本院とともに消失してしまいました。

【参考文献】
石井敏達（1969）「養育院百年史の陰に―児玉花外三十年忌を偲ぶ」
東京都養育院編（1972）『養育院百年史』東京都。
「児玉花外」Wikipedia、https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%85%90%E7%8E%89%E8%8A%B1%E5%A4%96　2020 年 5 月 21 日最終閲覧。
「明大校歌誕生の周辺（中村雄二郎）」明治大学ホームページ、https://www.meiji.ac.jp/koho/information/schoolsong/origin.html　2020 年 5 月 21 日最終閲覧。

養育院の初代院長
２つのお墓

宮本孝一
老年学情報センター

櫻園通信 60　令和3年1月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

東京都台東区谷中には約七千のお墓が立つ広大な墓地があります。

この墓地は、東京都立谷中墓地・天王寺墓地・寛永寺墓地の三つの墓地を併せたものです。著名人のお墓もたくさんあります。春には桜のトンネルができる桜の名所です。

寛永寺墓地の区域には、最後の将軍徳川慶喜のお墓があります。また隣接する了倫（りょうごん）寺墓地には、明治初めからの大正時代はじめまでの養育院収容者約三千八百人が眠る「養育院合祀塚」があります。（参考　桜園通信十六）

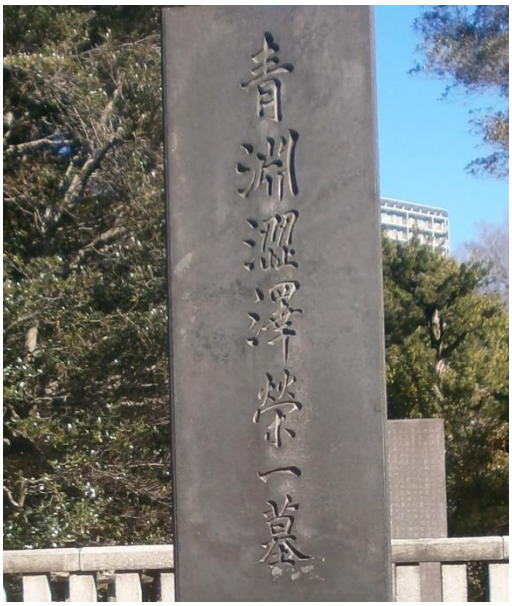
広大な墓地の中央の広い道は、江戸時代はお寺の参道で、そこで催される富くじが人気でした。参道には富くじを楽しむ茶屋が立ち並んでいました。

この二つの写真はどちらも谷中霊園で撮影した**養育院初代院長**のお墓です。

上のお墓には「青淵渋沢栄一墓」と彫られています。







日本資本主義の父であり、養育院院長を亡くなるまで約五十年続けた渋沢栄一のお墓です。

青淵（せいえん）というのは渋沢栄一の号（本名とは別に使う名前）で、渋沢が十八歳の時、いとこで渋沢の学問の先生であった尾高惇忠（おだかあつただ）に名づけられました。

青淵の由来は、渋沢の実家が「淵上小屋」と呼ばれていて、その家のそばに淵があったことにちなんだものといわれます。



もう一つの“初代養育院院長”のお墓は自然石の形を活かした、ユニークなお墓です。

「飯田直之亟（丞）墓」と刻まれています」。



文書には、明治六年一月に「会議所（江戸の救貧基金七分積金を管理するために大久保一翁府知事が設立した組織）」より飯田直之丞が養育院院長に任命された記録が残っています。

その年、渋沢栄一は五月まで大蔵省に勤務し、その後辞職して実業家の道に進みます。養育院運営には関わっていません。

渋沢栄一が間接的に養育院に関わりはじめたのは翌明治七年に会議所の共有金（＝七分積金）取締に任命されてからです。養育院は会議所の付属施設でした。

会議所が明治九年に廃止され、養育院が東京府の管轄になるとき、渋沢栄一は養育院の代表者（事務長）に就任。さらに、明治一二年、養育院の組織再編で事務長職が院長と改称され、渋沢栄一がそのまま院長に就きました。“初代院長渋沢栄一”のはじまりです。

渋沢栄一が養育院事務長、院長となる間、飯田直之丞も養育院掛・養育院副幹事として養育院経営を担っていました。飯田が院長でなくなったのは渋沢が事務長になったときです。それまでの院長職が廃止され、飯田は養育院掛という役職になりました。（参考 桜園通信二三）

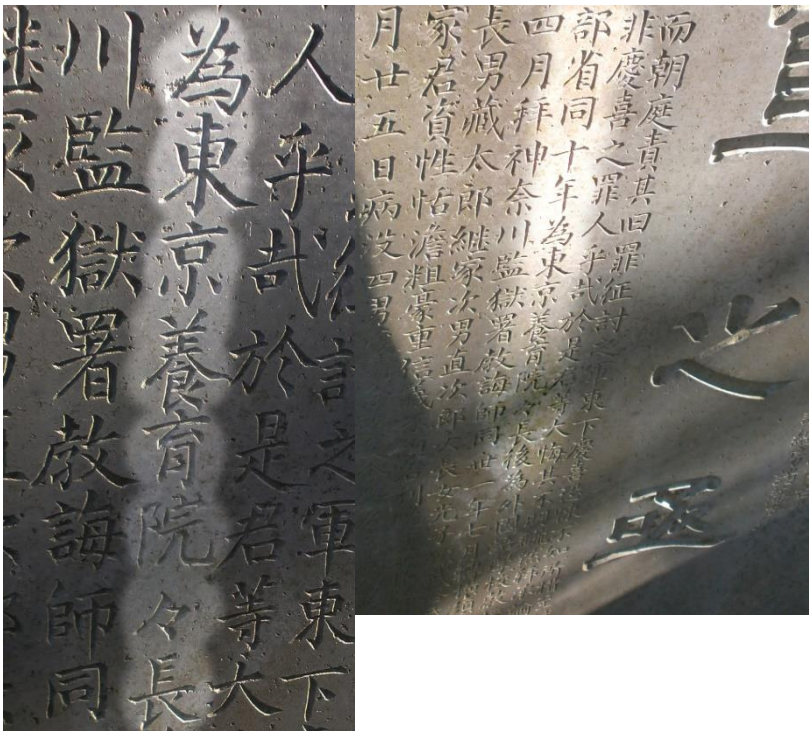
飯田直之丞は養育院史であまり語られることのない“幻の初代院長”です。

さて、飯田直之丞の墓には生涯の経歴がびっしりと彫られています。ここに「明治五年出仕文部省、同十年為東京養育院々長」という文字を読み取ることができます。

明治十年に養育院院長になった？

飯田直之丞院長は明治六年から九年までです。

なぜ明治十年と刻まれたのかはわかりません。謎です。



墓地の写真は、宮本撮影（2020年1月）
川の写真はフリー画像を使用



渋沢栄一銅像の除幕式

宮本孝一
老年学情報センター

櫻園通信　61　令和3年1月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

東京都健康長寿医療センターの敷地内には、約百年前に養育院本院に建立された巨大な渋沢栄一銅像が残っています。

養育院が大塚から板橋に移転してすぐに建てられものです。



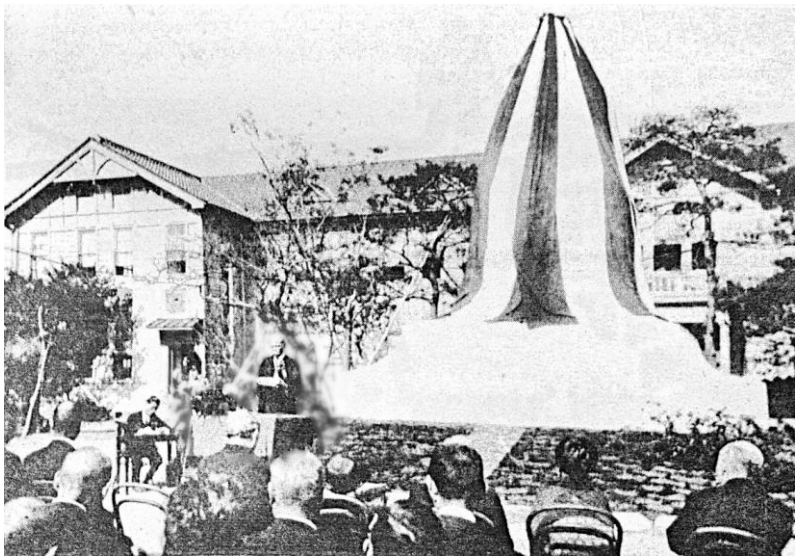
その除幕式当日の様子はどのようなものだったでしょうか。

その記録を見てみましょう。読みやすいように改行やよみがななどを加えました。

◆

当日は晩秋稀なる小春日和にて、定刻前より或は自動車に或は徒歩に続々参着せらるる来賓織るが如く、真に板橋町に於ける未曾有の光景を呈したり。

①幕に包まれていた銅像。
中村是公銅像建設会長（東京市長）の式辞。



軈（やが）て開会を告ぐる一発の煙火沖天に轟くや、主賓渋沢院長並に渋沢子爵の同族を始め来賓一同は予て設らへたる銅像前の式場に参入。

一同着席を了はらるるや、当日の司会者田中本院幹事先づ開会の辞に次ぎ銅像建設の経過並に工事報告を為し、次で中村市長は銅像建設会長の資格にて式辞を述べられ、

②除幕の瞬間。
銅像の下に栄一の孫昭子と田中太郎養育院幹事。



右終るや　渋沢子爵令孫昭子嬢（十一歳）は田中幹事の介添へにて幼なき花の姿を銅像の直下に運ばれ、粛然として除幕の紫紐を惹けば、紅白色鮮やかなる覆幕は微風に翻へりつゝ颯と辷べり落ち、見るも心地よき白色の花崗岩台石上、十有六尺の

中空に温容玉の如き（やさしくおだやかな表情顔かたちが玉石のように美しい）子爵の青銅坐像活けるが如くに現はれ出でしかば、急霰（きゅうさん　にわかに降るあられ）の如き拍手と歓呼は期せずして会衆の間に湧き起これり。

斯（か）くて芽出度く除幕終れば渋沢院長はやをら老躯を演壇に運ばれ、感慨無量の態度にて鄭重なる謝辞を述べられ、次いで若槻内務大臣及び平塚東京府知事の孰れも老子爵の功績を称へたる懇篤なる祝辞朗読あり。

最後に小坂本院常設委員長は建設会専任理事として閉会辞を述べられ且つ同氏の発声にて子爵の万歳を三唱し、之れにて滞ほりなく式を閉ぢ直に来賓を本院大講堂内に設らへたる食堂に案内し午餐を饗応せり。

斯くて宴方に酣（たけなわ）なる頃、小坂専任理事より一場の挨拶を述べらるゝところあり。

次で近藤東京市会副議長は市会議員を代表して乾盃辞を述べられ、老子爵の万歳を祝する歓呼の裡に一同の乾杯あり。

終りて再び渋沢子爵の蘇東坡（そとうば　約千年前、中国北宋の詩人・政治家）の喜雨亭の記に因（ちな）める含蓄深き一場の演説あり。

最後に枢密院議長穂積陳重男は渋沢子爵家親族を代表していと鄭重なる謝辞あり。

和気靄々（わきあいあい）裡（り・うち）に散会せしは午後一時過ぎなりき。



③渋沢栄一の謝辞
青淵澁澤榮一傳　昭和16年刊　p78より

銅像の除幕式は一九二五（大正一四）年一一月一五日に開催されました。

記録の原文は、東京市養育院月報第二九二号・第一一―一三頁（大正一四年一一月）に掲載されたもので、さらに「渋沢栄一伝記史料」第三十巻二三七―二三八ページに転載されています。

「渋沢栄一伝記史料」の本文はインターネットで公開されています。

引用：東京市養育院月報　第292号・第11-13頁　大正14年11月
「渋沢養育院長銅像除幕式」渋沢栄一伝記資料　第30巻　p237-238に収録
https://eiichi.shibusawa.or.jp/denkishiryo/digital/main/viewer.php?imgurl=300237
写真：「東京市養育院月報　第293号　大正14年12月25日発行」東京市養育院月報　第17巻　第232号～第293号.不二出版2009より

新型ウィルスに感染した渋沢栄一

宮本孝一
老年学情報センター

櫻園通信　62　令和3年1月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター



二〇一九年の冬に中国で感染が確認されて以来、新型コロナウィルスは、世界中に広がりパンデミック（世界的大流行）となりました。

人に病気をもたらすコロナウィルスはそれまで六種類だけでした。それらとは違う遺伝子・形・性質をもったコロナウイルスが出現して人間に病気を引き起こしているため「新型」と呼ばれています。

ウィルスは人や動物の細胞を使って自分のコピーを作り増殖します。このときウィルスの遺伝子がうまくコピーされず、少し違う遺伝子をもつウィルスができることがあります。

これを変異といいます。遺伝子がウィルスの性質を変えるほど大きく変化し、その新しい性質がたまたま感染拡大に有利なものだった場合は感染が広がることになります。

新型コロナウィルスも、もとはほかの特定の動物に感染していたコロナウィルスが、変異により人間に感染するウィルスになったと考えられています。しかしまだその起源は判明していません。

毎年冬に流行するインフルエンザも、ウィルスによる病気です。インフルエンザウィルスも変異しつづけているため、流行するウィルスの遺伝子・性質も毎年変わります。

今から百年前、恐しい性質をもつ新型インフルエンザ・ウィルスが出現しました。

四十度を超える高熱・頭痛・筋肉痛、肺炎、耳や鼻からの出血、肺に水がたまる（肺水腫）、そして数日で死に至るインフルエンザです。犠牲者のほとんどは健康な若者で、致死率は通常のインフルエンザの二十倍以上でした。

新型インフルエンザは一九一八（大正七）年の春にアメリカで流行した後ヨーロッパで広がりました。当時は第一次大戦の最中で、参戦していた国は感染を隠していましたが中立国のスペインの流行が報道され、「スペイン風邪」と名づけられました。スペイン風邪は夏になると収まり、寒くなると復活。結局3回大流行を起こしました。

スペイン風邪は、一九一八年の八月末から日本でも大流行が始まりました。新聞記事では山間部で「感冒のため一村全滅」という報道も見られるような状況でした。

一二月にはやや流行が収まりましたがその時点での感染者数は国内総人口の約四〇％に当たる人数でした。翌年の春、渋沢栄一もこの恐しいウィルスに感染してしまいました。

その時の記録が残っています。

カタカナをひらがなに書きかえ、改行や付記、濁点を加えています。一部漢字をかな表記にしています、（略）は原著でも略になっています。

渋沢栄一日記　大正八年（渋沢子爵家所蔵）

三月二日

（略）三月一日より四月三十日までの日誌は、前記の如く大患に罹りしため詳悉するをえず、よって病間殊に記憶するものを左に記載して他日の参考に供すと云爾（うんじ・しかいう＝強調）※他日の参考に供すこととする、ぐらいの意味か。

（略）十日はかつて渡来せるジユエー博士の歓迎会、姉崎博士近く仏国へ渡航につきその送別の宴を開催のはずなりしも、病中につき延期し、来る十七日と定めたり。けだしそのこのに至りなば病も快方と予期せしも、ついに当日も出席するを得ざりき。

十七日阪谷男爵・姉崎博士来話、けだし当日はジユエー博士の歓迎と送別との宴会につき、阪谷男には余に代りて来賓に接伴し饗応に尽力せられんことを請い、姉崎博士には渡仏後の注意につき平日の企望を陳述す。

時に病いまだ愈えず苦悶強くして談話意の如くならず。幾回となく氷片をもって口中を潤してようやく意見の幾分を述るを得たるなり。

而して（しこうして＝そして）そのため熱度五・六分を増したるを見れば、いかにその日の談話の苦痛なりしやを知る得べし。

二十三日姉崎博士再び来りて明日発足の由を告げらる。よって我が使節及随行の人士への伝語または米国及英仏なる知人への音信等をたくす。

（略）

【伝記史料　注】栄一、この年三月一日より四月末にいたる間、流行性感冒により病床にあり。

このとき渋沢栄一は七九歳。ひどく具合が悪くて人と話すのもつらいのに、口に氷を入れてなんとか対話しようとする様子が書かれています。無理をしたためそのあとすぐ熱が上がってしまいました。渋沢栄一はスペイン風邪で二ヵ月近くも病床に伏していたんですね。

記録の原文は渋沢栄一の日記で、「渋沢栄一伝記史料」第四　十巻　三三六-三三七ページに転載されています。

「渋沢栄一伝記史料」の本文はインターネットで公開されています。

渋沢栄一　日記　大正八年「三月二日」
渋沢栄一伝記資料　第40巻　p336-337に収録
https://eiichi.shibusawa.or.jp/denkishiryo/digital/main/viewer.php?imgurl=400336



渋沢栄一と養育院
はじめの1歩

宮本孝一　老年学情報センター

櫻園通信　63　令和3年1月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

渋沢栄一が（昭和六年）十一月に亡くなったあと、十二月に社会事業団体による故渋沢子爵追悼講演会が開かれました。

このとき演者の一人清浦奎吾伯爵は、渋沢栄一が「自分が社会事業に関与することになったのは、深く思索をして計画した結果でなく、偶然なんだ」とよく語っていたことを紹介しています。（＊1）

1872（明治5）年　営繕会議所発足。共有金による公共事業開始。営繕会議所の付属機関として養育院創立。
1873（明治6）年　渋沢栄一、大蔵省を辞職して実業界へ。
1874（明治7）年　渋沢栄一、東京府知事より営繕会議所の共有金取締を委嘱。
1875（明治8）年　営繕会議所は東京会議所に改名。
1876（明治9）年　会議所廃止。養育院の運営は東京府営に。渋沢栄一は東京府より養育院事務長に任命される。

1879（明治12）年　組織再編で事務長は院長に改名。これにより渋沢栄一は養育院院長に。

さらに、共有金（江戸幕府による窮民救済のための積立金）を管理する組織「会議所」で管理者に就いたため、会議所管轄の養育院の運営にも関わることになった。これが渋沢栄一が社会事業に関わるようになる始まりだったと講演で話しています。

では、渋沢栄一が営繕会議所の運営（共有金の運用）に関わる経緯はどのようなものだったでしょうか。

東京商工会沿革始末（東京商工会残務整理委員編纂）（＊2）に次のように書かれています。カタカナと一部の漢字をひらがなにしました。

東京会議所は道路橋梁修繕事務の外に養育院事務、共同墓地事務、瓦斯灯及街灯事務、商法講習所事務を管理処弁したるにつき、委員は皆その事務の煩擾（わずわしいほど乱れる）にして整理完全せざるを憂ひ、且共有金原資の漸次減少して余分なきに至るを憂ひ、府知事に推薦するに府下有志者才幹（才能、腕前）ある者某々等を委員に依嘱せられんことをもってしたるに、府知事はその推薦を納（受け入れること）れ、明治七年十一月をもって渋沢栄一等に共有金取締の事を嘱托し、その後翌明治八年四月をもって此諸氏を会議所の委員に任したりき。

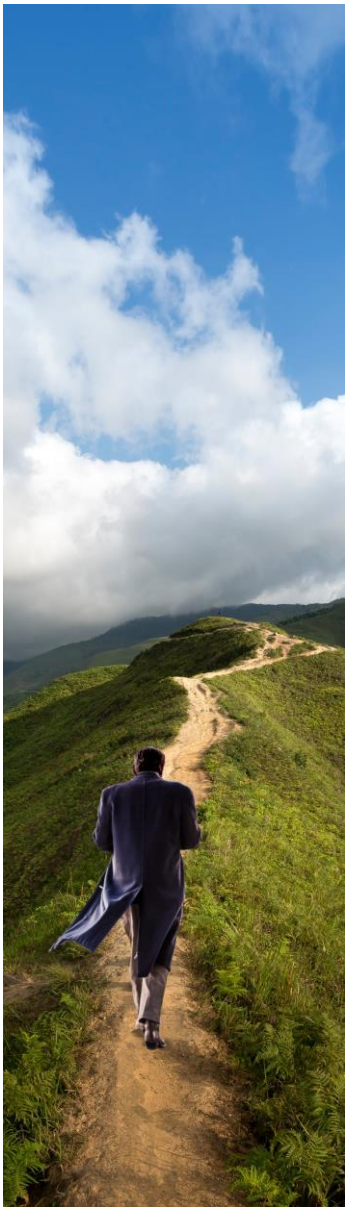
東京会議所の仕事は煩雑で混乱。運営する委員では手が回らない。事業費の原資である共有金（＝七分積金）も減る一方で会議所運営停止も時間の問題。そこで東京会議所の委員たちは東京府にいる有能な人材を何人か選び、会議所の運営に加えてもらうよう東京府知事大久保一翁に相談。久保一翁は会議所の申し出を了解。会議所に共有金取締の嘱託員として新たに任命された三人のうちの一人が渋沢栄一。

国家官僚を辞職し実業家に転身してまだ一年目の渋沢栄一。会議所の委員に推薦され、東京府知事大久保一翁に東京会議所の運営を任されます。

引用した「渋沢栄一伝記史料」第十二巻では同じページに続けて「会議所伺」という記事があり、注として**明治七年十一月東京会議所共有金取締トナリ、同月十七日始メテ新場橋際東京会議所ニ出勤ス**と付記されています。

明治七年一一月一七日。渋沢栄一、東京会議所に初出勤。

渋沢栄一の社会福祉事業の第一歩はここから始まりました。このとき渋沢は、自分が実業界よりも長く養育院院長職や、全国的な社会事業の振興に取り組むことになるとは思いもしなかったでしょう。



渋沢栄一自身の言葉としても**私が東京市の養育院に従事するやうになりましたのは明治七年でございました**[*3]と会議所の共有金取締就任が養育院運営に関わるそもそもの始まりと語っていたことが記録に残っています。

さて、一九二九（昭和四）年の楽翁公百年祭の講演で、渋沢栄一（当時八十九歳）が気になる一言を言っています。

共有金取締を申付けられるより前に、私は養育院の事業を引受けて微力を致すことになつて居りましたが、[*4]

これはどういうことでしょう。

会議所運営を監督することになり、たまたま会議所の付属施設として養育院があったからなりゆきでその運営にも関わるようになった・・・ということではなさそうですね。

では、共有金取締役就任以前の、どの段階で誰との間で「渋沢栄一が養育院の事業を引き受ける」と決まっていたのでしょう？

謎です。



＊1　「竜門雑誌　第519号　第118-1151頁　昭和6年12月　社会事業団体催故渋沢子爵追悼講演会」渋沢栄一伝記史料　第57巻 p.798-799

＊2　「東京商工会沿革始末（東京商工会残務整理委員編纂）第10-11〔明治25年5月〕」渋沢栄一伝記史料　第12巻 p.280-281

＊3　「竜門雑誌　第498号・第113―117頁　昭和5年3月　青淵先生説話集　松平楽翁のことゞも」渋沢栄一伝記史料　第49巻 p.133-136

＊4　「竜門雑誌　第489号・第116頁　昭和4年6月　楽翁公百年祭にて　青淵先生」渋沢栄一伝記史料　第49巻 p.129-132



貧民の帝都

養育院の時代背景

宮本孝一　老年学情報センター

櫻園通信　64　令和3年1月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

人口百万人の大江戸八百八町。山手線の内側と隅田川の両岸を合せたぐらいの範囲が江戸でした。

現在の東京二十三区よりずっと小さい広さです。

江戸の土地の七割は武家屋敷で占められていました。全国諸藩の大名の妻子を住まわせ、大名が二年ごとに参勤交代でやってきて一年江戸で暮らす屋敷や家来たちの屋敷です。将軍家に直接仕える旗本や御家人の屋敷もありました。



図1　江戸の大きさ

図2　武家地と町人地



図3
江戸城と武家屋敷（オレンジ色）から、
人が消えた。

左の地図のオレンジ色の部分が武家屋敷のある武家地です。その隙間を埋めるように分散している緑色の部分が町人が住む地区と寺社です。

江戸百万人の人口の半分は、武家地に住む武士でした。残り半分が町人です。

◆

幕末、江戸城を官軍に明け渡すと、各藩の武士は一斉に自分の藩に帰りました。豊かな商人たちも戦乱を恐れ、江戸から出ていきます。

江戸の人口の半分が突然いなくなったのです。

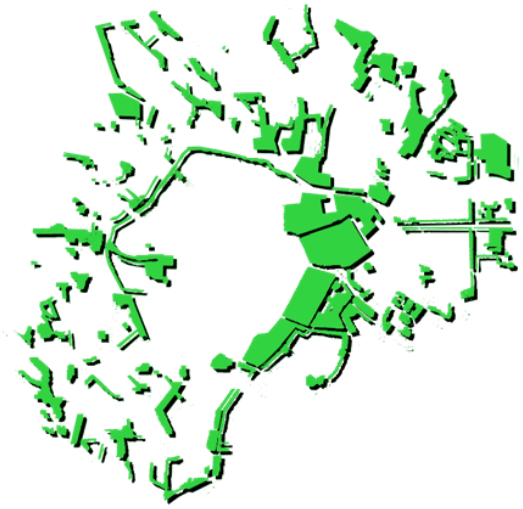


図2・3は、松山恵「都市空間の明治維新」（ちくま新書2019）p17の図を宮本改変

江戸城も武家屋敷も人の姿が消えました。江戸は無人の土地だらけで、骸骨のような有様です。（図3）

江戸に取り残されたのは、町人と藩に連れて行ってもらえなかった下級武士でした。

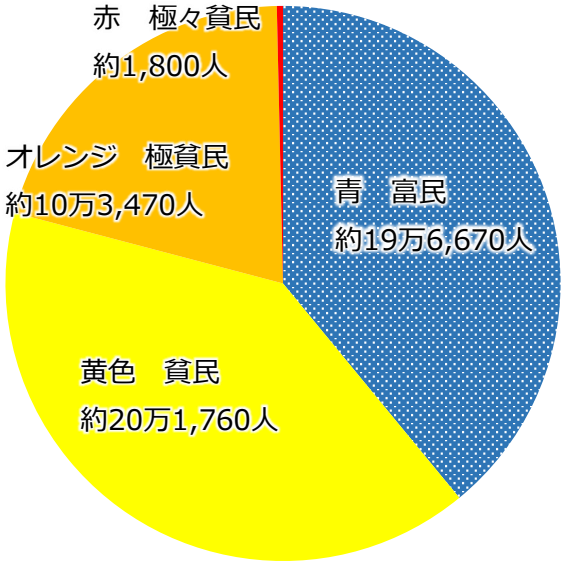
どんな仕事であれ給金を払う者もいなくなり、多くの町人や下級武士は失業しました。物資の流通も途絶え、貧しい人を助けるしくみもなく、多くの人が亡くなりました。

明治はじめの東京でも浮浪者があふれる状況は続き、明治五年に養育院が作られます。

明治元年に東京府は地域の有力者に命じて貧困者の数を調査しました。その結果が残っています。東京都編「東京市史稿　市街篇90」（一九六一）

東京の住民を、富民（家屋を所有）・貧民（借家住まい）・極貧民（七分積金でも救済を受けた者）・極々貧民（救済を希望している者）の四つに区分して調査したものです。

合計が約五十万人で、江戸の人口百万人が半減したことがこの調査でもわかります。



借家住まいの人をすべて貧民とみなすことはできませんが、極貧民・極々貧民という住む家がない困窮者が十万五千人もおり、東京の人口の二十％を占めていました。

東京に住む人のなんと五人に一人がホームレスだったことがわかります。そこには当然、大人だけでなく子どもも含まれます。



明治維新のころ、橋の下をねぐらにしていた孤児たち
「貧民の帝都」p23より

明治時代にはいると、全国で凶作が続き、農地を捨てた農民が東京に流入して貧困層は膨れ上がりました。

企業が増え工場の建設が進むと、貧困層の一部は工場労働者となりますが、日露戦争・第一次世界大戦後の不況、物価上昇、貧富の格差の拡大により、産業の発展の陰で生活困窮者は増えつづけました。東京の各地に貧民窟（スラム）が形成されます。

日本の近代化と並行して生じた貧困の状況と、養育院やほかの救貧施設の活動を詳しく説明した本に**塩見鮮一郎著「貧民の帝都」（文春新書　二〇〇八年）**があります。

「貧民の帝都」は養育院六十年史・百年史・百二十年史などの養育院刊行物とともに、養育院開設前史からその後の養育院の事業の歴史をたどることのできる書籍です。

養育院本院は移転を繰り返しましたが、その位置を現代の地図で示した図（本郷・上野・神田・本所・大塚・板橋）が本書に掲載されており、養育院があった場所を知る貴重な情報です。

異形の神への願い

松平定信の心願書

宮本孝一
老年学情報センター

櫻園通信　65　令和3年1月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

明治のはじめ、幕府瓦解による江戸市中の経済混乱で職を失う者が続出し、新首都東京には生活困難な極貧の大人・子どもがあふれていました。そうした人たちを収容する施設として「会議所」附養育院が設けられました。会議所とは、江戸幕府が積み立てていた莫大な救貧基金「七分積金（しちぶつみきん）」を管理運用する組織で、明治五年に作られました。

江戸幕府の救貧基金「七分積金」は、老中松平定信が始めた事業です。飢饉発生など非常時にそなえる「備荒貯蓄」と、貧しい人に米を支給する目的で、お金と米が蓄えられました。寛政の改革の一環です。

当時、大飢饉により米の価格が上がり、全国各地で暴動（一揆・打ちこわし）が起きていました。

老中松平定信は、世の中の混乱が収まることを神に願う「心願書」を書き、本所吉祥院の歓喜天（かんぎてん）という神に奉納しました。



白河楽翁の心願書と渋沢栄一の解説

渋沢栄一の時代から、旧養育院長室に、額が飾られていた。昭和 20 年 4 月の米軍による空襲で、養育院の多くの部分が焼夷弾に焼かれた。本院の多くの建物は焼失、107 名の犠牲者が出、コンクリートの代替像になっていた渋沢像も焼け焦げた。養育院に関する多くの歴史的資料もこのとき焼失したが、養育院長室からこの額は持ち出された。それほど大切にされてきたものであり、現在は表装しなおして展示ケースに収まっている。江戸時代、白河藩主松平定信(白河楽翁)が筆頭老中になり寛政の改革に乗り出したとき、吉祥天に納めた心願　書の写しである。松平定信の作った七部積金の制度に対する感謝の念こめられた渋沢の賛(解説文)が組み合わされて、一つの額にしてあるのである。



まず右側の白河楽翁の心願書であ

心願書は「米の値段が下がり、お金や食料の流通がよくなって、幕府の政事の効果が人々にいきわたりますよう、自分の命と妻子の命をかけてお願いします。もしかなわないのならば、今すぐ自分の命を奪って死なせてください」と書かれています。命を顧みない、文字通り必死の懇願です。この心願書の写しは渋沢栄一の解説文とともに額装され、渋沢栄一院長時代から養育院の院長室に掲げられていました。

明治のはじめの養育院の運営資金は松平定信が創設した七分積金によるものですが、渋沢栄一がそれを知ったのは、会議所の運営メンバーに加わり養育院運営に間接的に関わるようになってからです。

松平定信の心願書も、渋沢は養育院の職員から教わりました。

渋沢は「今ある養育院は、楽翁公（松平定信）あったればこそ」と考えました。（参考　桜園通信二十四号）

渋沢はこの心願書についてたびたび語っていますが、とくに「自分だけでなく妻子の命をもかけた心願で「若し自分の願を聞き届けて下さらぬならば、どうぞ私を殺して戴きたい、独り私の命ばかりでなく、妻子眷族が罰を受けても、一向恨みと思ひませぬ」（＊1）という点には必ず触れました。

そして、それは定信公の容易ならぬ覚悟・熾烈なる精神・身を捨てかかる大覚悟の表れと渋沢は説明していました。

さて、松平定信が心願書を奉納した歓喜天（かんぎてん）とはどういう神様でしょうか。歓喜天は仏教の守護神のひとつで、聖天（しょうてん）ともいいます。

歓喜天は一人ではなく、象の顔をした男女の神が立って抱き合っている姿をしています。二人で一つの神という変わった姿です。

その神像は厨子に納められて秘仏として扱われることが多いようです。

聖天



平安時代の図像集『別尊雑記』（心覚撰）巻四十二より

渋沢栄一は、自身の著書で定信の心願書について「定信公の決意の熾烈さ」とは違う観点の意見を書いていました。

◆

怪異不可思議の事を信ずると否とは、必ずしもその人の学問・知識の程度によるものでは無いらしい。存外な学者で幽霊を信じたりする者がある。

（略）

白河楽翁公の如きは、学問もあり智慧も優れ、精神の立派な人物であらせられたにかかわらず、従来談話した中にも既に申述べ置けるごとく、幕府の老中に任ぜらるるや、自分の一命は素より、妻子眷族の生命までも懸けて、窃に深川の聖天様へ起誓せられて居る。楽翁公に似合はしからぬ事だと思ふが、怪異を信ずると否とは、その人の学問なぞよりもむしろ、かえつてそ人の教育やら境遇に因ることゆえ、楽翁公は御出生が元来殿様なるため、幼少の頃より奥女中なぞに、かのごとき迷信じみた思想を吹き込まれて来た結果、我々から観れば馬鹿気て見ゆるごと起誓などを、正心誠意のほとばしつた余り、あえてせらるるに至つたものだらうと思ふ。（略）

◆

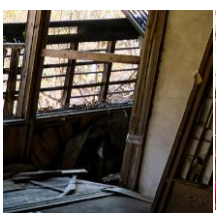
この文章は渋沢栄一が八十二歳のときに刊行された著書に載っています。

江戸の困窮民を新制度で救った楽翁松平定信の偉業を生涯称賛し続けた渋沢栄一ですが、異形の神に自分だけでなく妻子眷属の命も捧げるという行動には強い違和感を感じていたようです。

非合理的な思考を退け、何事も理性的合理的に考えることを旨とした渋沢の態度を見ることができます。

＊1 東京市養育院月報 第339号・第114頁 昭和4年10月 多摩川園に於ける『ロータリー』倶楽部の院児招待に対する謝辞（養育院長子爵渋沢栄一）：渋沢栄一伝記史料第30巻 p.263-266

＊2 実験論語処世談 （渋沢栄一著） 第599-601頁 〔大正11年12月〕【流行の神様】：渋沢栄一伝記史料第1巻 p.179-180




懸隔　けんかく

渋沢の行動原理を知る手がかり

宮本孝一　老年学情報センター

櫻園通信　66　令和3年1月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

江戸時代と明治時代の境目、明治維新のさなかに渋沢栄一はヨーロッパにいました。徳川慶喜の弟昭武のパリ万博参加にあたり幕臣として渋沢は随行しました。このとき最も心に残った体験は「外国では**役人と商人の懸隔（けんかく）**が日本の如くでない、是は何とかしなければならぬと云ふ事に気が付た」ことでした。[*1]

江戸時代、士農工商で商人は最下層の身分。武士と対等に話すことなどできません。ところが徳川昭武一行の世話役の銀行家と昭武の家庭教師をした陸軍大佐はまったく対等の態度で接している。商人と軍人（役人）が対等であることに渋沢は驚嘆しました。

渋沢の実家は染料の藍玉を製造・販売する農家。渋沢も十代の頃から藍の買い付けで商才を発揮していました。そのころ農家・商家に対する武家の理不尽で差別的な態度に強い怒りを覚えました。

明治時代になり、政府の役人を勤めたあと実業家に転身しますが、それを引き留めようとした人に「日本は官吏であることを無上の光栄とし、商工業者は蔑視される。自分は商人の品位を高め、商業・商人を社会の最も上流に位置付けたい。国家の基礎は商工業にあり、だ。そのため論語を思想とした経営をするつもりだ。」と答えます。

明治の初めまで、渋沢栄一の行動原理は「商人を見下す官尊民卑の打破。商業者の地位向上」でした。封建時代からいまだに残る**役人と商人の懸隔**をなんとかする、とはそういうことです。

◆

懸隔（けんかく）は、現代の言葉ではどんな言葉に当たるでしょうか。
それを考えるために次に、渋沢が晩年に使った懸隔をピックアップしてみます。

◆

・殊に工業が段々進むに就て、追々に生存競争が烈しくなりて**貧富を懸隔**せしめ（略）

・物質的の進歩が益々進むとしたならば、**貧富の懸隔**は益々甚しくなることを予期せざるを得ないのである。

竜門雑誌　第二七〇号・第一一―一九頁　明治四三年一一月　○慈善事業の過去現在（青淵先生）渋沢栄一伝記資料第30巻 p.813

・国民の富力増進に努むる所ありし結果、**貧富の懸隔**著しく、随て貧民は疾病に苦しむ場合にも之を療養する道なきが如きを致せりことを予期せり

竜門雑誌　第二七六号・第四九―五六頁　明治四四年五月　○恩賜財団に関する協議会　渋沢栄一伝記資料（DK310009k-0006）第31巻 p.65

・協調会が大正八年に出来まして、政府も助け資本家も加入して、其協調に努めて居ります。即ち資本家と労働者の協調を図つて居ります。更らに第三には、**貧富の懸隔**を防いで居ります。之は富めるものを貧しくし貧しいものを富ますのでは無く、貧者の懸隔を補ふにあります。之が私の老後国家に対する義務と考へて居ります。

青淵先生演説速記集（三）　自大正十年四月至大正十三年二月　雨夜譚会本　渋沢栄一伝記資料（DK490210k-0001）第49巻 p. 653

・もう一つは**貧富の隔懸**であります、**此両者の隔離を接近せしめて調和を図つて行く**と云ふこと、即ち純然たる社会事業である。今日は学者間では済民恤救と云ふことは努めて言はぬやうにして居る、是は理論上適当の注意でありませう。

併し事は矢張済貧恤救である。現に東京市の養育院の如きは私は明治初年から必要と思ふて、之に関係して最早四十九年目になります。

銀行通信録　第七五巻第四四七号・第一―一三頁大正一二年一月　物質界及精神界に対する予の希望　子爵渋沢栄一　渋沢栄一伝記資料（DK510003k-0002）第1巻 p.18

◆

貧富の懸隔（または隔懸）…渋沢栄一の言う懸隔は現代の**格差**という言葉に置き換えられるように思います。

晩年の渋沢栄一は、社会事業家として、**貧富の懸隔**、現代でいう**貧困格差・所得格差**を憂い、格差拡大への対処に取り組みました。

では、渋沢栄一が考えた貧富の懸隔対策とはいかなるものだったでしょうか。

◆

・貧富の懸隔を融和するといふ、即ち済貧恤救の事務であります。此救済の事は、動もすると仏説の喜捨となりて、只物を捨てゝ窮乏の人に施すを主義としますけれども、人道的若くは経済的に言ふならば、単に喜捨ばかりではいけない。**先づ第一に防貧を努めねばならぬ**と思ひます。斯く論ずると所謂**社会政策**となつて、学者・政事家の領分に立入るかも知れませぬが、貧しき人を救護し又は防貧の措置をすることは、人道上から言つても、政治上から考へても、経済上から観ても、必要欠くべからざることではないかと思ひます。竜門雑誌　第三七五号・第一一―一九頁　大正八年八月　○春季総集会に於て　青淵先生　渋沢栄一伝記資料（DK420111k-0005）第42巻 p.678

・最も其中にも力を用ひなければならぬと思ひまする事は、**既に困難に陥つた場合に之を救ふよりも、未だ其所に至らぬ以前に之を救済するといふ即ち済貧と防貧との差別でございます。**勿論済貧を致さねばなりませぬけれども、併し望むらくは一歩進んで防貧の手段が追々に制度上にも或は地方団体に於ける設備にも、或は個人的事業の上にも進んで参りましたならば、如何に一方からして貧富懸隔せしむる経済上の進歩が働きて行くとも、又之を防ぐことが伴つて参りませう。又さう参らせたいと思ふのであります。

慈善　第三編第二号・第四五―五一頁　明治四四年本会第四回総会開会の辞（会長男爵渋沢栄一）渋沢栄一伝記資料（DK300047k-0003）第30巻 p.453-457

◆

渋沢栄一が院長として養育院運営に関わると同時に事業家として活躍していた頃は「貧困は個人の責任（自業自得）だが、人道として援助は必要だ」という、事後的な救済の必要を訴えていました。渋沢のいう**済貧**です。

しかし日露戦争のあたりからは晩年まで、渋沢栄一は貧困に陥らないようにする社会のしくみこそ第一と唱えるようになります。**済貧より防貧、**です。

公利目的の企業家として商人の地位向上↓　貧窮者を助ける企業家精神↓　すべての人が最低限の生活が確保できる社会づくりの一部としての企業活動、と渋沢栄一の人生哲学は三段階で変化しました。

日本と欧米諸国の比較から見える制度整備などの**懸隔**、あるいは国内の社会に見られるさまざまな種類の**懸隔**を分析することで、渋沢栄一の行動原理は練り上げられたように思えます。

＊1　竜門雑誌　第265号　第11-12頁　〔明治43年6月〕本邦公債制度の起原（青淵先生）　渋沢栄一伝記資料　第1巻 p.660-661



渋沢栄一秘書
白石喜太郎の驚き

宮本孝一　老年学情報センター

櫻園通信　67　令和3年1月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

渋沢栄一の秘書が、亡くなる三年前、八十八歳の渋沢の様子を書き残しています。

ラジオ放送で渋沢が講演をした日の朝と、放送の様子です。

講演は「御大礼に際して迎ふる休戦記念日に就て」というもので、第一次世界大戦休戦の記念日に毎年、社団法人国際連盟協会会長としてラジオ講和を行っていました。東京の愛宕山に日本放送協会の放送局ができて日本にラジオ放送が始まったばかりの時代です。

この日は、第十一回休戦記念日の放送。一国の利益のみを求め他国を顧みないのは正しい道徳ではない。共存共栄・経済協調によってはじめて国民は安心して生活ができる。政治経済と道徳の一致が必要と説いています。

まずはその日の朝の様子から。

読みやすいよう、漢字をかなに変えたところや改行したところがあります。

午前九時飛鳥山邸へ行く。

このころ朝の遅い子爵がもうすつかり用意を整へて、今日の講演の原稿に手を入れておられる。

西洋館の居間の北側の窓に面し、青羅紗を張つた低い円卓を前にしておられる。正面からは弱い光が差し、やや後の東側の大きな窓から美しい朝日が勢よく飛込んでいる。

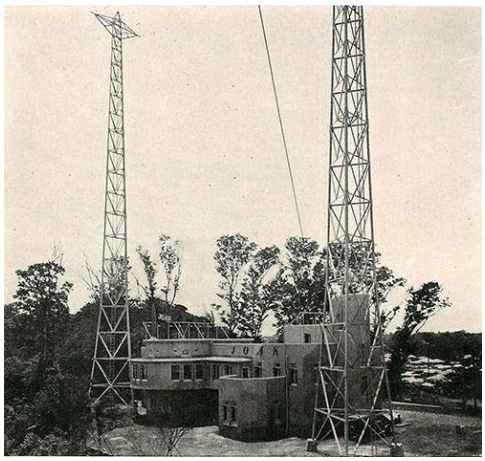
強弱二様の光の相交錯する辺りに、九十に近い子爵が眼鏡も掛けずに筆を運ぶ様はどうしても画である。

明窓浄几と題すべき形である。（略）



国際知識　第一二巻第二号・第五五―五八頁昭和七年二月　休戦記念日の想ひ出　故渋沢子爵秘書役白石喜太郎（DK370052k-0005）第37巻p.223-224

九時半ごろ渋沢は書き終わった原稿を秘書に読ませて意見を聞きます。秘書は二、三気になった所を指摘。そこでまた渋沢は原稿を修正。十時前に邸宅を出て愛宕山の放送局へ。



小さな放送室に入ると、アナウンサーとしばし会話。「一体話し方はどういうのがよいのですか。人によつては誠に聞き苦しいことがありますが……」「調子の早い方は具合が悪うございます。ゆっくりの方がよく入るようでございます。かん高い方でも早くなければ、そんなに聞き苦しくはありません」

そして、いよいよ放送スタート。

「ＪＯＡＫこちらは東京中央放送局であります。これから御大礼記念国際講演に移ります。有線中継でありますから準備の都合で、しばらくそのままお待ち願ひます」

　またしても異常の沈黙が広がる。事実一分経たぬかも知れないが、非常に長いような気がする。やがて沈黙は破れた。

「お待たせいたしました。それではこれから御大礼に際して迎ふる休戦記念日に就て、と題する子爵渋沢栄一氏の講演がございます」

　子爵はおもむろに原稿を拡げ、眼鏡なしで始められる。

「私がただいま紹介された渋沢栄一であります。」

　反響のない室のせいかやや低く聞えるが、語調と云ひ、語勢と云ひ、極めてよい。とても朗読とは思へぬ話し振である。

　ときどき原稿をはなれて註釈を加へられまた原稿に戻るのが、極めて自然で、原稿を知らぬ人には恐らく分るまいと思はれるほどである。

　咳を一度されたきりで、水一つ飲まれず、元気に続けられる。

「これで私のお話を終ります」

と結ばれてもなお話したそうに見えた。

　アナウンサーの結辞をまつて静かに室を出る。吉例によつて記念撮影である。

（略）

国際知識　第一二巻第二号・第五五―五八頁昭和七年二月　休戦記念日の想ひ出　故渋沢子爵秘書役白石喜太郎（DK370052k-0005）第37巻P.225-226



　この渋沢栄一の秘書白石喜太郎の回想ですが、渋沢の特徴に繰り返し触れています。白石にはこれが渋沢について特に強調したかったところなのでしょう。

　「九十に近い子爵が眼鏡も掛けずに筆を運ぶ様」「おもむろに原稿を拡げ、眼鏡なしで始められる」

　人間は四十歳ごろから眼球のレンズ（水晶体）が固くなり、近いものにピントが合わなくなります。老眼です。

　また高齢になると白内障や緑内障などの目の病気が起こりやすくなります。

　しかし渋沢栄一は八十八歳で眼鏡無しで原稿を読み書きしていたのです。

◆

　この日のラジオ放送は録音され、国際連盟協会によりレコードが作られました。

　また、現在もこのラジオ放送の音声を聞くことができます。渋沢史料館発行のＣＤ「肉声で聞く渋沢栄一の思想と行動」に収録され、史料館オンラインショップで販売されています。

養育院巣鴨分院
元孤児たちが建てた石碑

櫻園通信 68　令和 3 年 1 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

監修：稲松孝思　顧問医
作　：栄畑南美（えばた　なみ）　老年学情報センター

　東京都練馬区にある児童養護施設・東京都石神井学園。
　ここに石碑があります。「気は長く　勤めはかたく　色薄く　食細ふして　心広かれ　栄一書」とありますが、これは渋沢栄一の手によるものです。
　「短気にならずに気をゆったりと持ち、しっかりと働き、色欲はあまり持たず、食事は節制をして、心を広く持ちなさい」という意味です。
　元々、このことばは、安土桃山時代から江戸時代初期にかけての高僧・天海が語った長寿の秘訣ですが、それを渋沢が引用したのではないかと思われます。

　では、どうして渋沢栄一の書が彫られた石碑が、石神井学園にあるのでしょうか。



表面

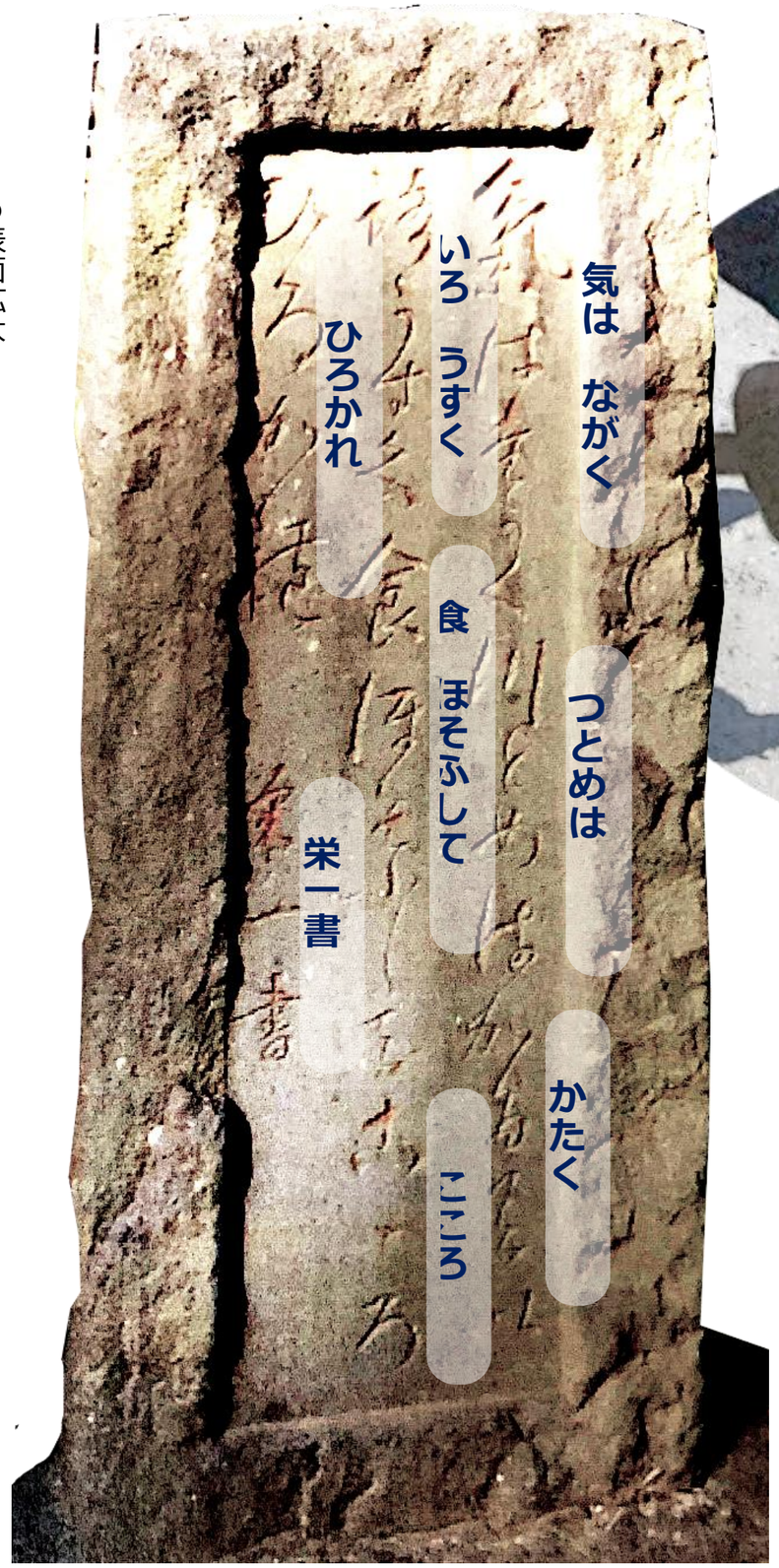


裏面

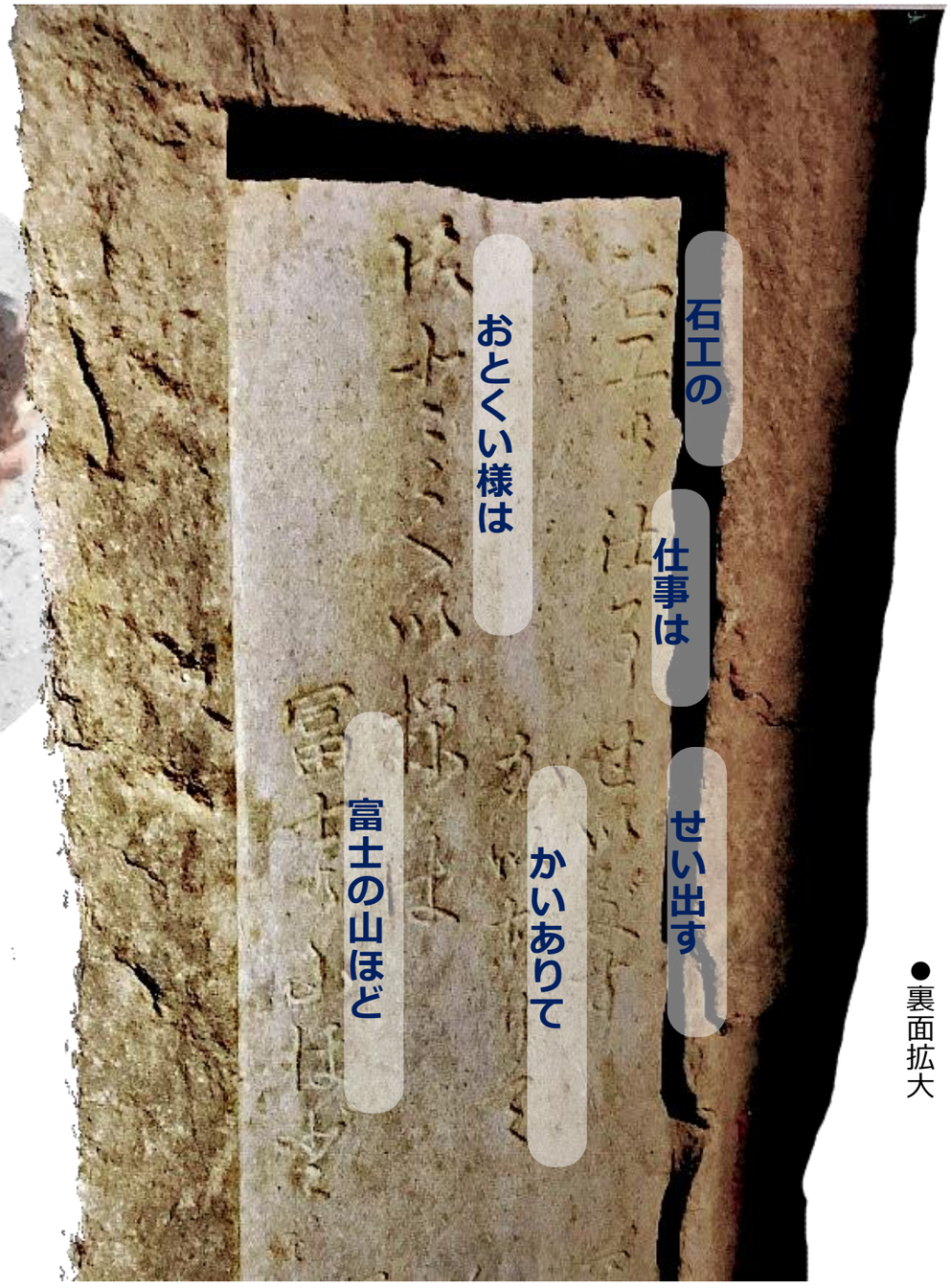


　それは、東京都石神井学園の前身が、渋沢栄一が初代院長を務めた養育院の巣鴨分院だからです。
　養育院は、1872 年（明治 5 年）に病人、孤児、障害者、困窮者などの保護施設として設立されました。
　その後、1909 年（明治 42 年）には、施設が手狭になったことと、入所している大人たちからの子どもへの悪影響を懸念して、孤児教育を目的とした養育院巣鴨分院が独立しました。
　巣鴨分院は、1942 年（昭和 17 年）に現在の土地に移転し、その時に名称も東京都石神井学園に変更され今に至っています。渋沢は、ほぼ毎月巣鴨分院を訪れ、子どもたちと話をしたと言われています。
　この石碑は、巣鴨分院で育った元孤児である石工たちが寄付して建立しました。石碑の背面には、石碑を作った元孤児である石工たちのことばも彫られています。「石工の仕事は　精出す　甲斐ありて　おとくい様は　富士の山ほど」とあり、石工として立派に自立大成した様子が伺われます。
　養育院から派生した巣鴨分院は、現在に繋がる児童福祉分野の先駆けだったとも言えるのではないでしょうか。

●表面拡大







●裏面拡大

【参考文献】
稲松孝思「都区職員のための渋沢栄一入門 15　新壱万円札の人　子どもたちの育成、論語と算盤　渋沢と教育・下」『都政新報』2020 年 11 月 27 日、p.8
「成り立ち・沿革」東京都社会福祉事業団東京都石神井学園ホームページ、
https://www.jigyodan.org/shakujii-gakuen/about/history/　2021 年 1 月 14 日最終閲覧。

写真で見る　養育院巣鴨分院

東京市養育院写真帖と
創立 60 周年記念写真帖から

櫻園通信 69　令和 3 年 1 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

監修：稲松孝思顧問医
作　：栄畑南美（えばた　なみ）　**老年学情報センター**



正門から見る巣鴨分院　1929 年（昭和 4 年）





東京都健康長寿医療センター（以下、センター）の前身・養育院は、1872 年（明治 5 年）に病人、孤児、障害者、困窮者などの保護施設として設立されました。

センターには、養育院時代の貴重な資料が保存されています。

今回は、保存資料のうち、1910 年（明治 43 年）発行の「東京市養育院写真帖」と、1932 年（昭和 7 年）発行の「創立 60 周年記念写真帖」から、孤児教育施設・養育院巣鴨分院の写真をご紹介します。

養育院巣鴨分院は、入所人数の増加と、養育院にいる大人から子どもたちへの悪影響が懸念され、1909 年（明治 42 年）に独立した孤児教育施設です。巣鴨分院は、1942 年（昭和 17 年）に練馬区の現在の土地に移転し、名称も東京都石神井学園に変更され、児童養護施設として今に至っています。



左の写真は、1909 年 6 月 5 日の巣鴨分院開院記念式で撮影された写真です。創立時から、とてもたくさんの子どもたちが巣鴨分院で暮らしていたことが分かりますね。



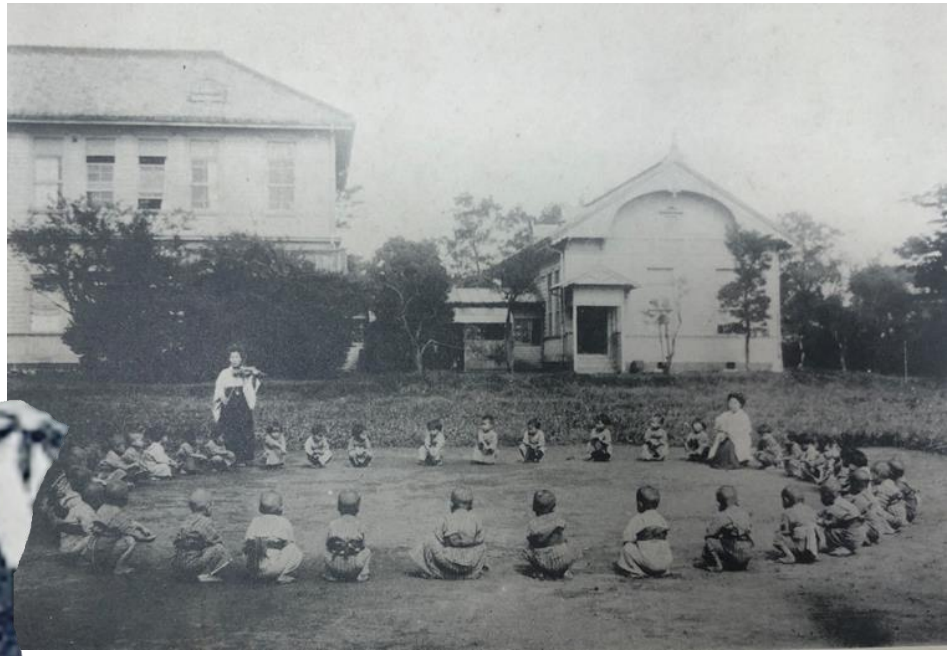
巣鴨分院では、当時の幼稚園や小学校程度の教育を行っていました。

右の写真は、創立当時（1909 年頃）の授業の様子です。





右の写真は、巣鴨分院の幼稚園児たちが輪になってお遊戯をしている様子です。左に立っている先生らしき女性が、バイオリンのような物を持っているのが見えます。







左の写真は、1932 年（昭和 7 年）のひなまつりの様子です。おひな様が飾ってありますね。

巣鴨分院では、授業だけではなく、季節の行事も行われていました。

【写真出典】
東京市養育院編著（1910）『東京市養育院写真帖』東京市養育院。
――――――（1932）『創立 60 周年記念写真帖』――――――。

蘭学者の夢 貧院 幼院 病院

養育院の遠いルーツ

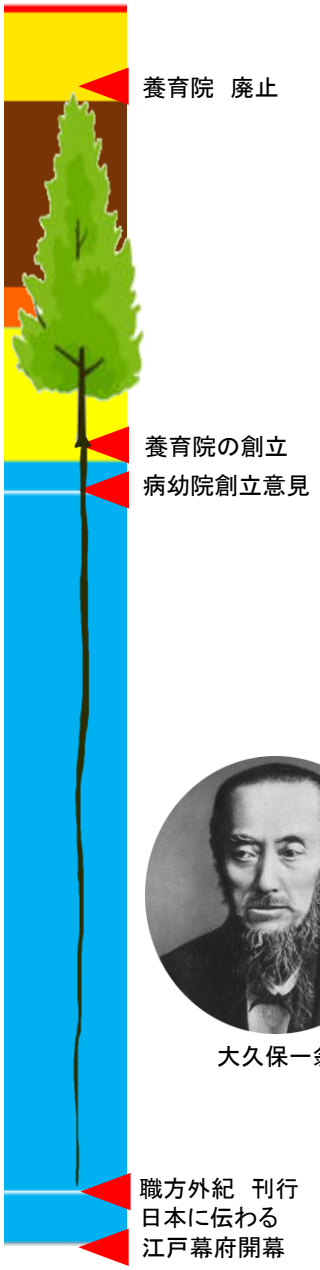
櫻園通信　70　令和3年1月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

宮本孝一　老年学情報センター

大久保一翁のプラン　貧民あふれる新首都東京の府知事に就任した大久保一翁は、幕府の救貧基金「七分積金」を管理する組織「会議所」に諮問し、救貧策を考えさせます。このことと口シア皇子来日に際しての浮浪者収容とが重なり、救貧施設「養育院」が誕生しました。

大久保一翁は、もともと江戸幕府の重臣でした。一翁はそのころすでに養育院とよく似た西洋式の救貧施設のプランを持っていました。

幕末の時期、西洋社会の知識を集めていた一翁は、新施設設置プランを**病幼院創立意見**としてまとめ幕府で提案しました。しかしその直後、異動命令が出され、拒否したため左遷されてしまいます。養育院の原型である一翁のプランは幕府では実現しませんでしたが、東京府知事で実現したといえます。（桜園通信　二十一号）




大久保一翁

蘭学者は知っていた　幕臣時代の一翁は、書籍や遣欧使節団からの世界情勢の情報を集め、日本の今後の展開を考えようとする開明派でした。一翁の救貧施設のプランも、西洋の福祉施設**貧院・幼院・病院**の知識を基にしたものでした。

幕末期の遣欧使節団に同行した洋学者たちは、これらの施設について現地で調べ、その事業内容を記録しました。西洋社会の福祉事業に対する関心が高かったことがわかります。

洋学は幕末期にイギリス・フランス・ドイツから西洋の知識が入ってくるようになってできた学問です。それまで西洋の知識はオランダからもたらされるものでした（蘭学）。

蘭学者の間では、一翁のプランより二四〇年も前から幼院・病院・貧院の知識が広く知られていました。

貧院・幼院・病院の知識をもたらした本

今から四百年前、江戸幕府の将軍が秀忠（第二代）から家光（第三代）に代わるころ、中国でイタリア人宣教師とキリスト教信者の中国人により、世界各国の社会制度・歴史を紹介する漢文の書籍「職方外紀（しょくほうがいき）」が刊行されました。この書籍はすぐに日本にも伝わりましたが、キリスト教宣教師の著作であり、まもなく幕府により禁書とされました。

ただ、西洋の知識を求めていた蘭学者たちは、隠れて写本やその内容を引用した書籍を作り、禁書の「職方外紀」を海外事情を知るテキストとして二百年間使っていました。現在も全国各地の図書館に多くの写本が残されています。**幼院・病院・貧院**の知識は「職方外紀」により日本に伝わりました。現代も使われる病院という言葉は、蘭学・洋学者に使われていて、それがそのまま日本語として定着したものです。＊1

では、養育院のルーツ**幼院・病院・貧院**の知識は、「職方外紀」ではどのように書かれていたでしょうか。

「職方外紀」の現代語訳が「大航海時代の地球見聞録　通解『職方外紀』」＊2です。この本から、貧院・幼院・病院の記述部分を引用してみます。

紫色の部分が引用文です。（前掲書　p一四〇ー一四一）

ヨーロッパの国人（くにびと）は天主の正教に奉（つか）え、二つのことを守る。一つは「天主を万物の上に敬愛する」こと、もう一つは「人を己のように愛する」ことである。（略）「人を己のように愛する」とは、一、その霊魂を愛し、善を行い悪を去り、天が生んだ福を享受することであり、二、身体を愛することである。自分が人を慈しまなければ、天主も自分を慈しまない。だからヨーロッパの人はよろこんで施しをする。千年来、貧しさで子女を売る者はおらず、飢餓で路に死ぬ者はいない。

貧院　身寄りのない者を養う。その中にいる者にも仕事があり、障がいがある人や病人も見すてない。盲目の者は手足を動かし、手足が麻痺したものは耳目をはたらかせ、それぞれ担当があり、その仕事に才をつくさせ、天地の廃物としない。

幼院　小児を養育する。貧者が子を産んで養う力がなくても、これを殺すのは罪である。だから、とくにこの院を設けて、人に養育させ、子どもの命を全うさせる。その一族が貴くても家が貧しい者は、子を孤児院（幼院）に送るのを恥じるので、両方を立てる法がある。院の壁に穴があり、回転盤を設け、内と外が隔たり、互いに見えない。子どもを送る者は人に見られることなく、子を盤に置く。壁をたたけば、院の中の人が盤を回転させて、子どもがはいる。洗礼を受けたかを子の胸に明記し、時が過ぎて、父母がまた養育するなら、入れた年月によって、その子をえるのである。

病院　大きな街では数十ヶ所になる。中下の院には中下の人がおり、大人（たいじん）の院には貴人がいる。貴人のうち、旅客や使者が病になれば、この院にはいる。病院は通常の家よりずっと美しく、必要な薬は係の者が管理し、名医が準備しており、毎日病人を診察する。また衣服や寝具があり、看護の人もいる。病が癒えて去るとき、貧者には旅費を給する。これは国王や名家が設立したものであり、街じゅうの人が力をあわせてつくった。月ごとに有力な貴人がその事を総領し、薬物や飲食などは実際に試して比べる。

「職方外紀」の職方とは、古代中国の官職で、地方の異民族の状況を知り、官を送って治めさせる役職です。職方外紀とは「職方も知らない遠方世界について記した本」という意味です。



職方外紀
アジア大陸を示す図
https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Zhifang_waiji1.PNG

＊1　荒川清秀．加藤周一氏の「明治初期の翻訳」について．文明21　No.3　p25-30

＊2　ジュリオ・アレーニほか著／齊藤正高訳「大航海時代の地球見聞録　通解『職方外紀』」（原書房2017）

巣鴨分院の職業訓練と藪入り会

櫻園通信 71 令和 3 年 3 月
東京都健康長寿医療センター
養育院･渋沢記念コーナー
連絡先:老年学情報センター



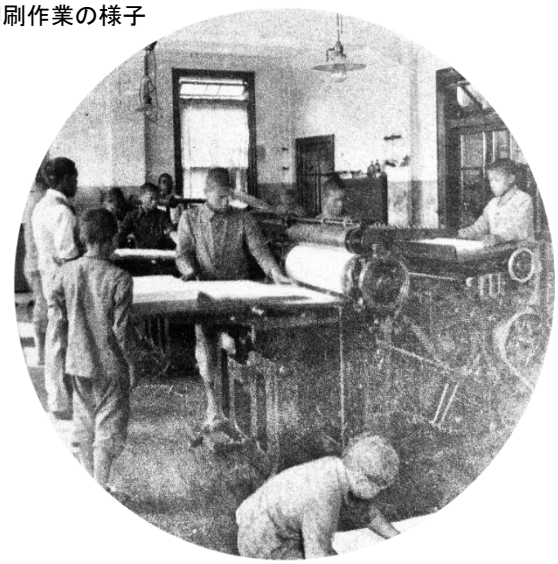
巣鴨分院　年長男子寮

監修：稲松孝思顧問医
作　：栄畑南美（えばた　なみ）　**老年学情報センター**

養育院巣鴨分院は、1909（明治 42）年に養育院から独立した孤児教育施設です。養育院本院では、入所人数の増加と、養育院にいる大人から子どもたちへの悪影響が懸念されていたため、巣鴨に子どもたちだけの施設が作られました。養育院の院長であった渋沢栄一も、巣鴨分院にほぼ毎月通っては孤児たちと交流していました。巣鴨分院は、1942（昭和 17）年に現在の練馬区に移転し、名称も東京都石神井学園に変更され、児童養護施設として今に至っています。

巣鴨分院では、当時の小学校程度の教育を施していましたが、年長の男子・女子には社会へ出るための準備として職業訓練も行っていました。年長男子寮の中には印刷場があり、1925（大正 14）年から職業訓練として印刷作業の実習を行っていました。

印刷作業の様子





ミシン裁縫を学ぶ様子

また、年長女子寮には炊事場があり、自炊の練習をして、家事ができるようにしていました。さらに、裁縫室とミシン裁縫室も設けられ、裁縫を習得できるようにしていました。

職業訓練を経て、巣鴨分院からはたくさんの子どもたちが巣立っていきました。奉公先から奉公人が実家に帰ることのできる春と秋の藪入りには、巣鴨分院出身者も巣鴨分院に帰ってきて、院長の渋沢も出席し**藪入り会**が盛大に催されていたようです。

1930（昭和 5）年 9 月の「東京市養育院月報」に、同年の藪入り会について記述した文章が残っていました。旧字を修正して裏面に引用します。

院外委託児童並出身者秋季藪入り会　院長登庁

日なる九月十三日を選び、当分院においては院外委託児童並出身者の秋季藪入り会を挙行せり、会場に当てたる講堂及び食堂は、職員一同の手により前日までに美しく装飾せられたり、当日は夜来の豪雨全く晴れ渡り、絶好の藪入り日和となり、早朝より喜色を満面に湛えつつ三々五々打ち連れ来り、開会定刻の午前十時にはすでに数十名に達したり（中略）

院長登壇、温容に微笑みを湛えられつつ、諄々処世の要諦につき訓辞を与えられ、終わって校庭にて記念撮影をなし、食堂においては保母の手になる特別献立の昼餐を饗し、午後再び余興を開き（中略）午後四時三十分盛会裏に散会したり。当日の来会者は男五十四人、女三十四人、計八十八人なりき。

（東京市養育院月報、第 350 号 p.15）

この文からは、巣鴨分院の職員による出身者たちを迎えるための心尽くしの準備や、出身者たちの嬉しそうな様子がよく伝わってきますね。渋沢も笑顔で訓辞したようです。それにしても、88 人も集まったとは盛大な会ですね。



さて、この時撮影された巣鴨分院出身者と院長の渋沢栄一の記念写真が、「創立 60 周年記念写真帖」に残っていました。左が 1930（昭和 5）年 9 月の藪入り会の写真です。前列真ん中に座っているのが渋沢です。

「写真帖」にもこの写真の説明として藪入り会について記述があります。以下に引用します。

出身者藪入り会と渋沢院長　（中略）渋沢院長もまた出身者一同と親しく膝を交えて或いは訓話し、あるいは共に余興をご覧になるのを大変喜びとしておられた。（中略）写真はそうした記念撮影の一つである。

昭和五年九月、当時院長は九十一歳で尚矍鑠（かくしゃく）たるものがあった。しかるに翌六年忽然として薨去（こうきょ）遊ばされようとは当時誰かよく予知し得たであろう。

（創立 60 周年記念写真帖）



上の写真の渋沢は、なんと 91 歳でした。亡くなる前年にも、巣鴨分院の藪入り会で出身者との交流を楽しんでいた渋沢栄一。まさに、児童福祉は渋沢が生涯を通じて携わった福祉事業分野だったと言えるのではないでしょうか。

【参考文献】
東京市養育院編（1930）『東京市養育院月報』第 350 号、東京市養育院。
――――――（1932）『創立 60 周年記念写真帖』――――――。



櫻園通信 72　令和 4 年 3 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

作：栄畑南美（えばた　なみ）
老年学情報センター

桜の名所・飛鳥山は、渋沢栄一の邸宅があったことでも有名です。渋沢は、東京都健康長寿医療センターの前身である養育院の院長を長く務めましたが、養育院には巣鴨分院という孤児教育施設もありました。渋沢は養育院巣鴨分院の子どもたちのためにも心を砕き、交流を大事にしていたといいます。今回は、巣鴨分院の子どもたちを招待し、飛鳥山の渋沢邸で開催された園遊会について紹介します。

養育院巣鴨分院は、1909 年（明治 42 年）に養育院から独立した孤児教育施設でした。養育院本院では入所人数の増加と、養育院にいる大人から子どもたちへの悪影響が懸念されていたため、巣鴨に子どもたちだけの施設が作られたのです。巣鴨分院は、1942 年（昭和 17 年）に練馬区の現在の土地に移転し、名称も東京都石神井学園に変更され、児童養護施設として今に至っています。



1909 年　巣鴨分院開院式での記念写真

養育院の院長であった渋沢は、巣鴨分院にもほぼ毎月通っていました。1922 年（大正 11 年）5 月の東京市養育院月報・第 255 号には、第 13 回看護学講習生卒業式における渋沢の訓話が載っています。その文からは、渋沢が巣鴨分院の子どもたちに話をすることを大事にしていた様子が読み取れます。

毎月十三日は本院の記念日でありますから、余程差迫つた用事のない限り、私は本院及び巣鴨分院に参りまして、或は常設委員会に列し或は事務の打合せを為し、又特に巣鴨分院児童に対しては何か話をすることに極めてゐます。
（東京市養育院月報、第 255 号 p.112）

1924 年（大正 13 年）の東京市養育院月報には、渋沢が同年 4 月 18 日、飛鳥山の自宅に巣鴨分院の子どもたちを招き「収容児童慰安会」という園遊会を催した記録が残っていました。渋沢邸を訪れた 7 歳から 15 歳までの子どもたちの人数は、なんと 344 名、引率の職員は 30 名だったそうです。

その園遊会の様子を、養育院月報から旧字を修正し句読点を補って引用します。

収容児童慰安会　四月十八日渋沢院長は当分院収容児童慰安のため飛鳥山の同邸において園遊会を開催せられたり（中略）午前十時同邸に到り特に設けられたる余興場前の芝生に集合せり。（中略）

庭を隈なく周遊すれば院長もまた草花等を指しつつ、高齢の体をも忘れられけん如く、いと楽し気に児童とともに散策を試みられたり。しばらくして庭内の一巡を終われば早や既にこちらの木陰あちらの亭に、或いは団子、或いは甘酒、或いは桜餅等の準備あり。院長自ら「さあさあ、こちらへ」と幼き数百の客を懇ろに饗応せられければ、児童は心ゆく限り自由なる春の園を飛び回り嬉戯する。（東京市養育院月報、第 273 号 p.22）

渋沢は、この時 84 歳と高齢でしたが、子どもたちと一緒に春の庭に出て、楽しく散策したようです。散策後にはお団子や甘酒、桜餅の模擬店が準備されていたとのことで、きっと子どもたちは大喜びだったことでしょう。その様子を見て、「**院長においては非常なる満足の顔なりき**」とも書かれています。



また院外に出づることの少なき児童等は遠くに筑波、近きは荒川、王子の各方面を展望して快哉を叫び或いは眼下を走る汽車に歓呼の声を放ち、いと賑やかに「すし」の昼食を終え再び余興場に集まりぬ。この時更に煎餅、ピース及びキャラメル等の菓子を分配せられれば、之を口にしつつ奇術師の巧みなる手芸、滑稽なる身振りに児童等の喜び例えんものなく、或いは拍手し或いは抱腹し時の移るを知らざりき。（同上）

渋沢邸からは筑波山や荒川、王子がよく見渡せ、子どもたちは眺望や汽車が走る様子を楽しみながら昼食におすしを食べました。その後、余興場でお菓子を食べながら手品等を楽しみました。配布されたピースとキャラメルは森永製菓より寄付されたものだったと、渋沢の秘書役・増田明六の日誌に記載があります。楽しい春の 1 日を渋沢邸で過ごし、4 時半頃子どもたちは巣鴨分院への帰路に就いたそうです。

渋沢は、亡くなるまで約 50 年間養育院の院長を勤めました。子どもたちを喜ばせ、自分自身も楽しみながら児童福祉分野に関わっていた渋沢の姿が、今回の資料から見て取れるのではないでしょうか。

【参考文献】
東京市養育院編（1922）『東京市養育院月報』第 255 号。
――――――（1924）『――――――』第 273 号。
「デジタル版渋沢栄一伝記資料」第 30 巻、p.235、公益財団法人渋沢栄一記念財団ホームページ、https://eiichi.shibusawa.or.jp/denkishiryo/digital/main/index.php?DK300021k_text、2022 年 2 月 3 日最終閲覧。



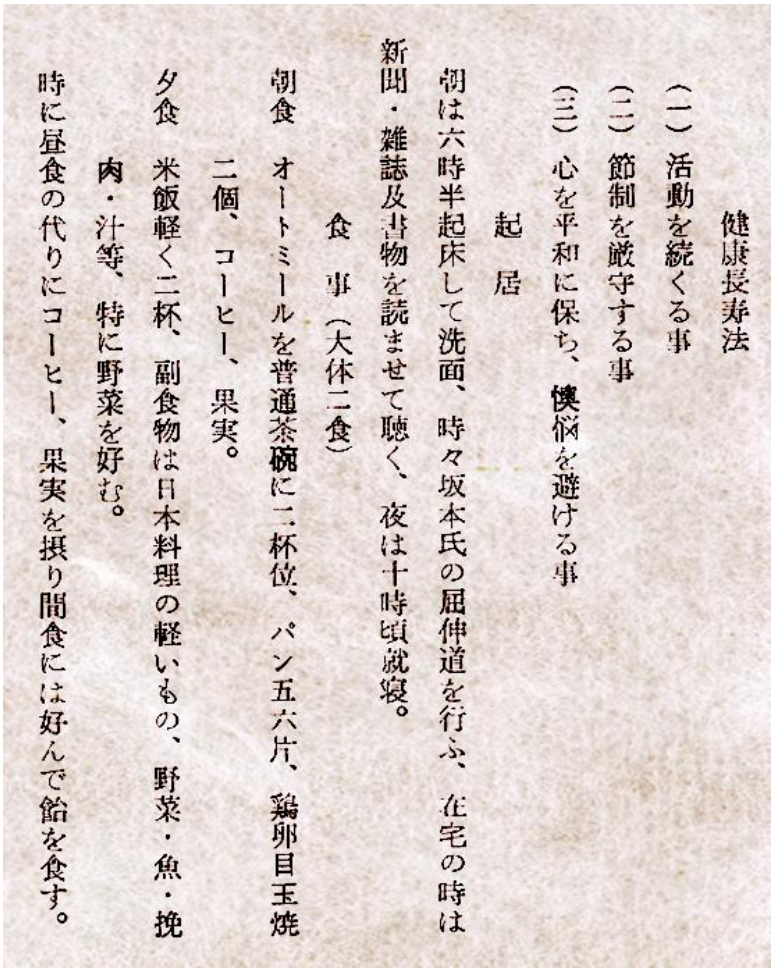
長寿の秘訣？
渋沢栄一の健康長寿法

作：栄畑南美（えばた　なみ）　老年学情報センター

櫻園通信 73　令和 4 年 3 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

渋沢栄一は、91 歳で亡くなるまで約 50 年間養育院の院長を務めました。まさに健康長寿だった渋沢の体調管理の秘訣は、誰もが気になるところでしょう。

『渋沢栄一伝記資料』の第 49 巻に、1931 年（昭和 6 年）の資料として、渋沢が最晩年に行っていた健康長寿法と一日の生活、食事についての記載を見つけました。



健康長寿法

（一）活動を続くる事
（二）節制を厳守する事
（三）心を平和に保ち、懊悩を避ける事

起　居

朝は六時半起床して洗面、時々坂本氏の屈伸道を行ふ、在宅の時は新聞・雑誌及書物を読ませて聴く、夜は十時頃就寝。

食　事（大体二食）

朝食　オートミールを普通茶碗に二杯位、パン五六片、鶏卵目玉焼二個、コーヒー、果実。

夕食　米飯軽く二杯、副食物は日本料理の軽いもの、野菜・魚・挽肉・汁等、特に野菜を好む。

時に昼食の代りにコーヒー、果実を摂り間食には好んで飴を食す。

渋沢栄一伝記資料　第 49 巻　p.603

右に書いてある健康長寿法の 1 番「活動を続くる事」の通り、渋沢は高齢になっても精力的に活動を続けていました。

この 1～3 の健康長寿法は、イギリスの医学者ラブソン・スミスが『百歳不老』という著書の中で主張したことであり、渋沢は「**スミスの説を読みまして、自分の考えをそのまま申してくれたように考えた**」（渋沢栄一伝記資料　第 39 巻 p.653）、「**大いに我が心を得た、大いに我思うたところに、他国人の戒めが相応ずると思うて、とにかく喜んでいる**」（同資料 第 43 巻 p.174）などと、よく講演でスミスの説を引用して話をしていたようです。



「起居」の段落にある「坂本氏の屈伸道」とは、柔術家・坂本謹吾が提唱した健康体操です。

屈伸道については、櫻園通信 44 号「渋沢栄一の健康法 坂本屈伸道」でご紹介しましたので、そちらをご参照ください（HP からもダウンロードできます）。
https://www.tmghig.jp/hospital/facilities/youikuin-shibusawa/

渋沢の食事に関しては、朝・夕の２食のことが多かったようです。伝記資料の第１巻にも「**お昼をあがらないから十時半頃朝食**」（p.295）という記載がありました。今で言うブランチのようですね。

朝食のメニューは、オートミールを普通茶碗に２杯ぐらい、パン５、６片、目玉焼き２つ、コーヒーと果物。高齢にもかかわらず、かなりしっかりと食べていました。

また、夕飯は、ご飯を軽く２杯、おかずは日本料理の軽いもの、野菜、魚、ひき肉、汁物といったメニューだったようです。渋沢は、特に野菜が好きだったそうです。そして、昼食を食べない代わりに、時々コーヒーや果物を食べたり、おやつには飴を食べたりしていました。





オートミール

さて、渋沢が好んで朝食に食べていたオートミールとは、どのようなものなのでしょうか。

オートミールとは、オーツ麦を脱穀し、食べやすく加工した食品です。シリアルの原料にも使われます。オートミールには、ミネラルや食物繊維が豊富に含まれているのと同時に、植物性たんぱく質も含まれ、最近では健康食品としても注目されています。

特に、水溶性と不溶性両方の食物繊維がバランスよく含まれているので、水溶性食物繊維に含まれるβグルカンの血液中のコレステロールを排出させる働きや、不溶性食物繊維の整腸作用が期待できます。

渋沢のオートミールの食べ方としては、前述の伝記資料第１巻に「**オートミールに牛乳をたっぷりかけて、もぐもぐと召し上がる**」との記載がありました。

最近はオートミールを牛乳や豆乳、ヨーグルトなどに入れ、一晩冷蔵庫で寝かせてふやかす「オーバーナイトオーツ」という食べ方が人気のようです。

お好みのフルーツやナッツなどを乗せ、おしゃれで健康に良い朝ごはんにしてみてはいかがでしょうか。



【参考文献】
渋沢青淵記念財団竜門会（1955 年）『渋沢栄一伝記資料』第 1 巻、渋沢栄一伝記史料刊行会。
渋沢青淵記念財団竜門社（1961 年）『――――――――』第 39 巻、渋沢栄一伝記史料刊行会。
渋沢青淵記念財団竜門社（1962 年）『――――――――』第 43 巻、渋沢栄一伝記史料刊行会。
渋沢青淵記念財団竜門社（1963 年）『――――――――』第 49 巻、渋沢栄一伝記史料刊行会。
「オートミールとは」日食オートミールホームページ　https://www.oatmeal.co.jp/about/　2022 年 2 月 22 日最終閲覧。

渋沢危篤と羊羹の金魚

櫻園通信　74　令和4年3月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

宮本孝一　老年学情報センター



明治三六年十一月、渋沢栄一（当時六十三歳）は感冒を発症しました。風邪気味で具合が悪く、日本銀行で催された会議に欠席の電話連絡をしたあと、王子の別荘で寝込んでしまいます。

当時、渋沢の本邸（兜町）は事務所などに使われており、、明治三四年から王子の別邸が家族と過ごす生活の場となっていました。

渋沢栄一の病気は「渋沢栄一伝記資料」第二十九巻ではインフルエンザと記されています。

明治三十六年十一月二十日
是日栄一、インフルエンザニ罹リ喘息ヲ併発ス、次イデ中耳炎ニ変ズ。十二月一日鼓膜切開ノ手術効ヲ奏シ稍快方ニ向フ。（渋沢栄一伝記資料　第二十九巻一三四ー一三八頁）

喘息と中耳炎も発症。十二月には耳を手術したようです。



この時、大塚にあった養育院ではハンセン病を患う収容者の増加が悩みの種でした。

養育院医員に就任した光田健輔がハンセン病が感染症であることを渋沢や幹事安達憲忠に説明し、明治三四年に患者を隔離する病室「回春室」を設けたのですが、ハンセン病の収容者が増えて回春室はすぐいっぱいになってしまいました。

渋沢栄一は安達や光田たちと相談し、インフルエンザからまだ完全に回復していない三七年二月、ハンセン病患者専用の収容所の設置を尾崎行雄東京市長に願い出ました。

しかし、東京市からはいつまでたっても何の返答もありませんでした。



三月に入り、体調が回復しない渋沢栄一は転地療養のため国府津（小田原市）の旅館国府津館に移りました。転地療養は四月二四日の帰京まで続きました。

その帰京直後、肺炎を発症。ついに危篤状態に陥ります。見舞いに訪れた徳川慶喜は渋沢の手を握って涙したといわれています。

渋沢栄一に回復の兆しが見えたのは六月にはいってからでした。

去月二十一日頃迄の先生の病状は甚だ気遣はしき容態を呈せられ、高木博士・土屋学士等毎日往診し、外に医員は交る交る終夜病床に侍し、看護婦も四名を傭ひ、僅に嚥下し得るものは流動物に過きざりしも、薬餌漸く効を奏し昨今は大に軽快に向ひ、高木博士の往診も隔日となり、医員も常に詰切り居らず、看護婦も二名を減ぜられ、先生には時々褥上に座して庭園を眺め、食餌も粥を用ゐらるゝに至り（略）（竜門雑誌第一九三号・第三九―四〇頁　明治三七年六月）

六月上旬はまだ熱が下がらず病床に伏していました。そんな六月九日、明治天皇より見舞いのお菓子一折が届けられました。渋沢栄一はたいへん感激し、なんと病床を出て礼服に着替えたようです。

男爵には床上に起なおり、礼服を取寄せて恭しく天恩を拝謝し、暫し感涙に咽はれたり。（中外商業新報第六七三三号　明治三七年六月一四日　渋沢男の軽快）

さらに、その場で渋沢は筆を取り寄せ、歌を一首詠みました。

伏屋もるうめきの声の思ひきや
雲の上まてきこゆへしとは

この日以降、渋沢の容態は快方に向かいます。

六月一八日、渋沢栄一は養育院のハンセン病患者を目黒の私立慰癈園に依託する方針を立て、尾崎東京市長に上申しました。

今度は尾崎市長はすぐに対応し、依託費用を予算予備費より補充する旨の指令を二二日に出しています。

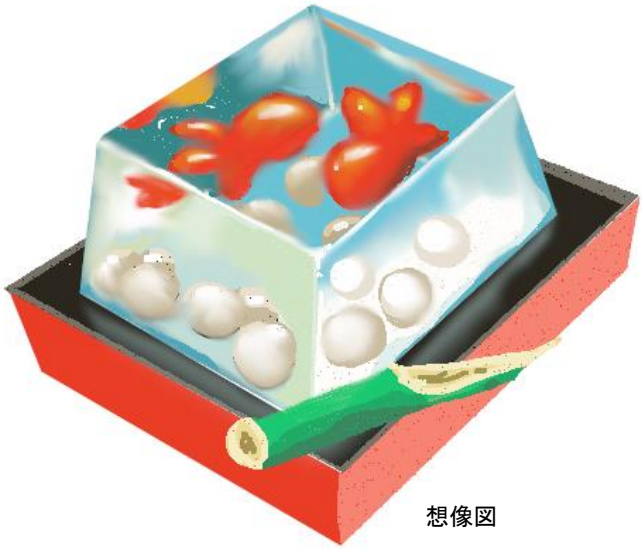
七月に養育院のハンセン病患者十人が目黒慰癈園に移され、養育院のハンセン病患者の収容状況は少し改善しました。

そのころ渋沢は、庭園に出て歩けるほど回復していました。



さて、六月に明治天皇より渋沢に贈られたお見舞いとは、どんなお菓子だったのでしょうか。

和菓子の老舗とらやのホームページによると、羊羹でできた金魚が二匹、四角い寒天の中に浮かんでいる美しいお菓子で、とらやの「蝉の小川」という和菓子だったようです。（渋沢栄一と虎屋の菓子　https://www.toraya-group.co.jp/toraya/bunko/historical-personage/020/）



想像図

養育館と養育院

櫻園通信　75　令和4年3月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

宮本孝一　老年学情報センター

明治五年、渋沢栄一（三十二歳）はまだ実業家ではなく、大蔵省の役人でした。渋沢栄一の上司は大蔵大輔（大蔵省次官）の井上馨です。



井上　馨



渋沢栄一

同年、井上馨は、幕府の救済基金「七分積金」を資金にして首都東京の道路や橋梁などの整備を進めようと考え、そのための団体「営繕会議所」を立ち上げました。

また同年、東京府知事に就任したのが大久保一翁。江戸城の無血開城の際は幕府側の代表者でした。幕府の「七分積金」を新政府に引き渡したのも大久保一翁です。



大久保一翁

明治時代のはじめ、東京には幕府瓦解により収入を失った失業者が浮浪者となって町中にあふれていました。七分積金は本来は困窮者の救救済の資金であり、インフラ整備の資金ではありません。

大久保一翁府知事は、東京の浮浪者の救済をどうしたらよいか営繕会議所に諮問しました。

知事の諮問をうけ、営繕会議所はすぐに、失業対策や困窮者の保護施設のプランを答申しました。

同時期にロシア皇子の来日に際して浮浪者の強制収容が実施されました。

このとき集められた人たちを収容する施設が、そのまま営繕会議所の答申にあった保護施設となりました。

明治五年、営繕会議所が運営する施設「会議所附**養育院**」の始まりです。

翌明治六年。大蔵省の井上馨と渋沢栄一は過大な支出を求める各省と対立し、二人いっしょに大蔵省を辞職。渋沢は実業家に転身すると同時に、大久保一翁の働きかけで営繕会議所の経営立て直しに取り組みます。

明治九年に会議所が無くなると、渋沢栄一（三十六歳）は養育院運営の代表者になり、その後九一歳で没するまで養育院の代表を続けました。



養育院に建立された
渋沢栄一院長の銅像

さて、営繕会議所設置・大久保一翁の府知事就任・養育院創設と続いた明治五年。大蔵省には、**井上馨**・伊藤博文・**渋沢栄一**・**松方正義**・得能良介・郷純造・吉田清成・陸奥宗光・芳川顕正・田中光顕・前島密・中品信行・星亨など、政・財・官界の中心になる人材が集まっていました。



松方正義

のちに日本銀行を創設し、総理大臣を二度務めた**松方正義**は、大蔵省の仕事に就く前は明治三年まで日田県（大分・福岡）の県知事でした。

松方正義知事は、飢饉が多かった日田に間引きや捨て子の悪習が続いていることを知り、地元の医師とともに、捨て子や孤児を集めて育てる施設を作りました。明治二年に作られたその施設は**養育館**と命名されました。

明治四年、松方は、井上馨が実質的なトップとなっていた大蔵省に入省し、地租改正に取り組みます。



大蔵省と内務省（明治10年）

養育院 養育館



養育院の名の由来は、松方正義が創った**養育館**でしょうか？

幕末、大久保一翁ら開明派は、西欧の救貧施設「貧院・幼院・病院」の知識をもっていました。一翁はその知識を元に「病幼院」のプランを作り、幕府に提案していました。実現しませんでしたが。

養育館と・・・**院**（西欧の救貧施設の名称）を併せて、**養育院**としたのでしょうか？　そうだとすると、養育院という名前を決めたのは誰でしょう？

養育院命名の経緯は記録が残されておらず、真相は不明です。



養育院附属病院から 健康長寿医療センターへ

宮本孝一　老年学情報センター

櫻園通信　76　令和4年3月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

旧軍施設の寮で始まった病院

板橋の養育院本院は一九四五（昭和二〇）年四月の大空襲で火の海となり、大半の建物を焼失しました。

終戦直後は焼け残った育児室を養育院の事務所として使い始めました。しかし元のように建物を再建できる社会状況ではありません。

一方、東京は戦災の被災者や浮浪者であふれています。養育院の児童も疎開先から引き揚げてきます。そこで軍用施設の借用が検討されました。

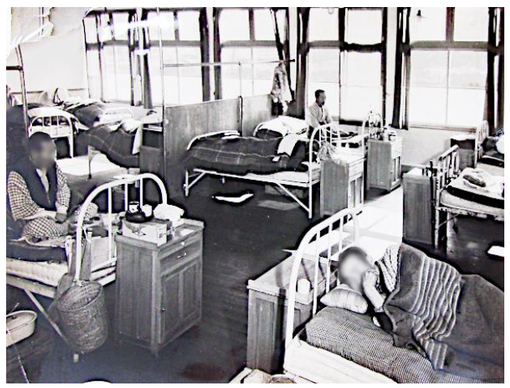
■

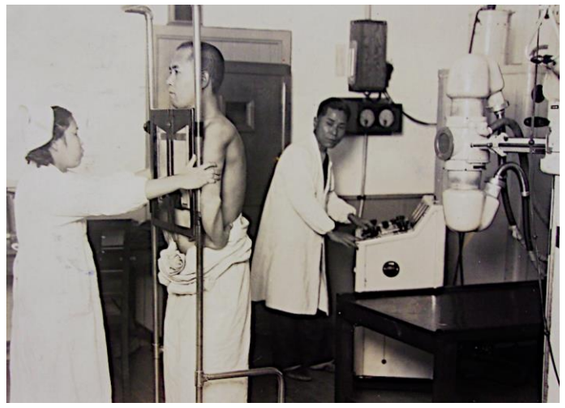
まず板橋分院（現在の東京都健康長寿医療センターから東武東上線を挟んだ向こう側）に隣接した旧軍施設の寮の借用を申請しましたがすでに他の利用が決まっていたため、次に板橋町四丁目の旧陸軍第一造兵廠（兵器工場）工員寮「大山宿舎」の使用を申請しました。その結果、大山宿舎の一角にある至誠寮の借用が許可され、翌昭和二一年には、大山宿舎生徒舎の一部も使用が認められました。

一九四六（昭和二一）年六月、至誠寮は養育院附属病院と名付けられ、養育収容者に限らず診療を開始しました。病院は建物が狭く、病院機能を十分に発揮できないため、一九四八（昭和二三）年にかけてレントゲン室や受電設備、看護婦寄宿舎などが作られました。



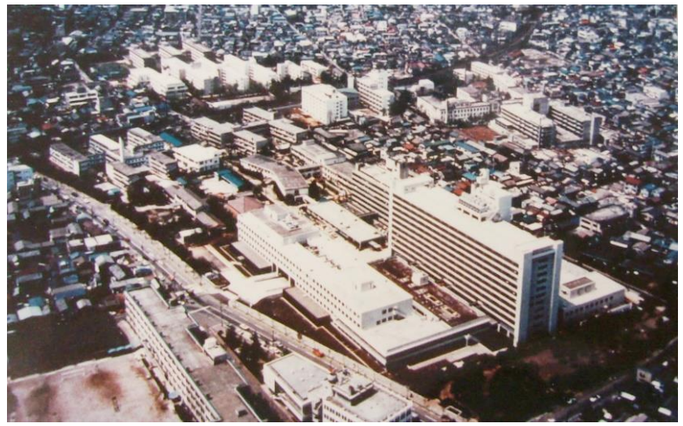
大山宿舎の門に掲げられた附属病院の看板（東京都健康長寿医療センター所蔵）





附属病院（東京都健康長寿医療センター所蔵）

養育院の敷地には、高齢者専門病院・老人総合研究所・昭和三〇年代に始まる老人ホーム・一九七六（昭和五一）年には板橋ナーシングホーム新設と、高齢者の医療・福祉・研究の施設が集中して設置されました。



板橋構内（東京都健康長寿医療センター所蔵）



東京都老人医療センターの玄関（東京都老人医療センター36年の軌跡付録CD収録）



外来の待合席（東京都健康長寿医療センター所蔵）

附属病院は、第二代病院長豊倉康夫の「国際的に通用する病院名に」という意向で、一九八六（昭和六一）年に**東京都老人医療センター**に改称されました。



国際老年学会　昭和51年（東京都老人医療センター36年の軌跡付録CD収録）



老人医療センターの外観（東京都老人医療センター36年の軌跡　付録CD収録）

現在の東京都健康長寿医療センター



二〇〇九（平成二一）年、東京都老人医療センターと東京都老人総合研究所は経営統合して、**地方独立行政法人 東京都健康長寿医療センター**が発足しました。

二〇一三（平成二五）年、新しい建物が完成し、旧医療センター・研究所の建物から引っ越しが行われました。六月には外来診療が開始されました。

養育院附属病院開院の少し前、三月には養育院事務室が育児室から陸軍第一造兵廠の生徒舎に移りました。

一九四六（昭和二一）年は一年間の入所者が約一万一四〇〇人に達し、養育院史上最多となりました。一方、同年の出所者数は二六〇〇人、無断出所六七〇〇人、院内での死亡者二〇七〇人です。つまり養育院から出た人（＋亡くなった人）は入所者数とほぼ同数です。一年の間に大量の人が入退所していた異常な状況がこのことからもわかります。

昭和二一年以降も旧軍施設の獲得をめざす動きは続けられ、視察や交渉が行われた施設は三十数か所に及びました。

二階建ての附属病院を新築

工員寮を使った附属病院開院から十年。一九五六（昭和三一）年に建物の老朽化と火災防止上の問題から本院敷地内に養育院在院者のための新病院を立てることが決まりました。一九五八（昭和三三）年の三月に新病院と看護婦寄宿舎が完成し、四月より診療が始まりました。



本院敷地に建てられた附属病院（東京都健康長寿医療センター所蔵）





病院開設時は、内科、外科、小児科、眼科、歯科、産婦人科、耳鼻咽喉科、放射線科、薬剤科、看護科があり、医師は二〇名、看護師は九八名でした。外部からは精神科や皮膚科の専門医も定期的に来て診療にあたりました。

板橋分院構内には一九五八年に看護婦寄宿舎ができて至誠寮の寄宿舎から移りました。同年には養育院附属准看護学院の教室も作られています。



板橋構内　昭和39年（東京都健康長寿医療センター所蔵）

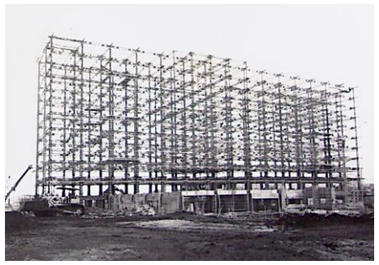
都内の高齢者のための病院

一九六七（昭和四二）年、都知事は養育院に、都内の老人医療状況を調査するよう指示しました。

老人病院の建設が必要という考えていた附属病院院長は「東京都内老人の医療現状と対策」という報告書をまとめ、養育院院長を通して知事に提出しました。

一九六九（昭和四四）年、東京都知事は老人病院問題懇談会という場で、老人病院・研究所・リハビリ施設などを併せた施設の設置という考えを出しました。

新病院の具体的な計画は翌年から始まりました。



附属病院の建設（東京都健康長寿医療センター所蔵）

一九七二（昭和四七）年、新しい養育院付属病院と老人総合研究所、リハビリセターが完成しました。養育院付属病院は養育院の在院者専用ではなく、都内の高齢者を対象とする病院になりました。

この年には、養育院創立百周年の記念式典が開催され、当時の皇太子夫妻がご臨場されました。



創立100周年記念式典（東京都健康長寿医療センター所蔵）



新築の付属病院（東京都健康長寿医療センター所蔵）